福　岡　市

有田・小田部

第9集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第173集

1988

福岡市教育委員会

福　岡　市

有田・小田部

第9集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第173集

1988

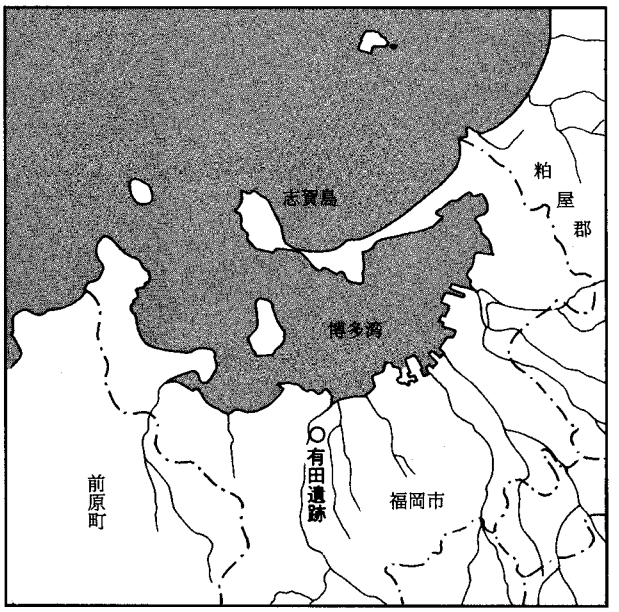
福岡市教育委員会

福　岡　市

有田・小田部

第9集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第173集



遺跡略号
ART

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

序　　文

福岡市は古来より大陸への窓口として繁栄しており，特に本市の西南部に位置する早良平野は埋蔵文化財が多く包蔵されている地域として知られています。この平野の中で，有田・小田部・南庄地区も又，先土器時代から近世に亘る重要な遺跡です。昭和41～43年に九州大学考古学研究室が区画整理に伴う発掘調査を行い，弥生時代初頭の環濠集落や奈良時代の建物などを検出して以来，学会の注目するところです。本市では昭和52年度からは全ての開発行為に対して発掘調査を実施し，今年度で18カ所を数えます。その成果は著しく，縄文時代の財蔵穴群，弥生時代の集落や墓地，古墳時代の集落，奈良時代の官衙建物，中世の館跡など枚挙に暇がありません。

今回，報告する10カ所の調査は弥生時代から中世に亘るもので，古墳時代の集落や奈良時代の官衙跡，中世の居館跡などを検出し，有田・小田部・南庄の歴史，ひいては早良平野の歴史を明らかにし得る成果を収めることができました。

発掘調査から報告作成を実施するにあたりましては，指導員の先生をはじめとして，地元の皆様方，及び作業員，整理補助員などの関係者の方々にご理解とご協力をいただいたことを深く感謝いたします。

又，本書が埋蔵文化財保護の理解と認識を深める一助となり，あわせて研究資料としても活用いただけることを願うものです。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

例　　言

(1)　本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における開発に伴い，福岡市教育委員会が昭和62年度の国庫補助を得て実施した緊急発掘調査の報告書である。

(2)　本書には昭和55年度の第35次調査，昭和57年度の第70～72次調査，昭和60年度の第102・105次調査，昭和61年度の第109・111・117次調査，昭和62年度の第122次調査を収録する。

(3)　本書では有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し，広義の有田遺跡と呼称する。

(4)　本書に収録した発掘調査は，第35次調査を井沢洋一・山崎龍雄が，第70～72次調査を井沢洋一・松村道博が，第102～122次調査を山崎龍雄・米倉秀紀が担当した。

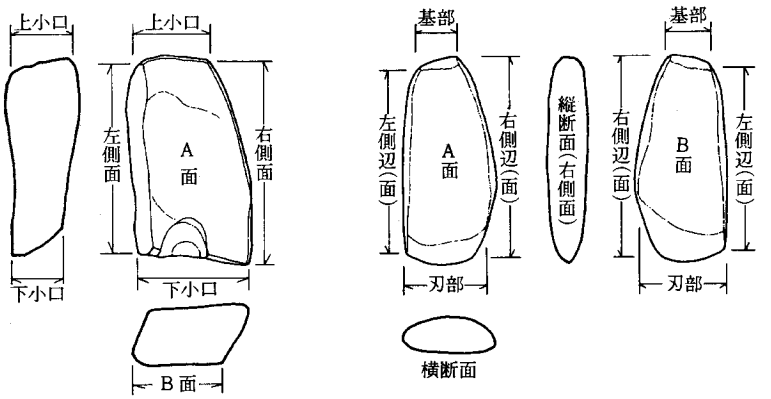
(5)　本書に掲載した遺構・遺物実測，写真撮影，遺構・遺物の製図については以下のとおりである。

（遺物実測）第35次調査―井沢，第71～72次調査―井沢，第102～122次調査―米倉，山崎，平川敬治，（遺物写真撮影）第35・71～72次調査―井沢，米倉，第102～122次調査―平川，（遺物・遺構整図）第35・71～72次調査―藤原美紀・井沢，第103～122次調査―山崎，米倉，岡根なおみ（遺構の写真撮影）第35次調査を井沢・山崎，第70～72次調査は井沢・松村，第102～122次調査は山崎・米倉が行った。

(6)　本書の執筆は以下のようである。

第１・２章	井沢（第２章－２，昭和62年度調査概要―山崎）
第３章－１～４	井沢
5～7・10	米倉
8・9・11	山崎

(7)　本書の編集は，調査次数毎に各担当者が整理し，井沢がまとめた。



本　文　目　次

本文頁

第１章　はじめに …… 1
１．調査に至る経過 …… 1
２．発掘調査の組織 …… 2
第２章　遺跡の立地と調査概要 …… 5
１．立地 …… 5
２．調査の概要 …… 7
第３章　調査経過 …… 16
１．第35次調査 …… 16
　１）調査地区の地形と概要 …… 16
　２）遺構各説 …… 16
　３）遺物各説 …… 36
　４）小　　結 …… 73
２．第70次調査 …… 78
　１）調査地区の地形と概要 …… 78
　２）遺構各説 …… 78
　３）遺物各説 …… 83
　４）小　　結 …… 92
３．第71次調査 …… 93
　１）調査地区の地形と概要 …… 93
　２）遺構各説 …… 94
　３）遺物各説 …… 104
　４）小　　結 …… 108
４．第72次調査 …… 122
　１）調査地区の地形と概要 …… 122
　２）遺構各説 …… 122
　３）遺物各説 …… 130
　４）小　　結 …… 143
５．第102次調査 …… 147
　１）調査地区の地形と概要 …… 147
　２）遺構各説 …… 148

3）遺物各説 ……151
4）小　　結 ……151
6．第105次調査 ……152
1）調査地区の地形と概要 ……152
2）遺構各説 ……153
3）遺物各説 ……157
4）小　　結 ……160
7．第109次調査 ……163
1）調査地区の地形と概要 ……163
2）遺構各説 ……163
3）遺物各説 ……163
4）小　　結 ……167
8．第111次調査 ……168
1）調査地区の地形と概要 ……168
2）遺構各説 ……168
3）遺物各説 ……171
4）小　　結 ……172
9．第117次調査 ……173
1）調査地区の地形と概要 ……173
2）遺構各説 ……173
3）遺物各説 ……179
4）小　　結 ……185
10．第122次調査 ……187
1）調査地区の地形と概要 ……187
2）遺構各説 ……187
3）遺物各説 ……194
4）小　　結 ……206
11．第108次調査追加資料 ……208

挿　図　目　次

頁

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡……(1/25,000)……6
Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点……(1/5,000)……折込
Fig. 3　有田・小田部台地の旧地形図……(1/5,000)……折込
Fig. 4　有田・小田部地区字図……15
Fig. 5　有田遺跡第35次・64次・90次調査遺構配置図(1/300),
　　調査区北側壁土層図(1/120)……折込
Fig. 6　1号・2号住居跡……(1/60)……18
Fig. 7　3号・4号住居跡……(1/60)……19
Fig. 8　5号・6号住居跡……(1/60)……21
Fig. 9　7号・8号住居跡……(1/60)……23
Fig. 10　9号・10号住居跡……(1/60)……24
Fig. 11　1号～5号土坑……(1/40)……27
Fig. 12　6号～8号土坑，1号井戸……(1/40)……29
Fig. 13　1号～3号溝土層図……(1/40)……31
Fig. 14　1号～4号掘立柱建物……(1/100)……33
Fig. 15　5号～7号掘立柱建物……(1/100)……35
Fig. 16　1号住居跡出土遺物……(1/3・1/4)……37
Fig. 17　1号住居跡出土遺物……(1/3)……39
Fig. 18　2号住居跡出土遺物……(1/3)……40
Fig. 19　2号・3号・5号住居跡出土遺物……(1/3)……41
Fig. 20　6号住居跡出土遺物……(1/3)……43
Fig. 21　6号住居跡出土遺物……(1/3)……45
Fig. 22　6号住居跡出土遺物……(1/3)……46
Fig. 23　6号住居跡出土遺物……(1/4・1/2)……47
Fig. 24　6号住居跡出土遺物……(1/3)……48
Fig. 25　7号住居跡出土遺物……(1/3)……49
Fig. 26　7号住居跡出土遺物……(1/3・1/2・1/1)……50
Fig. 27　7号住居跡出土遺物……(1/4・1/3)……52
Fig. 28　8号・9号住居跡出土遺物……(1/3・1/2)……54
Fig. 29　8号・9号住居跡出土遺物……(1/3)……55

Fig. 30　2号土坑出土遺物……(1/3・1/2)……56
Fig. 31　1号井戸出土遺物……(1/4・1/3)……58
Fig. 32　1号井戸出土遺物……(1/4)……59
Fig. 33　1号・2号溝，及びピット出土遺物……(1/3)……60
Fig. 34　甕棺……(1/6)……61
Fig. 35　包含層出土遺物……(1/3)……62
Fig. 36　包含層出土遺物……(1/3)……64
Fig. 37　包含層出土石器……(1/2)……66
Fig. 38　包含層出土石器……(1/2・1/1)……67
Fig. 39　住居跡・包含層出土石器……(1/1)……68
Fig. 40　包含層出土遺物……(1/2・1/1)……71
Fig. 41　第35次調査住居跡配置図……(1/3,000)……72
Fig. 42　中世溝配置図……(1/800)……77
Fig. 43　第70次調査遺構配置図……(1/200)……79
Fig. 44　第83次調査1号・2号溝断面図……(1/40)……79
Fig. 45　調査区東側土層図及び1号溝土層図……(1/120・1/40)……80
Fig. 46　2号・3号溝土層図，4号土坑……(1/60・1/20・1/30)……82
Fig. 47　1号～3号土坑……(1/40)……83
Fig. 48　1号溝出土遺物……(1/3)……85
Fig. 49　1号溝出土遺物……(1/3)……86
Fig. 50　1号溝出土遺物……(1/3)……88
Fig. 51　2号溝出土遺物……(1/3)……89
Fig. 52　出土遺物……(1/3)……91
Fig. 53　第71次調査遺構配置図……(1/200)……93
Fig. 54　調査区東側土層図……(1/80)……93
Fig. 55　1号住居跡……(1/60)……94
Fig. 56　1号～6号土坑……(1/40)……96
Fig. 57　7号～15号土坑……(1/40)……97
Fig. 58　1号・2号井戸……(1/60)……99
Fig. 59　3号a・b・c井戸……(1/60)……100
Fig. 60　1号・3号溝土層図……(1/60)……102
Fig. 61　2号溝土層図……(1/60)……103
Fig. 62　1号・2号掘立柱建物……(1/100)……104

Fig. 63 包含層，９号土坑，１号・２号井戸出土遺物……（1/3）……105
Fig. 64 ３号井戸出土遺物……（1/3）……106
Fig. 65 １号溝出土遺物……（1/3）……108
Fig. 66 １号溝出土遺物……（1/3）……109
Fig. 67 ２号溝出土遺物……（1/3）……112
Fig. 68 ２号溝出土遺物……（1/3・1/4）……113
Fig. 69 調査区東側段落ち出土遺物……（1/3）……116
Fig. 70 調査区東側段落ち出土遺物及びその他の遺物……（1/4・1/2・1/1）……117
Fig. 71 有田地区検出の中世濠の状態……（1/2,000）……121
Fig. 72 第23・32・72次調査遺構配置図……（1/200）……折込
Fig. 73 １号・２号・３号土坑……（1/60・1/40）……123
Fig. 74 ２号土坑断面図……（1/80）……124
Fig. 75 １号・２号溝……（1/40）……126
Fig. 76 １号・５号～７号溝……（1/40・1/60）……127
Fig. 77 １号・２号・４号掘立柱建物，１号柵……（1/100）……128
Fig. 78 ３号掘立柱建物……（1/100）……129
Fig. 79 １号土坑出土遺物……（1/3）……131
Fig. 80 ２号土坑出土遺物……（1/3）……133
Fig. 81 ２号土坑出土遺物……（1/3）……135
Fig. 82 １号溝出土遺物……（1/3）……136
Fig. 83 １号溝出土遺物……（1/3）……138
Fig. 84 １号溝出土遺物……（1/3）……140
Fig. 85 １号溝出土遺物……（1/3）……141
Fig. 86 ５号・６号・７号溝出土遺物……（1/3）……142
Fig. 87 掘立柱建物・溝配置図……（1/300）……144
Fig. 88 有田地区中世濠の状態……（1/2,500）……145
Fig. 89 第102次調査遺構配置図……（1/200）……147
Fig. 90 １号掘立柱建物，１号柵……（1/100）……149
Fig. 91 埋甕遺構及び出土遺物……（1/40・1/8・1/3）……150
Fig. 92 第105次調査遺構配置図……（1/200）……152
Fig. 93 １号住居跡……（1/60）……153
Fig. 94 １号～３号土坑……（1/40）……154
Fig. 95 １号掘立柱建物，１号柵……（1/100）……156

Fig. 96 製鉄関連遺構，埋甕遺構……(1/40) ……157
Fig. 97 出土遺物……(1/3・1/4・1/8) ……159
Fig. 98 第102・105次調査遺構配置図……(1/800) ……161
Fig. 99 第39・109次調査遺構配置図 ……(1/200) ……164
Fig. 100 1号・2号土坑……(1/40・1/80) ……165
Fig. 101 2号土坑出土遺物……(1/3) ……166
Fig. 102 第95・111次調査遺構配置図 ……(1/300) ……169
Fig. 103 1号住居跡……(1/60) ……170
Fig. 104 1号掘立柱建物，1号土坑……(1/100・1/40) ……171
Fig. 105 出土遺物……(1/3) ……172
Fig. 106 1号柵……(1/100) ……173
Fig. 107 第117次調査遺構配置図 ……(1/300) ……174
Fig. 108 ピット及び1号・2号・6号土坑 ……(1/40) ……175
Fig. 109 7号・8号土坑，2号井戸土層図……(1/40・1/60) ……177
Fig. 110 1号・2号溝西壁土層図……(1/40) ……178
Fig. 111 1号井戸出土遺物……(1/3) ……180
Fig. 112 1号井戸，及び2号井戸出土遺物……(1/4) ……181
Fig. 113 出土遺物……(1/3・1/5) ……182
Fig. 114 1号溝出土遺物……(1/3) ……184
Fig. 115 1号溝出土遺物……(1/3・1/4) ……185
Fig. 116 ピット出土遺物……(1/3) ……186
Fig. 117 第52・122次調査遺構配置図 ……(1/300) ……188
Fig. 118 1号～4号土坑……(1/40) ……189
Fig. 119 5号土坑……(1/80) ……190
Fig. 120 1号・2号掘立柱建物……(1/100) ……191
Fig. 121 3号・4号掘立柱建物……(1/100) ……192
Fig. 122 5号・6号掘立柱建物……(1/100) ……193
Fig. 123 3号・5－a号土坑出土遺物……(1/3) ……195
Fig. 124 5－a号土坑出土遺物……(1/3・1/4) ……196
Fig. 125 5－a号土坑出土遺物……(1/3・1/4・1/5) ……198
Fig. 126 5－a号土坑出土遺物……(1/4) ……200
Fig. 127 5－a号土坑出土遺物……(1/2・1/3・1/4) ……201
Fig. 128 5－a号土坑出土遺物……(1/3) ……202

Fig. 129　5－b号土坑出土遺物……（1/3）……204
Fig. 130　5－b号土坑，及びピット出土遺物……（1/1・1/2・1/3）……205
Fig. 131　鋳型実測図……（1/2）……208

図　版　目　次

PL. 1　有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）
PL. 2　有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）
PL. 3　(1)調査区南側全景（北から）　(2)調査区南側住居跡群（東から）
PL. 4　(1)調査区北側全景（南から）　(2)1号住居跡（南から）
PL. 5　(1)1号住居跡内粘土の状態　(2)1号住居跡かまどの状態
(3)2号住居跡の炉跡　(4)2号住居跡遺物出土状態
PL. 6　(1)2号住居跡（東から）　(2)3号・4号住居跡（東から）
PL. 7　(1)5号住居跡（南から）　(2)6号住居跡（東から）
PL. 8　(1)6号住居跡遺物出土状態・壺　(2)(1)に同じ・鉄製鋤先
(3)(1)に同じ・鉄製斧　(4)(1)に同じ・鉄製鎌
PL. 9　(1)6号住居跡内炉跡　(2)6号住居跡内出入口ピット（東から）
(3)6号住居跡遺物出土状態　(4)(3)に同じ
PL. 10　(1)7号・8号住居跡（南から）　(2)7号住居跡内炉跡
(3)8号住居跡内炉跡
PL. 11　(1)9号住居跡（東から）　(2)10号住居跡（西から）
PL. 12　(1)2号土坑（東から）　(2)2号土坑の断面の状態（東から）
(3)1号土坑（北から）　(4)4号土坑（西から）
PL. 13　(1)5号土坑（西から）　(2)9号土坑（南から）
(3)10号土坑（南から）　(4)10号土坑（横方向）
PL. 14　(1)1号井戸（北から）　(2)1号井戸の断面状態（東から）
PL. 15　(1)1号井戸底部の礫群　(2)1号井戸底部の濾過装置
(3)1号井戸二段目の掘り方　(4)1号井戸出土の石製品
PL. 16　(1)1号～3号溝（西から）　(2)1号溝の断面（東から）
(3)2号溝の断面（西から）　(4)3号溝の断面（東から）
PL. 17　出土遺物
PL. 18　出土遺物

PL. 19　出土遺物
PL. 20　出土遺物
PL. 21　出土遺物
PL. 22　出土遺物
PL. 23　出土遺物
PL. 24　出土遺物
PL. 25　出土遺物
PL. 26　出土遺物
PL. 27　出土遺物
PL. 28　(1)調査区全景（南から）　(2)調査区全景（西から）
PL. 29　(1) 1 号溝南側土層状態（北から）　(2) 1 号溝中央部土層状態（北から）
　(3) 1 号溝北側上層状態（南から）
PL. 30　(1) 2 号溝南側土層状態（北から）　(2) 2 号溝中央部の土層状態（南から）
　(3) 3 号溝土層状態（南から）
PL. 31　(1) 2 号溝（南から）　(2) 1 号溝（北から）
　(3) 3 号溝及び 4 号土坑（北から）　(4) 4 号土坑の礫群（東から）
PL. 32　(1) 1 号土坑（北から）　(2) 1 号土坑の土層状態（東から）
　(3) 3 号土坑（南から）　(4) 3 号土坑の土層状態（南から）
PL. 33　出土遺物
PL. 34　出土遺物
PL. 35　出土遺物
PL. 36　(1)調査区東側全景（東から）　(2)調査区西側全景（東から）
PL. 37　(1)調査区東側の段落ち部分（東から）　(2) 1 号住居跡（東から）
PL. 38　(1) 1 号～ 6 号土坑，2 号井戸(東から)　(2) 1 号～ 6 号土坑の土層状態（南から）
PL. 39　(1) 1 号井戸喫水部分の礫　(2) 2 号土坑内ピットの礫
　(3) 8 号土坑（南から）　(4) 8 号土坑の土層状態（南から）
PL. 40　(1) 9 号・13号・14号土坑（北から）　(2) 9 号土坑遺物出土状態（東から）
　(3) 1 号～ 3 号井戸（東から）　(4) 1 号井戸（東から）
PL. 41　(1) 1 号井戸の状態（東から）　(2) 3 号－ａ・ｂ・ｃ井戸（西から）
　(3) 3 号井戸土層状態（南から）　(4) 3 号井戸底の状態（南から）
PL. 42　(1) 1 号溝（北から）　(2) 1 号溝（南から）
　(3) 1 号溝南側の土層状態（北から）　(4) 1 号溝北側の土層状態（南から）
PL. 43　(1) 2 号溝東半分（東から）　(2) 2 号溝西半分（東から）

	(3) 2 号溝中央部の土層状態（東から）	(4) 2 号溝西側の土層状態（東から）
PL. 44	(1) 1 号溝東側の土層状態（西から）	(2) 1 号溝下層獣骨出土状態（西から）
	(3) 3 号溝の土層状態（北から）	(4) 1 号掘立柱建物（東から）
PL. 45	出土遺物	
PL. 46	出土遺物	
PL. 47	出土遺物	
PL. 48	(1)調査区全景（南から）	(2) 1 号・ 3 号～ 5 号・10号溝（東から）
PL. 49	(1) 1 号土坑（東から）	(2) 1 号土坑の土層状態（北から）
	(3) 3 号土坑（西から）	(4) 3 号土坑の土層状態（西から）
PL. 50	(1) 2 号土坑（北から）	(2) 2 号土坑の土層状態（南から）
	(3) 2 号土坑の周壁状態（南から）	(4) 2 号土坑礫群内遺物出土状態
PL. 51	(1) 1 号溝東西方向（東から）	(2) 1 号溝南北方向（西から）
PL. 52	(1) 1 号溝東側土層状態（西から）	(2) 1 号溝中央部土層状態（東から）
	(3) 1 号溝南北方向中央部土層状態(北から)	(4) 1 号溝南側土層状態（北から）
PL. 53	(1) 5 号・ 6 号溝（南から）	(2) 5 号溝の土層状態（東から）
	(3) 6 号溝の土層状態（南から）	
PL. 54	(1) 7 号溝（東から）	(2) 7 号溝（南から）
	(3) 1 号溝コーナー及び小溝（北から）	(4) 1 号溝法面の小溝（北から）
PL. 55	(1) 1 号掘立柱建物（東から）	(2) 2 号掘立柱建物， 1 号柵（東から）
	(3) 3 号掘立柱建物（東から）	(4) 4 号掘立柱建物（南から）
PL. 56	出土遺物	
PL. 57	出土遺物	
PL. 58	出土遺物	
PL. 59	(1)第102次調査全景（東から）	(2) 1 号掘立柱建物， 1 号柵（北から）
PL. 60	(1) 1 号掘立柱建物（東から）	(2)埋甕遺構（北から）
	(3)出土遺物	
PL. 61	(1)第105次調査全景	(2) 1 号住居跡及び 1 ～ 3 号土坑（南から）
	(3) 1 号住居跡遺物出土状態	
PL. 62	(1) 1 号掘立柱建物（西から）	(2)製鉄遺構（南から）
	(3) 1 号埋甕遺構（東から）	(4)ピット209遺物出土状態
PL. 63	出土遺物	
PL. 64	(1)第109次調査全景（南西から）	(2) 1 号土坑（南から）
	(3) 2 号土坑（南西から）	

PL. 65　(1) 2 号土坑東壁土層状態　(2) 2 号土坑内ピット遺物出土状態
(3)出土遺物
PL. 66　(1)第111次調査全景（東から）　(2) 1 号住居跡（南東から）
(3) 1 号掘立柱建物（東から）
PL. 67　(1) 1 号土坑（北から）　(2) 1 号住居跡入口部（南から）
(3) 1 号土坑遺物出土状態（東から）　(4)出土遺物
PL. 68　(1)第117次調査全景（北東から）　(2) 1 号・ 2 号溝（北から）
(3) 1 号柵（東から）
PL. 69　(1) 1 号井戸（南東から）　(2) 2 号井戸（南から）
(3) 3 号井戸（南から）　(4) 1 号土坑（西から）
PL. 70　(1) 7 号・ 8 号土坑（西から）　(2)ピット 9 ・11（北から）
(3) 1 号・ 2 号溝土層状態（北から）　(4)ピット遺物出土状態
PL. 71　出土遺物
PL. 72　(1)第122次調査全景　(2) 2 号土坑（北から）
(3) 3 号土坑（西から）
PL. 73　(1) 4 号土坑（北から）　(2) 5 号土坑（北から）
(3) 5 － a 号土坑遺物出土状態　(4) 5 － b 号土坑遺物出土状態
PL. 74　(1) 5 号土坑南壁土層状況　(2) 1 号掘立柱建物（東から）
(3) 2 号掘立柱建物（西から）　(4) 3 号掘立柱建物（北から）
PL. 75　(1) 4 号掘立柱建物（東から）　(2) 5 号掘立柱建物（東から）
(3) 6 号掘立柱建物（東から）　(4)ピット20の遺物出土状態
PL. 76　出土遺物
PL. 77　出土遺物
PL. 78　出土遺物
PL. 79　出土遺物

表　目　次

本文頁

tab. 1　有田・小田部発掘調査一覧表……11
tab. 2　第35次調査住居跡一覧表……26
tab. 3　第35次調査土坑一覧表……30
tab. 4　第35次調査掘立柱建物計測表……36
tab. 5　第35次調査出土石器一覧表……69
tab. 6　第35次調査出土玉類計測表……70
tab. 7　第71次調査土坑一覧表……99
tab. 8　第71次調査掘立柱建物計測表……104
tab. 9　第72次調査掘立柱建物計測表……130
tab. 10　第102次調査掘立柱建物計測表……148
tab. 11　第105次調査掘立柱建物計測表……155
tab. 12　第122次調査掘立柱建物計測表……194

付　図　目　次

Ⅰ．有田・小田部地区各調査地点配置図No. Ⅳ（1/1,000）……付録
Ⅱ．第35・36・46・64・86・90次調査遺構配置図（1/200）……付録

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

福岡市近郊の農村地帯であった有田地区・小田部地区・南庄地区の3つの集落が存在している。近年，202号線バイパスが西へ延長した事と昭和57年の市営地下鉄の開通などの影響を受け，専用住宅地域から高層住宅地域へと変貌しつつあり，過日の農村の面影は無い。

有田遺跡の発掘調査は昭和50年度から国庫補助事業として出発したが，昭和52年度からは，1,000㎡以下の小規模開発に対処している。昭和50年度～昭和56年度までの開発傾向は，専用住宅が圧倒的に多く，昭和57年度から昭和60年度までの開発傾向では，専用住宅が減少し，高層の共同住宅，賃貸倉庫，駐車場，店舗，分譲住宅などの大規模化の傾向を示している。昭和61年度～昭和62年度は金利の低下に伴い，専用住宅建設が増加している。昭和62年度までの調査件数は135件である。この内には学校建設，下水道事業，市営住宅改築などの公共事業も含まれている。

昭和62年度の発掘調査は17件で，昭和62年4月13日～63年3月31日まで発掘調査を行った。調査の総面積は5339㎡である。

報告書については，昭和55年度の第35次調査，昭和57年度の第70～72次調査，昭和60年度の第102・105次調査，昭和61年度の第109・111・117次調査，昭和62年度の第122次調査を報告する。

（昭和55年度発掘調査） 頭の数字は各年度の調査順位を示している。

3．第35次	福岡市早良区小田部5丁目150	面積	843㎡	申請者	金子　亮司

（昭和57年度発掘調査）

9．第70次	福岡市早良区有田1丁目17－1・2	面積	191㎡	申請者	永野　享
10．第71次	福岡市早良区有田1丁目22－4・7	面積	383㎡	申請者	野村　礼子
11．第72次	福岡市早良区有田1丁目26－3	面積	394㎡	申請者	坂口　悦乃

（昭和60年度発掘調査）

4．第102次	福岡市早良区小田部2丁目154	面積	330㎡	申請者	毛利　重徳
7．第105次	福岡市早良区小田部2丁目18－8	面積	660㎡	申請者	柴田　正行

（昭和61年度発掘調査）

3．第109次	福岡市早良区有田1丁目37－8	面積	290㎡	申請者	早川　秀人
5．第111次	福岡市早良区有田1丁目37－3	面積	135㎡	申請者	松尾　稔
11．第117次	福岡市早良区小田部3丁目3－14	面積	218㎡	申請者	毛利　保人

（昭和62年度発掘調査）

1．第115次	福岡市早良区有田３丁目８－53内	面 積	500m²	申請者	松口	秀世
2．第119次	福岡市早良区南庄３丁目270－１外	面 積	203m²	申請者	原野	善行
3．第120次	福岡市早良区有田１丁目38－３外	面 積	77m²	申請者	蒲地	俊喜
4．第121次	福岡市早良区小田部５丁目154－２	面 積	165m²	申請者	市丸	一美
5．第122次	福岡市早良区小田部２丁目11－16	面 積	375m²	申請者	毛利	公一
6．第124次	福岡市早良区有田１丁目24－４	面 積	650m²	申請者	毛利	保人
7．第125次	福岡市早良区小田部５丁目172外	面 積	722m²	申請者	守田	敏行
8．第126次	福岡市早良区小田部１丁目34－９	面 積	111m²	申請者	織方	章
9．第127次	福岡市早良区小田部１丁目418－１	面 積	180m²	申請者	興栄開発	
10．第129次	福岡市早良区小田部２丁目38	面 積	386m²	申請者	原井	常雄
11．第130次	福岡市早良区小田部２丁目185－２	面 積	293m²	申請者	横田ヨシ子	
12．第131次	福岡市早良区小田部２丁目131	面 積	118m²	申請者	森田	稔
13．第132次	福岡市早良区有田１丁目８－３	面 積	200m²	申請者	野村	学
14．第133次	福岡市早良区有田２丁目－３・４	面 積	433m²	申請者	坂口	征機
15．第134次	福岡市早良区有田１丁目32－４	面 積	420m²	申請者	坂口	武彦
16．第135次	福岡市早良区小田部１丁目361	面 積	293m²	申請者	佐藤	正

２．発掘調査の組織

(1) 昭和55年度の発掘調査の組織＜第35次調査＞

調査主体　福岡市教育委員会

調査担当　福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財第２係

事務担当　埋蔵文化財第２係長　柳田純孝，（庶務）岡嶋洋一

発掘担当　井沢洋一，山崎龍雄

調査協力者　松尾和雄，岩城庄助，高浜謙一，西原俊一，阿部典広，池野尚昭，池田健一，田代定行，川口清吾，麻生達也，渡辺武子，野村美砂恵，松尾圭子，内尾トミ子，佐々木光子，北原君代，松井フユ子，清原ユリ子，佐藤テル子，金子由利子，坂口フミ子，和玉八重子，岩谷ふたみ，真子昌子，井上照野，西尾たつよ，松尾スミ

児玉健一郎，池田孝弘，山田勝己，安達昌利，松尾正直，前田治郎，安部　宏，安岡洋二，堺裕明，永目尚子，鳥越のり子，古荘千栄子

資料整理　宮嶋成昭，児玉健一郎，池田孝弘，花田早苗，原　秋代，上原一重，竹嶋多賀子，

岩本京子，五島恵美子，堀内郁子，山中香欧里，鶴丸直美，青柳米子，平井彩子，佐藤玲子

(2) 昭和57年度の発掘調査の組織＜第70～72次＞

調査主体　福岡市教育委員会
調査担当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係
事務担当　埋蔵文化財第２係長　折尾　学，（庶務）岡嶋洋一
発掘担当　井沢洋一，松村道博
調査補助員　山口勝巳，池野尚昭，谷沢　仁，辻　哲也
調査協力者　松尾和雄，岩城庄助，山下　敏，結城茂巳，高浜謙一，渡辺武子，松井フユ子，佐藤テル子，金子由利子，清原ユリ子，真子昌子，西尾たつよ，松尾玲子，柴田幸子，土斐崎初栄，庄野崎ヒデ子，庄野崎チタカ，末松信子，砥綿チエ子，掘川ヒロ子，中村千里，伊庭秀子，坂田まさ子，平井和子，後藤ミサヲ，柴田勝子，柴田春代，緒方マサヨ，山田悦子
安部　宏，堺　裕明，前田次郎，安岡洋二，明野　隆，西島健一，前田　乱，松江宏文，萩原陽一郎，北川智穂美
資料整理　宮嶋成昭，児玉健一郎，松尾正直，辻　哲也，原　秋代，青柳米子，石橋千恵，内尾トミ子，仲前智江子，永井和子，落合弥生，久保順子，池田洋子，山下仁美，当房純子，深堀博子

(3) 昭和60年度発掘調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会
調査担当　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第２係
事務担当　埋蔵文化財課第２係長　飛高憲雄，（庶務）岸田　隆
発掘担当　山崎龍雄，米倉秀紀
調査補助員　谷沢　仁
調査協力者　合屋龍介，深堀雅基，馬場寿男，明野　隆，藤岡毅雄，高橋正弘，松尾和雄，高浜謙一，神尾順次，吉村哲美，井上真寿美，北原ヒサ子，三島博子，蓑原幸江，有富いつ子，板倉文子，井上紀世子，緒方マサヨ，金子由利子，清原ユリ子，後藤ミサヲ，坂口フミ子，佐藤テル子，柴田勝子，庄野崎ヒデ子，土斐崎初栄，徳永ノブヨ，西尾たつよ，平井和子，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，松尾玲子，宮原邦江，萬スミヨ，吉岡田鶴子

(4) 昭和61年度発掘調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会

調査担当　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第２係

事務担当　埋蔵文化財課第２係長　飛高憲雄，（庶務）岸田　隆

発掘担当　山崎龍雄，米倉秀紀

調査補助員　大内志郎，平川敬治

調査協力者　合屋龍介，馬場寿男，三浦義隆，本多育夫，松尾　司，穴井欽哉，松尾和雄，高浜謙一，神尾順次，吉村哲美，有富いつ子，板倉文子，井上紀世子，緒方マサヨ，金子由利子，清原ユリ子，後藤ミサヲ，坂口フミ子，佐藤テル子，柴田勝子，庄野崎ヒデ子，土斐崎初栄，徳永ノブヨ，西尾たつよ，平井和子，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，松尾玲子，宮原邦江，萬スミヨ，吉岡田鶴子，井上真寿美，北原ヒサ子，蓑原幸江，山田サヨ子，青柳フミ子

(5) 昭和62年度発掘調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会

調査担当　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化課第２係

事務担当　埋蔵文化財課第２係長　飛高憲雄，（庶務）岸田　隆

発掘担当　山崎龍雄，米倉秀紀，小林義彦

調査補助員　平川敬治（九州大学）

調査協力者　松尾和雄，高浜謙一，神尾順次，三浦義隆，松尾　司，田中克昌，金田英夫，重光保宏，真先　修，桃崎柘輔，吉村哲美，有富いつ子，板倉文子，井上紀世子，緒方マサヨ，金子由利子，清原ユリ子，後藤ミサヲ，坂口フミ子，佐藤テル子，柴田勝子，庄野崎ヒデ子，土斐崎初栄，徳永ノブヨ，西尾たつよ，平井和子，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，松尾玲子，宮原邦江，萬スミヨ，吉岡田鶴子，河津玉枝，舛本亜希，綿加知子，田中智子，徳永亜紀，青柳フミ子

資料整理　平川敬治，池田礼子，井上マツミ，内尾トミ子，岡根なおみ，永井和子，仲前智江子，松下節子，吉田祝子

＜有田・小田部第９集編集関係者＞　池田洋子，山中香欧里，佛石美紀子，藤原美紀，安部晴代，髙木美起子，箱田加代子，永利咲江

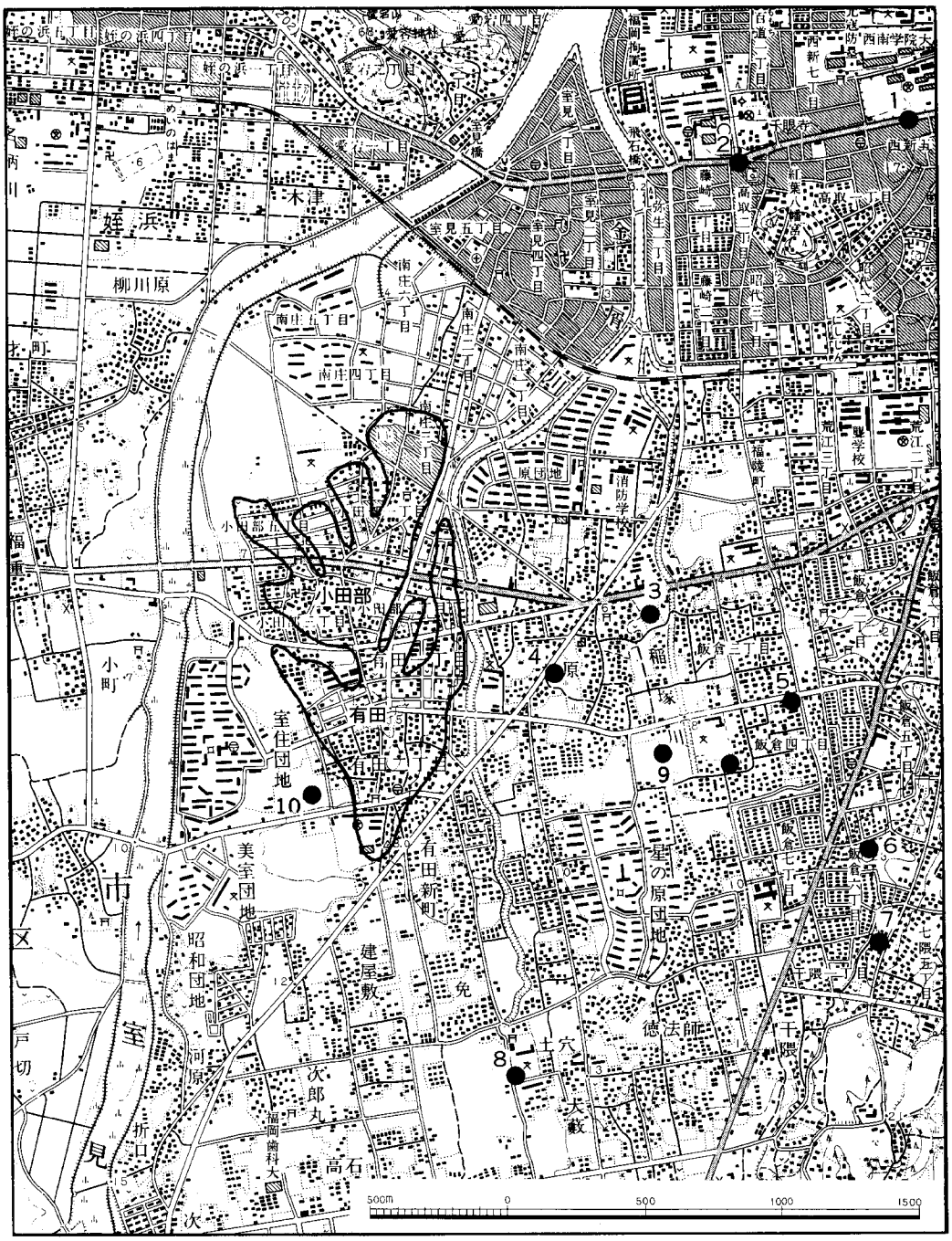
以上のほか，発掘調査・資料整理期間中，土地所有の方々あるいは多くの地元の方々から，多大な援助をいただいた。これらの方々に，末筆ながら深くお礼申し上げる次第です。

第２章　遺跡の立地と調査概要

１．立　地

福岡市早良区有田・小田部・南庄の位置する台地は，室見川の開折によって形成された早良平野のほぼ中央に位置し，標高15m前後を測る独立中位段丘である。台地の形成は洪積世に位置づけられ，八女粘土・鳥栖・新期ロームの層序をなしている。台地は主軸を南北方向に向け，南北の長さ約１km，最大幅約0.7kmを測り，北へ緩やかに傾斜している。旧地形では有田１～２丁目を最高所にして標高15mを測り，周辺水田面との比高差は約10mを測っていたが，現在では沖積化のため５～７mの比高差を測る。台地の西側に室見川が，東側に金屑川が北流しているため台地の縁辺は浸蝕を受け，小断崖を形成している。また，台地内に深く切り込んだ比較的浅く，緩やかな谷も幾つか存在するため台地は北方向に八ツ手状に分岐している。この台地上には有田・小田部・南庄の３つの集落が形成されているが，近世の住宅化はその界線を失くしつつある。有田・小田部両地区は昭和40年代の初めに区画整理事業が行われ，著しい現状変更が行われている。

有田遺跡は台地上に広く分布する旧石器時代から近世までの複合遺跡である。旧石器のナイフ・ポイントは第６次調査などで検出されている。縄文時代には有田地区の西側に偏して中期～晩期の貯蔵穴群を検出している。弥生時代初頭のＶ字溝は第２次調査で検出しているが，その後の第45次・54次・77次・95次調査によって，この溝が西側の浅い谷を取り巻くように巡るもので，長径300m，短径200mを測る楕円形の環濠になる可能性をもっていることがわかった。西端の七田前遺跡では縄文晩期の土器に大陸系の石器や無文土器を伴っており，既に水田経営のあったことを示唆している。前期後半の集落は台地中央上に検出できる。この時期の溝は有田地区では台地縁辺をとり巻くように巡るが規模は不明である。この時期の甕棺墓の内，西福岡高校校庭内の甕棺より細形銅剣１本が出土している。その他には小田部地区から細形銅矛の出土も伝えられる。中期は前代を踏襲し，後半には第３次調査で検出した大型の円形住居跡群が出現する。青銅利器の鎔范片の出土や広形銅戈の出土も伝えられることから拠点的な集落の存在が考えられる。古墳時代の住居跡は台地上に広く検出しており，長期間に亘った集落が各所に存在しているが，４～５軒の単位集落を把握することが可能である。この時期には小田部地区に古墳が形成され，筑紫殿塚・松浦殿塚などの大円墳が存在する。石棺墓や粘土郭も検出しており，弥生時代からつづいた在地勢力の集約化が認められる。又，原遺跡は金屑川を挟んで有田台地の東側に位置しており，弥生時代から古墳時代の遺跡であるが，位置関係から考えて有田遺跡とは共同体的な機能を果たしていたものと思われる。律令時代はこの地区は早良群田部郷に比定されるが，大型の柱穴をもつ建物群は有田地区に集中し，第56次・第57次・第77



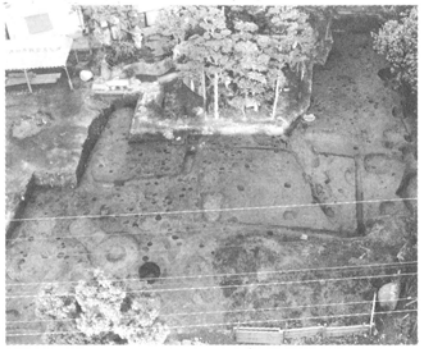
1．西新町遺跡　2．藤崎遺跡　3．原遺跡　4．原談儀遺跡　5．飯倉遺跡
6．飯倉原遺跡　7．千隈遺跡　8．鶴町遺跡　9．原深町遺跡　10．有田七田前遺跡

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡（縮尺 1/25,000）

次・第78次・第82次・第101次・第107次調査では倉庫や居宅的な建物を検出した。更に，有田地区から連続する小田部の旧集落内からは第105・102次調査によって３本柱の柵に囲まれた掘立柱建物の倉庫群を検出している。これらの建物群は古代官道に付設された額田駅が西方約２㎞に位置することを考慮すれば郡衙などの官衙規模の建物群と考えて良く，円面硯や石帯・越州窯・長沙窯などの出土遺物を考え併わせると，早良郡衙を推定することが可能である。古代・中世には西に下山門荘，南に野芥荘が存在するが，中世には在地領主の成長とともに名田や名屋敷が開発され，当該地域にも中園屋敷，淀姫屋敷などの名屋敷が形成される。中世後半には大内氏の早良郡代大村興景の知行地や，大友氏の被官であった小田部氏の里城―小田辺城などが存在する。有田地区にて検出した幅５ｍを測る空濠は〝Ｌ字形〟又は〝コの字形〟の郭を形成しており，範囲は約200ｍ四方に及ぶ。大内氏関係の遺物や中国明代，李朝の陶磁器が出土しており，16世紀前～中頃の築城を考えることができる。中世の遺物には博多湾が貿易の良港として栄えたことや大内氏の朝鮮貿易とも関わっており，中国陶磁器や朝鮮陶磁器の出土が著しい。

２．調査の概要

昭和62年度事業では，先土器時代以降の遺物，弥生時代以降の遺構を検出した。発掘調査は昭和62年４月13日～63年３月25日まで行った。調査次数は第115次，第119次～第135次までで，この内第123次調査は有田地区の下水道建設工事に伴う調査である。以下第115次から第135次調査についての概要を述べる。



第115次調査

第115次調査　昨年度からの継続調査である。昭和61年度調査分の南側を発掘調査した。北側は包含層が残り，遺構面は２面ある。主な遺構は井戸，土坑，溝，弥生後期の矩形の小溝である。遺物は包含層より越州窯系の青磁片，弥生時代後期の土器などが出土した。

遺構　井戸，土坑，溝，矩形の小溝

遺物　越州窯系の青磁片。

第119次調査

第119次調査　南庄地区の台地西側周縁に位置する。周辺では北東に50ｍ程離れた所に第85・89次調査を実施している。遺構は弥生時代中期の甕棺墓８基，土坑墓，江戸時代の土坑，土坑墓10基で，遺物は弥生式土器片

や江戸時代の陶磁器や埋甕が出土した。

遺構　弥生時代の甕棺墓８基，土坑墓，江戸時代土坑墓

遺物　弥生時代中期甕棺

第120次調査　有田地区台地の西側斜面に立地し，周辺では第12・39・109次調査などを実施している。今回検出した遺構は中世と考えられる土坑３基とピットである。

遺構　中世土坑３基

第121次調査　小田部地区の調査で，周辺では第36・46・64・86次調査などを実施し，弥生時代前期末から後期の甕棺墓地や古墳時代の竪穴式住居跡群，中世の濠などを検出している。今回の調査では，弥生時代前期の貯蔵穴２基，弥生時代後期前半の甕棺墓１基，中世溝２条，柵１条，掘立柱建物１棟を検出した。遺物は貯蔵穴から弥生前期の小型壺，甕が出土。

遺構　弥生時代前期貯蔵穴２基，弥生時代後期甕棺墓１基，柵１条，中世溝２条，掘立柱建物１棟

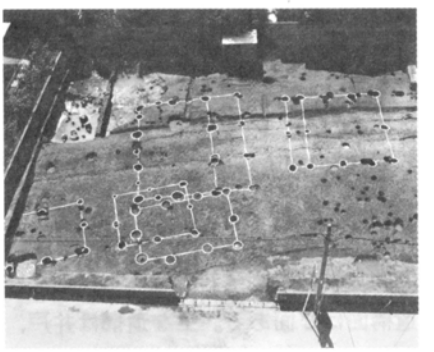
第122次調査　小田部台地に立地し，周辺では第53・105・130次調査などを実施しており，古墳時代後期を中心とする遺構群を発見した。今回の調査は第53次調査に隣接し，古墳時代後期の水溜状遺構と考えられる大型土坑，律令時代の掘立柱建物６棟を検出した。遺物は大型土坑から古墳時代後期の土師器，須恵器が多量に出土。

遺構　古墳時代後期の土坑６，律令時代の掘立柱建物６棟

第123次調査　有田・小田部地区における下水道工事に伴う調査である。総延長5,500m，幅２mの範囲について調査を行った。

第120次調査

第121次調査



第122次調査

第123次調査

第124次調査　小田部地区の調査で，有田・小田部台地の最も幅の狭い地域に位置する。周辺では第３・40・51・108次調査などを実施し，弥生時代中期から古墳時代後期迄の竪穴住居跡群，古墳時代から中世迄の掘立柱建物群・溝などを検出した。今回の調査では第３次調査から続く平安時代の大溝，第108次調査から続く奈良時代の溝，古墳時代後期の竪穴住居跡７軒，平安時代の井戸２基を検出した。遺物は竪穴住居跡から古墳時代後期の須恵器，土師器が出土している。

遺構　弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡７軒，古墳時代～中世の掘立柱建物，奈良時代の溝１条，平安時代の溝１条，井戸２基

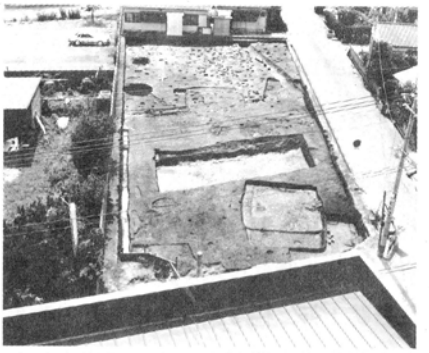
第125次調査　小田部地区の西側台地の東斜面上に立地する。周辺では第16・35・90・106次調査などを実施し，古墳時代前期から後期の竪穴住居跡群，中世の溝などを検出している。今回の調査でも古墳時代を中心に遺構を検出した。主な遺構は弥生時代前期の土坑５基，古墳時代前期～中期の竪穴住居跡８軒・掘立柱建物５棟，中世溝２条である。遺物は弥生時代から中世まで多量出土した。

遺構　弥生時代前期土坑５基，古墳時代竪穴住居跡８軒，掘立柱建物５棟，中世溝２条

第126次調査　小田部地区台地の北端部にあり，当地点の北側は崖面となっている。周辺では第25・27・37・63次調査を実施し，弥生時代中期の竪穴住居跡や古墳時代以降の掘立柱建物群を検出している。今回の調査では弥生時代前期末から中期の甕棺墓４基・土坑墓２基を検出した。遺物は２基の甕棺から人骨が各一体遺存していた。

遺構　弥生時代前期～中期甕棺墓４基，土坑墓２基

第127次調査　小田部地区の調査である。周辺の調査は



第124次調査

第125次調査

第126次調査

第127次調査

進んでおらず，第36・34次調査の２カ所にすぎない。今回の調査では調査区内の西側を中心にピット群を検出した。

第128次調査　南庄地区台地の中央に位置する。周辺では第58・76・94次調査などを実施している。今回の調査では弥生時代後期の土坑１基，古墳時代後期の竪穴住居跡１軒，柵２条を検出した。弥生時代後期の土坑から弥生式土器がまとまって出土した。

遺構　弥生時代後期土坑１基，古墳時代後期竪穴住居跡１軒，柵２条

第129次調査　小田部地区東側台地の西斜面上に位置し，周辺の調査では第13・131次調査などがある。今回の調査では古墳時代以降の土坑２基，ピット群を検出した。弥生時代から中世迄の遺物が出土した。

遺構　古墳時代以降の土坑２基

第130次調査　小田部地区の調査である。周辺などでは第50・117・122・124次調査などを実施している。今回の調査では中世溝１条，近世以降の土坑，埋甕，ピットを検出した。

遺構　中世溝１条，近世以降の土坑，埋甕

遺物　近世以降の日常雑器

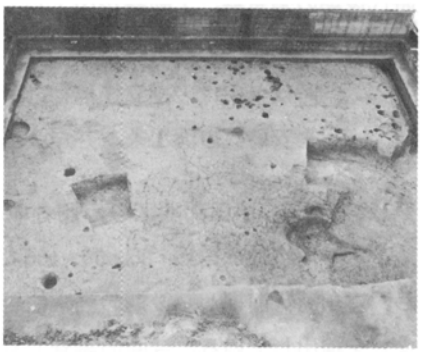
第131次調査　小田部地区の調査で，第130次調査とは谷を挟んで相対している。今回の調査では古墳時代後期の竪穴住居跡１軒と旧石器時代の遺物が数十点出土した。

遺構　古墳時代後期の竪穴住居跡１軒。

遺物　旧石器のナイフなどが出土。

第132次調査　有田地区台地の東側斜面上に位置し，西側では第88次調査を実施している。今回の調査では奈良時代から平安時代の掘立柱建物群や土坑を検出した。

第128次調査



第129次調査

第130次調査

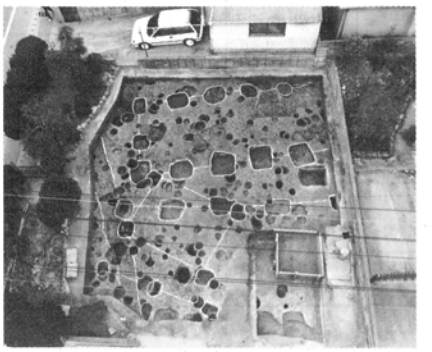
第131次調査

遺物の時期は弥生時代から中世である。

遺構　奈良時代～平安時代の掘立柱建物・土坑。

第133次調査　有田地区台地の中央に位置し，周辺では第18・56・95・101・107次調査などを実施し，弥生時代前期の環濠や古墳時代から古代迄の掘立柱建物群，戦国時代の濠などを調査している。今回の調査では第95次調査から続く環濠や戦国時代の濠を検出した。遺物の時期は弥生時代から中世迄の各時代に亘っている。

遺構　弥生時代前期環濠１条，中世濠１条。



第132次調査

tab. 1　有田・小田部発掘調査一覧表

調査次数	調査番号	地点名	調査地域（地番）	調査面積	調査期間	遺構	文献
第1次	6501		13、14、18、24、25、27、29、31 街区８ヶ所	500㎡	42年２月20日～３月11日	弥生時代前期Ｖ字溝１、古墳時代前期住居跡２、後期住居跡１、奈良時代住居跡１	註４
〃２〃	6603		13、16、17、18、27、29、31 街区７ヶ所	900㎡	43年２月20日～３月１１日	弥生時代前期Ｖ字溝１、後期Ｖ字溝１、古墳時代前期住居跡４、古墳時代前期溝２、奈良時代炉跡３、掘立柱建物１、平安時代溝１、中世溝１	註５
〃３ａ〃	7503	Ｃ－ｄ	早良区小田部１丁目427、439－１、499－２	1,082㎡	50年12月８日～２月10日		註14
〃３ｂ〃	7504	Ｉ－ａ	〃　有田１丁目23－１	1,836㎡	51年２月16日～６月16日	弥生時代前期貯蔵穴２、中期住居跡４、井戸２、後期住居跡８、掘立柱建物１、平安時代溝１	〃
〃４〃	7710	Ｇ－ａ	〃　小田部２丁目139	1,691㎡	52年６月９日～８月19日	奈良時代以降の掘立柱建物40棟、製鉄炉跡	註２
〃５〃	7711	Ｊ－ｃ	〃　〃　〃　704	900㎡	〃　６月20日～11月23日	縄文時代中期～後期貯蔵穴群	註11
〃６〃	7712	Ｉ－ｕ	〃　有田１丁目20－３	1,289㎡	〃　８月18日～10月20日	弥生時代前期Ｖ字溝２、古墳時代住居跡２、中世溝２、奈良時代柵	註２
〃７〃	7821	Ｉ－ｖ	〃　〃　〃　８－10	573㎡	53年３月８日～４月20日	弥生時代前期溝、中世掘立柱建物１、溝２、墓跡１	註７
〃８〃	7822	Ｉ－ｄ	〃　〃　〃　13－12	191㎡	〃　３月17日～５月15日	掘立柱建物１、古墳時代住居跡３	〃
〃９〃	7823	Ｄ－ｉ	〃　小田部１丁目174－２	211㎡	〃　５月29日～６月９日 〃　６月15日～６月30日	古墳時代住居跡２、土坑１	註１
〃10〃	7824	Ｆ－ｇ	〃　〃　２丁目57	436㎡	〃　５月30日～６月14日		〃
〃11〃	7825	Ｈ－ｄ	〃　〃　168－３－４	186㎡	〃　５月27日～６月２日		〃
〃12〃	7826	Ｊ－ｇ	〃　有田１丁目37－11	360㎡	〃　６月６日～６月29日	古墳時代前期住居跡２、奈良時代以降炉跡３、掘立柱建物２	〃
〃13〃	7827	Ｆ－ｄ	〃　小田部２丁目73－２	152㎡	〃　７月17日～７月21日	ピット数個、方形の竪穴	〃
〃14〃	7828	Ｈ－ｊ	〃　〃　３丁目281－２	539㎡	〃　８月２日～８月21日	近世井戸跡３	〃
〃15〃	7829	Ｅ－ｐ	〃　〃　５丁目54－１	275㎡	〃　８月29日～10月２日	古墳時代住居跡５、掘立柱建物	〃
〃16〃	7830	Ｅ－ｎ	〃　〃　３丁目312	107㎡		弥生時代前期貯蔵穴 弥生時代末～古墳時代初頭住居跡１	〃
〃17〃	7831	Ｊ－ｐ	〃　有田１丁目20－９	136㎡	54年３月９日～３月20日	中世溝１	註６
〃18〃	7913	Ｊ－ｎ	〃　〃　〃　32－１	248㎡	〃　４月16日～21日、27日	夜臼式土器を伴う弥生時代前期溝	
〃19〃	7914	Ｉ－ｕ	〃　〃　〃　24－４	250㎡	〃　６月16日～７月８日	古墳時代初頭住居跡１、中世溝２ 弥生時代前期溝１、井戸１	註９
〃20〃	7915	Ｋ－ｃ	〃　〃　２丁目14－20	250㎡	〃　６月３日	溝１、掘立柱建物１	
〃21〃	7916	Ｉ－ｄ	〃　〃　１丁目13－16	442㎡	〃　７月13日～７月18日	古墳時代初頭住居跡１、掘立柱建物１	註６
〃22〃	7917	Ｅ－ｊ	〃　小田部１丁目25	385㎡	〃　〃　～７月26日	掘立柱建物12	〃
〃23〃	7918	Ｊ－ｇ	〃　有田１丁目27－２	485㎡	〃　７月27日～８月23日	中世溝２	〃
〃24〃	7919	Ｋ－ｅ	〃　〃　２丁目10－７	143㎡	〃　８月３日～９月10日	中世濠状遺構１、井戸跡２	〃
〃25〃	7920	Ｄ－ａ	〃　小田部１丁目237－１	298㎡	〃　８月８日～８月11日	中世掘立柱建物４	〃

調査次数	調査番号	地点名	調査地域（地番）	調査面積	調査期間	遺構	文献
第26次	7921	D－c	早良区小田部１丁目219	245㎡	〃 8月23日～9月10日	掘立柱建物２、平安時代土坑墓１	註６
〃27〃	7922	D－a	〃 〃 〃 241	244㎡	〃 9月10日～9月17日	弥生時代中期住居跡１	〃
〃28〃	7923	I－u	〃 有田１丁目20－２	179㎡	〃 9月14日～10月２日	弥生時代前期Ｖ字溝１、中世溝１、道路跡１	註７
〃29〃	7924	J－e	〃 〃 〃 33－２	280㎡	〃 10月５日～11月12日	古墳時代住居跡３、奈良時代掘立柱建物１	〃
〃30〃	7925	J－k	〃 小田部３丁目288	586㎡	〃 10月16日～12月３日	弥生時代～中世掘立柱建物10数棟 古墳時代住居跡２、火葬墓１	註10
〃31〃	7926	J－h	〃 有田１丁目34－２	580㎡	〃 11月12日～12月１日	古墳時代住居跡１、掘立柱建物２	註７
〃32〃	7927	J－o	〃 〃 〃 29－９	237㎡	〃 12月14日～55年２月10日 55年２月25日～３月17日	古墳時代初頭住居跡１、掘立柱建物１ 中世溝２、中世井戸１	註９
〃33〃	8005	D－c	〃 小田部１丁目230～231	491㎡	〃 5月20日～6月7日	古墳時代住居跡2、掘立柱建物2、製鉄炉跡３	註７
〃34〃	8006	C－d	〃 〃 〃 157	612㎡	〃 6月9日～6月19日	古墳時代住居跡１、掘立柱建物４	〃
〃35〃	8007	E－h	〃 〃 5丁目150	843㎡	〃 6月19日～11月7日	古墳時代初期～後期住居跡10、弥生時代前期貯蔵穴１、中世井戸１、中世溝３、掘立柱建物１、土坑４	
〃36〃	8008	E－h	〃 〃 〃 143	247㎡	〃 6月23日～7月23日	弥生時代中期後半～末甕棺墓２、中世柵跡 中世溝１	註９
〃37〃	8009	D－a	〃 〃 1丁目237－３	347㎡	〃 7月24日～8月20日	掘立柱建物	〃
〃38〃	8010	D－h	〃 〃 〃 198	430㎡	〃 8月5日～8月19日	中世溝２	〃
〃39〃	8011	J－q	〃 有田１丁目37－７	527㎡	〃 9月26日～10月29日	古墳時代～中世掘立柱建物10数棟、土坑墓２	註11
〃40〃	8012	J－g	〃 有田１丁目26－２	376㎡	55年10月２日～10月31日	中世溝２、掘立柱建物、土坑墓２	註９
〃41〃	8013	H－k	〃 小田部３丁目307	325㎡	〃 11月4日～11月19日	中世溝３、中世井戸１	〃
〃42〃	8104	K－m	〃 有田２丁目85	150㎡	56年４月10日～４月25日	弥生時代～古墳時代掘立柱建物１、平安時代土坑１、中世掘立柱建物２、溝２	〃
〃43〃	8105	K－m	〃 〃 〃 7－88	403㎡	〃 〃 ～４月17日	近世雨落溝１	註14
〃44〃	8106	K－c	〃 〃 〃 14－９	1,028㎡	〃 4月17日～4月30日	中世溝状遺構３ 中世末～近代初頭井戸１、土坑２	註10
〃45〃	8107	L－d	〃 〃 〃 22－15	111㎡	〃 4月23日～4月28日	弥生時代前期溝１、中世溝１ 古墳時代井戸１	註９
〃46〃	8108	E－h	〃 小田部５丁目143－１	264㎡	〃 5月6日～5月28日	中世柵状遺構１、溝２、中世井戸１ 中世土坑１	註10
〃47〃	8109	J－p	〃 有田１丁目28－７，８	372㎡	〃 5月8日～5月26日	中世土坑２、溝１、濠状遺構１	〃
〃48〃	8110	G－a	〃 小田部２丁目140	458㎡	〃 5月18日～6月10日	弥生時代前期甕棺２、同中期住居跡２、掘立柱建物１、弥生～古墳時代土坑７、古墳時代住居跡３、中世掘立柱建物２、溝１、井戸１	〃
〃49〃	8111	F－h	〃 〃 1丁目20－21	655㎡	〃 6月9日～6月11日	古墳時代溝１、土坑２、中世土坑墓１	〃
〃50〃	8112	H－d	〃 〃 3丁目６－２、11－２	182㎡	〃 6月10日～6月17日	中世溝２、井戸１、その他土坑１	
〃51〃	8113	I－a	〃 有田１丁目23－６	314㎡	〃 6月15日～7月17日	弥生時代中期住居跡２、弥生時代～古墳時代掘立柱建物３、古墳時代住居跡１	註11
〃52〃	8114	G－i	〃 小田部２丁目110－２	561㎡	〃 6月24日～8月5日	古墳時代住居跡４、土坑３、奈良時代土坑１ 中世溝１、近世溝４条、その他、土坑１、掘立柱建物１	註12
〃53〃	8115	J－k	〃 有田１丁目28－３、28－４	417㎡	〃 7月21日～8月7日	古墳時代～平安時代溝１、掘立柱建物１、古墳時代住居跡１、中世溝１、土坑２	註11
〃54〃	8116	K－n	〃 〃 2丁目16－１	1,224㎡	〃 7月22日～7月29日	縄文時代溝１、弥生時代前期溝１、中世溝１ 近世溝１	
〃55〃	8117	J－e	〃 〃 1丁目33－３	317㎡	〃 8月7日～9月29日	古墳時代土坑１、古墳時代住居跡２、律令時代溝１、掘立柱建物２、中世溝１、その他、土坑１	註10
〃56〃	8118	J－n	〃 〃 〃 32－９	513㎡	〃 8月25日～10月28日	縄文晩期溝１、律令時代掘立柱建物２ 中世土坑墓１	註11
〃57〃	8119	J－q	〃 〃 1丁目241－２	275㎡	〃 10月1日～10月14日	古墳時代住居跡１、中世溝１	〃
〃58〃	8120	A－o	〃 南庄３丁目185、186	333㎡	〃 10月2日～10月20日	弥生時代住居跡２、中世～近世土坑４	
〃59〃	8121	J－a	〃 小田部３丁目177	938㎡	〃 10月6日～11月21日	弥生時代中期住居跡２、前期甕棺墓１、中世溝２、掘立柱建物10、弥生～中世土坑41	註８・12
〃60〃	8122	J－a	〃 〃 〃 178－２	26㎡	〃 11月21日～11月24日	中世溝１、近世地割り溝１	註12
〃61〃	8123	I－m	〃 有田２丁目21－２	187㎡	〃 11月21日～12月13日	中世溝１	
〃62〃	8133	L区外	〃 有田字七田前	1,200㎡	57年８月16日～９月23日	縄文時代終末、夜臼式土器包含層 及び川状遺構	註３
〃63〃	8204	D	〃 小田部１丁目224	115㎡	〃 4月2日～4月12日	古墳時代～中世の掘立柱建物７、柵１	註10
〃64〃	8205	E	〃 〃 5丁目144－１，145 146、151－153	1、800㎡	〃 4月12日～5月10日 6月25日～8月6日	弥生時代甕棺墓33、古墳時代の住居跡19、古墳時代～律令時代の掘立柱建物10、弥生～中世土坑41	註14
〃65〃	8206	K	〃 有田２丁目７－10	251㎡	〃 4月23日～4月26日	縄文時代～古墳時代の土坑３	註10

調査次数	調査番号	地点名	調査地域（地番）	調査面積	調査期間	遺構	文献
第66次	8207	I	早良区有田1丁目20－1	503㎡	〃 5月7日～6月10日	古墳時代住居跡2、溝4、奈良時代井戸1、土坑1、掘立柱建物4、柵1、古墳時代中世の掘立柱建物10、柵1	註11
〃67〃	8208	D	〃 小田部1丁目171、172－1	802㎡	〃 5月25日～6月18日	古墳時代の住居跡1、古墳～律令時代掘立柱建物4、時期不明土坑3、中世土坑1	註10
〃68〃	8209	L	〃 有田2丁目17－42	146㎡	〃 6月8日～6月15日	中世濠1、時期不明土坑3	〃
〃69〃	8210	I	〃 〃 1丁目13－10	649㎡	〃 6月16日～7月31日	古墳～律令時代掘立柱建物1、土坑2 中世溝状遺構2	〃
〃70〃	8211	I	〃 〃 〃 17－1、2	191㎡	〃 6月17日～6月30日	中世濠2	〃
〃71〃	8212	I	〃 〃 〃 22－4・7	383㎡	〃 8月30日～10月4日	古墳時代住居跡1、掘立柱建物1、奈良時代井戸1、中世井戸2、濠2、土坑1	〃
〃72〃	8213	J	〃 〃 〃 26－3	394㎡	〃 9月22日～10月21日	中世土坑1、濠1、溝1、掘立柱建物3	〃
〃73〃	8214	D	〃 小田部1丁目189	144㎡	〃 9月28日～10月8日	古墳～律令時代の掘立柱建物3	〃
〃74〃	8215	K	〃 有田2丁目7－80	1,156㎡	〃 10月12日～12月31日	弥生時代井戸1、中近世井戸3、溝1、土坑1、弥生～古墳時代住居跡2、溝1、掘立柱建物2、奈良時代製鉄遺構2、時期不明掘立建物10	〃
〃75〃	8216	J	〃 〃 1丁目27－11	284㎡	〃 10月20日～11月4日	律令時代柵1、時期不明掘立柱建物3	〃
〃76〃	8304	A	〃 南庄3丁目114－3	355㎡	58年4月5日～4月22日	住居跡2、掘立柱建物6、溝状遺構1	註11
〃77〃	8305	J	〃 有田1丁目30－1～3	1,707㎡	〃 4月8日～6月20日	古墳時代の住居跡7軒、奈良時代の掘立柱建物4棟、中世末の溝1条、土坑墓4、木棺墓1、井戸1、溝状遺構5条、柵1条	〃
〃78〃	8306	L	〃 〃 2丁目20－2	412㎡	〃 5月23日～7月21日	弥生時代前期の貯蔵穴6、住居跡2軒、古墳時代住居跡1軒、奈良時代の溝1条、中世の土坑墓2、中世末の溝1条、時代不詳の掘立柱建物1軒	〃
〃79〃	8307	D	〃 小田部1丁目225－1・2	143㎡	〃 6月9日～6月15日	掘立柱建物1棟	〃
〃80〃	8308	C	〃 小田部1丁目168	885㎡	58年6月22日～7月26日	弥生時代前期の貯蔵穴群、中期の住居跡2軒土坑墓1、火葬墓1	註11
〃81〃	8309	I	〃 有田1丁目	8,000㎡	〃 7月1日～12月10日	弥生時代～中世	註13
〃82〃	8310	J	〃 〃 1丁目29－13・14	411㎡	〃 7月14日～9月6日	溝2、住居跡1、土坑15、集石遺構2 掘立柱建物4	註12
〃83〃	8311	I	〃 〃 〃 127－3	378㎡	〃 8月24日～11月11日	土坑3、井戸1、道路状遺構1、溝2	〃
〃84〃	8312	K	〃 〃 2丁目7－66	303㎡	〃 9月13日～10月18日	弥生時代後期の井戸、中世の濠	註11
〃85〃	8313	A	〃 南庄3丁目261－1	576㎡	〃 9月27日～10月5日	土坑1基	〃
〃86〃	8314	E	〃 小田部5丁目143－3	247㎡	〃 10月11日～11月7日	土坑6、甕棺墓4、溝状遺構5、掘立柱建物2	〃
〃87〃	8315	K	〃 有田2丁目12－6	248㎡	〃 10月14日～12月1日	住居跡2、土坑7、掘立柱建物2、溝2	〃
〃88〃	8316	I	〃 〃 1丁目8－7	259㎡	〃 11月2日～12月24日	奈良時代の住居跡1軒、掘立柱建物5棟、中世末の溝1条	〃
〃89〃	8317	A	〃 南庄3丁目261－1	576㎡	〃 12月1日～12月20日	古墳時代の住居跡、円墳の周溝跡、奈良時代の火葬墓1	〃
〃90〃	8318	E	〃 小田部5丁目149－2～4	286㎡	〃 12月9日～59年1月28日	古墳時代の住居跡2軒、井戸1、中世の溝2条、掘立柱建物	〃
〃91〃	8417	J	〃 〃 3丁目153	282㎡	59年4月25日～5月11日	円形袋状土坑、中世末～近世初頭溝、Pit群	註12
〃92〃	8418	J	〃 有田1丁目26－6（一部）	150㎡	〃 4月26日～5月12日	弥生時代後期の溝1条、古墳時代の溝1条 土坑3基、中世の土坑墓1基、Pit群	〃
〃93〃	8419	H	〃 小田部3丁目401	318㎡	〃 5月11日～5月22日	溝、Pit群	〃
〃94〃	8420	A	〃 南庄3丁目172	453㎡	〃 6月8日～7月5日	Pit群、掘立柱建物	〃
〃95〃	8421	J	〃 有田1丁目31－4	657㎡	〃 7月25日～8月29日	弥生時代前期初頭の溝、古墳時代前期住居跡2軒、中世濠2条、近世初期道路状遺構1条、土坑4基	〃
〃96〃	8422	I	〃 〃 〃 20－17	446㎡	〃 8月16日～9月28日	古墳時代前期の溝1条、中世溝1条、土坑2基、井戸1基	〃
〃97〃	8423	A	〃 南庄3丁目90、91、93	1,082㎡	〃 8月20日～9月5日	弥生時代末期甕棺墓1基、古墳時代木棺墓2基、土坑1基	〃
〃98〃	8424	E	〃 小田部5丁目44	286㎡	〃 12月19日～12月28日	土坑1基、Pit群	〃
〃99〃	8425	C	〃 〃 1丁目147、150	547㎡	60年1月24日～1月31日	土坑2基、掘立柱建物1棟、柵状遺構1 近世溝状遺構1条	〃
〃100〃	8510	K	〃 有田3丁目8～2	671㎡	〃 8月23日～10月27日	弥生時代前期の貯蔵穴、土坑4基、弥生時代中期竪穴住居跡1軒、古墳時代前期竪穴住居跡3軒、中世の掘立柱建物18棟、中世の溝5条、井戸1基、中世末の濠1条、土坑墓1基	〃
〃101〃	8511	J	〃 有田1丁目32－3	215㎡	〃 9月4日～10月1日	奈良時代の掘立柱建物4軒、古墳時代竪穴住居跡1軒、中世溝状遺構3条、掘立柱建物1棟、土坑墓2基	〃

調査次数	調査番号	地点名	調査地域（地番）	調査面積	調査期間	遺構	文献
第102次	8512	G	早良区小田部２丁目154	330㎡	〃 ９月26日～11月７日	掘立柱建物１棟、柵１条	〃
〃103〃	8513	H	〃 〃 ３丁目３－14	501㎡	〃 10月４日～10月22日	近世初頭井戸１基、溝２条、近代井戸１基 掘立柱建物２棟	〃
〃104〃	8514	L区外	〃 有田字七田前389－１	544㎡	〃 10月１日～10月23日	突帯文土器の包含層	〃
〃105〃	8515	G	〃 小田部２丁目18－８	660㎡	〃 10月26日～11月22日	古墳時代後期住居跡１軒、溝状遺構１条 奈良時代掘立柱建物１棟、中世土坑	〃
〃106〃	8538	E	〃 〃 〃 168	706㎡	〃 11月8日～61年2月14日	古墳時代竪穴住居跡15軒＋α、中世溝３条 古墳時代から律令時代の掘立柱建物３棟	〃
〃107〃	8602	J	〃 有田１丁目31－１外	925㎡	61年４月24日～８月１日	古墳時代初頭竪穴住居跡３軒、同後期の竪穴住居跡３軒、古墳時代後期～奈良時代掘立柱建物11棟、柵３列、奈良時代の溝１条、中世の濠３条	註14
〃108〃	8603	J	〃 〃 〃 27－１外	787㎡	〃 ５月８日～６月３日	古墳時代前期竪穴住居跡１、同後期住居跡１、奈良時代の溝１条、掘立柱建物５棟、中世末濠２条、近世以降溝５条	〃
〃109〃	8611	J	〃 〃 〃 37－８	290㎡	〃 ５月30日～６月13日	奈良時代ピット群	〃
〃110〃	8623	M	〃 〃 ３丁目71	231㎡	〃 ５月28日～６月３日	古墳時代溝１条	〃
〃111〃	8624	J	〃 〃 １丁目37－３	135㎡	〃 ７月11日～７月29日	古墳時代中期竪穴住居跡１ 掘立柱建物１、土坑１	〃
〃112〃	8644	K	〃 〃 ２丁目９－２	264㎡	〃 10月21日～11月21日	掘立柱建物３棟（うち２棟－平安時代後半） 中世土坑18基	〃
〃113〃	8646	J	〃 〃 １丁目28－９	166㎡	〃 11月５日～11月29日	中世末濠２条	〃
〃114〃	8651	E	〃 小田部５丁目51－２外	1,028㎡	〃 11月27日～62年１月26日	弥生時代中期竪穴住居跡１軒、古墳時代竪穴住居跡５軒 掘立柱建物７棟、土坑２基	〃
〃115〃	8655	M	〃 有田３丁目８－53	800㎡	62年２月４日～５月22日	弥生時代土坑、井戸、中世末製鉄関連遺構	〃
〃116〃	8656	J	〃 小田部３丁目189－１内	500㎡	〃 ２月９日～３月25日	古墳時代前期竪穴住居跡１、同後期竪穴住居跡１、律令期掘立柱建物１	〃
〃117〃	8657	H	〃 〃 〃 ３－14	218㎡	〃 ３月２日～３月25日	井戸３基、溝１条	〃
〃118〃	8639	（下水道）	〃 有田１・２丁目	2,242㎡	〃 ９月24日～３月31日		〃
〃119〃	8701	A	〃 南庄３丁目270－１外	203㎡	〃 ４月17日～５月19日	弥生時代の磯棺墓８基、土坑墓、江戸時代土坑墓	
〃120〃	8705	J	〃 有田１丁目38－３外	77㎡	62年５月14日～５月21日	中世土坑３基	
〃121〃	8706	E	〃 小田部５丁目154－２	165㎡	〃 ５月20日～６月13日	弥生時代前期貯蔵穴２基、弥生時代後期甕棺墓１基、柵１条、中世溝２条、掘立柱建物１棟	
〃122〃	8707	G	〃 〃 ２丁目11－16	375㎡	〃 ５月25日～６月26日	古墳時代後期の土坑、律令時代の掘立柱建物７棟	
〃123〃	8712	（下水道）	〃 有田・小田部	11,000㎡	〃 ５月20日～		
〃124〃	8713	J	〃 有田１丁目24－４	650㎡	〃 ６月23日～９月26日	弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡７棟、古墳時代～中世の掘立柱建物、奈良時代の溝１条、平安時代の溝１条、井戸２基	
〃125〃	8718	E	〃 小田部５丁目172外	722㎡	〃 ６月29日～10月７日	弥生時代前期土坑５、古墳時代竪穴住居跡８棟、掘立柱建物２棟	
〃126〃	8724	D	〃 〃 １丁目34－９	111㎡	〃 ８月４日～８月26日	弥生時代前期～中期甕棺墓４基、土坑墓２基	
〃127〃	8729	C	〃 〃 〃 418－１	180㎡	〃 ９月17日～10月９日	弥生時代後期土坑１、古墳時代住居跡１軒、柵２条	
〃128〃	8730	A	〃 南庄３丁目116	213㎡	〃 ９月28日～10月26日	弥生時代後期土坑１基、古墳時代後期竪穴住居１棟、柵２条	
〃129〃	8735	F	〃 小田部２丁目38	386㎡	〃 10月27日～16月26日	古墳時代以降の土坑２基	
〃130〃	8739	G	〃 〃 〃 185－２	293㎡	〃 11月28日～12月26日	中世溝１条、近世以降の土坑１、埋甕１	
〃131〃	8742	G	〃 〃 〃 131	118㎡	〃 12月16日～１月６日	古墳時代後期の竪穴住居跡１棟	
〃132〃	8749	I	〃 有田１丁目８－３	200㎡	63年１月25日～３月３日	奈良時代～平安時代の掘立柱建物１、土坑１	
〃133〃	8750	J	〃 〃 〃 32－４	420㎡	〃 １月26日～３月31日	弥生時代前期環濠、中世末濠	
〃134〃	8752	D	〃 有田２丁目12－３・４	433㎡	〃 ３月３日～３月24日		
〃135〃	8754	K	〃 小田部１丁目361	293㎡	〃 ３月７日～３月24日		

Tab. 1 の参考文献

註１　福岡市教育委員会「有田遺跡」（孔版）1979
註２　福岡市教育委員会「有田遺跡」遺跡説明会パンフレット　1977
註３　福岡市教育委員会「有田七田前遺跡」（第62次調査）福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集　1983
註４　福岡市教育委員会「有田古代遺跡発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第１集　1967

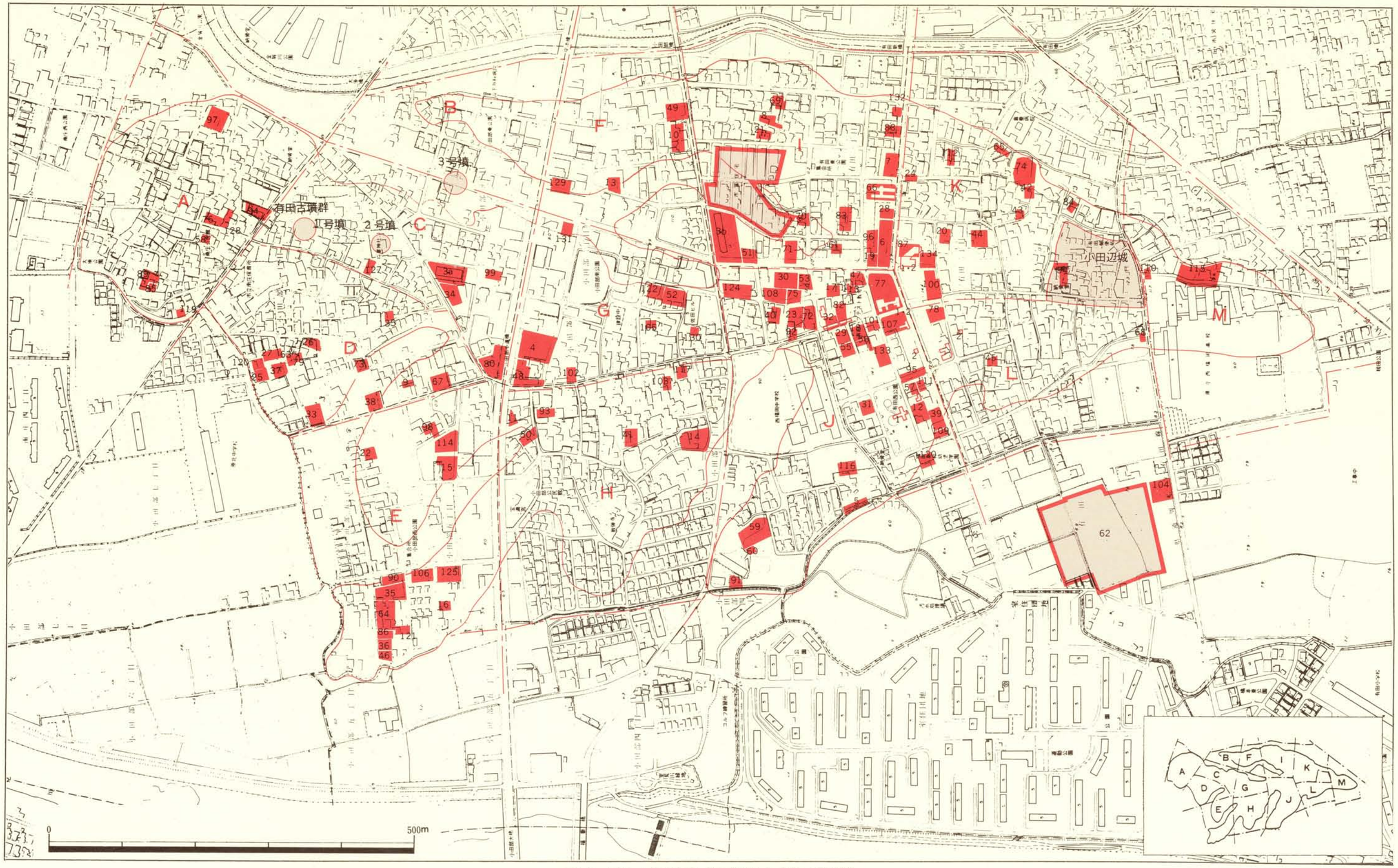


Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点（縮尺 1/5,000）

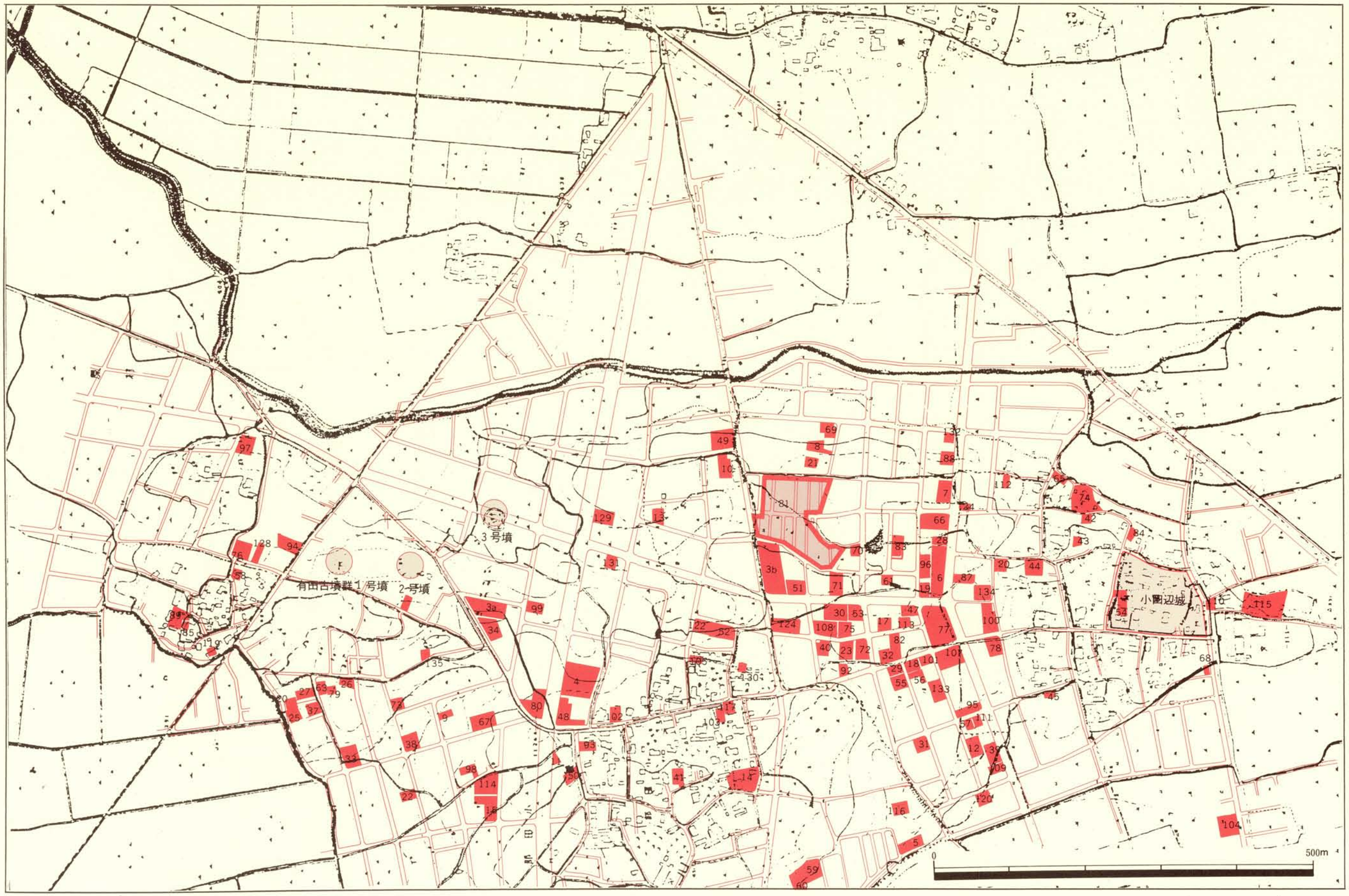


Fig. 3 有田・小田部台地の旧地形図（縮尺 1/5,000）

註５　福岡市教育委員会「有田遺跡―福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査書第２集　1968
註６　福岡市教育委員会「有田・小田部第１集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集　1980
註７　福岡市教育委員会「有田・小田部第２集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集　1982
註８　福岡市教育委員会「有田・小田部第３集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集　1982
註９　福岡市教育委員会「有田・小田部第４集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集　1983
註10　福岡市教育委員会「有田・小田部第５集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集　1984
註11　福岡市教育委員会「有田・小田部第６集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集　1985
註12　福岡市教育委員会「有田・小田部第７集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集　1986
註13　福岡市教育委員会「有田遺跡群－第81次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集　1986
註14　福岡市教育委員会「有田・小田部第８集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集　1987

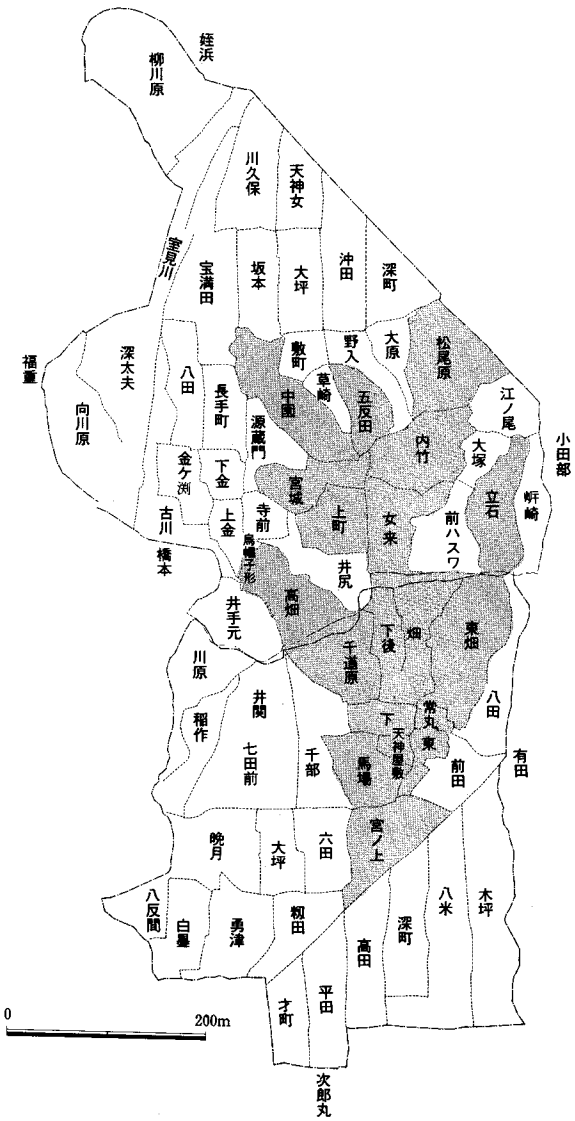


Fig. 4　有田・小田部地区字図（アミは台地上を示す）

第3章　調　査　経　過

1．第35次調査　（調査番号8007）

1）調査地区の地形と概要

発掘調査地の地番は福岡市早良区小田部5丁目150番地である。発掘調査面積は843m²である。発掘調査は昭和57年6月19日～11月7日まで実施した。

この地域は昭和52年以来既に8ヵ所の発掘調査を行っており，弥生時代から中世までの集落，墓地，館跡などを検出している。昭和40年代には側溝工事などで，甕棺墓が発見されている。この甕棺墓地は，狭い舌状台地上に立地することからみて宝台遺跡型の集落と墓地の存在が推測されるところである。弥生時代の集落の手懸りには第16・106次調査の前期後半～中期初頭の貯蔵穴や，第64次調査の円形住居跡がある。又，遺物には弥生時代前期～後期の土器や磨製石斧・石庖丁・石鏃が出土している。弥生時代末から古墳時代の中頃までは大集落が形成される。又，この地域は字名を「中園」と称すが，青柳文書では中世後半期に中園屋敷・中園名が存在したことが記されている。

調査区は舌状台地の東端に位置する。当該地は昭和40年代初めに区画整理を受けていたため，調査区南側の削平は著しい。南側は八女粘土が表出しており，遺構はローム層上面で検出した。表土は旧耕作土の他，一部マサ土の客土がある。北側に暗茶褐色粘質土の包含層が存在する。この北側斜面には包含層が厚く堆積していたが，これは古墳時代～奈良時代の整理層であり，その上面，又は下層には古墳時代の住居跡群が存在した。遺構は弥生時代の甕棺墓・土坑・住居跡，古墳時代の住居跡，奈良時代の柵，中世の溝・土坑などがある。遺物には弥生時代の石庖丁・石斧の他，古墳時代の土師器・須恵器など多数出土した。

2）遺構各説

住居跡（SC）

古墳時代の竪穴住居跡を11軒検出した。1号・15号住居跡を除いて，他は4世紀代に属している。又，3号・4号・9号・11号住居跡は第64次調査区との境界地に位置しており，第64次調査で全体形を把握した。3号住居跡は第64次調査の3号住居跡，9号住居跡は第64次調査の7号住居跡，11号住居跡は第64次調査の12号住居跡と一致する。

1号住居跡（Fig. 6，PL. 4・5）

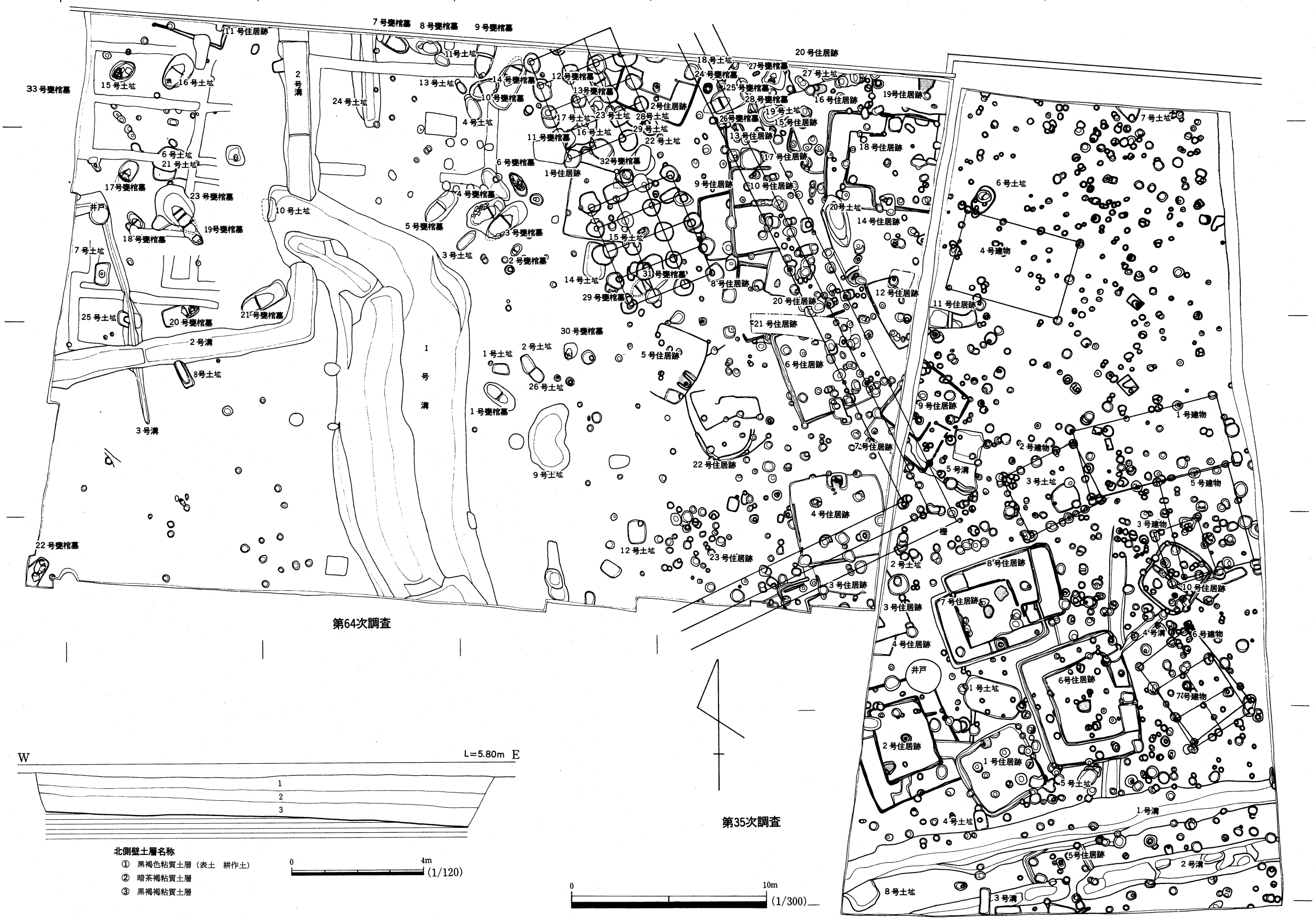


Fig. 5　有田遺跡第35次・64次・90次調査遺構配置図(縮尺 1/300)，
調査区北側壁土層図(1/120)

調査区の南側に位置する。削平を受けているが，壁の残存状態は良好である。２号住居跡と重複する。住居跡の平面形は方形を呈し，東西長は約3.84m，南北長は3.76m，残存壁高38cmを測る。周溝は壁下の西北隅から南東隅まで連続するが，東側の壁下には存在しない。南東隅丸には青灰色の粘土が堆積しており，更に住居跡外へも伸びている。この粘土は長さ1.4m，幅80cm，厚さ６～10cmを測る。住居跡外側の粘土は溝状の遺構に充塡されており，住居跡に関連する施設である。竈は北壁の中央に設けている。炉体を把握できなかったが，支石が残っていたため，竈の存在を確認した。大きさは焼土面より推定すると，東西の長さ80cm，南北の長さ60cmを考えることができる。住居跡の主柱はＰ１～Ｐ４の４本である。掘り方径は40～60cm，深さ43～50cmを測る。柱痕径は18～28cmである。住居跡の覆土は黒褐色粘質土である。

遺物には床面より土師器甕・坏・鉢・甑，須恵器・坏身・坏蓋が出土した。

２号住居跡（Fig. 6，PL. 5・6）

調査区の南西側の境界地に位置する。削平が著しく，壁の遺存状態は悪い。１号住居跡と１号井戸に切られている。住居跡の平面形は長方形で，南北の復元長は約6.6m，東西長は5.14m，残存壁高15cmを測る。壁に沿って全周する口の字形のベッドを設けている。ベッドは地山のローム，及び黒色土の混合土を貼り付けて形成するもので，幅は約90～104cm，高さ10cmを測る。西壁下のベッドは北側で，一段下がっており，又，北壁側のベッドも他に比べて低いことから出入口が北壁側にあることが推測できる。周溝はベッド内側，及び周壁下に存在し，ベッド内側の周溝幅は３～４cm，周壁下の周溝幅は３～６cmを測る。住居跡の中央に炉跡Ｐ１がある。Ｐ１は楕円形を呈し，径70cm，深さ６cmを測る。Ｐ２・Ｐ３は柱穴と思われるが，Ｐ３はベッド上を掘り込んでおり，且つ，炉跡を住居跡の中心と考えた場合離れすぎている。Ｐ２の長径は46cm，現存の深さ22cmを測る。東側のベッド上には，周溝に接して長径64cm，短径60cm，深さ31cmを測る楕円形の Pit がある。この Pit は屋内貯蔵穴とも考えられる。この Pit の北側には長さ64cm程の小溝が，ベッド下の周溝に直交する形で作られている。この Pit の位置は６号住居跡の出入口の pit と周溝の状態に似ており，先に述べたように北側を出口とするよりも，当住居跡の出入口は東向きの可能性が強い。住居跡の覆土は黒褐色粘質土である。

遺物には床面より土師器布留式併行期の甕・高坏の他，扁平石を用いた工作台が出土している。

３号住居跡（Fig. 7，PL. 6）

調査区西側の境界地に位置する。西側の第64次調査の結果，ほぼ全体形を確認できた。第64次調査の３号住居跡と同一である。削平が著しい。４号住居跡と重複しており，３号住居跡が後出する。住居跡の平面形は長方形で，東西の復元長は約5.4m，南北長は4.45m，残存壁高は，第64次調査分では約2.3cmを測る。西側及び，東側の隅角にＬ字形のベッドを設けている。本来ベッドは全周するものと考えられる。北壁の中央寄りに南北方向の周溝が存在するので，

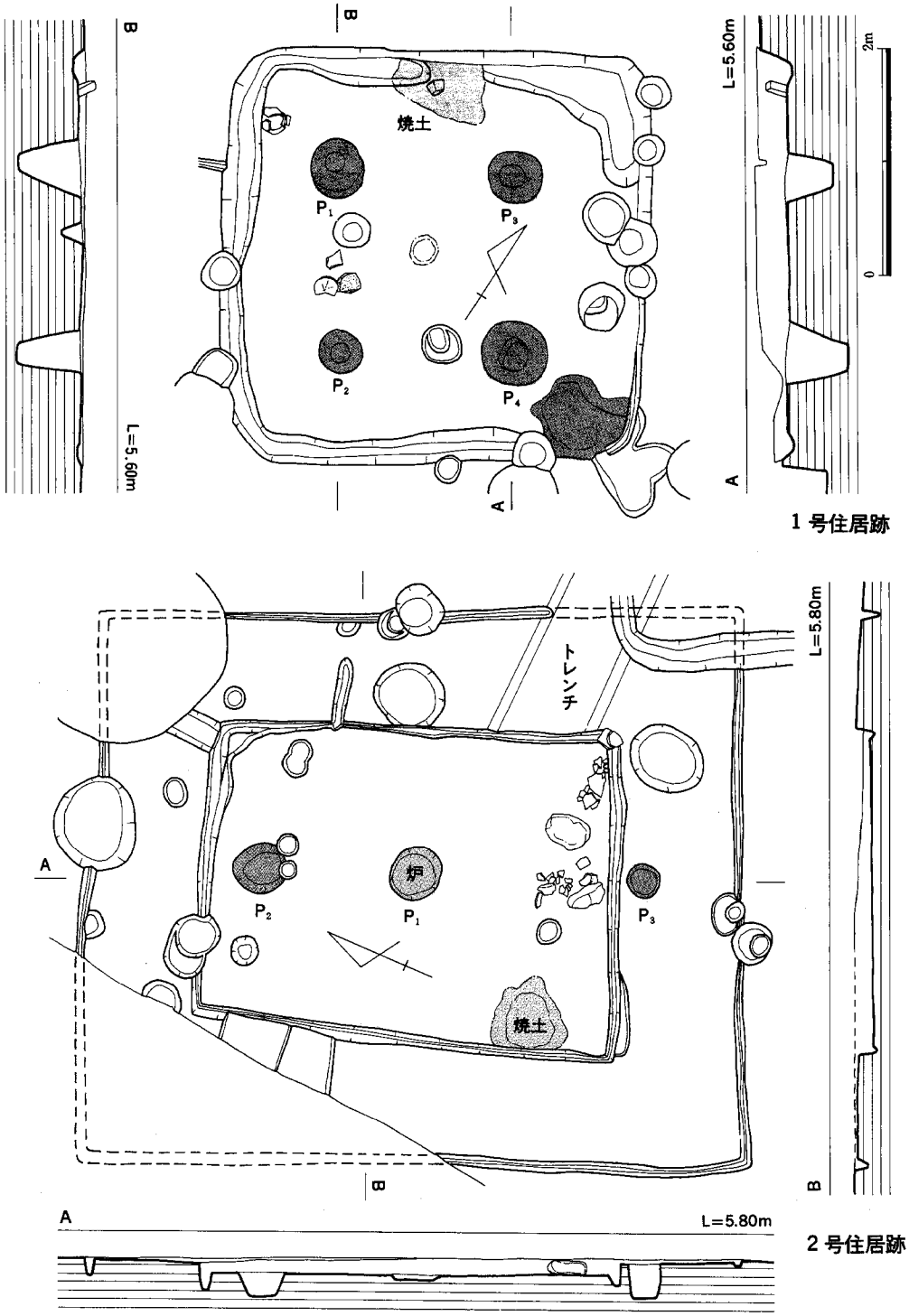


Fig. 6　1号・2号住居跡（縮尺 1/60）

北壁中央部は出入口のため，ベッドが途切れる。周溝はベッド下，及び周壁下に存在するが東壁側には連続しない。炉跡は住居跡の中央に設けており，楕円形を呈する。大きさは長さ58cm，深さ約４cmを測る。主柱はＰ１が考えられる。掘り方径は38cm，深さ約35cmを測る。住居跡の覆土は黒褐色粘質土である。

遺物は第35次調査では出土していないが，第64次調査では布留式併行期の甕・小型丸底壺・高坏・鉢や山陰系の壺などが出土している。

４号住居跡 (Fig. 7, PL. 6)

調査区西側の境界地に位置する。削平が著しく，３号住居跡と重複しており，３号住居跡に

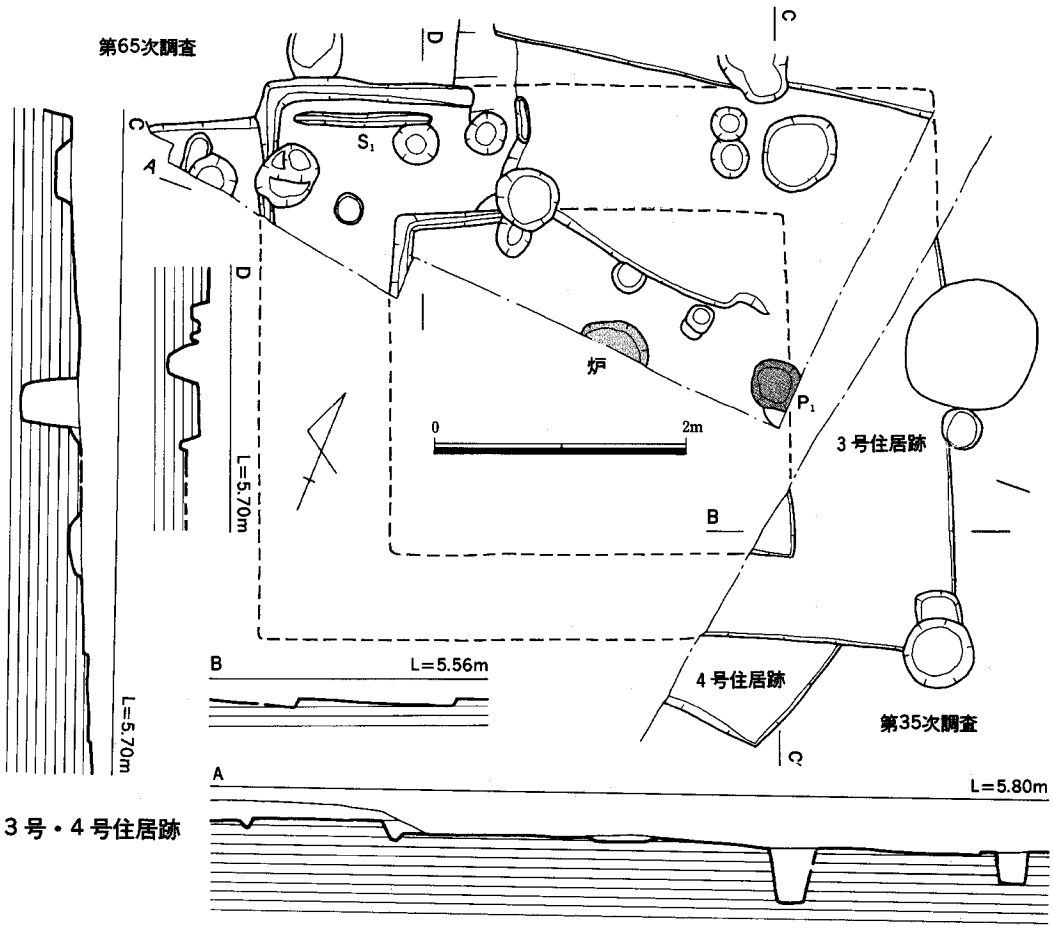


Fig. 7　３号・４号住居跡（縮尺 1/60）

先行する。全体形は不明だが，第64次調査で一部を確認した。住居跡の平面形は長方形を呈するものと思われる。第35次調査部分は住居跡の東南隅角を形成するものと思われるが，第64次調査検出分の住居跡の壁方向と若干ズレるため住居跡平面形には歪みがある。これは第35次調査分が著しい削平を受けているため，本来の形状を残していないためと考えられる。東西の復元長は約5.5m 以上である。残存壁高約15cmである。ベッドの存在は不明。周溝はＳ１が付属するものと思われ，周壁下に存在する。幅は12cm，深さ15cmを測る。現状では連続していない。炉跡，及び主柱は不明。住居跡の覆土は黒褐色粘質土である。

遺物は第64次調査で出土しているが，３号住居跡の遺物が混入しており，時期の判断ができないが，第64次調査分の３号住居跡には庄内併行期又は弥生時代終末期の土器を混入しており，これらの時期の可能性がある。

５号住居跡 (Fig. 8, PL. 7)

調査区南側に位置する。削平が著しく，周壁は全く遺存していない。１号・２号溝に切られているが，東側と西側，及び南側の周溝が一部残っており，規模を知ることができる。住居跡の平面形は周溝から復元すると長方形を呈している。南北の復元長は約3.84m，東西は3.22mを測る。周溝は周壁下を全周するものと考えられ，幅26～30cm，深さ８～10cmを測る。炉跡は住居跡の中央に位置し，楕円形を呈している。長さ40cm，幅36cmを測る。主柱は炉跡の南側と北側に各１本ある。Ｐ１は長径52cm，深さ52cm，柱痕径18cm，Ｐ２は長径45cm，深さ75cm，柱痕径25cmを測る。遺物の出土は少なく，細片であり，時期の判断材料にならない。住居跡の規模や柱穴・炉跡の位置関係などの構造からみて，弥生時代後期後半から古墳時代初頭の住居跡と考えられるが，周溝がベッド内側を巡る可能性をもっており即断はできない。

６号住居跡 (Fig. 8, PL. 7～9)

調査区南側に位置する。住居跡の床面には焼土や炭化物が広がっており，火災により焼失したものと考えられ，出土遺物は他の住居跡に比べ非常に豊富である。住居跡の遺存状態は良好である。住居跡の平面形は隅丸長方形であるが，東側壁が西側壁に対して長く，若干，台形状を呈している。東西の復元長は東壁が6.46m，西壁は5.6m，南北長は南壁が4.5m，北壁は5.1mである。残存壁高は最大値で34cmを測る。周壁下には幅78～100cm，高さ16cm程のベッドを設けるが，このベッドは貼り付けである。ベッドは，東側中央に接して出入口の pit が設けられるため全周しない。周溝はベッド内側，及び周壁下に巡り，周壁下の周溝は出入口の pit まで巡る。出入口の pit は68cm，幅58cm，深さ34cmを測り，隅丸長方形を呈する。炉跡は住居跡の中央寄りに設けている。炉の形状は不整形で，大きさは長さ70cm，最大幅62cm，深さ９cmを測る。主柱はＰ１～Ｐ７が考えられる。Ｐ１～Ｐ４は一列に並んでおり，Ｐ２・Ｐ３の柱穴は深さ20cm・42cmである。ただし，この柱列は住居跡の中心より東側に偏している。Ｐ５～Ｐ７は長径28～42cmの規模であるが，約Ｐ５が35cm，Ｐ６・Ｐ７が26cmの深さをもっている。炉跡を中心

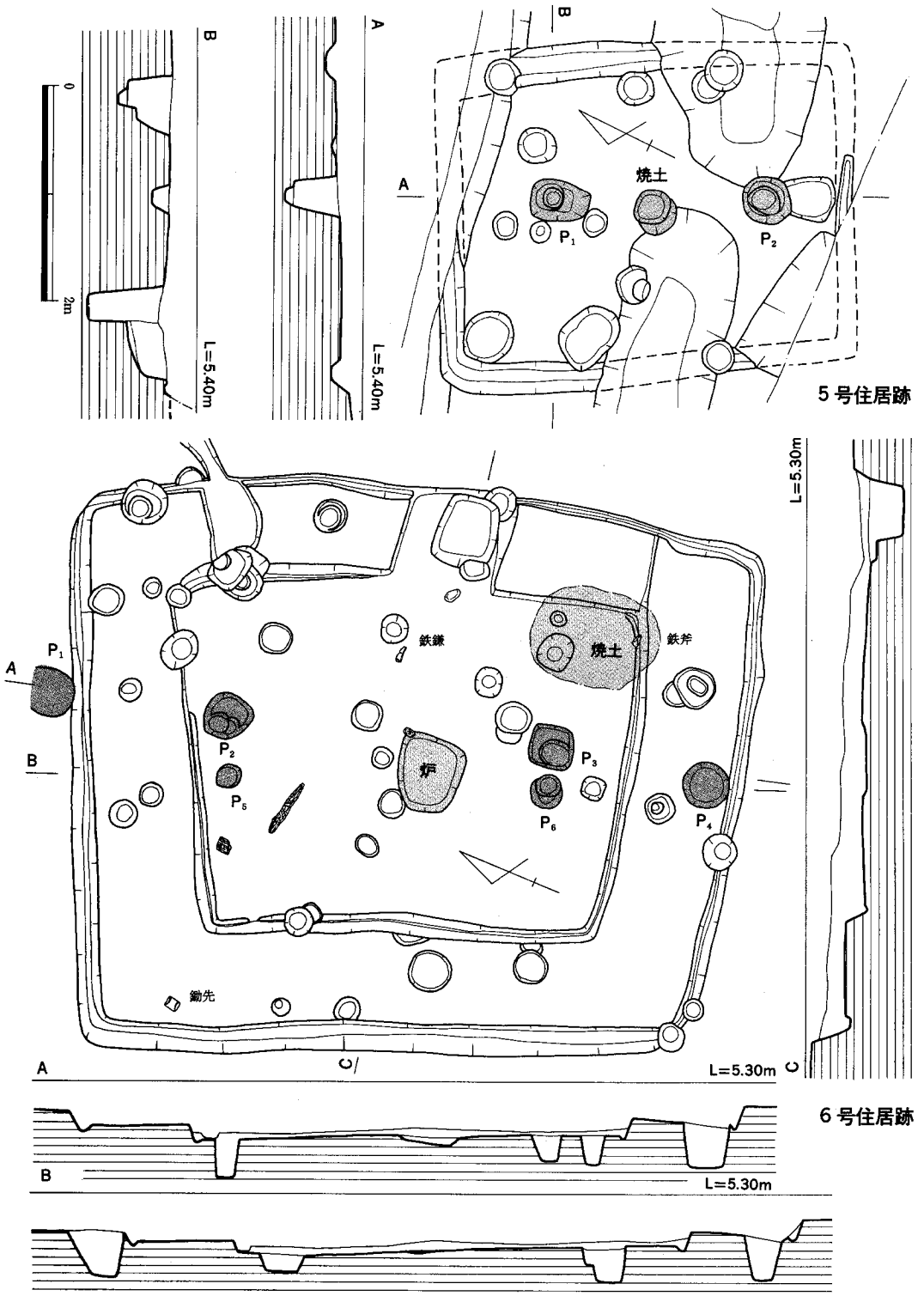


Fig. 8　5号・6号住居跡（縮尺 1/60）

として直列し，住居跡の中軸にほぼ合致しているので，Ｐ５・Ｐ６を主柱として考えることができる。住居跡の覆土は黒褐色粘質土である。

遺物は土師器・坏・鉢・甕・高坏・小型丸底壺・支脚・山陰系の二重口縁壺，鉄製鎌・鉄製鋤先・鉄斧が出土している。その他，覆土からは夜臼式土器，弥生式土器，須恵器の出土がある。

7号住居跡 (Fig. 9, PL. 10)

8号住居跡と重複しており，8号住居跡が先行する。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈している。東西長は約5.2m，南北長は約3.9m，残存壁高50cmを測る。8号住居跡と同じく，東壁と西壁下にＬ字形のベッドを造り出している。東壁側のベッドは周溝により確認した。ベッド幅は65～105cmを測る。周溝はベッド内側，及び周壁下に存在するが，ベッド内側の周溝は南壁側まで巡っていない。南壁中央部には，ベッドに接して pit が付設する。平面形は隅丸方形を呈し，長さ56cm，深さ15cmを測る。2段掘りになっており，底面には径26cmの小 pit がある。出入口の梯子穴と考えて良いだろう。炉跡は住居跡の中央に設けており，不整形を呈する。大きさは長さ66cm，幅50cm，深さ8cmを測る。主柱はＰ３・Ｐ４の２本である。掘り方の長径38～50cm，深さはＰ３が42cm，Ｐ４が62cmを測る。主柱は住居跡長軸中心よりも南側に偏しており，主柱として疑問が残る。床面には暗黄褐色土や黄褐色土による貼り床が施されている。床面には広範囲の焼土面があり，火災による焼失が想像できる。住居跡の覆土は暗茶褐色粘質土である。

遺物には土師器の坏・鉢・小型丸底壺・高坏・器台などが出土している。床面出土の土器には庄内式土器併行期の遺物も存在する。

8号住居跡 (Fig. 9, PL. 10)

調査区西南側に位置する。7号住居跡と重複しており，7号住居跡に先行する。遺存状態は非常に良好であったが，覆土に古墳時代後期の土器が多量に入っており，住居跡の切合い関係を明らかにすることが非常に困難であった。住居跡の先後関係は床面の状態で決定したが，住居跡に伴う遺物はあらかじめ出土地点を把握して取り上げた。住居跡の平面形は隅丸長方形で，東西長は約5.65m，南北長は3.8m，残存壁高約40cmを測る。東側にＬ字形のベッドを造り出しており，西壁下も同様にＬ字形ベッドの存在が考えられる。ベッドは地山成形である。ベッド幅は95～100cmである。周溝はベッド内側及び周壁下に存在するが，西側ベッド下には検出できなかった。南壁中央部に接して pit が付設する。不整円形を呈し，径70cm，深さ51cmを測る。この pit を中心にして両側にＬ字形ベットが設けられており，室内貯蔵穴と考えるよりも，出入口の梯子穴と考えたい。炉跡は住居跡の中央に設けており，不整形を呈する。炉跡の大きさは長さ70cm，幅60cm，深さ10cmを測る。主柱はＰ１・Ｐ２の２本である。掘り方径は55～60cm，深さ50cm，柱痕径は18cmを測る。住居跡の覆土は暗茶褐色粘質土である。

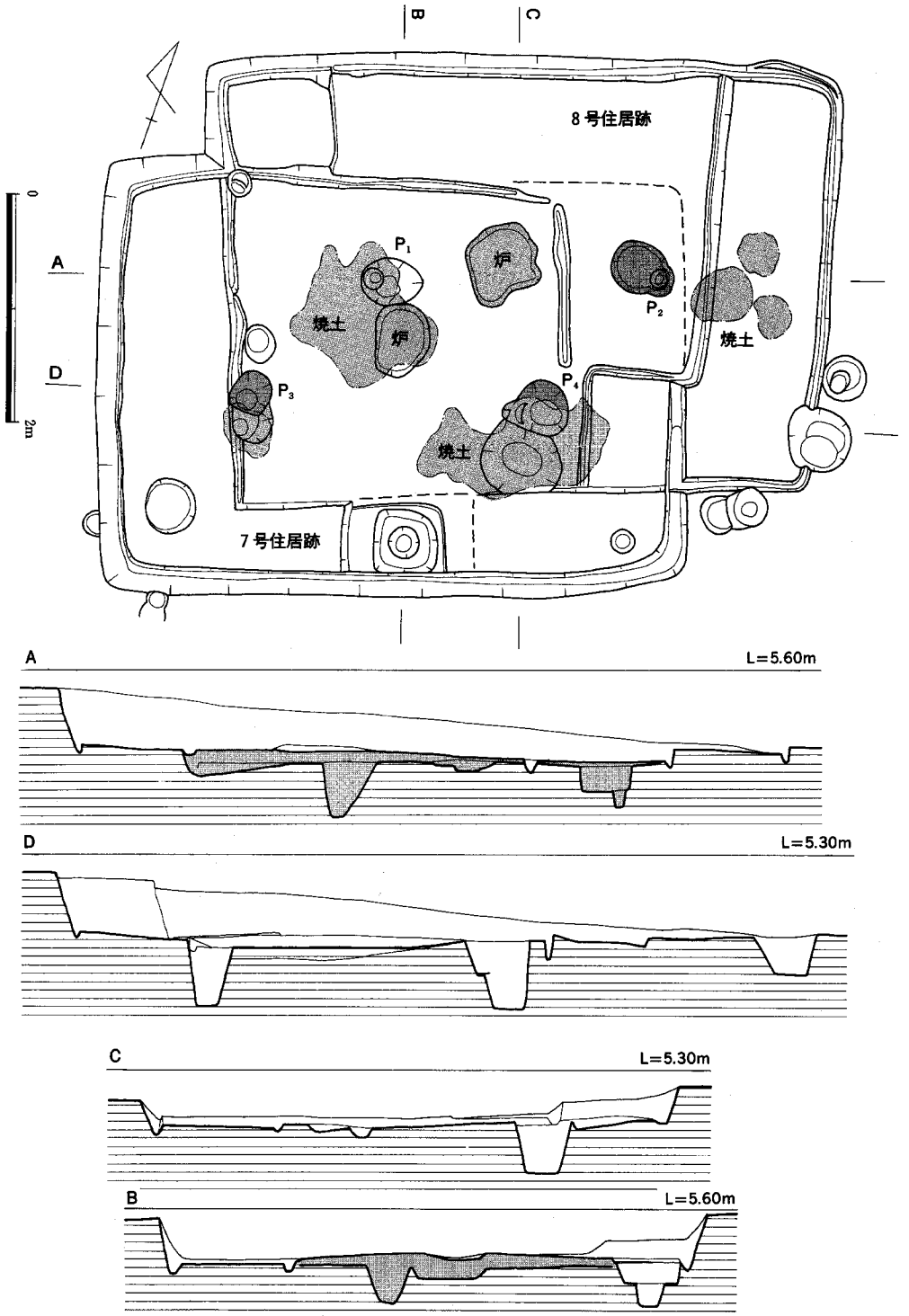


Fig. 9　7号・8号住居跡（縮尺 1/60）

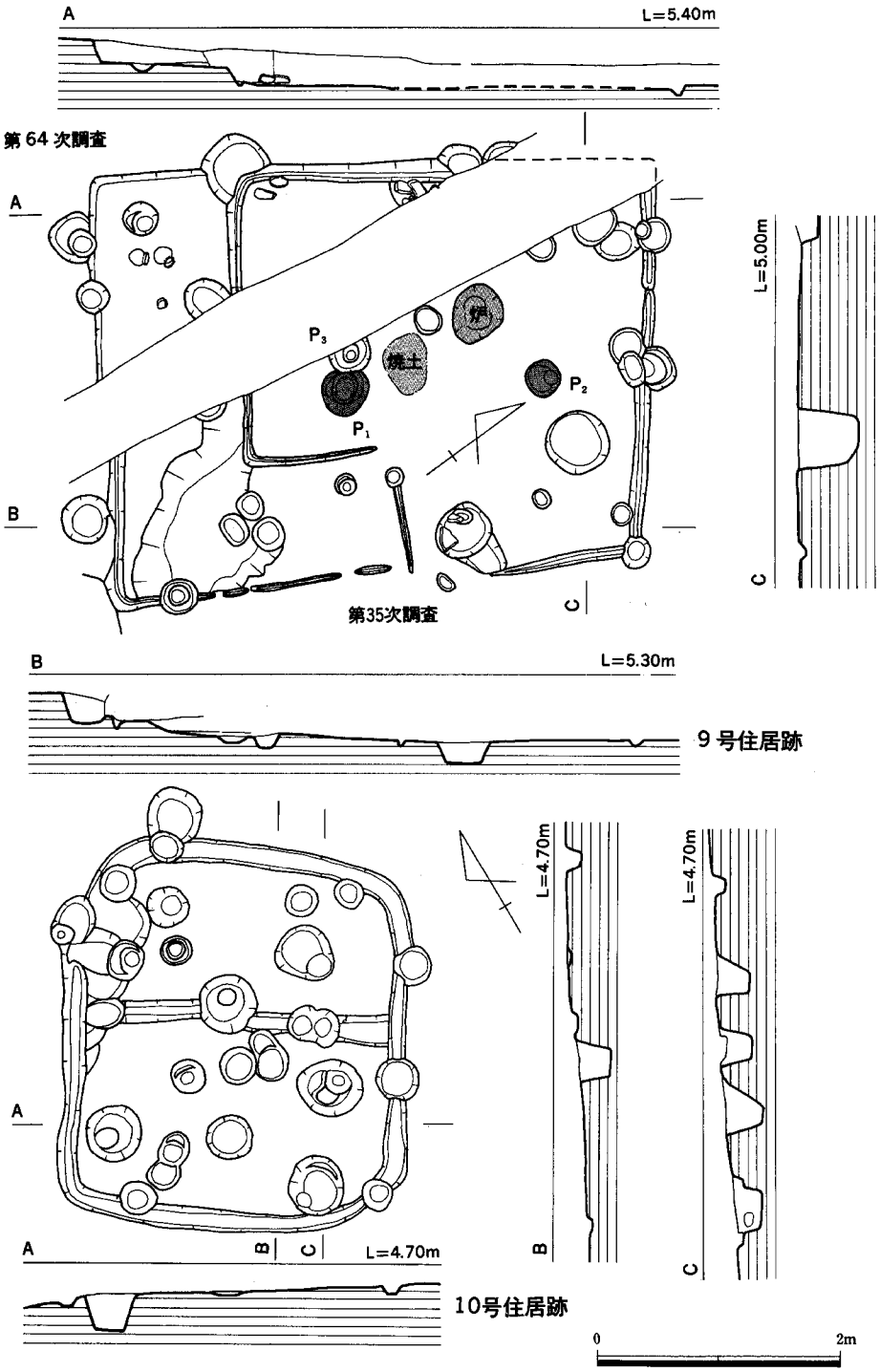


Fig. 10　9号・10号住居跡（縮尺 1/60）

遺物は土師器布留式土器併行期の坏・鉢・丸底壺・器台・高坏・甕・山陰系の二重口縁壺の他，覆土中より弥生式土器，須恵器・壺，鉄鏃などが出土している。

9号住居跡 (Fig. 10, PL. 11)

第64次調査区との境界地に位置する。第64次調査の7号住居跡と同一である。削平が著しく，壁の遺存状態は悪い。住居跡の平面形は長方形を呈するが，北壁が短いため歪である。南北の現存長4.7m，東西長は約3.25～3.55m，残存壁高48cmを測る。西側壁にはL字形のベッドを造り出している。ベッドの大きさは幅92～120cmを測る。北側壁下にはベッドが遺存していないが，炉跡や周溝の位置からみて，北側壁下に片袖のベッドが存在したものと考えて良い。北側のベッドの幅を加えると住居跡の復元全長は約5.6mを考えることができる。周溝はベッドの内側，及び周壁下に存在するが，周壁下は全周しない。南壁の中央部に接して円形のpitが付設する。径約50cmを測る。出入口の梯子穴であろう。炉跡は住居跡中央より西側に偏して設けている。炉跡の平面形は不整形で，大きさは長さ50cm，幅42cm，深さ18cmを測る。主柱はP1～P3の内の2本が考えられるが，いずれも浅い。住居跡の覆土は黒褐色粘質土である。

遺物は床面より丸底の坏が出土した。その他，第64次調査では，布留式土器併行期の小型壺や甕が出土している。

10号住居跡 (Fig. 10, PL. 11)

調査区の東側中央部に位置する。削平が著しく，周溝を検出するにとどまった。この周溝は平面形が隅丸長方形を呈し，更に中央部には東西方向に小溝が存在する。周溝の幅は14～20cm，深さ5cmを測る。現存の南北長は3.25m，東西長は2.9mを測るので，この規模から推測して2号住居跡などの四辺にベッドを有した長方形の住居跡が削平を受けた結果と考えられる。主柱，炉跡は検出できなかった。又，遺物の出土も無い。

11号住居跡 (Fig. 5)

第64次調査区との境界地に位置する。削平が著しいため，住居跡の形状を残していない。貼り床の粘土をわずかに残していたため，この貼り床部分を掘った結果，貼り床下の形状は溝状を呈していた。第64次調査でも住居跡の遺存状態は悪く，西壁の現存長は3.67m，現存高16cmを確認するにとどまっている。住居跡の平面形はベッドを有した方形，又は長方形が考えられる。

遺物は第64次調査で土師器鉢・高坏，滑石製小玉が出土している。

tab. 2　第35次調査住居跡一覧表

(単位：cm)

住居跡番号	形状	計測値	主柱	ベッド状遺構	火気施設	重複関係	時代	備考
1号	隅丸方形	384×376 周溝幅18～30・深さ8～24.5 残存壁高38	主柱4本 掘り方径40～60 深さ43～50 柱痕径18～28	なし	東側隅に粘土帯…カマド跡？ 北側中央にカマド支脚	2号住居跡を切る	古墳6世紀	床面中央に焼土
2号	隅丸長方形	660×514 周溝幅3～6・深さ4.9～19 残存壁高15	主柱2本 掘り方径46～70 深さ6～22	4辺にベッド 幅90～104 高さ10	中央に炉跡 規模　径70、深さ6 形状　楕円形	1号住居跡と1号井戸に切られる	古墳4世紀	西南隅に焼土
3号	隅丸長方形	540×445 周溝幅10～18・深さ4～27.7 残存壁高230	主柱1本 掘り方径38 深さ35	両袖コ字形ベッド 幅62～124 高さ11.5～11.8	中央に炉跡 規模　径58、深さ約4 形状　楕円形	4号住居跡を切る 2号土坑に切られる	古墳4世紀	削平著しい 64次調査、3号住居跡と同一
4号	隅丸長方形	復元長550以上 周溝幅12・深さ15 残存壁高15	不明	不明	不明	3号住居跡に切られる	古墳4世紀	削平著しい 64次調査の3号住居跡と同一
5号	隅丸長方形	384×322 周溝幅26～30・深さ8～10	主柱2本 掘り方径45～52 深さ52～75 柱根径25	不明	中央に炉跡 規模　径40、幅36 形状　楕円形	1号・2号溝に切られる	弥生か	削平著しい
6号	隅丸長方形	646×560 周溝幅5～30・深さ6～39 残存壁高34	主柱7本 掘り方径28～42 深さ20～42	4辺にベッド 幅78～100 高さ16	中央に炉跡 規模　径70、幅62 形状　不整形	4号溝と切り合う	古墳4世紀	東辺中央に出入口のPit 東南隅に焼土あり 炭化物多い、火災
7号	隅丸長方形	520×390 周溝幅2～10・深さ10 残存壁高50	主柱2本 掘り方径38～50 深さ42～62	両袖にL字形の造り出し 幅65～105 高さ3～6.5	中央に炉跡 規模　径70、最大幅62、深さ9 形状　不整形	8号住居跡を切る	古墳4世紀	床面に焼土あり、火災 南辺中央に出入口のpit
8号	隅丸長方形	578×390 周溝幅9～20・深さ10～42.5 残存壁高50	主柱2本 掘り方径55～60 深さ39～54 柱根径18～20	両袖にL字形貼付け 幅90～98 高さ9.5～12.5	中央に炉跡 規模　径70、幅60、深10 形状　不整形	7号住居跡に切られる	〃	南辺中央に出入口のpit
9号	隅丸不整長方形	474×374 周溝幅8～16・深さ5～20.5 残存壁高19.1	主柱2本 掘り方径32～40 深さ27～44	片袖にL字形ベッド 片袖は不明	西側寄りに炉跡 規模　径50、幅42、深18 形状　不整形	6号溝と切り合う	古墳4世紀	中央に焼土あり 64次調査の7号住居跡と同一
10号	隅丸長方形	330×290 周溝幅9～20・深さ6～125	掘り方径30～52 深さ12.5～34 柱根径11～21	不明	不明	4号溝を切っている	古墳	削平著しい 周溝のみ残存
11号	隅丸 長方形か？	307×残存長126 周溝幅7.5～12・深さ2.5 残存壁高16	不明	不明	不明		弥生	64次調査の12号住居跡と同一 貼り床のみ検出

土　坑（SK）

弥生時代から中世までの土坑を10基検出した。この内，覆土からみて，4号土坑は弥生時代よりも時代が古くなる可能性をもっている。又，9号・10号土坑は内部が焼けており，調査中は1号・2号焼土坑と呼称していたが，土坑名称に置きかえる。このふたつの土坑はいずれも包含層中に設けられていた。

1号土坑（Fig. 11, PL. 12）

削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し，断面形は逆梯形である。現存長3.06m，幅1.82m，深さ30cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は細片であるが，弥生式土器が出土した。この土坑は前期の長方形貯蔵穴に比べ非常に大きく，筑紫野市の野黒坂遺跡の前期住居跡や，有田遺跡第48次・80次調査検出の隅丸長方形の土坑と形状，規模が近似しており，住居跡として取り扱うことも可能である。P1・P2は長径が55～60cm，深さ19～32cm，柱痕径は25～28cmを測る。いずれも土坑の長軸中芯に位置しており，この土坑に伴う可能性をもっている。

2号土坑（Fig. 11, PL. 12）

3号住居跡に切られる。袋状貯蔵穴である。平面形は円形を呈し，断面形はフラスコ形であ

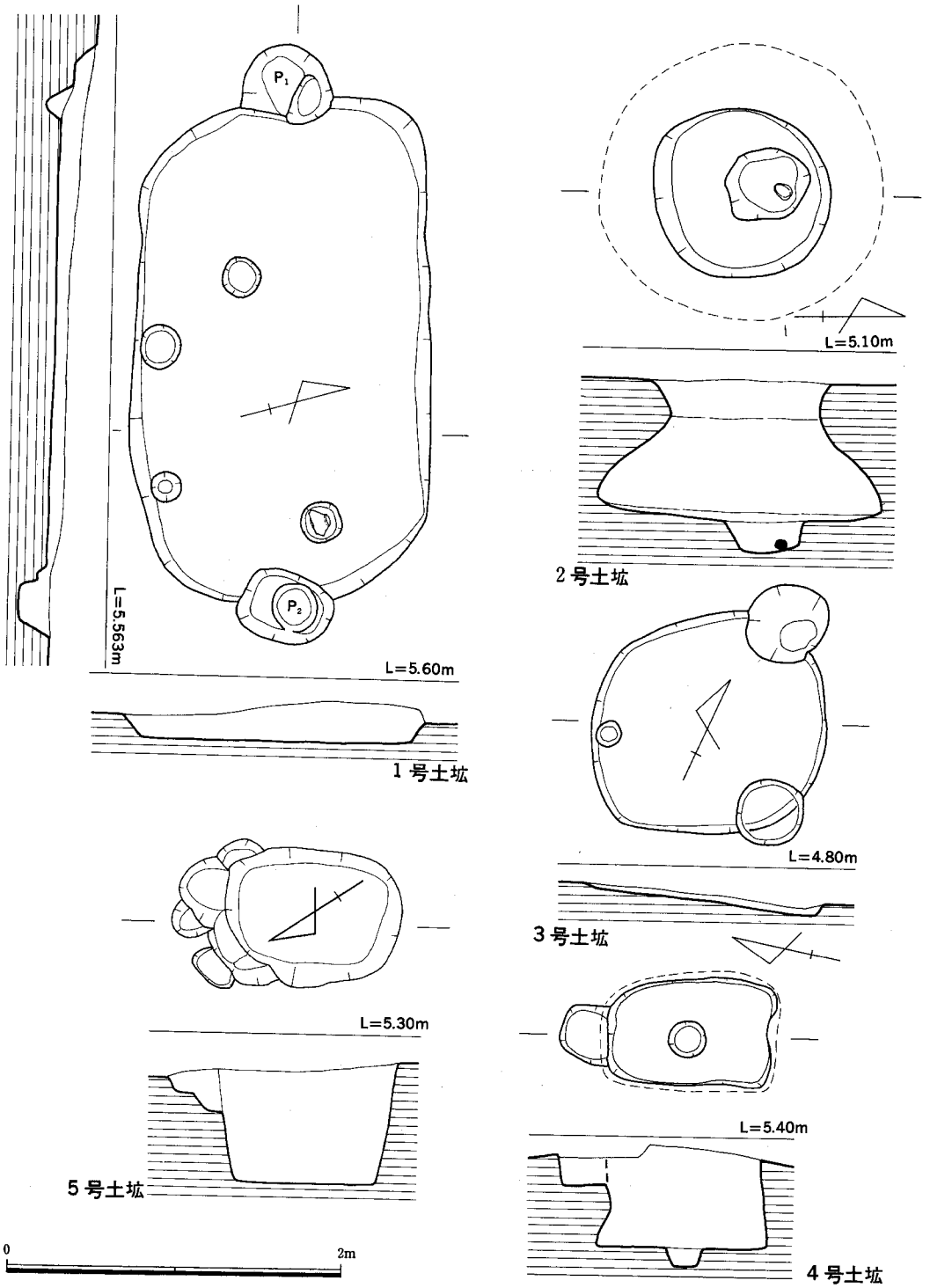


Fig. 11　1号～5号土坑（縮尺 1/40）

る。上端径は100～110cm，底径は約175cm，深さ86cmを測る。底面の中央から北寄りに不整形のpitが掘り込まれる。Pitの径約50cm，深さ18cmを測る。内部からは磨石が出土した。土坑の覆土は上部が黒褐色粘質土で，下層は黒褐色粘質土，又は暗黄褐色粘質土で構成される。

遺物は弥生時代前期の土器の他，黒曜石片や柱状石斧などが出土している。

3号土坑（Fig. 11）

2号掘立柱建物と切り合う。削平が著しく遺存状態は悪い。平面形は隅丸長方形を呈し，断面形は逆梯形である。長さ145cm，幅145cmを測る。覆土は黒色粘質土である。

遺物は土器細片である。

4号土坑（Fig. 11，PL. 12）

1号溝に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し，断面形は上端がオーバーハングしており，梯形状を呈している。上端の長さ94cm，幅60cm，底面の長さ108cm，幅74cmを測る。底面の中央には径26cm，深さ10cmを測るpitが設けられている。覆土は黒色粘質土である。遺物は弥生土器細片である。同様な土坑は第50次・第64次・第86次調査で検出しており，覆土や構造が似ている。又，いずれも時期の手懸りになる遺物の出土が無い。

5号土坑（Fig. 11，PL. 13）

平面形は隅丸長方形を呈し，断面形は逆梯形である。現存長106cm，幅80cm，深さ75cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

6号土坑（Fig. 12）

調査区の北西側に位置する。平面形は楕円形を呈しており，現存長142cm，最大幅92cm，深さ8～12cmを測る。削平は著しい。二段掘りになっており，底面には不整形のpitがある。径65～75cm，深さ28cmを測る。この土坑は柱穴の掘り方と考えられるが，この土坑周辺には同様な遺構がないため土坑とした。覆土は黒褐色粘質土に暗黄褐色土を含んでいる。

7号土坑（Fig. 12）

調査区の北側境界地で検出した。境界地にかかるため全体形は不明である。平面形は不整形を呈し，現存長110cm，最大幅116cm，深さ12cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

8号土坑（Fig. 12）

調査区の南西隅に位置する。1号溝に切られるため全体形は不明であるが，隅丸長方形を呈するものと思われる。断面形はレンズ状を呈している。覆土は暗茶褐色粘質土で，地山のローム土を含んでいる。覆土からみるかぎり，16世紀代の遺構であろう。

9号土坑（PL. 13）

9号・10号土坑共に当初は各々，1号・2号焼土坑と称していた。覆土中からは鉄滓などの出土もあった。包含層中に築かれていたため，調査の都合上撤去した。1号土坑は平面形が隅丸長方形を呈し，長さ90cm，最大幅60cmを測る。断面形はU字形を呈しており，内壁には青灰

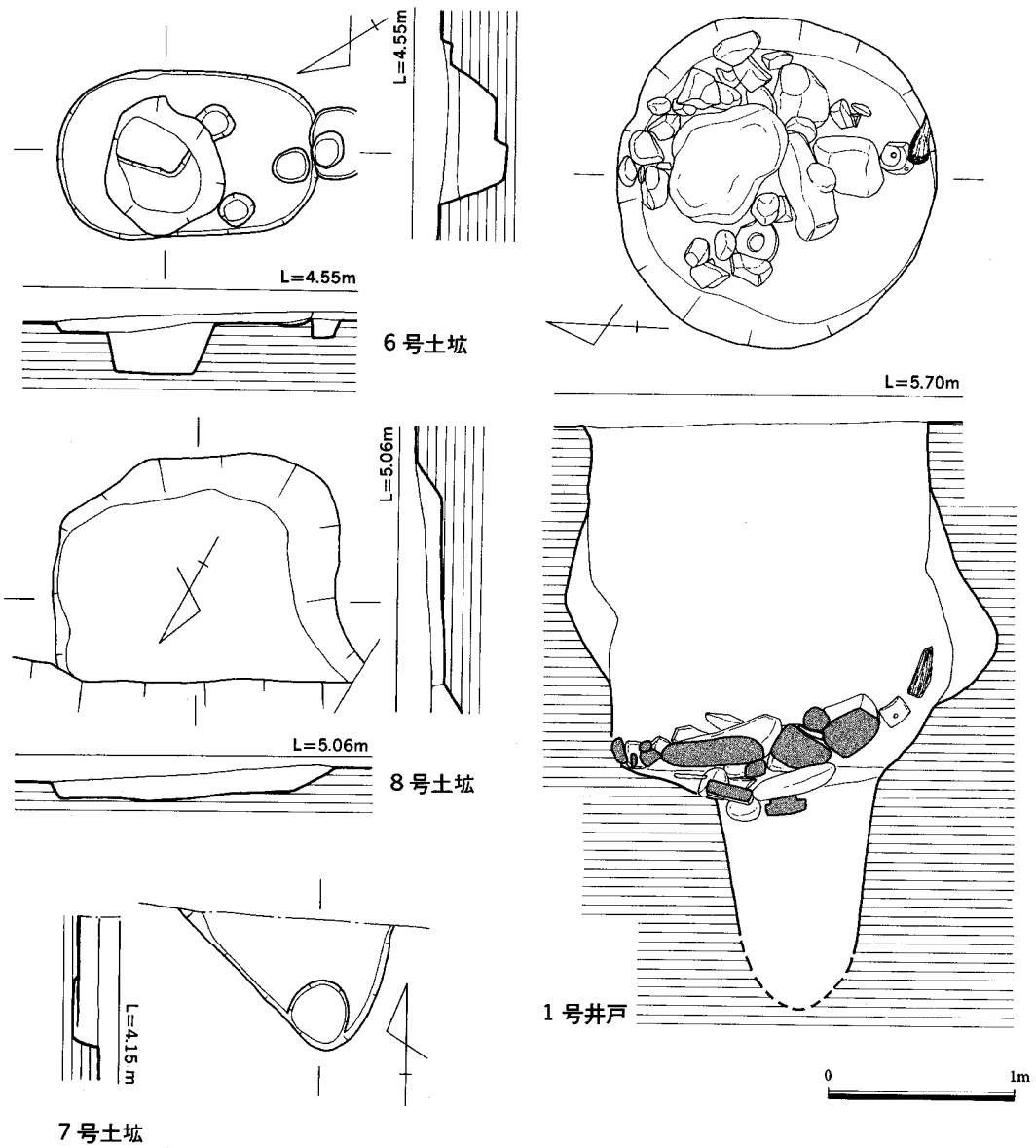


Fig. 12　6号～8号土坑，1号井戸（縮尺 1/40）

色粘土を貼り付けていた。内壁から底面は全赤く焼けており，焼壁を形成する。遺物は鉄滓の他は無い。

10号土坑 (PL. 13)

9号土坑と同様な構造をもつ。やはり，包含層の暗茶褐色粘質土層内に築かれていたため，平板実測後撤去した。9号土坑に比べ規模が大きい。平面形は隅丸長方形を呈しており，断面形はU字形を呈している。長さ115cm，最大幅100cmを測る。内壁には青灰色粘土を貼り付けており，9号土坑同様に内部が焼けていた。

tab. 3　第35次調査土坑一覧表　(単位：cm)

番号	形態		規模（計測値）			方位	出土遺物	時代	切り合い関係	備考
	平面形	断面形	長	幅	深					
1	隅丸長方形	逆梯形	306	182	30	N74°30′W	弥生式土器	弥生		
2	不整円形	フラスコ形	上端直径 底部径	100～110 175	86	N 2°W	弥生時代前期の土器 黒曜石片、柱状石斧	弥生	3号住居跡に切られる	
3	隅丸長方形	逆梯形	145	145	18	N17°E	土器細片		2号掘立柱と切り合う	
4	隅丸長方形	梯形状	94 108	60 74	74	N11°W	弥生土器細片		1号溝に切られる	上端ーオーバーハング
5	隅丸長方形	逆梯形	106	80	75	N34°30′E				
6	楕円形	浅い皿状	142	92	8～12	N32°E				二段掘りになっており、底面に不整形の pit がある
7	不整形	逆梯形	110	116	12	N89°E				
8	隅丸長方形	レンズ状	170	124	20	N61°E		16世紀代	1号溝に切られる	
9	隅丸長方形	U字形	90	60		W12°S	鉄滓			
10	隅丸長方形	U字形	115	100		W 8°S	鉄滓			

井　戸（SE）

1号井戸 (Fig. 12, PL. 14・15)

素掘りの井戸である。井戸の直径は1.75～1.8m，深さ約3.2mを測る。平面形は不整円形である。断面形は二段掘りになっており，上部の掘り方は円筒状を呈し，下位は円錘形を呈している。上部の掘り方は195cmの深さである。覆土は上位が暗茶褐色粘質土で，下位掘り方は暗灰色，又は黒色粘質土である。底部は地山の細砂質土層に達している。上部掘り方の下位の喫水部分は井戸壁の剝落が著しいため暗褐色粘質土などを用いて修復している。又，上部掘り方の底部には人頭大の礫や長さ75cmを測る扁平礫を敷き詰めており，礫層の厚さは55cmを測る。この礫層の下，すなわち下部掘り方の上部には木の枝や竹を厚く敷き詰めており，これらの礫や木の枝が濾過装置の機能をもっていたことが理解される。又，下部掘り方は直径100cmを測るも

ので，湧水の出を良くするために円錘形に掘られている。出土遺物には瓦質の湯釜や鉢の他，礫群より板碑，五輪塔，石臼などが出土している。16世紀に位置づけることが可能である。

溝（SD）

6条の溝を検出した。この内，6号溝は9号住居跡(第64次調査—12号住居跡)の貼り床部分であることが判明した。以下に1～5号の溝について詳述する。

1号溝 (Fig. 13, PL. 16)

調査区の南側に位置し，東西方向の溝である。2号・3号溝は1号溝の南側に併行している。溝は著しい削平を受けており，現存長22.9mを測る。溝幅は100～230cm，深さ11～22cmを測る。断面形は二段掘りになっており，一段目はレンズ状形を，二段目はU字形を呈する。溝底は西側から東側に向かっており，東側が低くなる。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とする。中世後半期の溝であろう。

遺物には龍泉窯系青磁椀I類が出土している。

2号溝 (Fig. 13, PL. 16)

調査区の南側に位置し，東西方向の溝である。1号溝の南に併行する。3号溝とは陸橋を挟んで連続する。現存長10.8m，削平が著しく，遺存状態は悪い。溝幅は100～150cm，深さ18～35cmを測る。断面形は本来二段掘りと思われるが，現状ではU字形を呈している。濠底は西側か

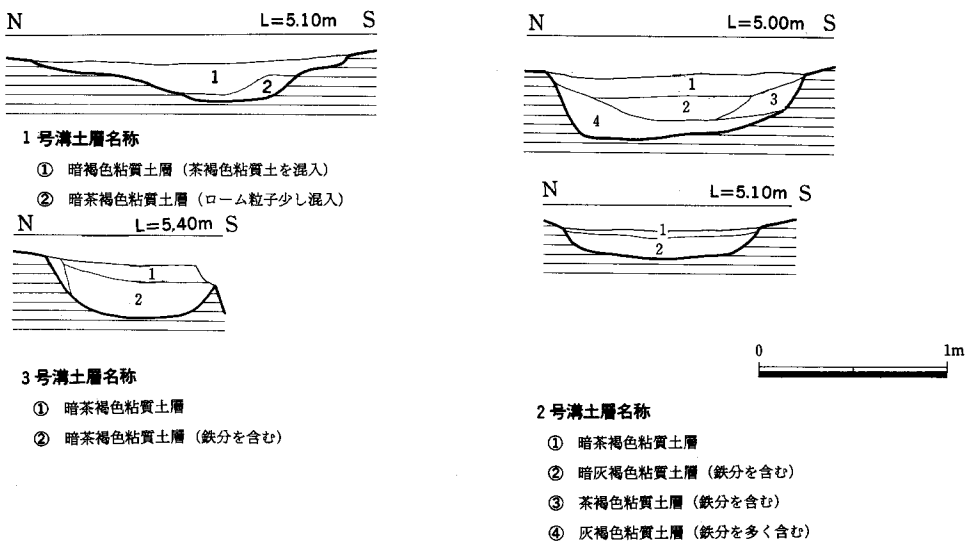


Fig. 13　1号～3号溝土層図（縮尺 1/40）

ら東側に向かっており，東側の第90次調査では消滅する。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とする。3号溝との間には陸橋があるが，この陸橋は幅50cmの短いものである。陸橋の両側，すなわち2号溝・3号溝の先端は深くなっており，堆水を示す暗灰色，又は黒色粘質土の堆積があった。

遺物は弥生式土器，土師器を多量に含むが，石鍋，土師質の鍋，青磁・白磁などの出土がある。

土師質の鍋は16世紀代に出現する器形である。

3号溝 (Fig. 13, PL. 16)

陸橋を挟んで，2号溝に連続する。現存長8.2mの溝である。1号溝の南側と併行する。幅は90～120cm，深さ18～24cmを測る。断面形はU字形を呈しているが，本来は1号溝同様の二段掘りをなすものであろう。濠底は西側から東側に向かっている。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とする。遺物は少ないが，16世紀に位置づけられる。

以上，1～3号溝について詳述したが，これらの溝は有機的なつながりをもっていることが，3つの溝の位置関係で推測できる。1号溝と2号・3号溝は併行しており，その間は140～200cmの幅をもっている。又，2号・3号溝が陸橋でつながっている点を考えると，これらの溝が道路の側溝的な要素をもっているものと考えたい。もちろん，上部を大幅に削平されているため即断はできないが，舌状台地の中軸に対して横断する形でほぼ直交していることや，東側の谷地に溝底が傾斜することなど，1号及び，2号・3号溝間の幅員が道路機能をもつ可能性は大きい。又，これらの溝は第64次調査の1号溝(濠)とも直交しており，この溝との関係も強いことを伺わせている。いずれの溝・濠とも16世紀に位置づけられる。

4号溝 (Fig. 5)

東西方向の溝である。6号・10号住居跡と重複するが，6号住居跡との先後関係は必ずしも明確ではない。10号住居跡はこの溝上に周溝を作っており，10号住居跡が明らかに後出する。溝は現存長8.2m，幅は30～50cm，深さ4～17cmを測る。溝底は西から東へ低くなっており，東側の谷地へ向かっている。溝の西側先端は6号住居跡の北東隅のベッドを切り込んでいる。2号住居跡の北東隅のベッドにも同様な小溝が遺存しているが，これらの溝が住居跡に伴う排水溝として考えることも可能であろう。

5号溝 (Fig. 5)

9号住居跡の上部を覆っていた暗茶褐色粘質土を撤去した際検出した小溝である。当初は住居跡に伴う周溝と考えていたが，住居跡の壁が明確ではなく，且つ，小溝が蛇行するなどから，住居跡に伴う周溝ではないと判断した。溝幅は28cm，深さ26cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

遺物には土師器細片がある。

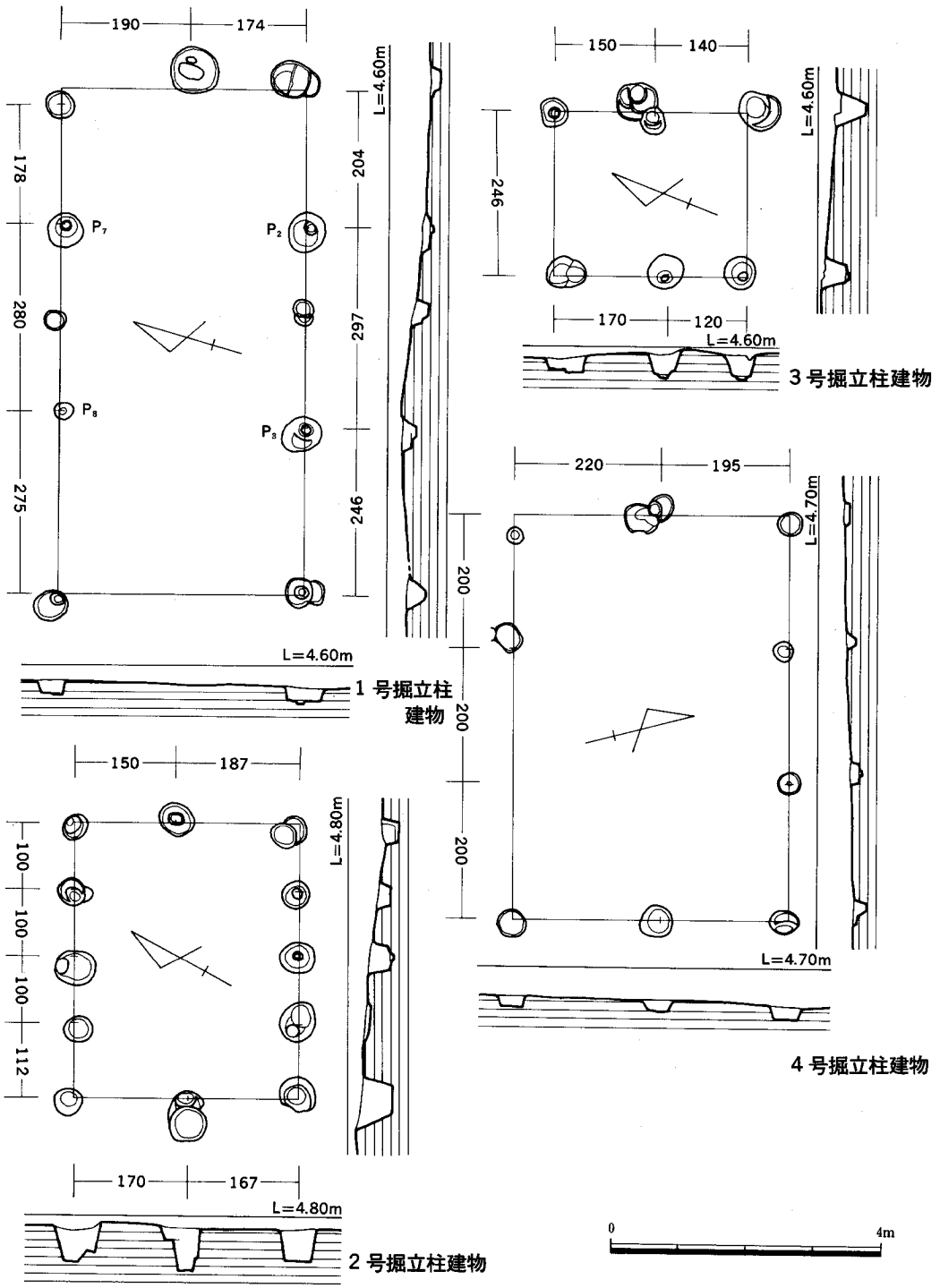


Fig. 14　1 号～4 号掘立柱建物（縮尺 1/100）

掘立柱建物（ＳＢ）

住居跡の柱穴の可能性のあるものを含め，多数の pit を検出したが，いずれも削平が著しい。柱の並ぶものは多いが，建物として把握できない。掘立柱建物として確認したのは６棟のみである。又，第64次調査区の東側で検出した３本柱の柵は外側に50m 離れて，もう１列の柵が存在する可能性をもっており，こうした点も考慮して検討したが確定するには至らなかった。

１号掘立柱建物（Fig. 14）

東西方向の建物である。梁行２間，桁行３間の規模をもち，側柱だけの建物である。主軸方位はＮ73°31′Ｅである。梁行3.64m，桁行7.33～7.47m，梁間平均約6.0尺，桁間平均約8.2尺を測る。又，主柱Ｐ２～Ｐ３，Ｐ７～Ｐ８の間には間柱が存在し，各柱間平均は1.44m で，4.8尺を測る。柱穴掘り方は円形，又は楕円形を呈し，長径26～70cm，深さ15～40cmを測り，柱痕は径15～23cmを測る。掘り方覆土は黒褐色粘質土である。遺物は土器細片である。

２号掘立柱建物（Fig. 14）

１号掘立柱建物，及び３号土坑と重複している。１号建物とはＰ７で切り合うが，１号建物が後出する。梁行２間，桁行４間の規模をもち，側柱だけの建物である。主軸方位はＮ61°30′Ｅである。梁行3.37m，桁行4.12m，梁間平均約5.6尺，桁間平均約3.4尺を測る。柱穴掘り方は円形，又は楕円形を呈し，長径40～60cm，深さ10～65cmを測る。柱痕は径15～29cm，掘り方覆土は黒褐色粘質土である。

３号掘立柱建物（Fig. 14）

10号住居跡と重複し，10号住居跡に後出する。梁行１間，桁行２間の規模をもち，側柱だけの建物である。主軸方位はＮ21°Ｗである。梁行2.46m，桁行2.90m，梁間約８尺，桁間平均約4.8尺を測る。柱穴掘り方は円形，又は隅丸長方形を呈し，長径43～53cm，深さ20～50cmを測る。柱痕は径19～24cmである。掘り方の覆土は黒褐色粘質土である。規模は北方向に伸びる可能性をもっている。

４号掘立柱建物（Fig. 14）

６号土坑と重複し，６号土坑に先行する。削平のため南側桁行の柱穴を失っている。梁行２間，桁行３間の規模をもち，側柱だけの建物である。主軸方位はＮ75°30′Ｗである。梁行4.15m，桁行6.05m，梁間平均約6.9尺，桁間平均約6.7尺を測る。柱穴掘り方は楕円形を呈し，長さ25～49cm，深さ10～30cmを測る。柱痕は径11cmを測る。掘り方の覆土は黒褐色粘質土である。

５号掘立柱建物（Fig. 15）

調査区の東側に位置する。削平のため遺存状態は悪い。梁行２間，桁行３間の規模をもち，総柱建物である。東側桁行の柱間は不規則であることから，梁行１間，桁行３間の側柱だけの建物の可能性もある。梁行実長は3.6m，桁行実長5.1m，梁間平均６尺，桁間平均5.7尺を測

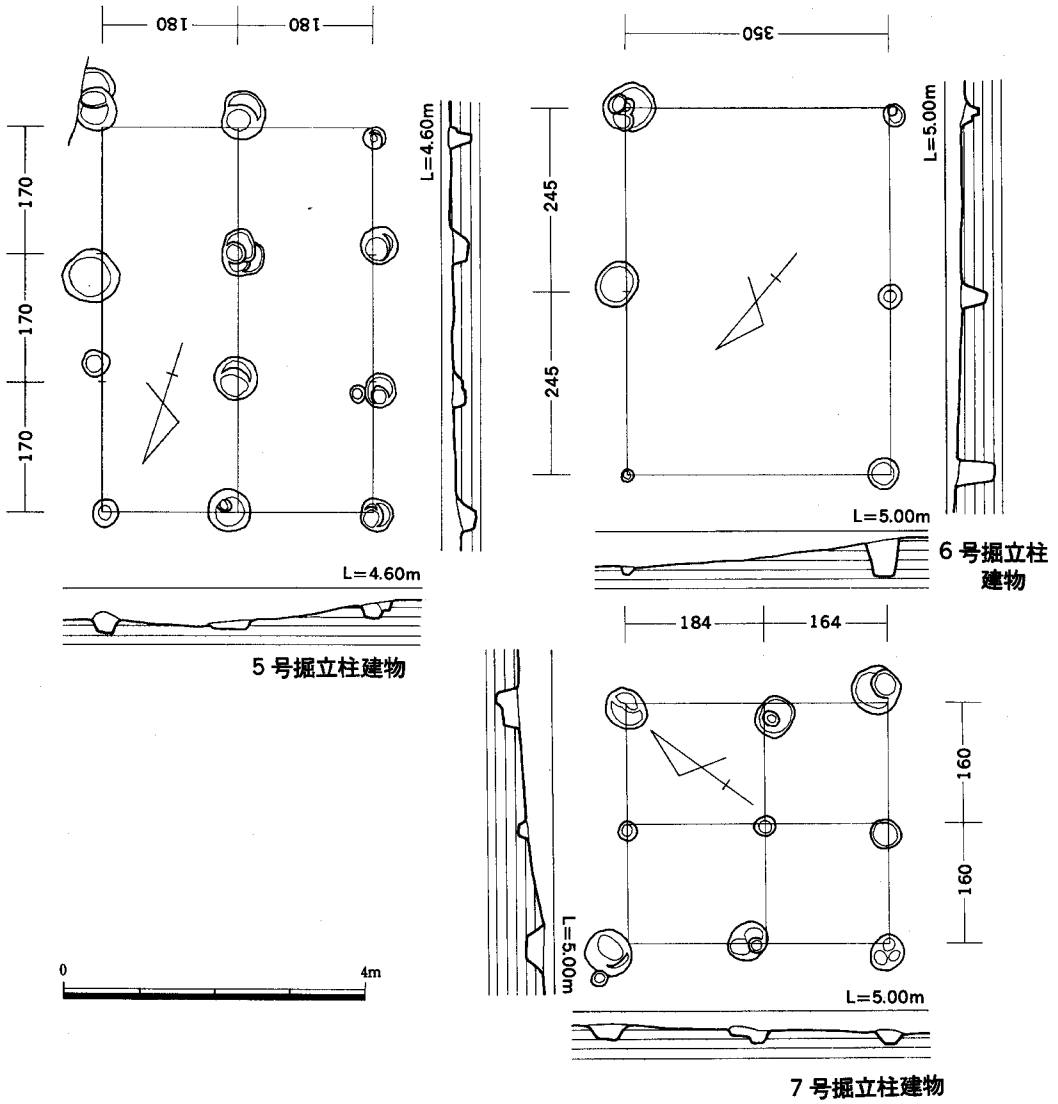


Fig. 15　5～7号掘立柱建物（縮尺 1/100）

る。柱穴掘り方は不整円形を呈し，柱穴径は30～74cm，深さ10～20cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。主軸方位はN19°Eである。

6号掘立柱建物（Fig. 15）

調査区の東側に位置し，5号建物と切り合う。削平のため遺存状態は悪い。梁行1間，桁行2間の規模で，側柱だけの建物である。桁行実長は4.9m，梁行実長は3.5m，桁間平均8.2尺，梁間平均11.7尺を測る。柱穴掘り方は不整円形，又は楕円形を呈し，径は20～70cm，深さ10～54cmを測る。主軸方位はN40°Wである。

7号掘立柱建物 (Fig. 15)

調査区の東側に位置し，5号掘立柱建物と重複する。削平のため遺存状態は悪い。梁行2間，桁行2間の総柱建物である。桁行実長は3.48m，梁行実長は3.2m，桁間平均5.3尺，梁間平均5.8尺を測る。柱穴の覆土は黒褐色粘質土で，掘り方は平面形，又は不整円形を呈している。径は30～68cm，深さ16～30cmである。主軸方位はN86°30′Eを示している。

tab. 4　第35次調査掘立柱建物計測表

(単位：cm)

番号	規模	方向	桁行		梁行		方位	床面積 m²	柱穴状態					備考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	長径	短径	柱根径	
1号	3×2	東西	733(24.9)	8.2、5.7 4.2、6.8	364(12.1)	5.8、6.3	N73°31′E	28.39	11	15～40	26～70	25～70	15～23	P2－P3 P7－P8の間に間柱
2号	4×2	東西	412(13.7)	3.3、3.3 3.3、3.7	337(11.2)	5.7、5.6	N61°30′E	13.88	12	10～65	40～60	40～52	15～29	
3号	2×1	南北	290(9.7)	5.7、4 5.0、4.7	246(8.2)	8.2	N21°W	7.13	6	20～50	43～53	37～50	19～24	
4号	3×2	東西	605(20.2) 6.8、6.7、6.7	415(13.8)	6.5、7.3	6.7、6.5	N75°30′W	9	10	25～49	24～47	11		
5号	3×2	南北	510(17)	5.7、5.7、5.7	360(12)	6、6	N19°W	21.96	12	10～20	30～74	30～70	13～30	
6号	2×1	北西	490(16.3)	8.2、8.2	350(11.7)	11.7	N40°W	17.15	6	10～54	20～70	16～64	14～20	
7号	2×2	東西	348(11.6)	6.1、5.5	320(10.7)	5.3、5.3	N30°W	11.14	9	16～30	30～68	28～62	20～42	

3）遺物各説

1号住居跡出土遺物 (Fig. 16・17, PL. 17・26)

住居跡の覆土より出土した遺物は4・5・14，他は床面より出土した。

須恵器

坏身(1・2・3)　1は完形品である。1の口径12.4cm，器高4.4cm，2・3の口径は11.0～11.6cm，2・3の復元器高4.2～4.3cmを測る。蓋受けは小さく，若干立ち上っており，立ち上がり部は1・3が内傾し，2は直立気味である。2・3の立ち上がり部は端部を細く仕上げるが，1の立ち上がりは器壁が厚い。体部は丸味をもっており，外面はヘラケズリを⅔まで施す。ケズリの方向は1が逆時計回りで，3は時計回りである。口縁部内外面はヨコナデ調整であるが，3の内底には青海波状のタタキ痕がある。いずれも胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。1は灰青色，2は灰色，3は生焼けのため外面が淡灰褐色を呈する。

坏蓋(4・5)　4は完形品である。口径は4が14.4cm，5の復元口径は15.2cm，器高は4が4.1cm，5が4.3cmを測る。体部は丸味をもつが天井部は水平に仕上げている。4の口縁部内側には沈線が施される。天井部から体部外面の約⅔にはヘラケズリが施される。5は時計回り，4は逆時計回りである。5の天井部内面には，3と同様の青海波のタタキ痕が認められる。4は胎土に砂粒を含み，5は精良である。4は灰色，又は淡灰色，5は青灰色である。胎土は良好。

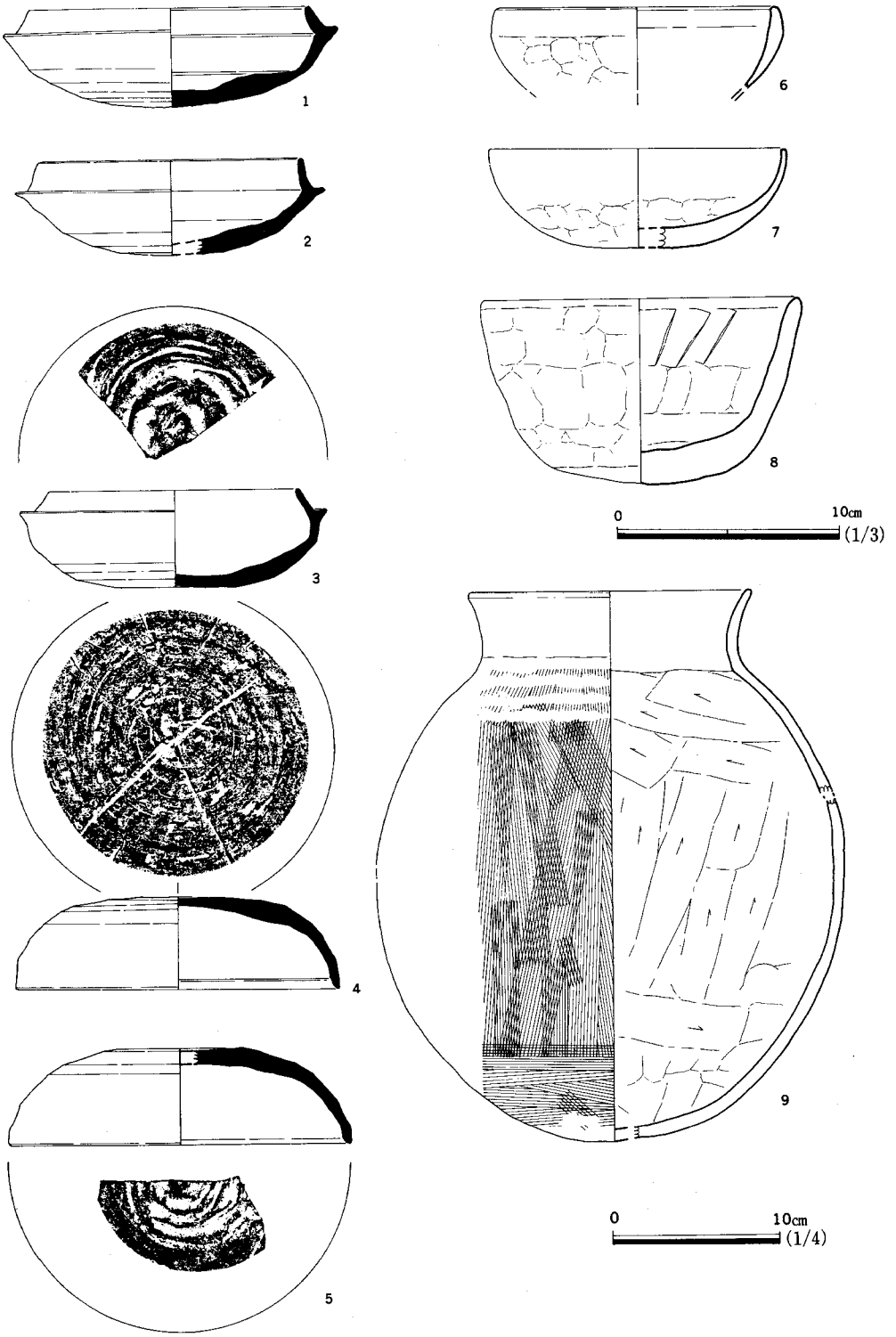


Fig. 16　1号住居跡出土遺物（縮尺 1/3・1/4）

甕（12～15）　12・13は同一個体である。12は胴部，13は底部の破片である。いずれも外面に細かい格子目タタキを施し，12には部分的にヨコ方向に数条の沈線を施す。内面は二種類の青海波タタキを施す。14は外面に平行タタキを施した後，カキ目調整を行い，内面は青海波タタキである。15は外面に細かい格子目タタキを施した後，カキ目調整を行う。内面は細かい青海波のアテ具痕を残す。12・13の焼成は良好で，暗青灰色を呈す。14・15はやや焼成が悪く，14の内面は褐色，15は青灰色を呈している。いずれも胎土に砂粒を含む。

土師器

坏（6・7）　6・7の口径は12.2～13.4cm，7の復元器高は4.4cmを測る。体部はいずれも丸味をもつが，6の口縁部は肥厚し，7は薄身である。6は口縁部内外面がヨコナデ調整で，他はナデ調整である。

鉢（8）　完形である。口径14.2cm，器高8.3cmを測る。体部と底部の境は明瞭で，底部はわずかに丸底を形成する。器壁が厚い。口縁部内面はヘラ状工具によるヨコナデを施し，他はナデ調整である。焼成は良好で，胎土には砂粒を多く含む。黄灰色を呈し，外面に黒斑がある。二次火のため一部赤変する。

甕（9）　口径19cm，器高33.4cmを測る。口縁部をわずかに外反させる。体部は卵形を呈している。口縁部内外面はヨコナデ調整である。体部内底はナデ，内面はヘラケズリを施し，外面は底部にヨコハケ，上位はタテハケ調整である。頸部はナデ消している。

壺（10）　口径9.0cmを測る。口縁部を小さく外反させる。胎土は精良で，焼成は甘い。

甑（11）　把手の長さ5.6cm，厚さ3.3～3.8cmを測る。貼り付け接合である。暗黄褐色を呈する。

玉　類

小玉（16）　覆土中より1点出土した。径4㎜の小さい玉で，滑石製である。

2号住居跡出土遺物（Fig. 18・19，PL. 18・26）

住居跡の覆土の出土は1・3・7・9・10・11，他は床面，又はベッド上面からの出土である。但し，13・14は弥生時代の遺物で，住居跡には伴わない。

土師器

甕（1～8）　いずれも器面の摩滅が著しい。正確な器形を把握できないが，特徴より3つのグループに分けることが可能である。Aグループ（1・2・5）は口縁部を外反させ，口縁端部を上につまみ上げて，口縁部を肥厚させており，2の体部内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。1・2は同一個体の可能性もある。5は小型で，口径12.4cm，2は口径18.4cm，1は口径18.6cmを測る。いずれも胎土に砂粒を含み，1は暗茶褐色，2・5は黄褐色を呈す。Bグループ(3)は口径16.4cmを測る。口縁部が非常に肥厚しており，口唇部も丸味をもっている。体部内面は

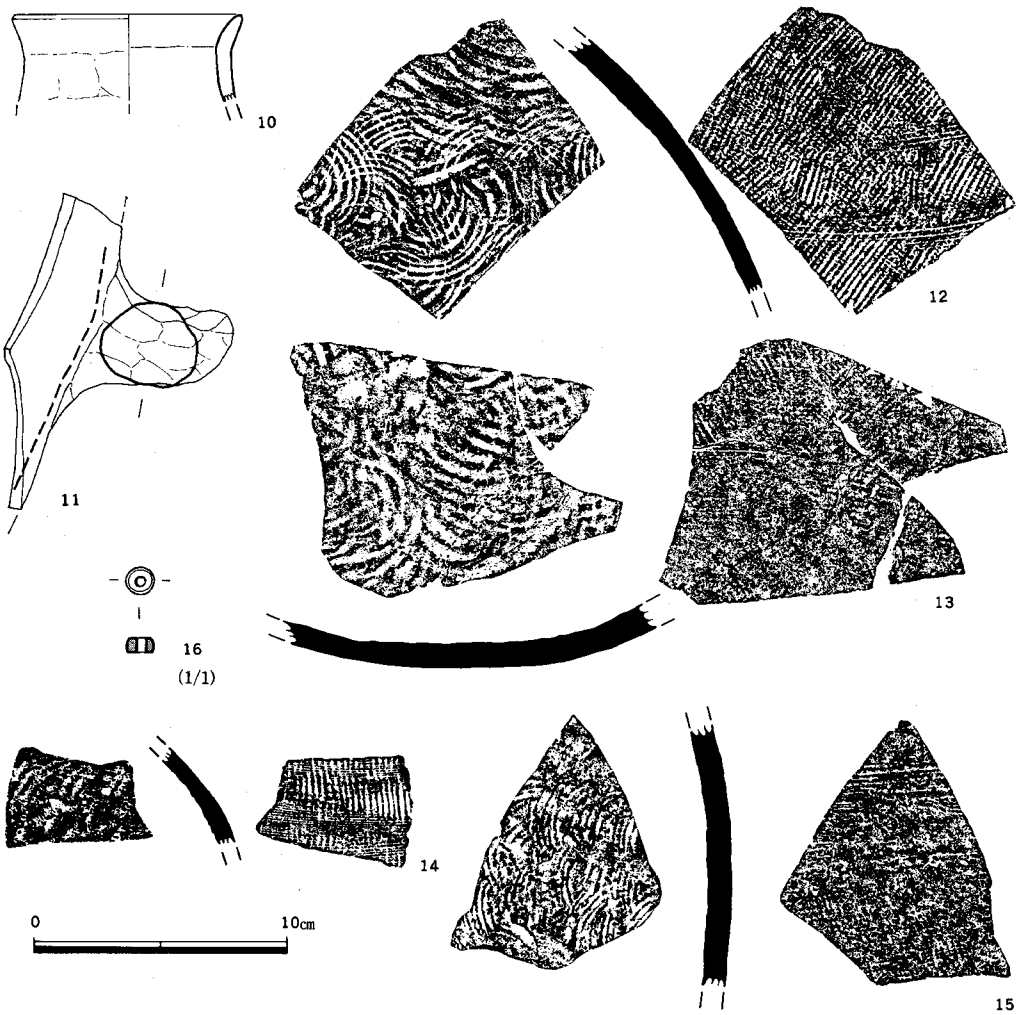


Fig. 17　1号住居跡出土遺物（縮尺 1/3）

ヨコ方向のヘラケズリで，外面にはタテハケ調整の痕跡がある。又，口縁部外面に沈線状の圏線を有している。胎土には砂粒が多く，黒曜石細片も含む。焼成は甘く，暗灰黄色である。Cグループ(4～8)は口縁部を内弯させており，口縁端部は上下に若干つまみ出して，平坦に仕上げる。体部内面はヨコ方向のヘラケズリを，外面にはヨコハケ調整を施す。7は体部が球体を呈している。7の胴部上位には波状沈線が一条施される。復元口径は16.2～19.2cmを測る。胎土に砂粒を含む。4は暗黄灰色，6・7は灰黄色，8は暗灰褐色である。

高坏（9～12）　坏部9・10の口径は16.1～18.3cmを測る。9の体部は直線的に開くが，10の体部は大きく外反する。底部は丸味をもっており，9は体部と底部の境が明瞭である。10の内

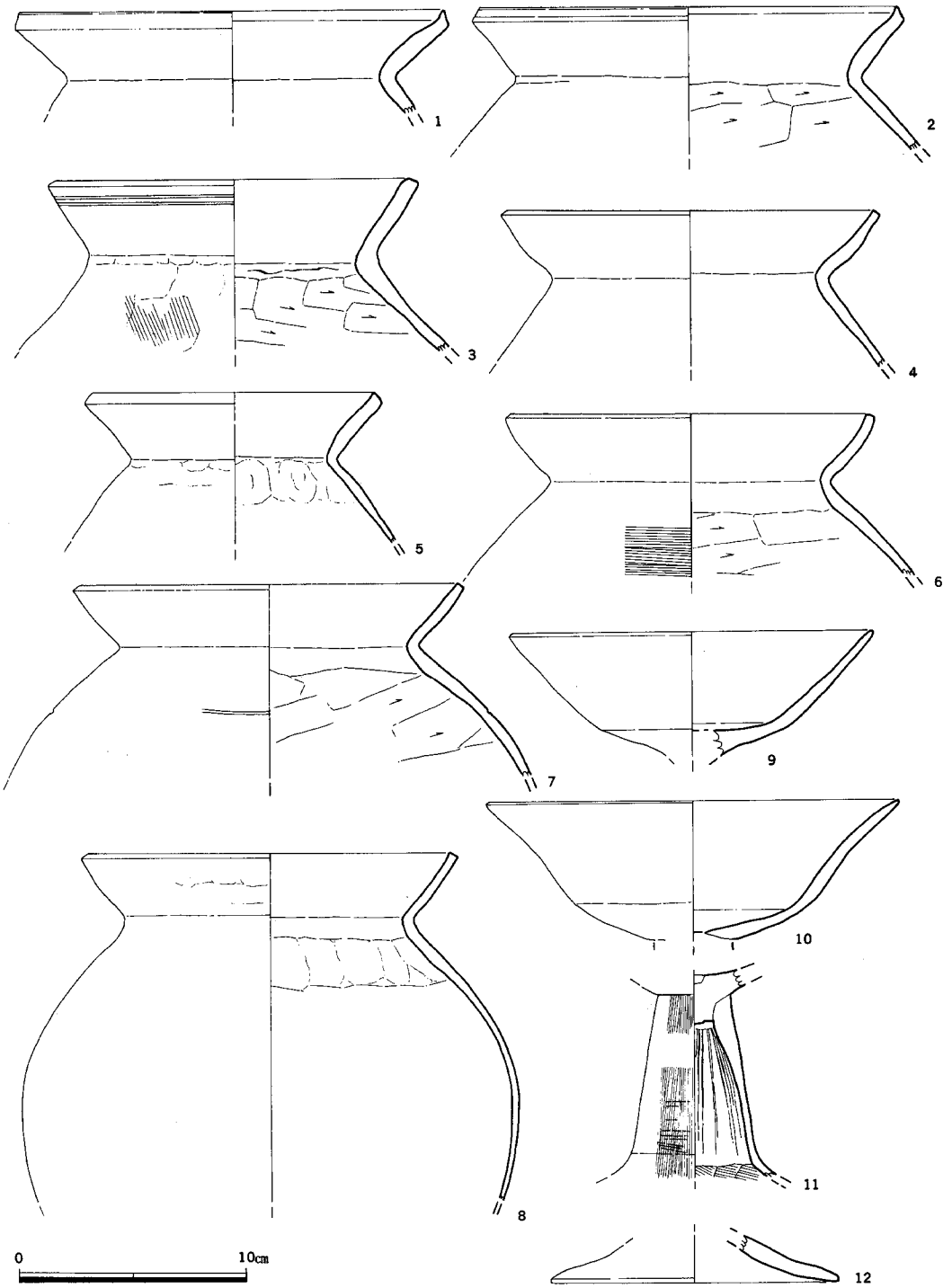


Fig. 18　2号住居跡出土遺物（縮尺 1/3）

面は丁寧なナデ調整である。脚部(11・12)は筒部中位がわずかに膨み，脚裾は外方へ大きく屈折する。12の底径は12.7cmを測る。11の外面は細かいタテハケ調整後，下位はヨコナデ調整を施す。内面にはしぼり痕が残り，裾部はヨコハケ調整である。9・10・12の焼成は悪く，いずれも胎土に砂粒を含むが，9には金雲母を含む。9は茶褐色，10は黄土色，11は暗灰黄色，12は黄褐色である。

壺（13～16）　13は二重口縁壺片である。復元口径11.2cmを測る。くの字形口縁の段は強い稜を有しない。焼成は甘く，淡黄橙色を呈する。胎土に砂粒と金雲母を少し含む。14～16は小型丸底壺である。14・15の体部は球体を呈し，口縁部はくの字形に強く外反させ，端部は細く仕上げる。14の体部内外面はナデ調整である。復元口径は14が10.1cm，15が9.1cmを測る。16は体部が長胴形の器形で，頸部内面の稜は強くない。口縁端部は丸く仕上げている。復元口径11.6cmを測る。いずれも胎土に砂粒・微砂を含むが，14には褐色土の粒子を，16には金雲母を含む。14は黄土色，15は淡黄橙色，16は淡黄褐色を呈する。いずれも焼成は甘い。16は14・15よりも後出する土器である。

その他には，覆土中より弥生時代前期土器の出土がある。17の底部は円盤貼付状を呈している。18は前期後半の甕である。

玉　類（20）　臼玉が覆土中より1点出土している。径6㎜を測る。滑石製である。

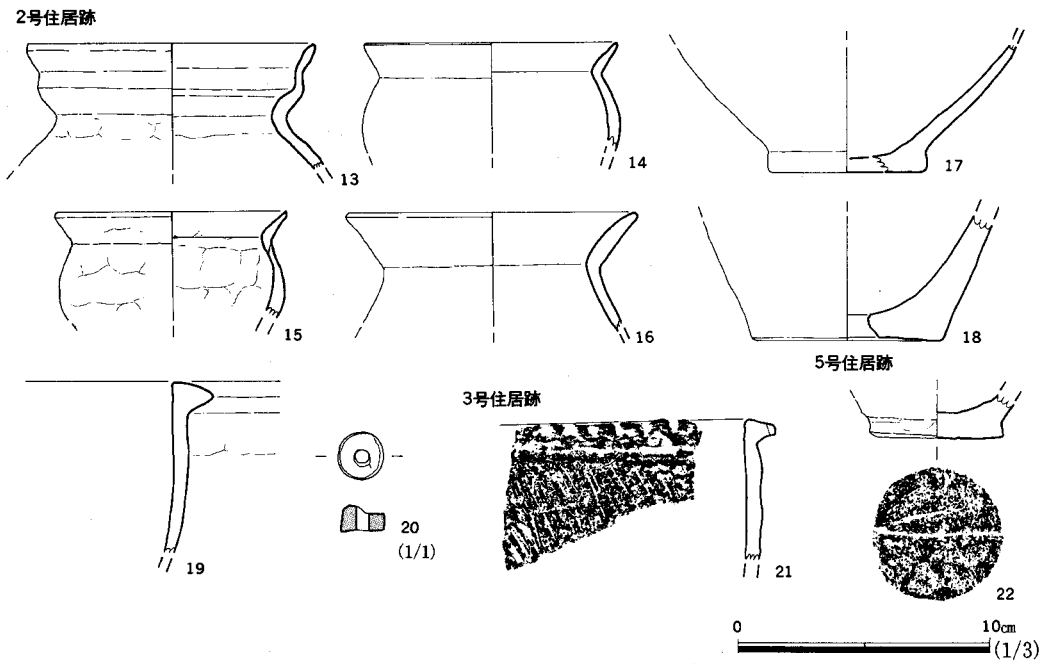


Fig. 19　2号・3号・5号住居跡出土遺物（縮尺 1/1, 1/3）

3号住居跡出土遺物 (Fig. 19, PL18)

遺構編で述べたように，調査は住居跡の一部に限られた。第64次調査分では布留式併行期の甕・小形丸底壺・鉢・高坏・二重口縁壺を伴っている。今回は覆土中より，縄文時代晩期の突帯文土器（21）が出土した。

4号住居跡出土遺物

3号住居跡同様に住居跡のごく一部を調査したにすぎない。遺物は第64次調査分の3号住居跡出土遺物として報告した土器の内（第8集 Fig. 109）16・17・18・22が伴うものと考えられる。3号住居跡出土の土器群より古い様相を示している。

5号住居跡出土遺物 (Fig. 19)

完全に削平を受けており，図示できる遺物は少ない。22の外底には木の葉の圧痕がある。

6号住居跡出土遺物 (Fig. 20～24, PL. 18～20)

火災を受けているため，土器の遺存状態は悪く，表面を摩滅したものが多い。遺物量は他に比べ非常に多く，火災のため持ち出すことが不可能だったためと考えられる。覆土中には古墳時代後期の土師器や須恵器も含まれていた。

土師器

坏（1～3）　3種類に分類できる。口径は1が13cm，2が12cm，3が11.4cm，器高は1が4.6cm，2が5cm，3が5.1cmである。

鉢（4～9・11）　4種類に分類できる。A類(4)は体部が丸味をもつが，底部が尖底状を呈している器形である。薄手の土器で，復元口径は15.7cm，器高5.6cmを測る。体部外面には幅広いタテハケで，粗目に調整している。淡黄褐色を呈し，焼成は良好である。胎土に石英粒を多く含む。B類（7～9）はA類の大型のもので，器形的には大きな差は無い。8は口縁端部を外反させ，9は口縁端部を水平に仕上げている。9の内面にはヨコハケ調整を施す。外面はタテハケ後ナデ調整である。7・8は摩滅のため調整は不明。胎土に砂粒を含み，7・8の焼成は甘い。7は淡黄褐色，8・9は暗灰黄色を呈する。復元口径は21.5～22.8cm，7の復元高は8.1cmを測る。C類(11)は体部が半球体を呈する器形で，口縁端部は水平に仕上げる。体部中位以下は内外面にヘラケズリを施す。口縁部内面はヨコハケ，外面はヨコナデ調整である。体部外面はヘラケズリ後タテハケ調整である。復元口径20cm，器高11cmを測る。胎土に砂粒と金雲母を少し含む。暗褐色を呈する。D類（5・6）半球形の体部に，口縁部を外反させる器形である。5の口縁部は内弯気味で，端部はシャープに仕上げる。6の口縁内面にはヘラによる暗文を施

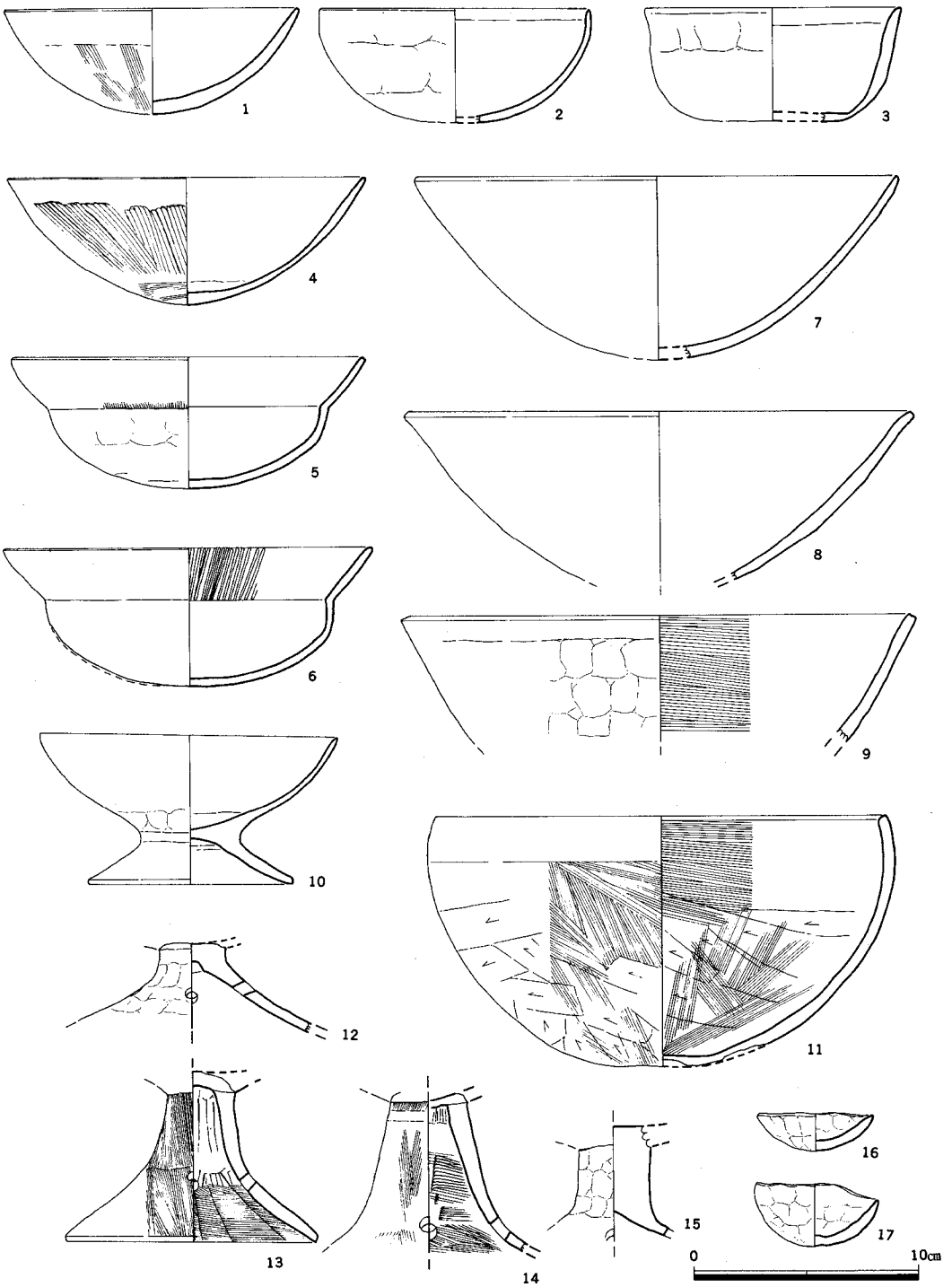


Fig. 20　6号住居跡出土遺物（縮尺 1/3）

す。5の口縁外面はタテハケ後ヨコナデを施す。復元口径は5が15.6cm，6が16.3cm，器高は5が5.8cm，6が6.1cmを測る。焼成は甘く，胎土に砂粒を含む。5は褐色，6は黄灰色である。

高坏(10・12～15)　10・12は低い脚が付くもので，10は坏部口径13.1cm，器高6.6cm，高台径9.1cmを測る。12は坏部，脚裾を欠く。脚は大きく開き，中位に径5.5mmの孔を4個施している。13～15は高坏の脚部で，13は高台径11.1cmを測る。筒部内面は板状工具によるヨコナデ調整，裾部はヨコハケ調整を施す。外面は細かいタテハケ調整を施す。14の内面はヨコハケ調整，外面はタテハケ後ヨコナデ調整を施す。15は筒部が円柱状を呈し，裾部は小さく外反する。穿孔は13が径5mmの孔を2孔，14は径8mmの孔を2孔，15は1孔以上である。いずれも胎土は精良で，微砂を含む。13・15は金雲母を含み，14・15の焼成は甘い。いずれも褐色を呈する。

手捏土器（16・17）　16は口径5.2cm，器高1.6cm，17は口径5.4cm，器高2.8cmを測る。いずれも指圧調整痕を残しており，胎土には砂粒を含む。焼成は甘く，17は黄灰色である。

壺（18～23）　23は大型で、18～22は小型丸底壺である。3種類に分類できる。A類（18・19・21）は球体の体部で，口縁部は直立気味に立ちあがる。いずれもやや内弯気味で，内面はヨコハケ調整後ヨコナデ調整を施す。18の頸部にはタテハケの痕跡が認められる。21の体部外面は板状工具によるヨコナデ，内面はナデ調整である。口径は18が12.5cm，19が12cmである。21は完形品で，口径11.2cm，器高14.1cmを測る。B類（22）は口縁部が外反し，端部が肥厚する器形で，口径14.5cmを測る。内外面はナデ調整である。C類（20）は半球体の体部に大きく開く口縁部を有しており，口径10.8cm，器高7.1cmを測る。口縁部内面はヨコハケ調整，外面はヘラミガキを施す。焼成はいずれも弱い。胎土に砂粒を含むものは18・22で，他は精良な胎土である。18は淡黄褐色，19は淡黄灰色，20は黄褐色，22は暗褐色を呈している。23は二重口縁の壺で，復元口径18cmを測る。口縁部屈折部には強い稜が付く。内外面はヨコナデ調整である。胎土に細かい砂を含み，焼成は良好である。暗灰色を呈している。

甕（24～35・37～40）　3種類に分類できる。A類（24）は口縁端部を上方へ強く引き出しており，内外面はヨコナデ調整である。口径は18cmを測る。B類（25・30）外反する口縁端部を丸く仕上げており，25は30のように肩が余り張らない。30の内面はヘラケズリ，外面はタテハケ調整，口縁部内外面はヨコナデ調整である。口径は13.6・15.8cmを測る。C類(26～29・31～35・37～40）は口縁部をやや内弯気味に外反させ，端部を上下につまみ出して水平に仕上げるもので，肩の張るタイプと張らないタイプの2種類があり，且つ大・小に分けられる。肩の張らないタイプ（27・31・35）は小型で，口径13.6～15.7cmを測る。肩の張るタイプは（28・29・32～34，37～40)は口径17.9～18.6cmを測り，29は小型で，口径13.6cmである。特に32・37～40は大型である。26・27・33・37・39は胴部内面を丁寧なヘラケズリを施しているが，28・34は胴部上位のヘラケズリが粗い。外面は27・37～39がヨコハケ調整，33がタテハケ後肩部のみヨコハケ調整，34はタテハケ後ヨコナデ調整である。肩部に沈線，又は波状沈線を施すものは32・

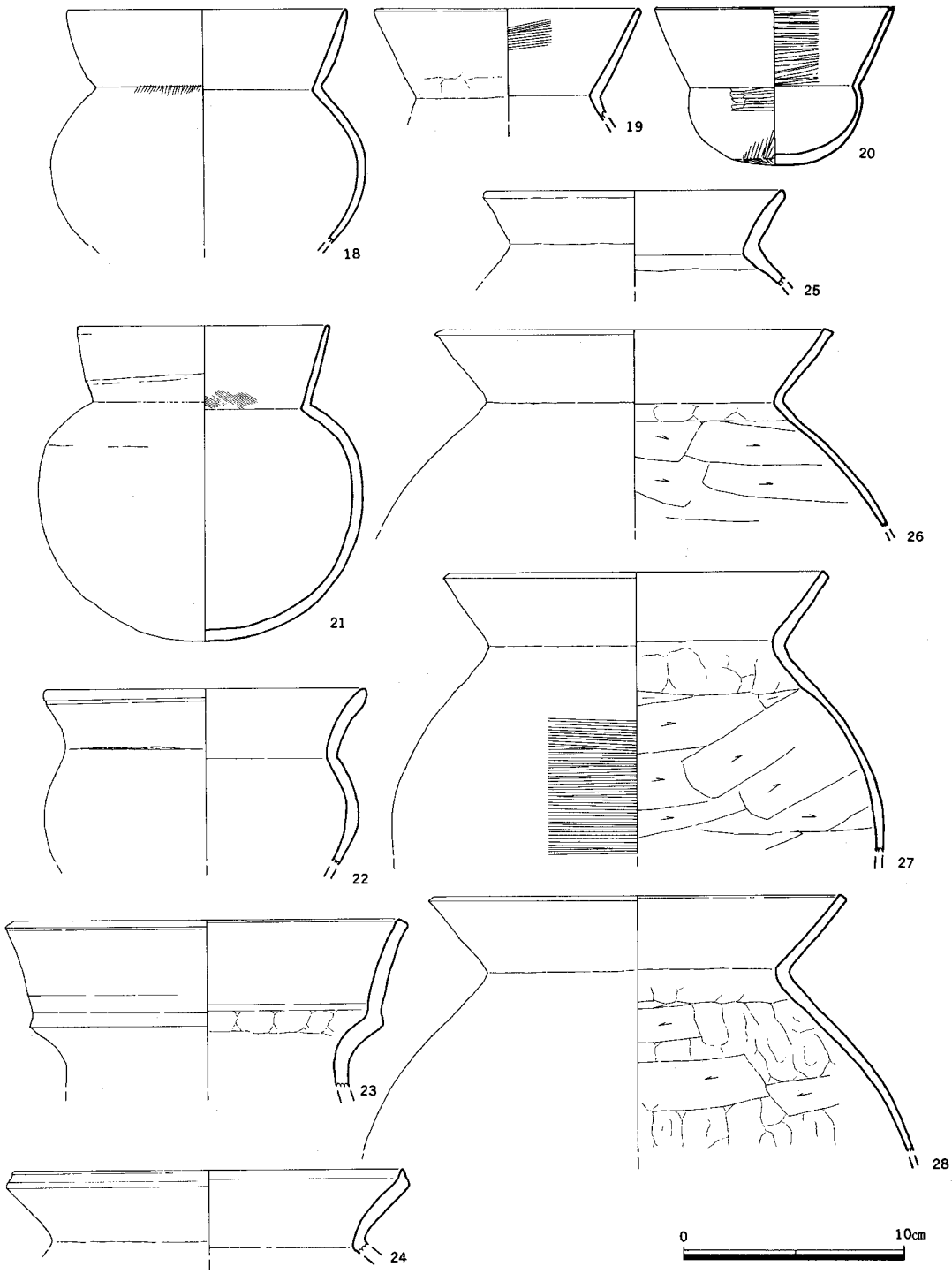


Fig. 21　6号住居跡出土遺物（縮尺 1/3）

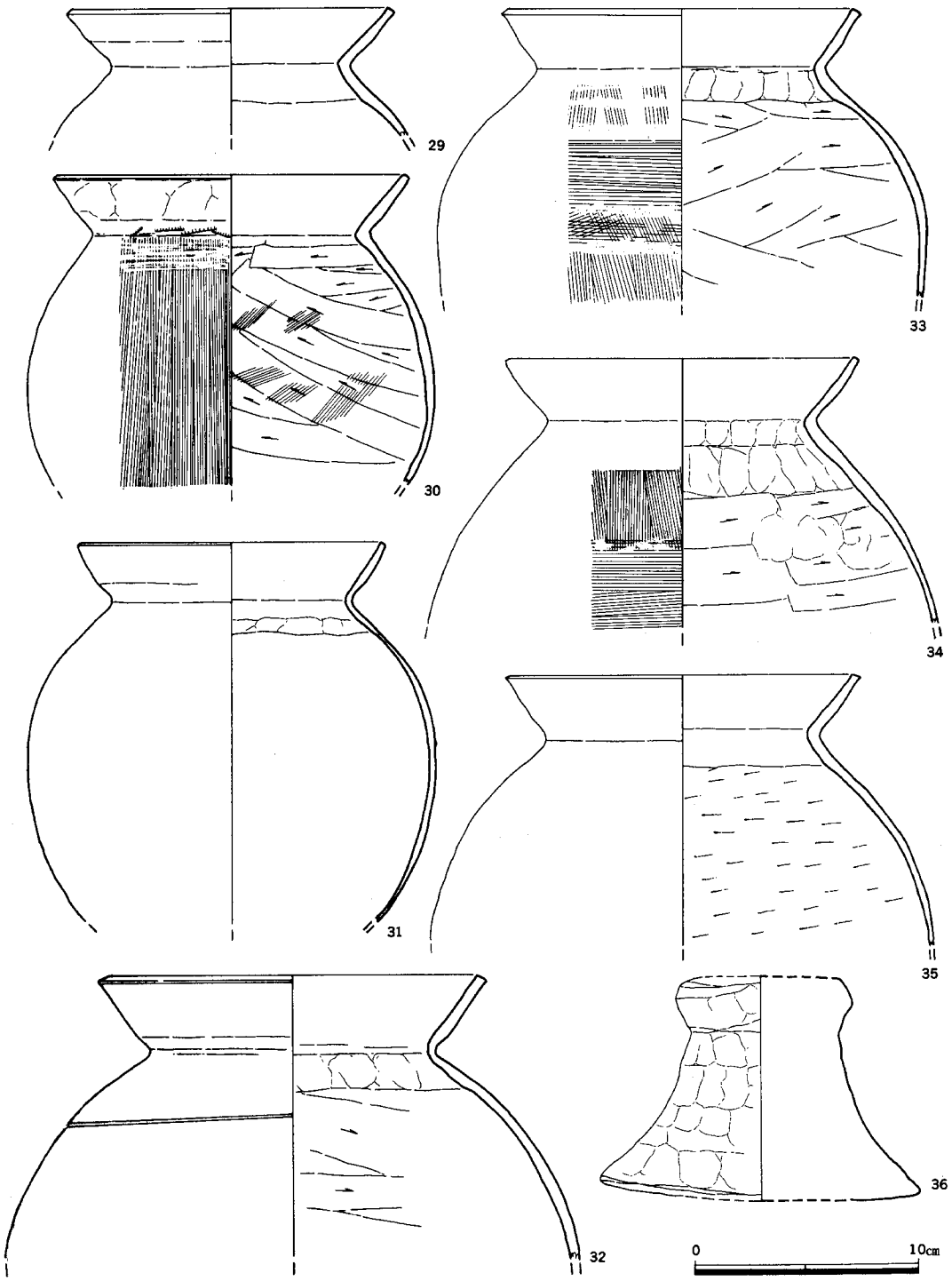


Fig. 22　6号住居跡出土遺物（縮尺 1/3）

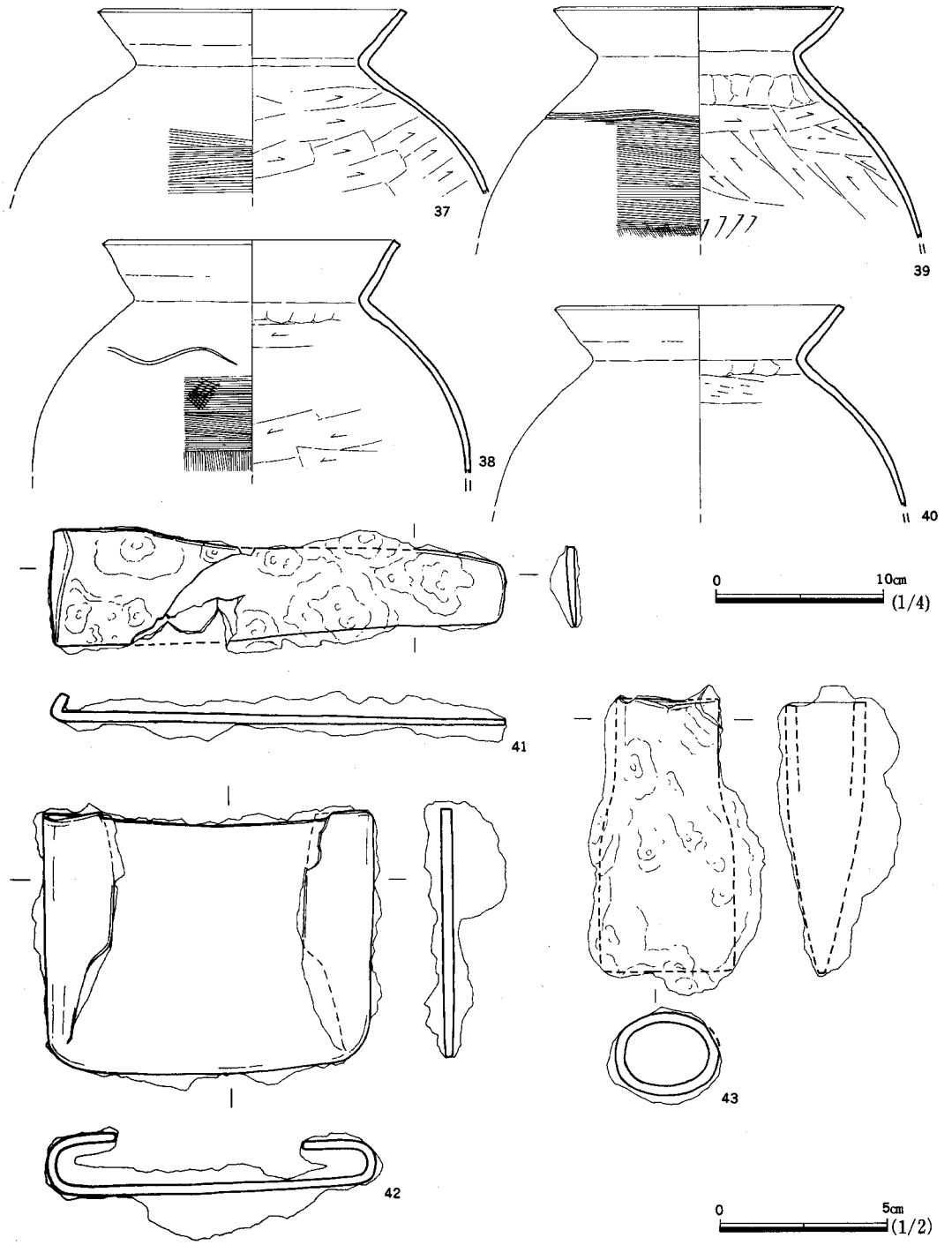


Fig. 23　6号住居跡出土遺物（縮尺 1/4, 1/2）

38・39で，39は螺旋状に巡る。いずれの土器も焼成は弱く，胎土に砂粒を含む。33の胎土には金雲母を含む。色調は26・27・32が黄灰色，28が黄土色，29・35・39が黄褐色，31・37が淡茶褐色，33が暗灰色，34・40が淡黄褐色，38が灰黄色を呈する。

支脚（36）　梯形状を呈し，上部端部は丸味をもたせる。現存高9.9cm，底径14.2cmを測る。

鉄製品

鉄製品はいずれも床面より出土した。銹化が著しく，厚さは推定による。

鉄鎌（41）　全長13.7cm，最大幅3.5cm，厚さ1.7～3㎜を測る。着柄部は折り返しをつけており，背部に肩を有している。先端は隅丸になっており，刃部は直線的である。

鉄斧（43）　全長約8.1cm，袋部の径は約3.1×2.5cm，刃部幅は約4cmを測る。肩部を形成するものと考えられるが，銹のため不明。袋部に折り返しがみられないことから鋳造品と考えられる。銹化部分の亀裂は著しい。

鋤先（42）　長さ約7.9cm，袋部の幅約9.9cm，刃部幅約9.6cm，厚さ2.5㎜を測る。両端を折り返して着柄の袋部とする。袋部の先端は内弯させている。内側に木質が残存する。刃部は外弯している。

その他，覆土からは44・45の縄文時代晩期の突帯文土器，46の弥生前期土器，47の同中期土器，48・49の須恵器坏蓋などが出土している。

7号住居跡出土遺物（Fig. 25～27，PL. 21・26）

8号住居跡と切り合い，且つ覆土中には須恵器などの多くの遺物を含んでいた。覆土中からの出土品は1・2・4～7・9・10・13～16・18～25・27～29・31～35である。

坏（1・3・5・6）　3種類ある。A類(1)は口径10.9cmを測り，底部は尖底をなす器形である。B類(3)は口径11cm，器高2.4cmを測り，浅い半球体を呈している。底部はヘラケズリで

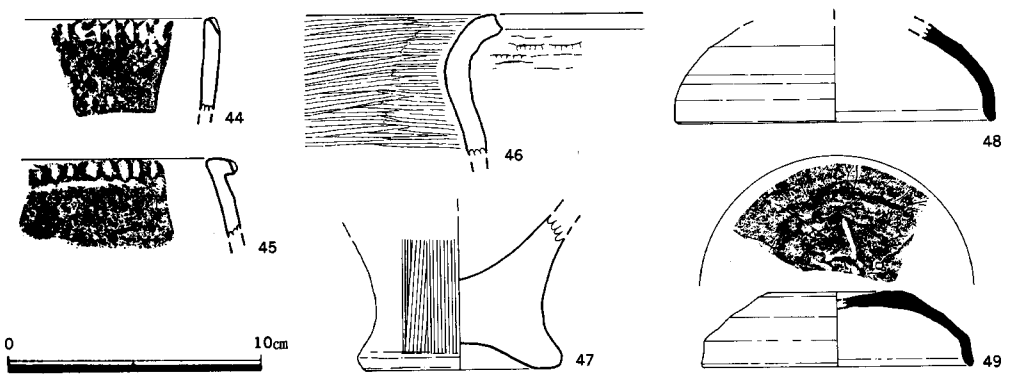


Fig. 24　6号住居跡出土遺物（縮尺 1/3）

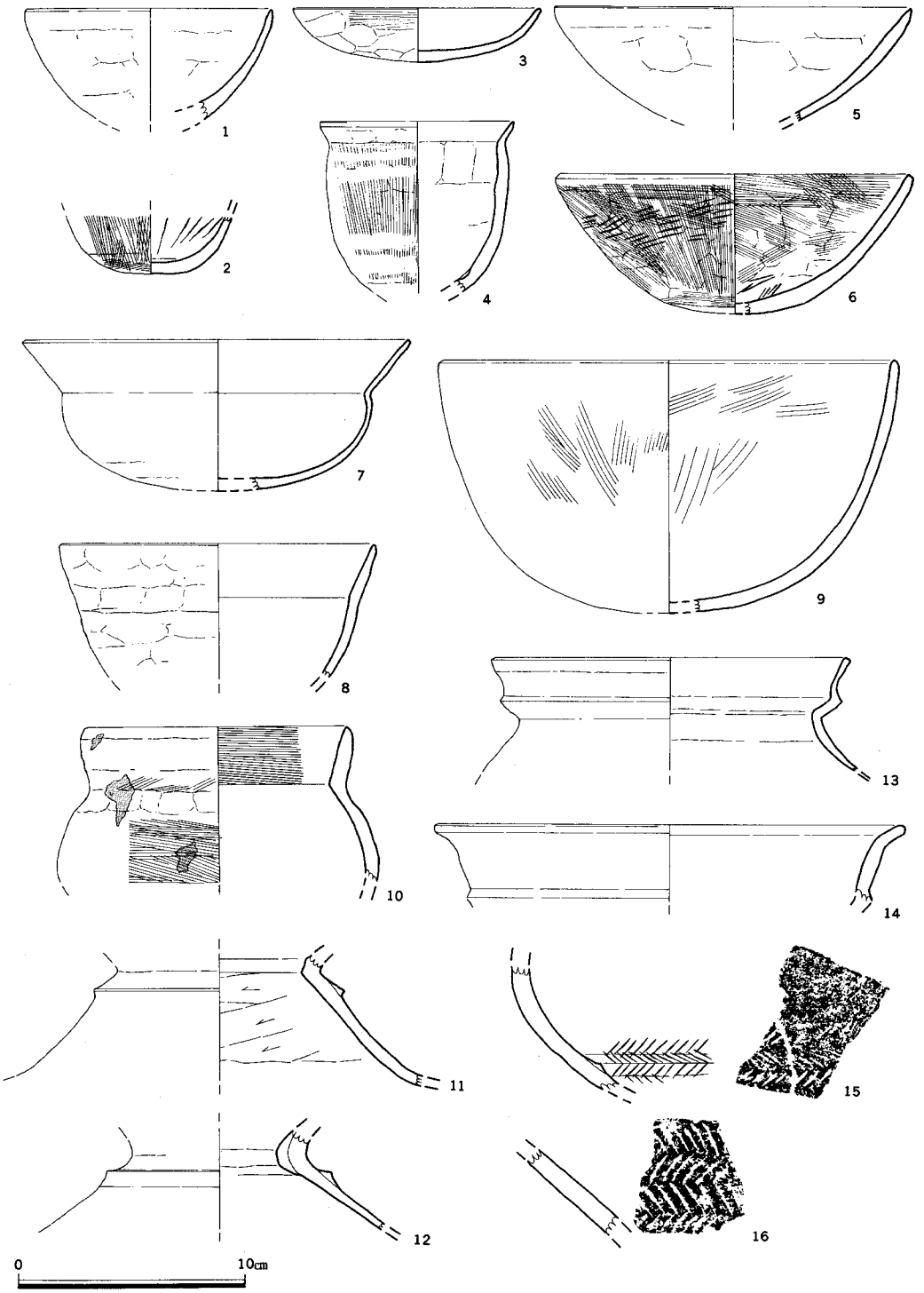


Fig. 25　7号住居跡出土遺物（縮尺 1/3）

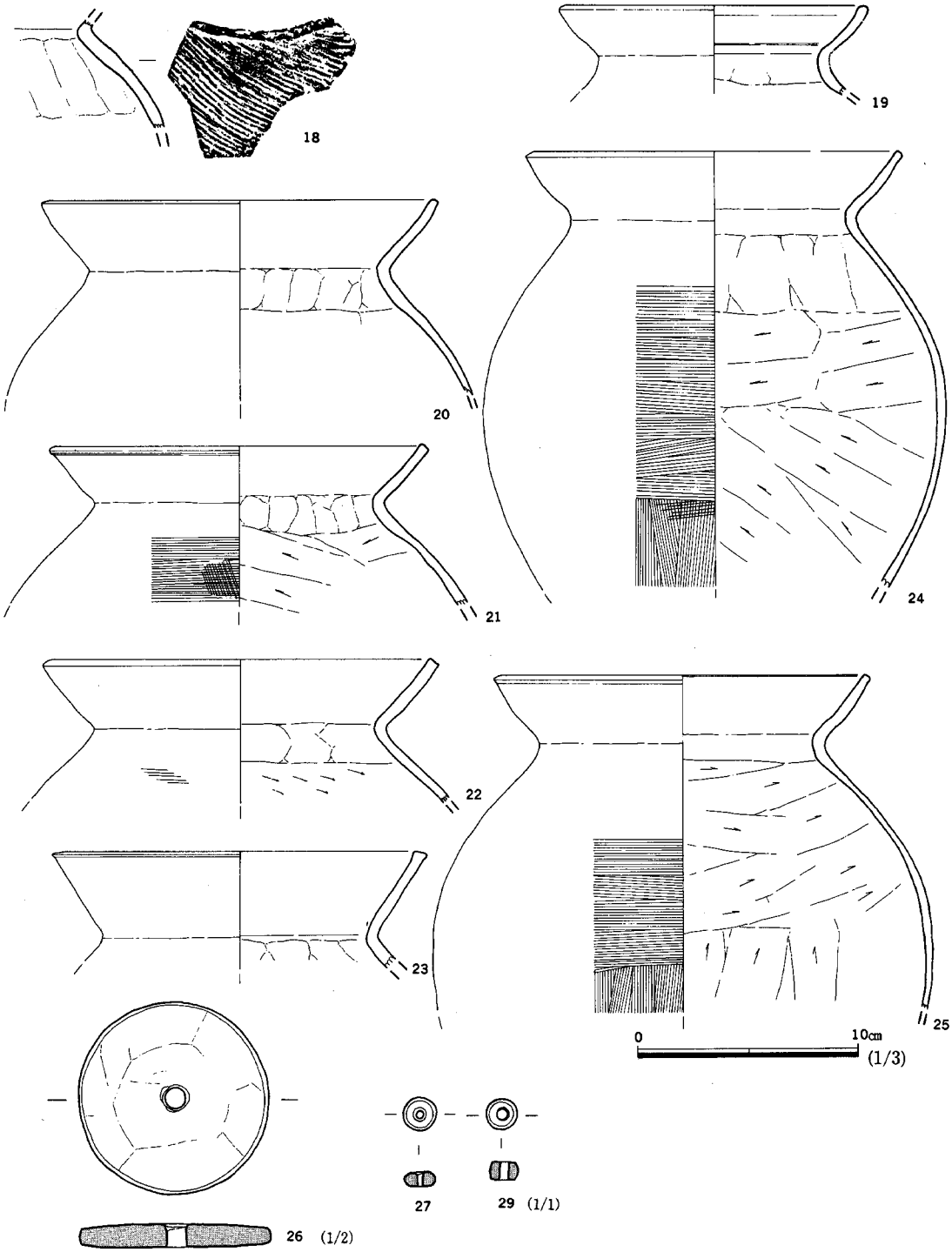


Fig. 26　7号住居跡出土遺物（縮尺 1/3・1/2・1/1）

ある。C類（5・6）5は丸味をもった体部に丸底を形成する。5・6の口径は16cm，器高は6.2cmを測る。5は口縁部外面にヨコハケ調整を施す。6は口縁部内外面にヨコハケ調整，体部外面はタテハケ調整，底部はヨコハケ調整である。いずれも胎土に砂粒を含み，焼成は3を除き悪い。6は茶褐色を，5は黄灰色を呈する。

鉢（2・4・7・8）　3種類に分類できる。A類（2・4）は口径8.6cmを測る。体部は卵形を呈し，口縁部が小さく外反する。外面はタテハケ調整である。2の内面にはヘラ状工具痕がある。B類（7・8）は半球体の体部に外半する口縁部を有している。7は薄手の土器で，口縁部が強く外反する。8は口縁部が余り開かず，体部の器高は深い。厚手の土器で，作りは悪い。7の復元口径は17cm，器高は6cm，8の口径は14cmを測る。C類(9)は半球体の体部をもち，直口する口縁部の端部は丸味をもつ。内外面にタテハケ調整を施す。復元口径20.5cm，器高11.2cmを測る。焼成は4・9が良好である。いずれも胎土に砂粒を含む。7の胎土は精良で，微砂を含んでいる。

壺（10・13・14）　10は小型丸底壺で，球体の体部に短かく直口する口縁部を有している。口径11.5cmを測る。体部外面はヨコハケ，口縁部内面はヨコハケ調整である。外面の数ヵ所に赤色顔料塗布の痕跡がある。13・14は二重口縁壺で，13の口径は16cm，14は21cmを測る。13は外面に強い稜を有し，頸部の屈折も強い。15・16は同一個体で，二重口縁壺の頸部に相当する。ヘラ彫による羽状文を，突帯の上位に2条，下位に5条以上施している。14の口縁部は外開きで，端部は丸く仕上げている。いずれも胎土に砂粒を含み，焼成は悪い。13～16は山陰系の土器である。

器台（11・12）　同一個体の可能性もあるが接合部分が無く，別個体として報告する。脚裾部をいずれも欠く。11の内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。11の焼成は良好。11は黄橙色，12は黄灰色を呈する。いずれも胎土には砂粒を含む。

甕(18～25・30・31)　18は外面に右下りの平行タタキを施し，内面はナデ調整である。19～25・30は布留式併行期の甕で，19・20・24・25・30は肩が余り張らない。口縁部を内弯気味に外反させ，端部を水平に仕上げる。19は小型の甕で，口径14cmを測る。他は口径17～18cmである。30は完形品で，口径18cm，器高29.3cmを測る。21・22・24・25・30の胴部内面はヘラケズリを施している。21・22・24・25・30は胴部外面にタテハケ調整後，胴部中位にヨコハケを施す。30の肩部には一条の波状沈線がある。31は口径13.6cm，器高13.1cmを測る。胴部の膨みが小さく，口縁部は小さく外反する。器壁が厚く，内面はヘラケズリである。外面にはタテハケ調整，及び底部にはヨコハケ調整を施す。古墳時代中期以降の土器で，住居跡には伴わない。

その他，7号住居跡から出土した土器には32の須恵器壺，33の突帯文土器，34・35の弥生時代前期土器がある。

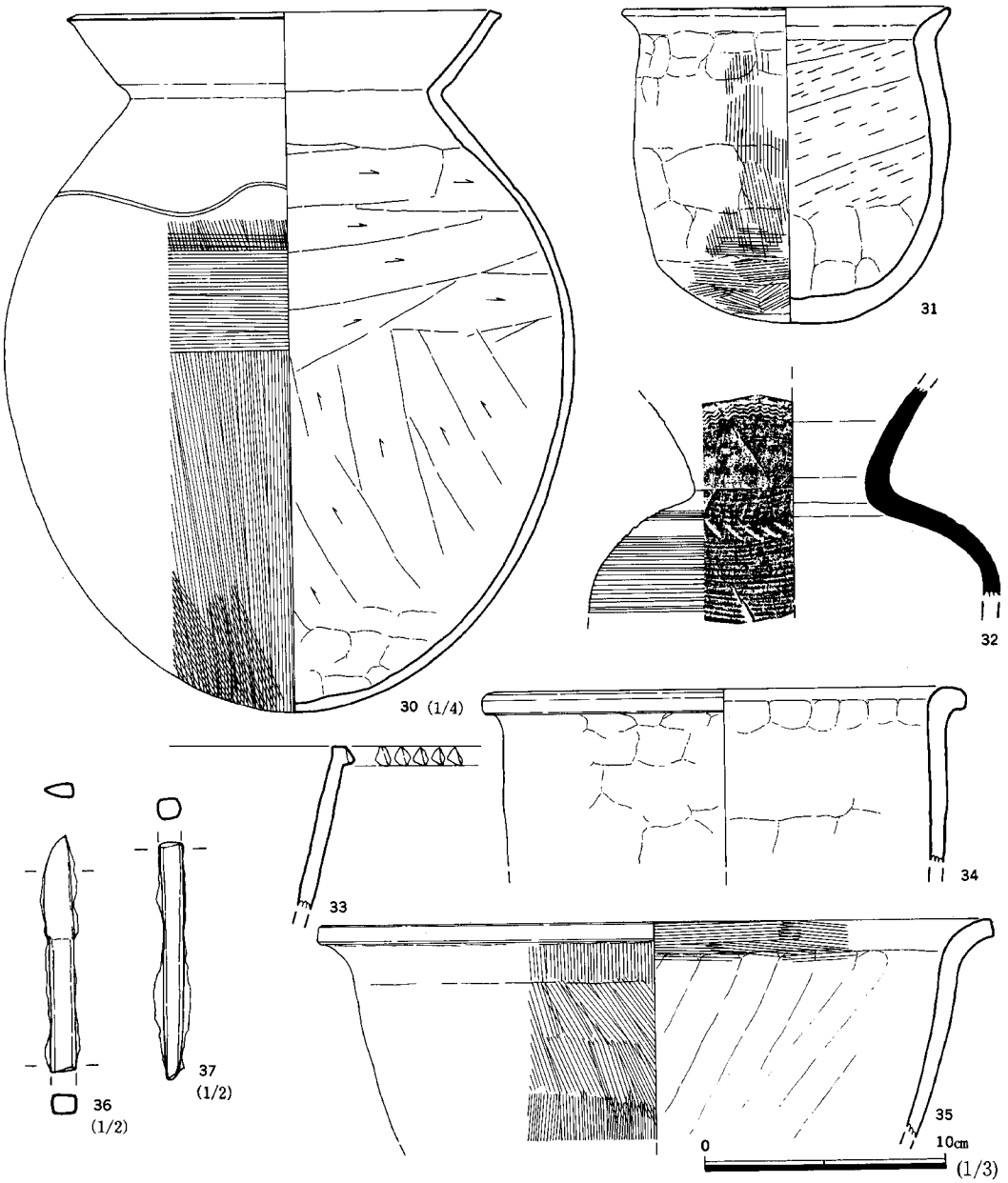


Fig. 27　7号住居跡出土遺物（縮尺 1/4・1/3）

石器・玉類・鉄製品

紡錘車（26）　直径5.95cm，厚さ4～7cm，孔径6mmを測る。全体の研磨は丁寧で，縁辺には敲打痕を残す。材質は緑泥片岩であろう。

小玉（27・28）　tab.6の計測表を参照。27はガラス小玉，28は滑石製である。

鉄鏃（36・37）　いずれも覆土から出土。現存長は36が6.6cm，37が6.7cmを測る。銹化が著しい。

その他，長さ14.3cmを測る転石を利用した磨石が1点と凹石が1点出土している。

8号住居跡出土遺物（Fig. 28・29，PL. 22）

7号住居跡と切り合い関係にあるため，覆土の遺物には混入品が多い。1・2・8・9・11～13は覆土，他はベッド上・床上からの出土である。

土師器

坏（1～3）　3種類に分類できる。A類(1)は平底の底部をもち，体部は若干丸味をもつ。口縁部はシャープに仕上げる。内底にはヘラ状工具によるナデを行う。口径10.1cm，器高5.7cmを測る。B類(2)は半球体の体部を呈している。口径は10.9cm，器高4.9cmを測る。C類(3)は半球体の体部に短く外反する口縁部を有している。口縁部は若干，内弯気味で，内外面はヨコナデ調整である。口径10cm，器高5.8cmを測る。体部外面は丁寧なナデ調整であるが，一部にタテ方向の調整痕を残す。又，外面の一部に朱塗りの痕跡をとどめており，祭祀的な土器と思われる。

鉢（4・5）　A類(4)は器高の低い坏で，口径は20cm，復元器高6cmを測る。内面は丁寧なナデ，外面にはハケ調整，及びナデ調整を施す。B類(5)は大型の鉢で，復元口径26.1cmを測る。口縁端部を平らに仕上げている。体部は丸味を有し，内外面は粗目のハケを施す。胎土は3を除き，いずれも砂粒を多く含む。3の胎土は精良である。

壺（6・9）　小型丸底壺で，6は球体の体部に直口する口縁部を有しており，端部はシャープである。口縁部内面はナデ調整である。9の体部は小さな半球体を呈し，大きく開く口縁部を有している。胎土に砂粒を含む。焼成は弱い。6は口径10.9cm，器高9.5cm，9は口径12cmを測る。9は8号住居跡出土品ではなく，出土地点不詳

器台（7・8）　胎土・色調共に共通する点があるため同一個体の可能性がある。底径は7が16.7cm，8が18.8cmを測る。口縁端部は丸味をもっている。内面はヨコ方向又はナナメ方向のヘラケズリを施す。外面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を多く含み，いずれも褐色である。

高坏（10～13）　12・13の高台は低い。10は坏部で，口縁部が大きく外反し，底部との境は明瞭な段を有している。口径24.6cmを測る。内外面共にハケ調整の後，タテ方向の丁寧なヘラ研磨を施している。土器の表面にはスリップを塗布した痕跡がある。胎土は精良で，砂粒・金雲母を含む。11の器台は筒部が膨みをもっており，裾部との境に径1cmを測る孔を3ヵ所設ける。筒部内面はナデ調整である。胎土に砂粒を含み，淡黄褐色を呈する。12・13の底径は9.7cm・9.3cmを測る。椀状の坏が接続するもので，脚裾は大きく開く。端部は丸味を持つ。いずれも胎土は精良で，褐色を呈する。

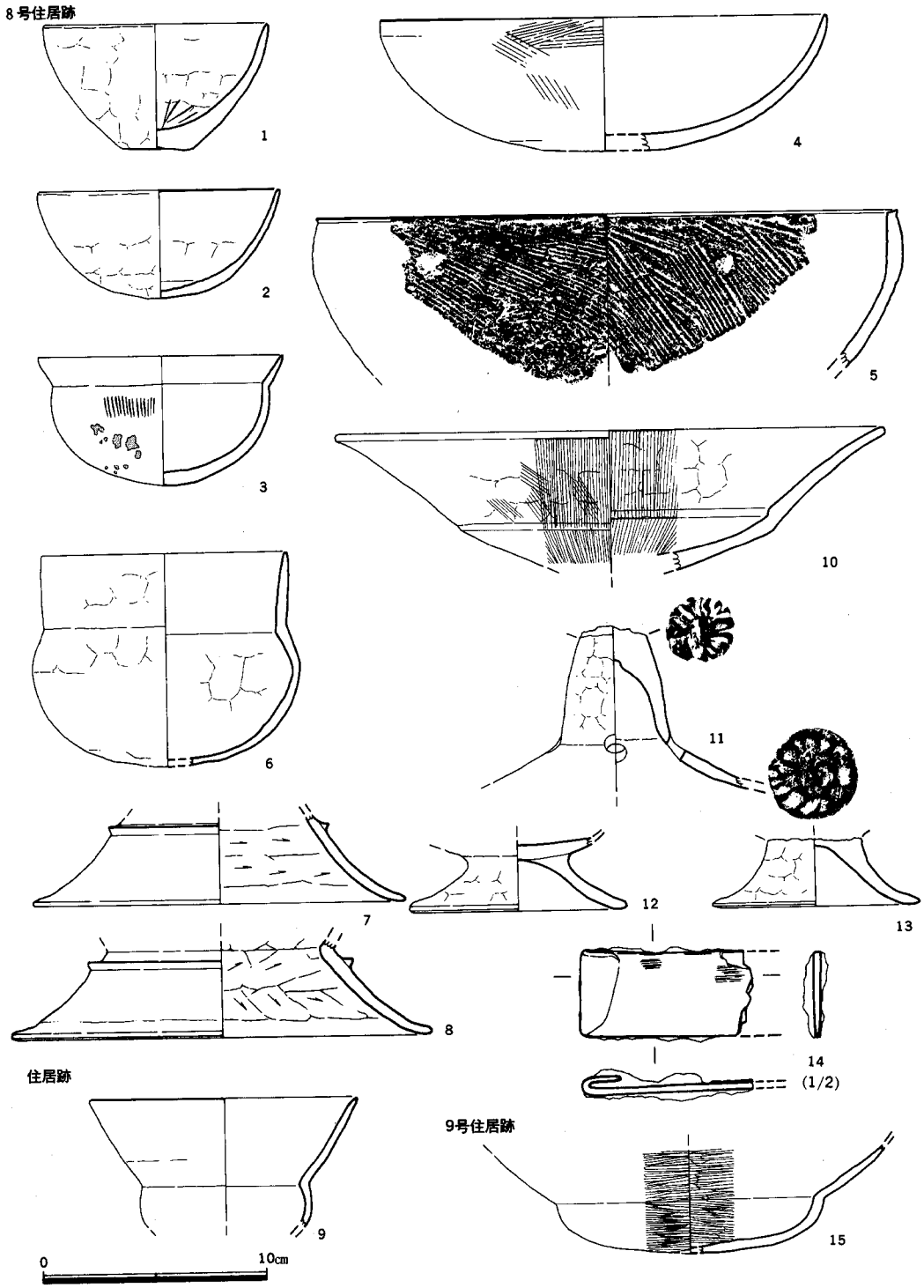


Fig. 28　8号・9号住居跡出土遺物（縮尺 1/3・1/2）

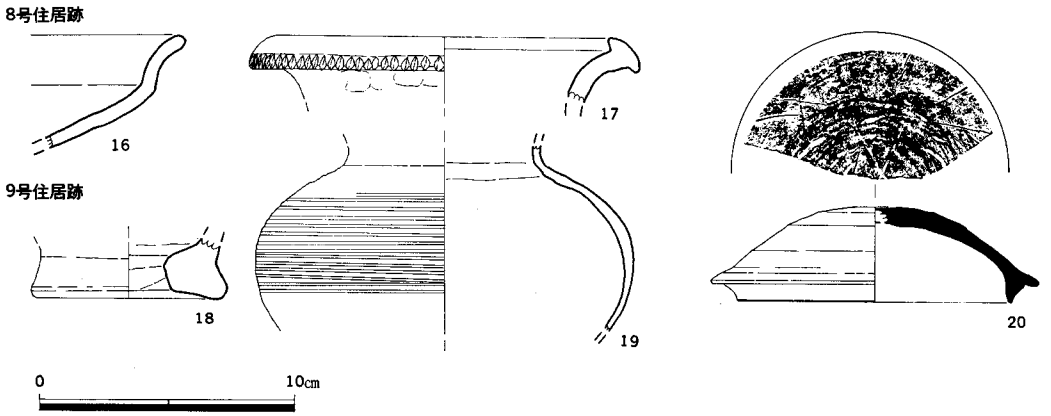


Fig. 29　8号・9号住居跡出土遺物（縮尺 1/3）

鉄製品

手鎌 (14)　半分を欠損している。銹化は著しい。現存長5cm，幅2.5cm，厚さ2mmを測る。両端を折り返して，袋部を形成している。内側に木質が残っている。

その他，8号住居跡の覆土からは，Fig. 27のように縄文晩期の浅鉢(16)・弥生時代終末の壺(17)・須恵器坏蓋(20)・土師器壺(19)がある。19の胎土は精良で，調整及び，外面のカキ目は須恵器と全く同一手法である。胎土に砂粒を含み，褐色を呈する。

9号住居跡出土遺物 (Fig. 28・29)

遺構各説で述べたとおり，第64次調査で検出した7号住居跡の一部で，土師器・坏・小型丸底壺・小型の甕が出土している。今回は数点にすぎない。「有田・小田部第8集」を参照のこと。

土師器

鉢 (15)　口縁部を欠いている。現存高4.6cmを測る。体部は浅く，口縁部は大きく開く。内外面ヨコ方向のヘラ研磨を施す。胎土は精良で，微砂を含む。

その他，縄文晩期の甑(18)がある。底部の穿子は焼成後である。

10号住居跡出土遺物

周溝のみを検出するにとどまったため遺物は全て細片で，時期の決定材料になり得ない。

11号住居跡出土遺物

遺構各説で述べたように第64次調査12号住居跡に相当する。遺物は土師器・鉢・高坏・滑石製小玉が出土した。「有田・小田部第8集」を参照のこと。

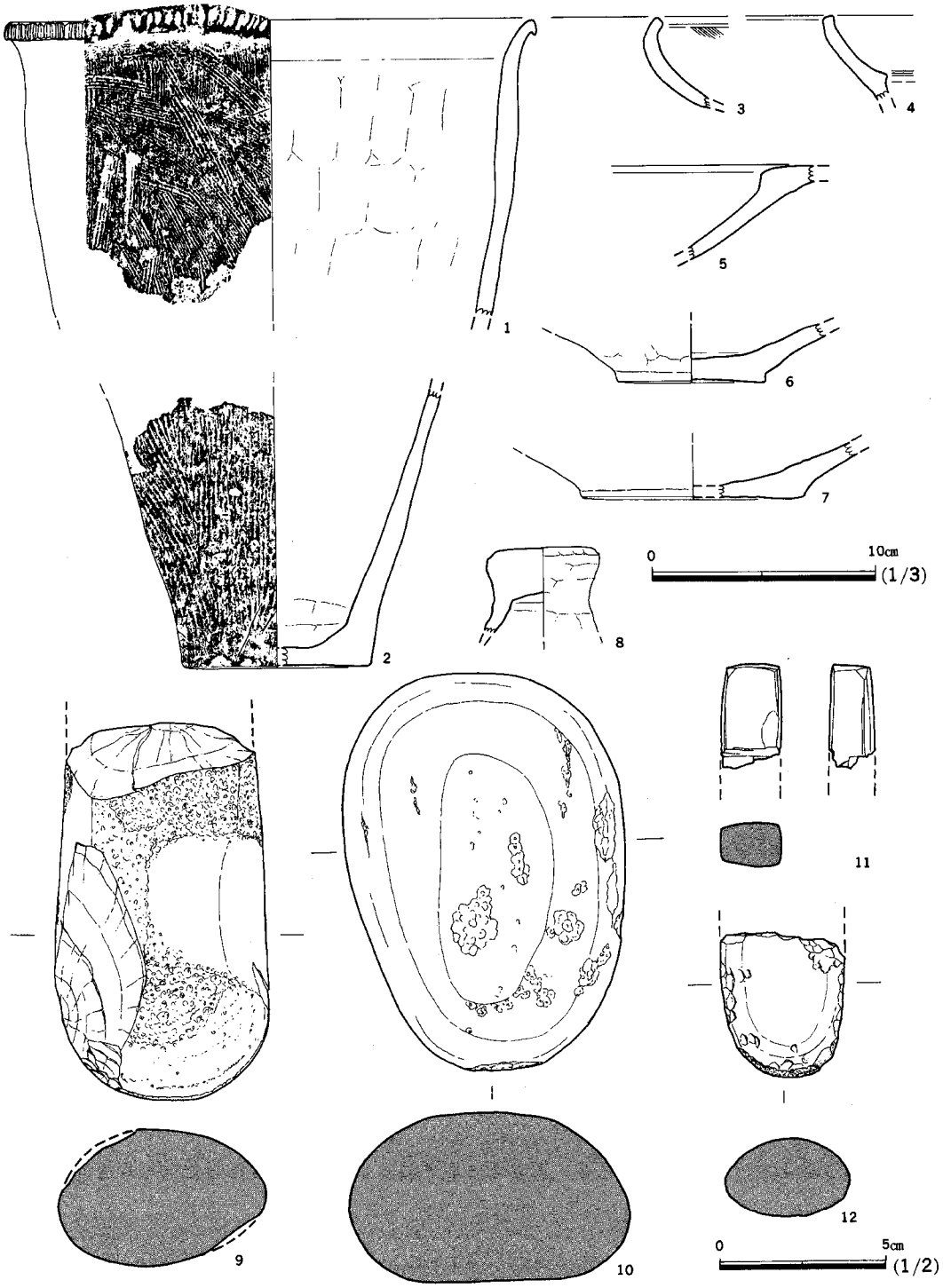


Fig. 30　2号土坑出土遺物（縮尺 1/3・1/2）

2号土坑出土遺物 (Fig. 30, PL. 22)

覆土内から土器・石器・黒曜石が出土した。

突帯文土器・弥生式土器

甕（1～4）　1・2は弥生前期板付Ⅰ式併行期の甕で，胎土・焼成・色調などから同一個体の可能性が非常に強い。1の口径は23.7cmを測り，口縁部を若干外反させ，端部にヘラ刻みを密に施している。外面はタテハケ調整，内面はヨコナデ調整，又はナデ調整を施す。2は底径8.3cmを測り，体部は膨みをもたない。外面はタテハケ調整で，底部周辺はヨコナデを施す。3・4は内傾した口縁部で，内外面にヘラ研磨を施している。5は高坏の坏部片で，口縁部内側に粘土を貼り付けて，平坦面を形成している。6・7は壷形土器の底部であり，6の底部は円盤貼り付け状を呈す。8は蓋形土器のつまみで，全体に丸味をもっており，内外面はナデ調整である。いずれも胎土に砂粒を含む。3・4の胎土は他の土器とは違い，焼成も良好である。4は茶褐色を呈している。

石　器

石斧（9・10）　磨製石斧で，現存長11.3cm，最大幅6.4cm，最大厚4.1cmを測る。刃部は半円状を呈する。基部を欠くが，基部幅に対し，刃部幅が大きい。研磨は部分的に施しているが，全体に敲打痕を残す。石材は玄武岩である。10は柱状片刃石斧の基部片である。現存長3.1cm，幅1.3cm，厚さ1.3cmを測る。石材は粘板岩であろう。

敲石・磨石（11・12）自然石を用いる。いずれも先端を敲石として利用している。12は現存長4.3cmを測り，石材は花崗岩系の石材である。11は磨石にも（1）が1点出土利用している。長さ11.9cm，幅8.5cm，厚さ5.1cmを測る。花崗岩である。

1号井戸出土遺物 (Fig. 31・32, PL. 23)

土器は細片が多く，図示し得るものは少ない。石器には板碑・石臼・五輪塔片などが出土している。又，濾過に用いた竹や木の枝の自然遺物も出土している。

瓦質土器

湯釜（3）　口径15cmを測る。体部は球体に近く，口縁部は直口する。耳は欠損しており，そのために径約8㎜を測る孔を2つ穿孔して耳の代りとしている。内外面は黒色を呈し，口縁部はヨコハケ調整，外面の一部にタテハケ痕がある。焼成良好である。

捏鉢（4）　内面にはヨコハケ調整，外面はタテハケ後ナデ調整である。胎土に砂粒を含み，黒灰色を呈する。

その他の瓦質土器には鼎片などがある。

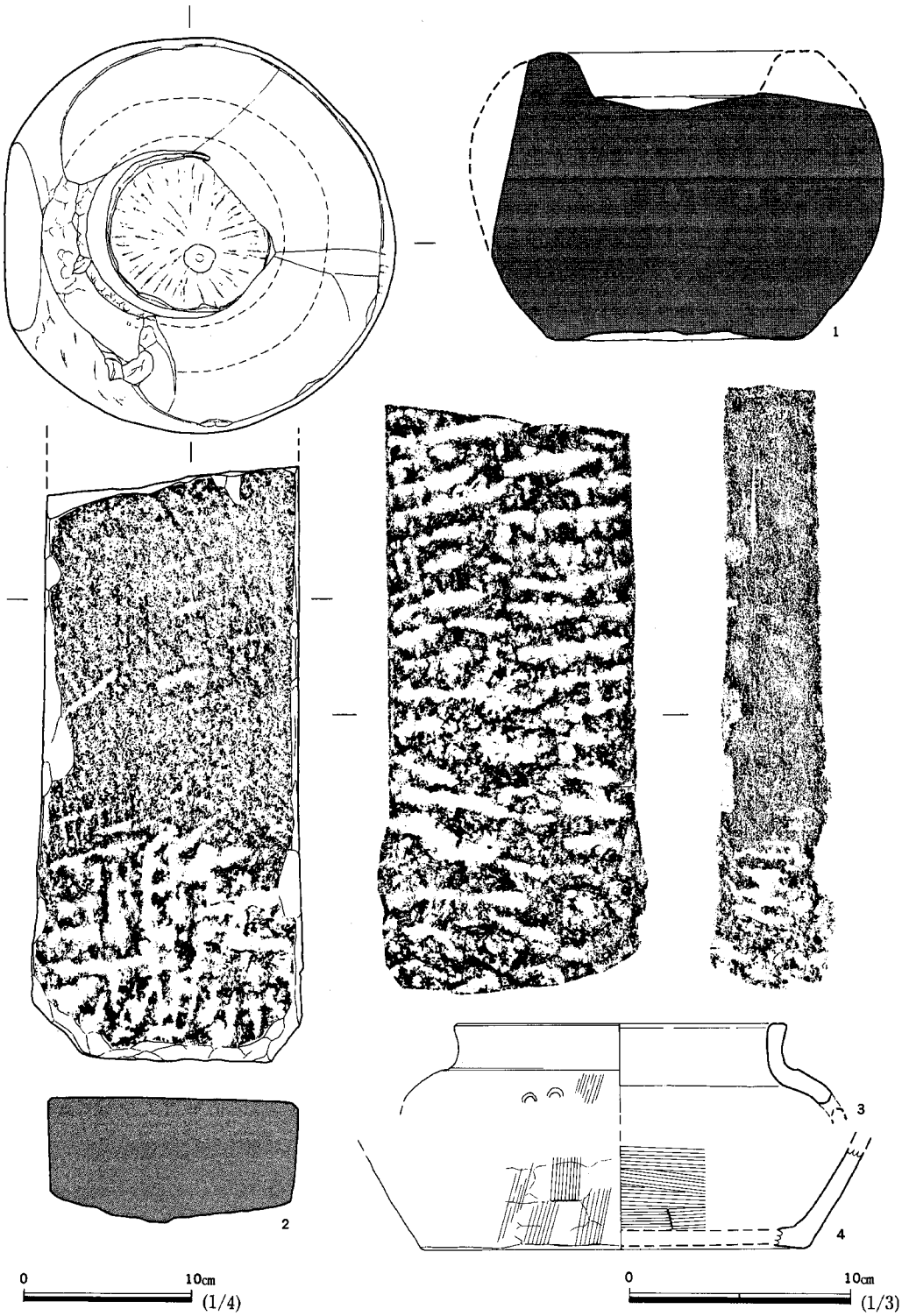


Fig. 31　1号井戸出土遺物（縮尺 1/4・1/3）

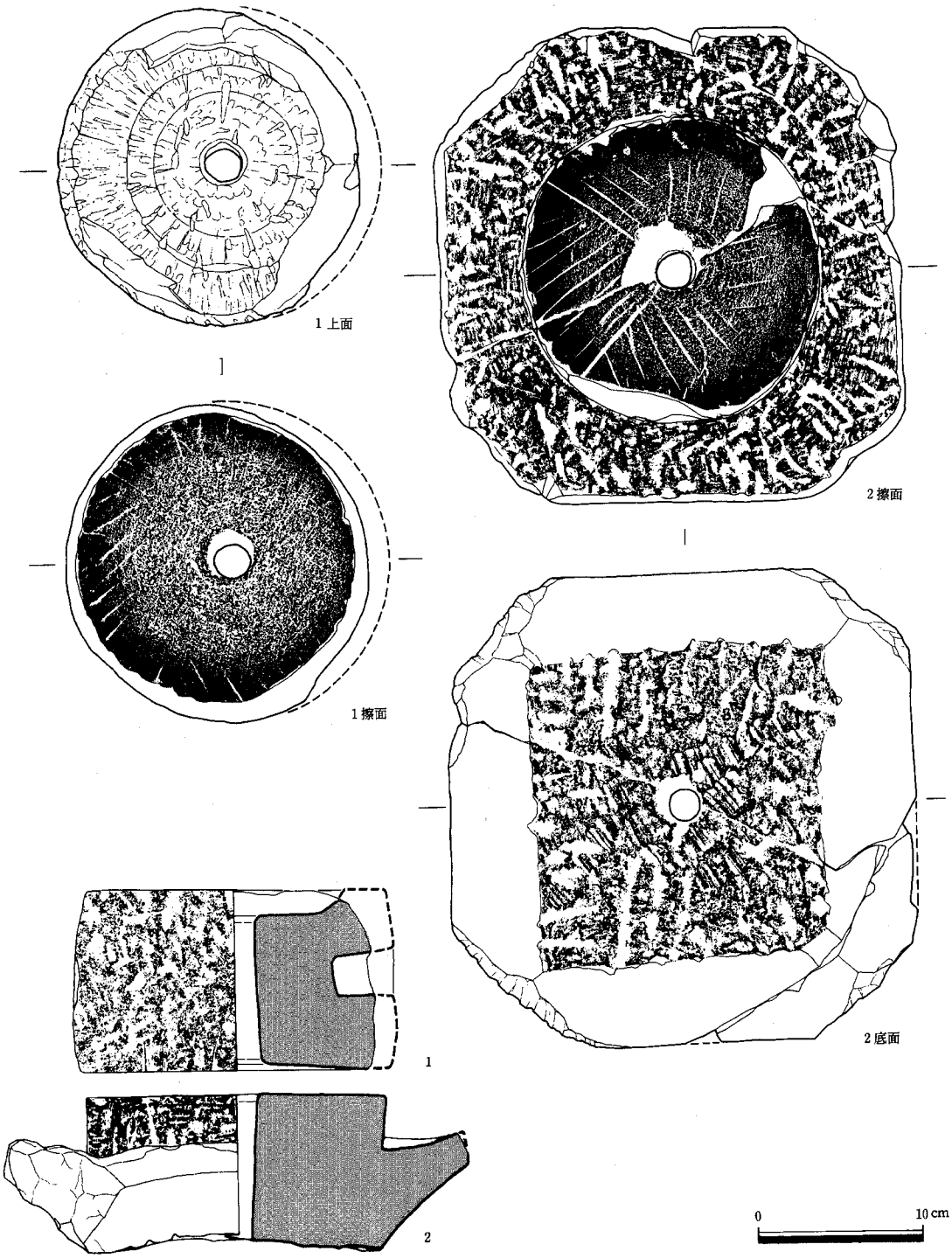


Fig. 32　1号井戸出土遺物（縮尺 1/4）

石製品

五輪塔（1）　砥石として再利用されており，上面と側面が利用されている。水輪と思われる。体部は球体を呈する。底面はノミによる荒成形を行う。上面には火輪を差し込むための受け穴を作る。この穴は，口径13.2cm，深さ3.5cmを測る。梵字のあったと思われる部分は砥面として利用し，消している。高さは17.5cm，最大径25.2cm，底面径15.5cm，上面復元径17cmを測る。良質の砂岩製である。

板碑（2）　三角形の頭部を欠いており，現存長36cm，基部の長さ12.2cm，碑面の幅15.3cm，基部の最大幅16.3cm，厚さは5.7～7.5cmを測る。碑面及び側面のケズリは丁寧であるが，基部及び裏面はノミ痕を残したままである。やや目の荒い砂岩を用いる。有田遺跡出土の板碑に共通する石材である。

石臼（5・6）　茶臼の上・下臼と考えられる。上臼(5)は側面の一部を破損しているが，擦り合わせ面の復元直径20cm，厚さ11.2cm，芯棒孔径3cmを測る。側面，及び上面は粗いノミ痕を残した成形を行っている。上面の研磨は雑である。上面の受け皿部分は，直径12.3cm，深さ1.8cmの逆梯状を呈している。荒いノミ痕を残す。下面は使用のため著しく摩滅しており，擦目を消失する。目は分割主溝4本，副溝8本以上で，逆時計回りに施している。側面には挽き木を挿入するための長さ2.1cm，深さ4.2cmを測る方形の孔を一対穿っている。砂岩製で風化が著しい。下臼(6)は受け部外周部の一部を欠いている。受け皿は平面形が，隅角を切り落とした方形を呈している。底は上げ底で，四隅を四脚状に削り出している。長さ28.2cm，高さ9.6cmを測る。受け皿の上面は粗いノミ痕を残す。擦り合わせ部分の直径は18.8cm，高さ3.2cmを測る。放射状に条痕を残すが，分割線は5分割で，主溝5本，副溝4～8本を逆時計回りに施している。上面は使用による摩滅が著しい。芯棒孔径は2.8cmを測る。底面，及び側面には粗いノミ痕を残す。砂岩製である。

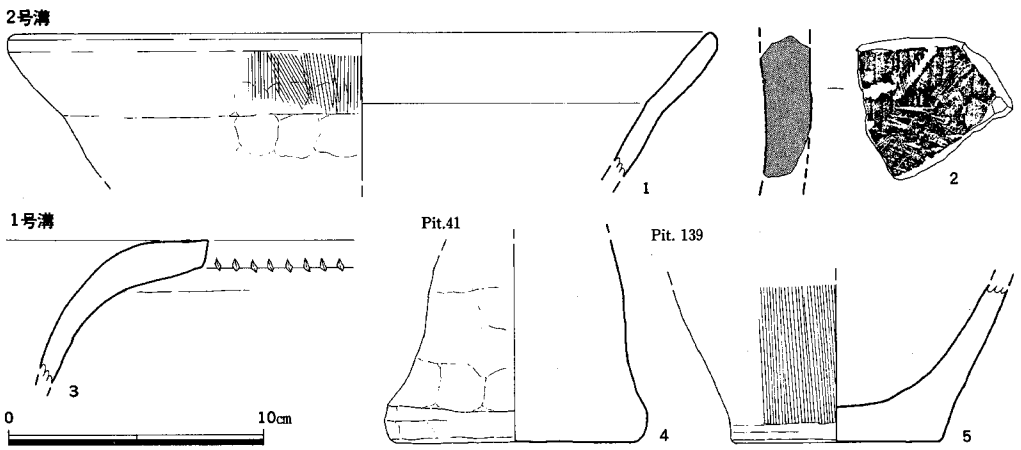


Fig. 33　1号・2号溝，及びピット出土遺物（縮尺 1/3）

1号溝出土遺物 (Fig. 33)

弥生時代前期の壺形土器片(3)が出土しているが，この溝は中世の遺構であり，直接関係する遺物ではない。

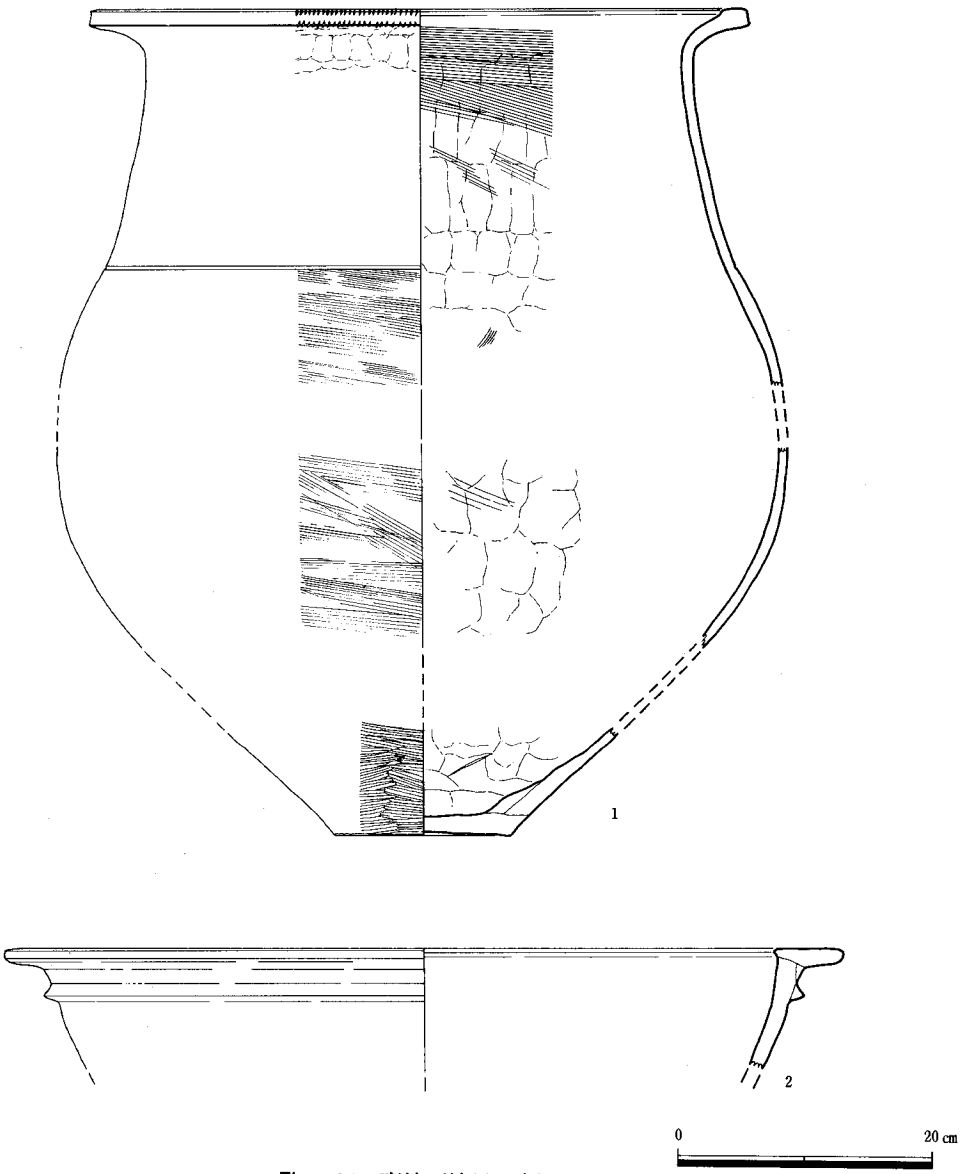


Fig. 34 甕棺（縮尺 1/6）

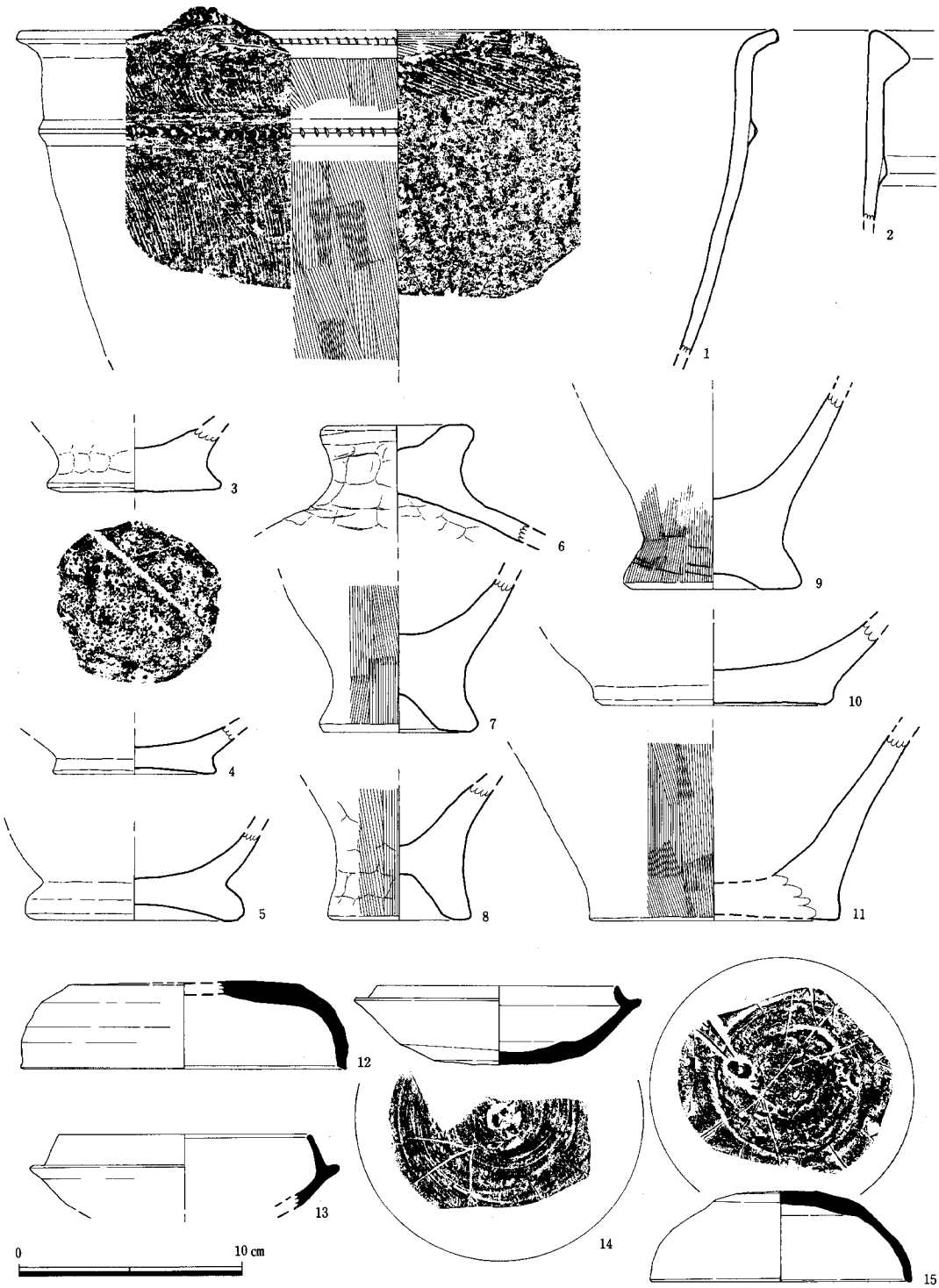


Fig. 35 包含層出土遺物（縮尺 1/3）

2号溝出土遺物 (Fig. 33)

土師質土器・滑石製品

鍋（1）　復元口径28～32cmを測る。口縁部が内弯気味に外反し，内面に稜を有す器形である。胎土に砂粒を多く含み，黄褐色を呈する。口縁部外面にタテハケ痕がある。16世紀に出現する器形である。

石鍋（2）　破片のため器形不明。厚さ1.9cmを測る。外面はタテ長のケズリを施している。良質で，銀灰褐色を呈する。

ピット出土遺物 (Fig. 33, PL. 24)

各Pitから多数の土器が出土したが，図示するのは2点のみである。4はP41，5はP139出土で，いずれも弥生式土器である。

支脚（4）　底径9.7cmを測る。円柱状を呈し，底部を張り出している。胎土に砂粒を含む。

甕（5）　底径8.2cmを測る。外面はタテハケ調整，内面は炭化のため黒色を呈する。中期の土器である。

包含層・表土出土遺物 (Fig. 30～40, PL. 24～27)

甕棺（1・2）　第64次・86次調査では前期から後期の甕棺を出土しており，1・2の土器が包含層，又は表採といえども規模からみて甕棺と考えるのは妥当であろう。1は包含層より出土，2は35次調査区北側道路の側溝工事で出土した。1は口縁部・胴部・底部が揃っており，図上復元した。口径は52.6cm，器高約70cm，底径14.2cmを測る。外反した口縁部の内側に粘土を貼り付けて，平坦面を形成する。肩部には一条の沈線を巡らし頸部と胴部の境をなす。頸部内面の上位にはヨコハケ調整を施し，胴部にはヘラ研磨を施している。恐らく，口縁部・頸部にもヘラミガキを施したものであろう。板付II式併行期である。焼成は良好で，胎土に砂粒を含み，褐色を呈する。2は甕棺の上甕である。蓋形の土器で，器高は高くない。復元口径66.8cmを測る。口縁部はほぼ平坦に仕上げ，頸部に一条の三角突帯を貼り付ける。焼成は良好で，胎土に砂粒を含む。黄褐色を呈する。中期中頃～後半の甕棺である。

包含層から出土した遺物には上記の他，縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・石鍋など多種の遺物がある。主なものを図化したので概述する。

縄文土器・甕（3～5）　いずれも底部で，3の外底には木の葉の圧痕がある。4・5は上げ底を呈している。胎土に砂粒を含む。底径は3が8cm，5が10cmを測る。

弥生土器・甕（1・2・7～11）　1・2は前期の甕で，1は口縁部と突帯に刻目を施す。2は三角形の口縁部の下に低い三角突帯を貼り付ける。前期末の土器である。7～9は中期初頭

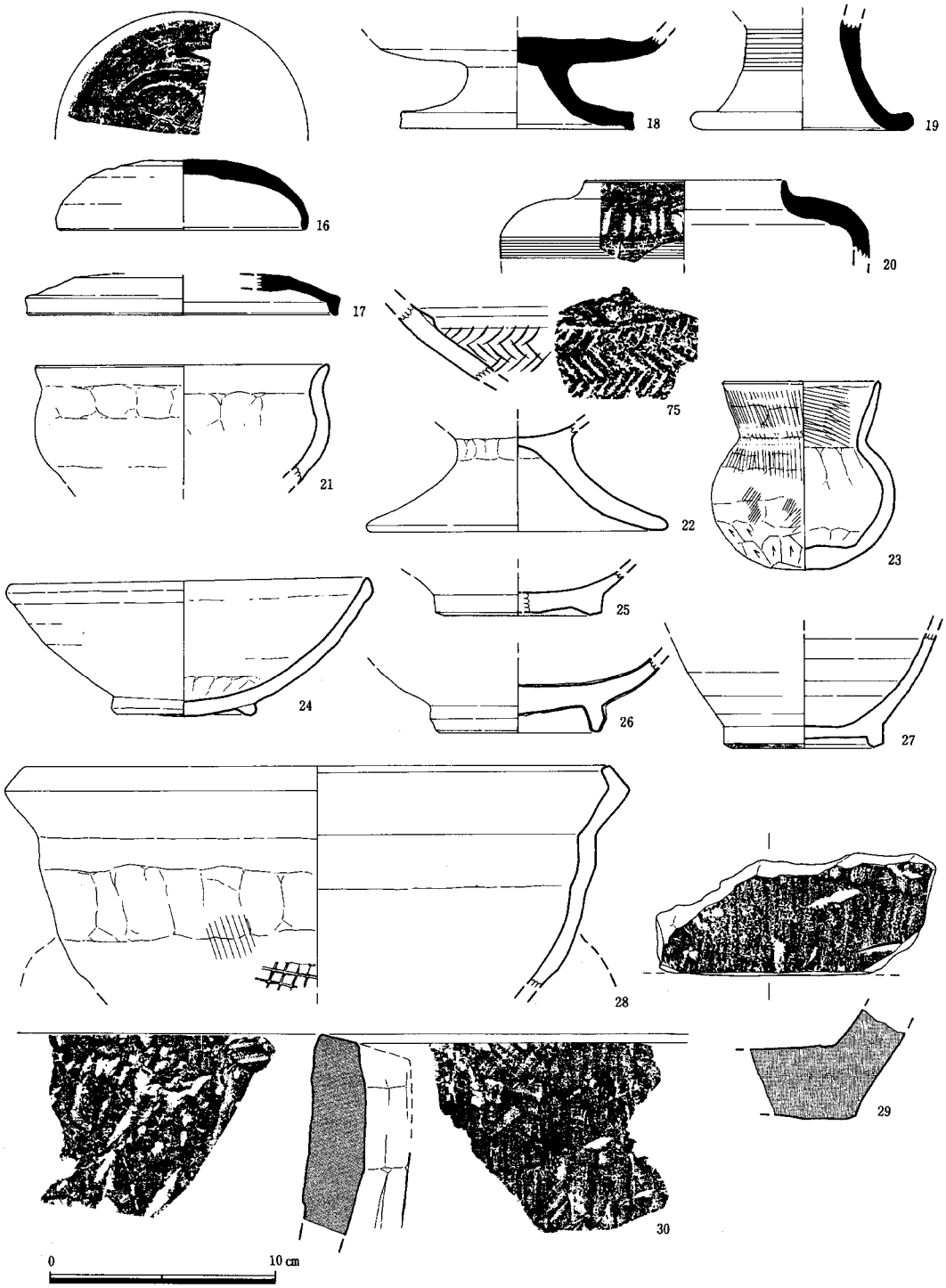


Fig. 36 包含層出土遺物（縮尺 1/3）

に位置づけられ，上げ底の底部は肥厚する。外面はタテハケ調整である。11は中期中頃～後半の甕で，外面はタテハケ調整である。10は壺の可能性がある。いずれも胎土に砂粒を含む。1の復元口径は34cm，7・8・10の底径は7.2cm・6.1cm・10.8cmを測る。

蓋（6）　底径7cmを測る。内外面はナデ調整である。底径7.4cmを測る。

須恵器・坏蓋（12・15～17）　12は口径14.7cmで，口縁端部内側に段を有す。15の口径は11.8cm，器高4.1cm，16の口径は11.2cm，器高3.1cmを測る。15・16は天井部にヘラ記号を施しており，ヘラケズリはいずれも天井部だけである。17は平安時代の宝珠つまみをもつ蓋である。

坏身（13・14）　14の口径10.9cm，器高3.6cmを測る。天井部にはヘラ記号が有る。ヘラケズリは天井部に施す。復元口径は13が11.2cm，14が10.9cmを測る。

高坏（18・19）　18は脚端部をつまみ出して水平に仕上げ，坏底部にはヘラケズリを施す。自然釉がかかる。19は脚端部を丸く仕上げ，筒部にはカキ目を施している。

壺（20）　口縁部が直口する短頸壺である。肩部に貝殻腹縁による刻目を，その下にはカキ目を施す。復元口径は9cmを測る。色調は暗青灰色である。

土師器・坏（21）　口縁部は如意形をしている。22のような高台が付くかもしれない。

高坏（22）　低い高台で，端部は丸味をもっている。底径13.4cmを測る。

壺(23・75)　小型の壺で，完形品である。体部は球体で，小さな底部がつく。口縁部内面は粗目のヨコハケ調整，外面にはタテハケ調整である。体部はハケナデを施すが，下位にはヘラケズリが認められる。口径は7cm，器高8.4cmを測る。75は山陰系の二重口縁壺である。

椀（24）　中世の土師器椀で，完形品である。口径16.9cm，器高6.7cmを測る。高台は低く，小さい。口縁部は丸味をもつが，全体に玉縁状を呈している。内面にはナデの痕跡がある。胎土は精良で，砂粒を含まない。黄白色を呈している，類例には石丸・古川遺跡に出土品がある。玉縁口縁の白磁椀を模倣した土器であろう。

白磁・椀（25）　25は中国白磁で，玉縁口縁をもつ器形である。

青磁・瓶（27）　越州窯系の青磁で，高台畳付には目痕が残る。釉は外面に施され，オリーブ色を呈する。高台径は7.2cmを測る。

椀（26）　26は高麗系の青磁で，緑灰色の釉が高台外面まで施される。底径7.1cmを測る。

瓦質土器・鼎（28）　脚部を欠く。復元口径26cmを測る。底部に格子目タタキを施す。口縁端部を内側へ折り曲げる特徴を有しており，色調は暗灰褐色を呈する。

石製品・石器・玉類

石鍋（29・30）　30は縦長の把手を4ヵ所に設ける器形で，口縁部は直口する。厚さ2.5cmを測る。内面のケズリは荒く，外面はタテ長のケズリである。29は厚さ2.2～3.2cmの厚手の鍋で，外面は幅広いタテ長のケズリ整形を施す。良質の石材である。29は外面に煤が付着。

石斧（31～35・36・43～45）　31～36はいずれも蛤刃石斧で，玄武岩製である。31・34は薄手

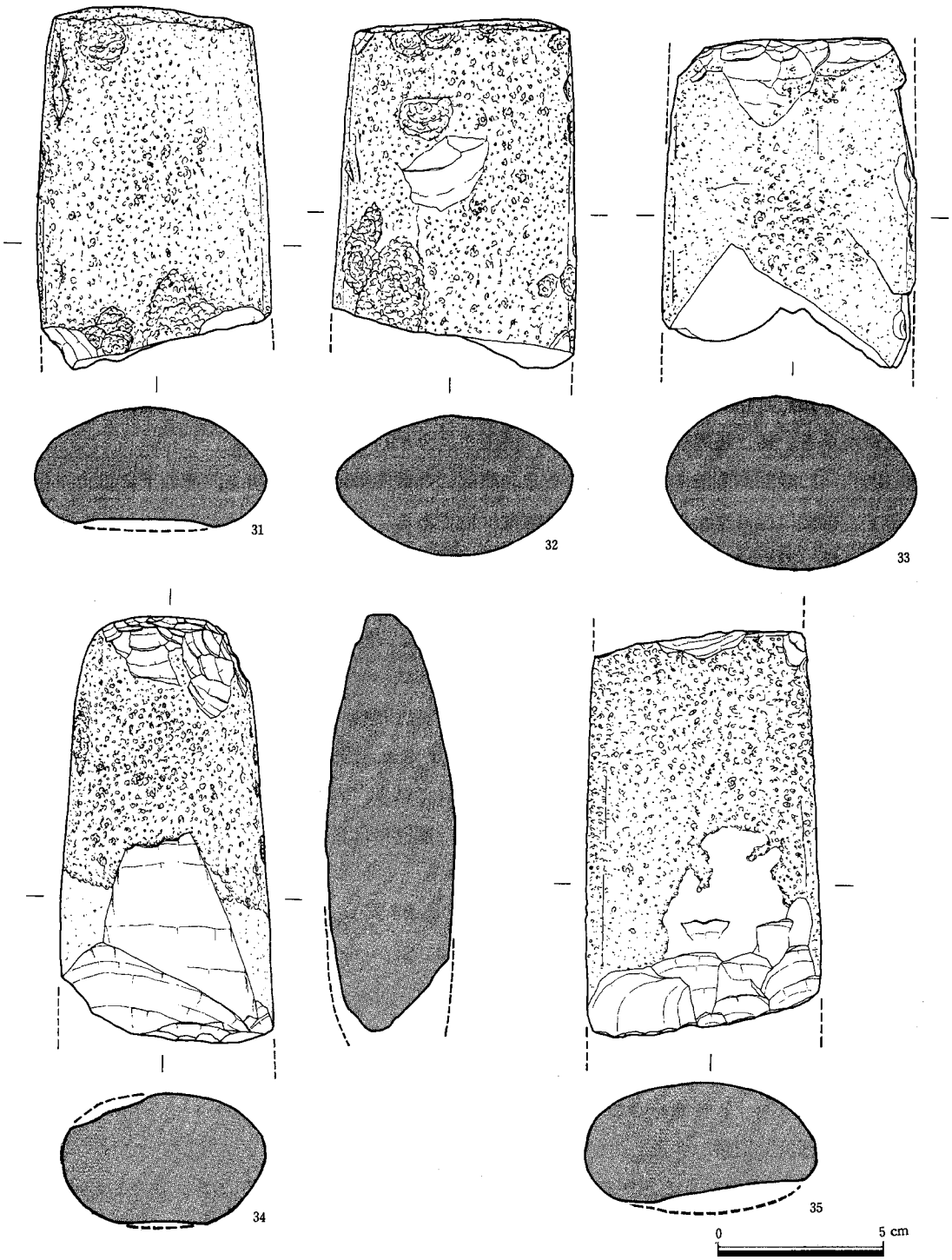


Fig. 37 包含層出土石器（縮尺 1/2）

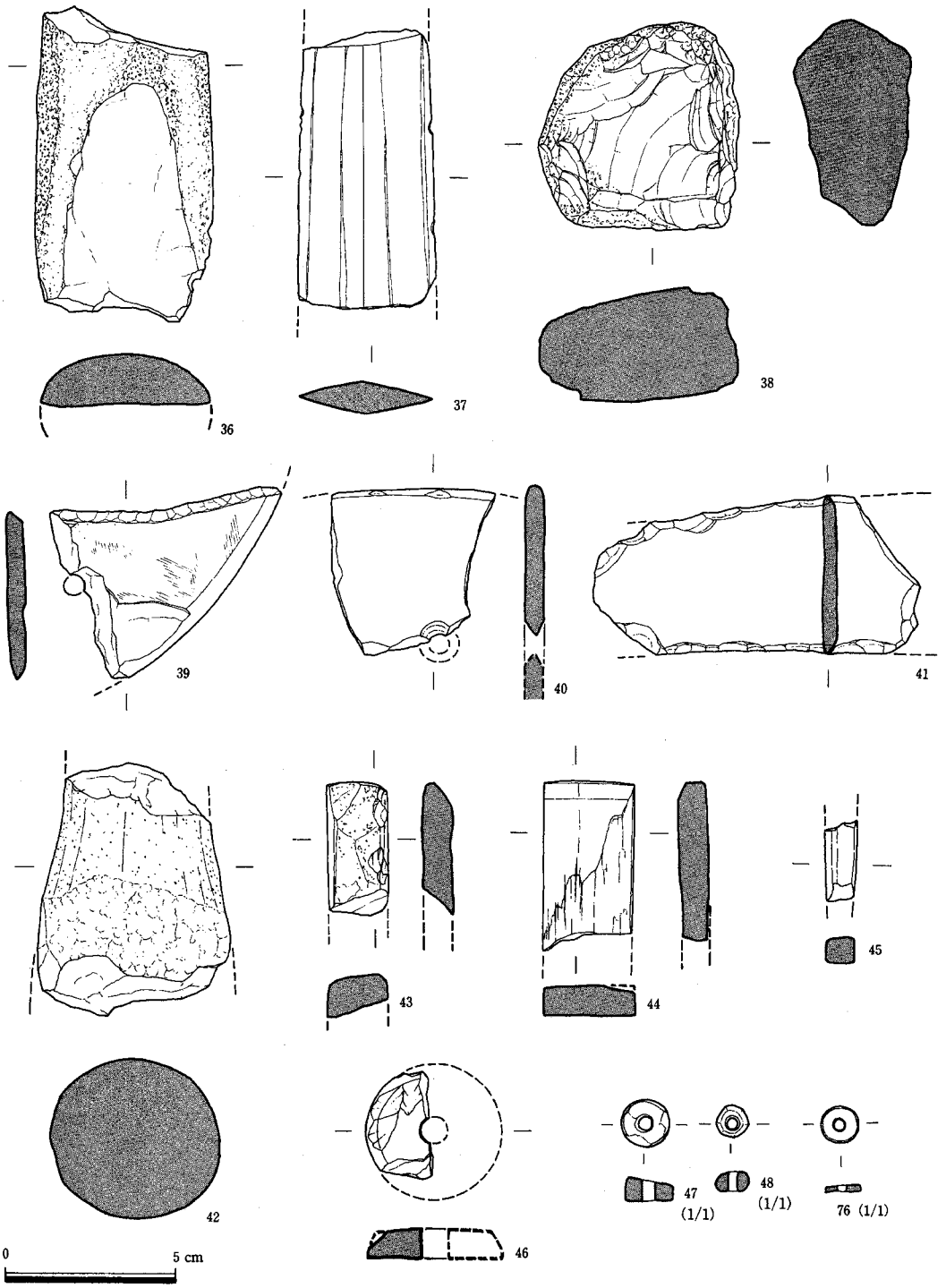


Fig. 38 包含層出土石器（縮尺 1/2, 1/1）

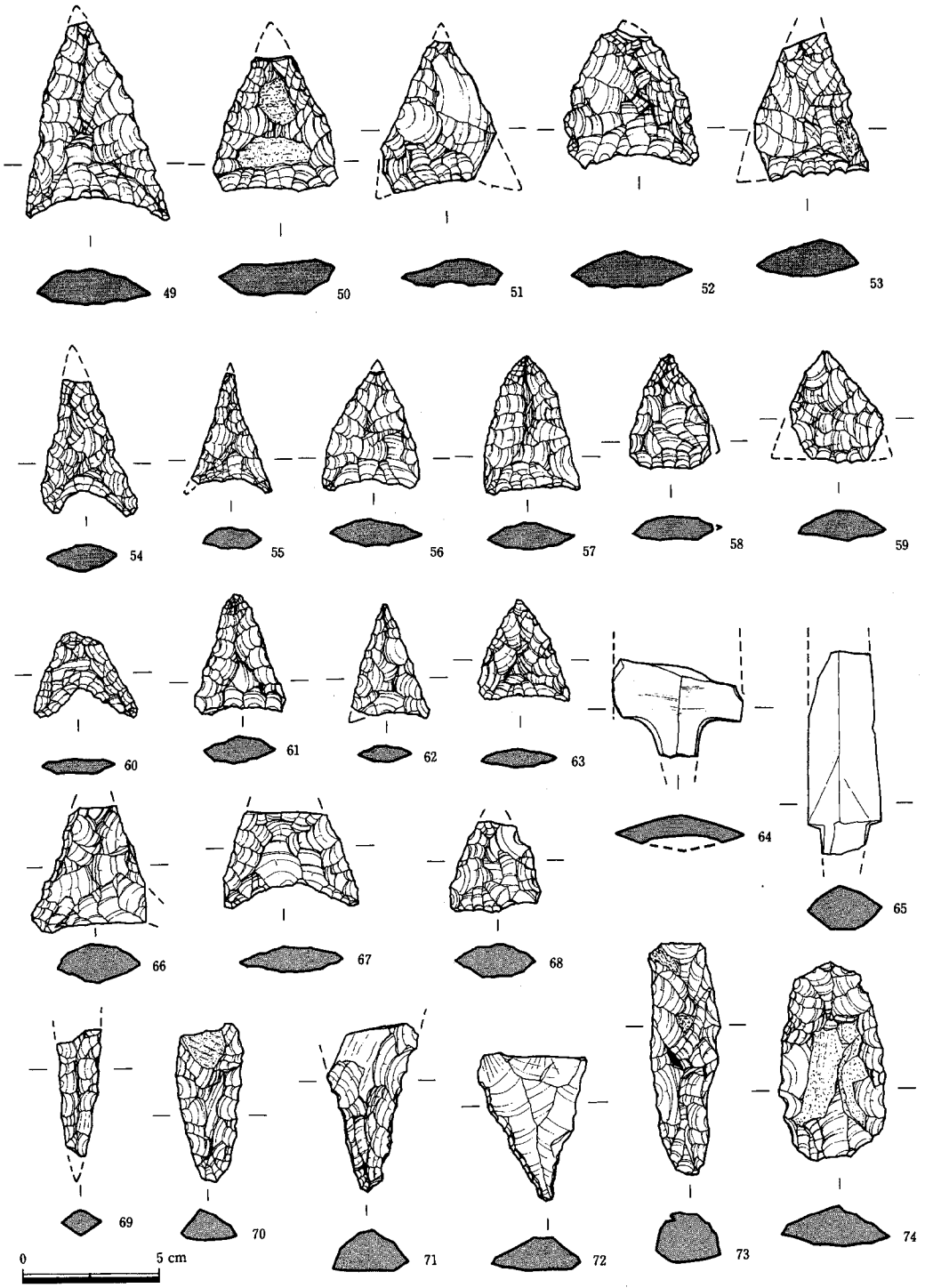


Fig. 39 住居跡・包含層出土石器（縮尺 1/1）

tab. 5　第35次調査出土石器一覧表

①

挿図番号	登録番号	種　類	出土地点	大きさ(cm) 長(最大)	幅(最大)	厚	重量(g)	石材	色調	備考
26−26	0748	紡錘車	7号住居跡	5.9	5.8	0.7	42	蛇紋岩		
30−9	1110	石斧	2号土坑	現存 11.3	6.4	4.1	480	玄武岩	くすんだ茶褐色	
30−10	1111	磨石	2号土坑	11.9	8.5	5.1	780	花崗岩系	淡灰色	
30−11	1113	柱状石斧	2号土坑	3.13	1.91	1.38	14.78	頁岩		
30−12	1112	叩石	2号土坑	4.3	3.8	2.3	58	花崗岩	白灰褐色	
31−1	2503	五輪塔	1号井戸	23.1	17.4			砂岩		
31−2	2504	板碑	1号井戸	35.3	14.9	7.5		砂岩		
32−1	2505	石臼	1号井戸	19.4	11.1			砂岩		
32−2	2506	石臼	1号井戸	29.8	9.5			砂岩		
33−2	1901	石鍋	2号溝	現存 7.3	5.7	1.9	98	滑石	外・黒褐色 内・淡い銀褐色	
36−30	6005	石鍋	表土	現存高 9	32	2.4		滑石	灰緑色	
37−31	5044	石斧	包含層	現存 11.1	7.2	3.8	514	玄武岩	灰色	今山型
37−32	5045	石斧	包含層	10.7	7.4	4.2	572	玄武岩	淡灰色	今山型
37−33	5040	石斧	包含層	10.1	7.7	5.3	690	玄武岩		
37−34	0686	石斧	6号住居跡	13.0	7.5	4.0	540	玄武岩	灰褐色	
37−35	5041	石斧	包含層	12.6	7.1	3.6	565	玄武岩		
38−36	0740	石斧	7号住居跡	現存 9.5	5.25	1.5	105	頁岩質	淡灰褐色	
38−37	0685	石剣	6号住居跡	8.3	4.1	1	40	頁岩		風化、鏑あり
38−38	5039	敲石	包含層	6.2	6.0	3.3	208	玄武岩	灰青色	縁辺を利用
38−39	6006	石庖丁	表土	現存 4.9	7	0.5	22	砂岩？	灰色	破片
38−40	0687	石庖丁	6号住居跡	5	4.9	0.6	22.6	砂岩	明灰褐色	
38−41	5046	石錘	包含層	9.7	4.7	0.5	33	粘板岩	やや淡い灰色	
38−42	5047	穿孔具	包含層	7.5	5.8	1.03	261	砂岩	淡い褐色	
38−43	5042	柱状石斧	包含層	現存 3.92	1.94	1.05	13.7	安山岩		
38−44	5048	片刀石斧	包含層	5.0	2.8	0.9	26		乳灰褐色	
38−45	0676	柱状石斧	6号住居跡	現存 2.5	0.9	1.0	3.5	粘板岩	黒灰褐色	
38−46	5043	紡錘車	包含層	推定	径4	0.82	8	滑石		
39−49	5010	石鏃	包含層	2.9	2.1	0.5	1.95	黒曜石	黒色	
39−50	6003	石鏃	表土	2.0	1.9	0.5	1.95	黒曜石	〃	
39−51	0735	石鏃	7号住居跡	2.2	1.8	0.4	1.05	黒曜石	〃	未成品
39−52	3001	石鏃	Pit30	2.0	2.0	0.55	1.9	黒曜石	黒色	未成品
39−53	5057	石鏃	包含層	現存 2.12	現存 1.67	0.54	1.6	黒曜石	〃	未成品
39−54	5011	石鏃	包含層	2.1	1.5	0.4	0.7	黒曜石	黒色	
39−55	0678	石鏃	6号住居跡	1.8	1.2	0.3	0.35	黒曜石	〃	
39−56	0677	石鏃	6号住居跡	1.75	1.5	0.4	0.7	黒曜石	淡黒色	
39−57	0123	石鏃	1号住居跡	2.05	1.45	0.4	1.1	黒曜石		
39−58	0734	石鏃	7号住居跡	1.7	1.20	0.35	0.6	黒曜石	黒色	
39−59	5051	石鏃	包含層	1.73	1.49	0.44	0.85	黒曜石	〃	未成品
39−60	5009	石鏃	包含層	現存 1.4	1.5	0.2	0.35	黒曜石	黒色	
39−61	5005	石鏃	包含層	1.8	1.3	0.4	0.75	黒曜石	〃	
39−62	5035	石鏃	包含層	1.7	0.8	0.25	0.45	黒曜石	漆黒色	
39−63	2507	石鏃	1号井戸	1.5	1.15	0.3	0.5	黒曜石	〃	
39−64	5004	有茎磨製石鏃	包含層	現存 1.4	1.9	0.46	1.1	頁岩質	ややくすんだ灰色	
39−65	0675	有茎磨製石鏃	6号住居跡	現存 3	1.10	0.65	2.7	粘板岩	暗青灰色	
39−66	0692	石鏃	6号住居跡	現存 1.9	1.7	0.55	1.5	黒曜石	黒色	未成品
39−67	5053	石鏃	包含層	現存 1.5	現存 2.2	0.37	0.9	黒曜石	〃	先端欠く
39−68	5056	石鏃	包含層	現存 1.53	現存 1.48	0.52	0.9	黒曜石	〃	未成品
39−69	5013	石錐	包含層	現存 1.9	0.6	0.38	0.4	黒曜石	〃	
39−70	1905	石錐	1号溝	現存 2.48	1.02	0.60	1.2	黒曜石	〃	
39−71	0733	石錐	7号住居跡	現存 2.5	1.4	0.6	1.75	黒曜石	〃	
39−72	0754	石鏃	7号住居跡	現存 2.27	現存 1.64	0.53	1.25	黒曜石	〃	
39−73	5036	石錐	包含層	3.5	1	0.7	2.7	黒曜石	〃	先端は尖っていない

挿図番号	登録番号	種　類	出土地点	大きさ (cm) 長（最大）	幅（最大）	厚	重量（g）	石材	色調	備考
39－74	0737	石鏃	7号住居跡	現存 3	1.6	0.6	2.6	黒曜石		未成品
	0124	砥石片	1号住居跡	現存 9.4	4.9	4.0	308	砂岩	淡い明灰褐色	
	0128	砥石	1号住居跡	18.7	10.6	8.4	2310	砂岩	やや暗い灰褐色	かまどの支脚として再利用
	0689	砥石	6号住居跡	7.2	7	3.55	210	砂岩（細目）	こげ茶色	
	0690	叩石	6号住居跡	10.1	2.5	4.4	390	砂岩（細目）	淡灰褐色	A面に赤色顔料らしい斑点
	0691	磨石	6号住居跡	9	6.9	3.6	327	砂岩	やや緑をおびた灰色	
	0693	石鏃	6号住居跡	現存 3.1	現存 2.17	0.39	2.1	黒曜石		未成品
	0694	石鏃	6号住居跡	現存 2.95	現存 2.25	0.42	3.0	黒曜石		未成品
	0730	凹石	7号住居跡	8.5	7.5	3.4	340		淡黄灰褐色	
	0732	石錐	7号住居跡	7	7	1.9	140	玄武岩	淡灰褐色	
	0749	砥石	7号住居跡	現存 12.4	7.4	2.8	267	粘板岩	暗青灰色～黒灰色	
	0750	磨石	7号住居跡	7.8	6.5	2.7		玄武岩	淡灰色	
	0753	石鏃	7号住居跡	現存 2.10	現存 2.39	0.63	2.8	黒曜石		未成品
	0756	石鏃	7号住居跡	現存 3.25	現存 1.95	0.7	3.4	黒曜石		
	0757	石鏃	7号住居跡	現存 3.4	現存 2.5	0.95	5.5	黒曜石		未成品
	0818	砥石	8号住居跡	現存 9.1	2.3	1.8		粘板岩	暗灰褐色	
	1114	石鏃	2号土坑	現存 1.69	1.59	0.37	9.5	黒曜石		
	1301	石鏃	4号土坑	現存 3.18	1.45	0.59	2.4	黒曜石		
	5049	石鍋	包含層	現存 7.9	2.8	2.55	98	滑石	外・黒褐色 内・銀灰褐色	
	5052	石鏃	包含層	2.23	現存 1.91	0.44	1.4	黒曜石		未成品
	5054	石鏃	包含層	現存 1.8	現存 1.57	0.38	0.95	黒曜石		未成品
	5058	石鏃	包含層	現存 1.55	1.13	0.51	0.8	黒曜石		未成品
	5059	石鏃	包含層	現存 1.28	現存 0.77	0.63	0.5	黒曜石		未成品
	5062	石鍋	包含層	現存 12.6	7.5	5.4	441	滑石	外・暗銀灰色 内・銀灰色	
	5065	石錐	包含層	3.95	2.46	1.32	7.0	黒曜石		
	6007	石鏃	表土	現存 2.32	現存 1.84	0.52	2.05	黒曜石		未成品
	6008	石鏃	表土	2.96	1.53	0.66	2.15	黒曜石		未成品

tab. 6　第35次調査出土玉類計測表

挿図番号	登録番号	種　類	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	色調	遺構
19－20	0236	臼玉	3.5	6.0	2.0	0.2	滑石	灰色	2号住居跡
26－29	0736	臼玉	3	4.5	1.5	0.15	滑石	黒灰色	7号住居跡
26－27	0738	小玉	2.0	4.7	1.5	0.1	硬玉	明緑色	7号住居跡
36－75	5066	小玉	1.0	5.2	2.0	0.05	滑石	灰緑色	包含層
38－47	6001	臼玉	3.5	7.0	2.0	0.3	滑石	淡灰褐色	表土
38－48	5037	小玉	1.5	5.0	1.5	0.1	ガラス	ライトブルー	包含層
39－16	0126	小玉	2.0	4.0	1.0	0.05	滑石	暗褐色	1号住居跡覆土

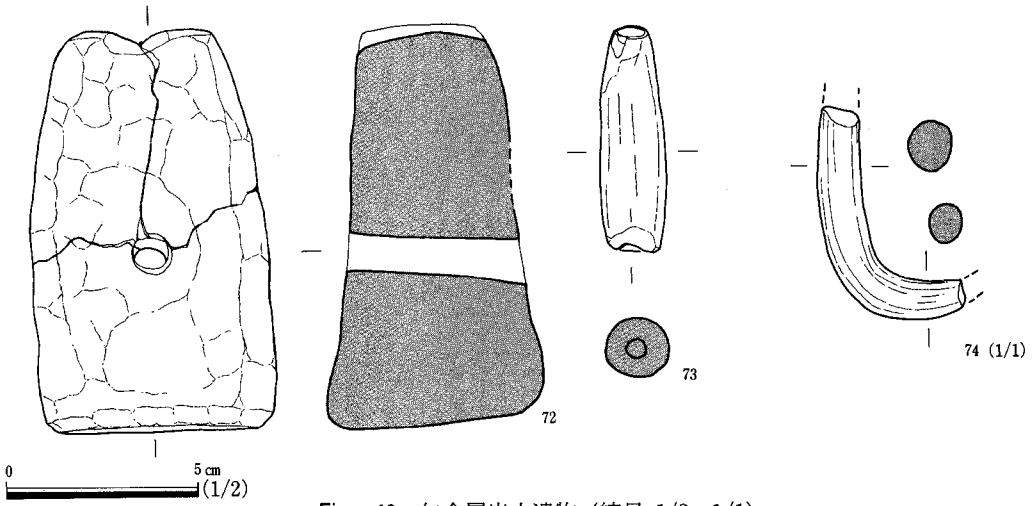


Fig. 40　包含層出土遺物（縮尺 1/2・1/1）

の作りで，34は小型品である。33・35は基部を欠くが，再調整の痕跡がある。34・35はA・B両面の一部に研磨痕があるが，全体に研磨を施しているものは無い。36は石斧の破片である。小型の石斧である。43・45は柱状片刃石斧片である。43は刃部，及びB面を欠くが，基部のB面は再加工している。45は基部・刃部の両端を欠く，断面形は隅丸方形である。材質は43が安山岩である。44は扁平片刃石斧で，刃部を欠く。全体に丁寧な研磨を施しており，現存長5.0cm，幅2.8cm，厚さ0.9cmを測る。粘板岩の材質である。

石剣（37）　頁岩質で，風化のため節理面が認められる。両面の鎬はシャープである。薄手の作りで，非常に鋭利。現存幅は4.1cmを測る。大型の剣である。

敲石（38）　玄武岩を方形状に成形しており，その縁辺を打面として利用している。A・B両面に剝離成形痕を残す。使用部分は少ない。

石庖丁（39・40）　破損が著しい。いずれも外弯刃で，両刃である。39は丁寧な研磨を施している。背部は再加工の整形痕がある。材質は粘板岩である。

穿孔具（42）　上・下端部を欠損しているため確定はできない。断面は円形を呈し，表面摩滅している。下端の破損部には再調整痕がある。砂岩製である。

紡錘車（46）　滑石製。円形を呈するが，半分を欠く。直径5.8cm，孔径6㎜を測る。A面には研磨を施していないので未製品の破損品であろう。暗緑色を呈する。

小玉（47・48）　47は滑石製で，淡灰褐色を呈する。48はガラス製で，ライトブルーを呈する。計測値はtab. 6を参照。

石鏃（49～65・66～68・74）　64・65は有柄磨製石鏃で，65はいわゆる柳葉形石鏃である。断面形は菱形を呈し，A面の鎬はシャープであるが，B面は鎬が2本ある。64は薄手で，両面に

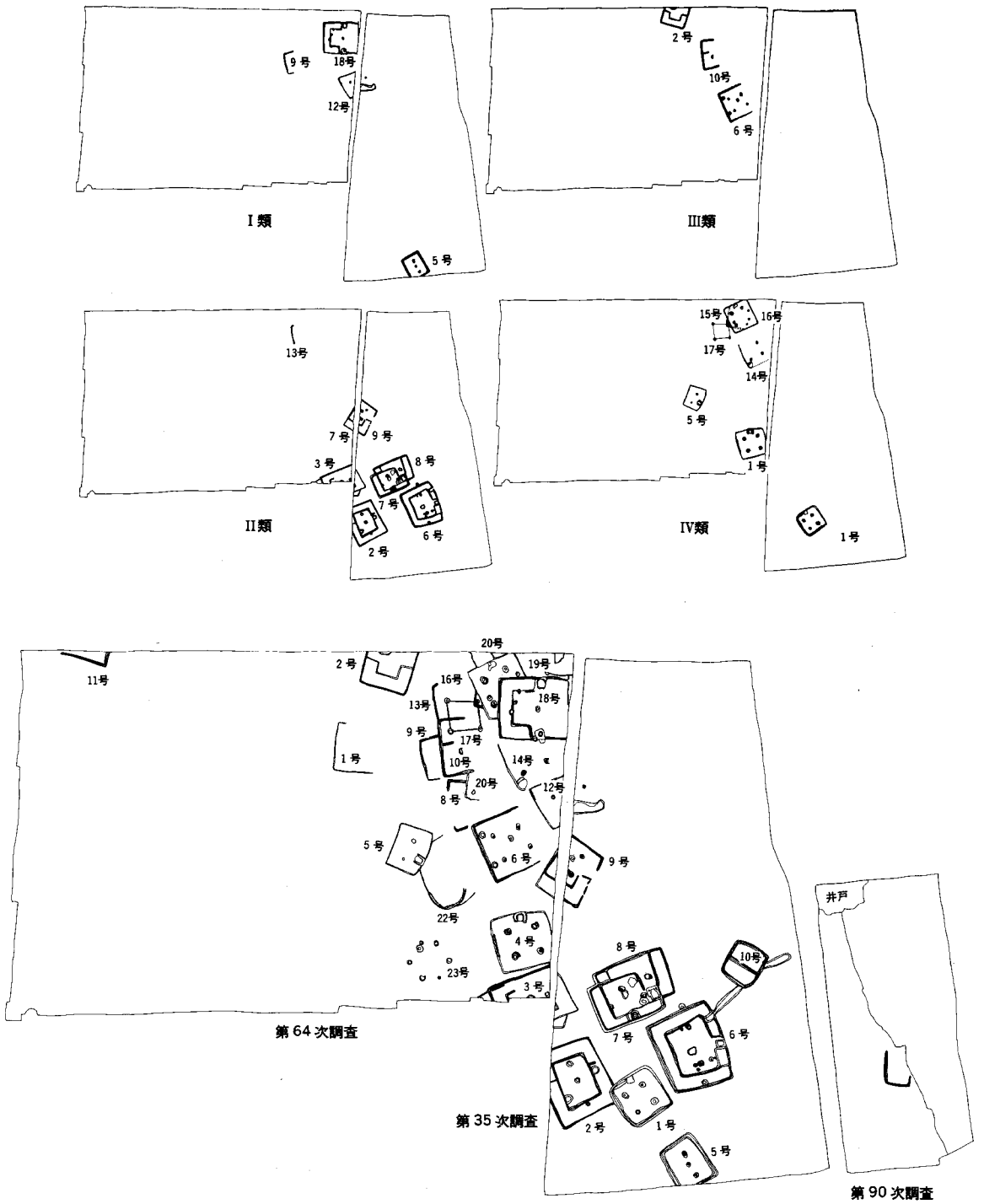


Fig. 41　第35次調査住居跡配置図（縮尺 1/3,000）

鎬をもつ。材質は65が粘板岩，64は頁岩質である。打製石鏃は全て黒曜石製である。第35次調査，及び第64次調査では多量の黒曜石片を出土しており，第64次調査でも石鏃の数は未成品を加えると14点を数える。今回は22点である。この内未製品は50～52・56・58・59・66・68の他10点である。74は加工途中であり，他の器形に成形される可能性をもつ。

石錐（69～73）　いずれも黒曜石で，69は基部を欠く，73はA面の調整が荒い。先端は丸くなっており使用した痕跡がある。他に小さな剝片の両側を簡単に加工した錐(72)がある。

土製品・金属製品

土錘（75・76）　75は分銅型石錘を模倣したもので，全長10.7cm，幅は3.8～6.2cm，厚さ3.5～5.8cmを測る。中央に径1.0～1.1cmの孔を有している。胎土に砂粒を含み，ナデ調整である。褐色を呈する。73は管状土錘で，現存長6.1cm，最大径1.8cm，孔径0.5cmを測る。灰色を呈する。

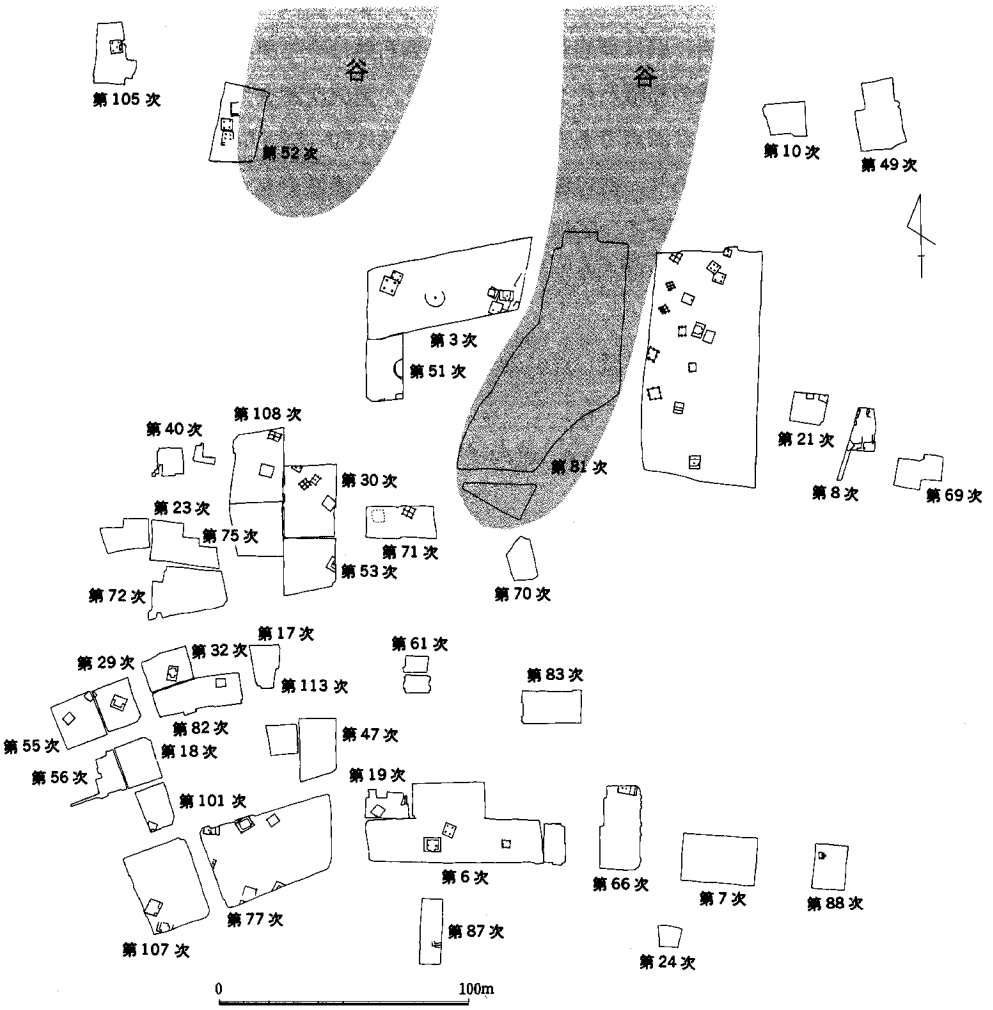
不明青銅品（74）　断面形は楕円形を呈し，L字形に曲がっている。現存長6.8cm，断面径は0.5～0.7cmを測る。この他には板状の青銅片が2点出土している。

4）小　　結

検出した遺構は弥生時代終末～古墳時代の住居跡11軒，弥生時代～中世までの土坑10，中世の井戸1基，古墳時代～中世の溝5条である。遺物は縄文時代晩期から16世紀代の遺物を多く含み，特に黒曜石，鉄滓などの出土量は多い。遺構・遺物は大きく，I期縄文時代，II期弥生時代，III期古墳時代，IV期奈良・平安時代，V期中世に分けることができる。

I期の縄文時代は明らかな遺構は無いが，遺物は晩期の突帯文土器の甕や鉢片が出土している他，黒曜石製の石鏃が非常に多く，未製品を含めると22点に及ぶ。第64次調査でも出土しており，総数は36点である。黒曜石片はコンテナ一杯に達する。石材は5～10cm大の小礫を用いており，いかなる大きさの剝片も有効利用するために，完成した石鏃の大きさや形は一定していない。最小は1.7cm，最大は2.9cmの長さである。こうした状況は第62次調査の有田七田前遺跡でもみられ，夥しい剝片や原石が出土している。七田前遺跡では大陸系の磨製石器・石庖丁や籾痕土器を伴っており，水田経営を実証した。有田台地の東側でも鶴町遺跡・原深町遺跡・田村遺跡など低位の段丘上や沖積地に集落が出現しており，突帯文期の水田経営の存在を裏付けている。有田地区で検出した長径300m，短径200mの環濠は板付式土器と突帯文土器の共伴期に比定できるが，その初現は突帯文期にさかのぼるもので，曲田遺跡の大集落や板付遺跡の環濠集落成立と同一時期である。この時期にはどの遺跡でも石鏃が大量に出土するが，このことが晩期突帯文期の拠点集落の出現とどのような関係をもつのか興味がもたれる。

II期の弥生時代は2号土坑を中心とする。この土坑は最終の埋設時期を中期と考えられるが，下層では前期土器が出土しており，掘削時期は前期にさか上り得る。西側の第16次調査では同じく，断面形がフラスコ形をした前期の貯蔵穴を1基検出しており，舌状台地の中央部に貯蔵



有田地区住居跡配置図（縮尺 1/3,000）

穴群が存在することが想定できる。この時期には他に甕棺片が出土しているが，明確な遺構はない。甕棺墓については，第64次調査の報告の中で詳述したので除くが，総数50～60基単位の小規模な甕棺群で，数個の集落すなわち一共同体単位の墓地と考えられ，宝台遺跡型の集落と墓地の存り方が想定できる。住居跡は第64次調査で円形住居跡を１軒検出したが，当該地では削平が著しく周壁が残っていない。幾つかの Pit サークルを検出したものの断定できなかった。

遺物は前期から後期までの土器及び，磨製石斧・石庖丁など豊富であるが，摩滅を受けたものが多いことから弥生時代以降早い時期に集落跡の破壊・削平を受けたものと思われる。石斧は玄武岩製で，いずれも全面に敲打痕を残こすものや研磨途中のものもある。断面形が扁平形に近いものと太型のものがあるが，太型のものは長さ20cm以上にはなるだろう。敲打具として

玄武岩が用いられている。又，剝片や礫などが出土していることは全ての玄武岩製石斧が今山産とは断定できない。玄武岩の剝片・礫の存在は，石材の持ち込み，及び石器製作が行われたことを示している。この今山産石斧及び，玄武岩製石斧についての生産地の問題は今後，整理してゆく予定である。

III期は古墳時代の集落であるが，この時期は3小期に分類できる。1小期は庄内併行期又は，終末期で，遺物の出土は無いが，住居跡の形状により5号住居跡が比定できる。2小期は布留式併行期の住居跡群で，2号～4号・6～9号住居跡が存在する。2号住居跡出土遺物の内，甕(3・5)，小型丸底壺，高坏などは新しい様相を示している。6号住居跡の遺物には鉢(22)などの古い型式を含むが，ほぼ，布留式古相を示す。甕(22)，鉢(3)などの新しい要素も含んでいる。7号住居跡は鉢(6)，甕(18)などの古式の土器を含むが，布留式土器の古様の様相をもっている。8号住居跡床面出土の鉢(5)，貯蔵穴内の高坏(10)は終末又は，庄内併行期の土器である。全体として新旧が混在しているが，7号住居跡との切り合いによるもので，新しい要素の土器は7号住居跡からの混入であろう。又，逆に7号住居跡の古い要素は床面出土も含めて，8号住居跡からの混入と考えたい。布留式土器併行期は古相と新相の2期が存在することが判明した。4小期は1号住居跡で，須恵器IIIb期に位置づけられる。6世紀の住居跡と考えられる。

以上の住居跡を第64次調査分をも含めて，時期的な変遷を追ってゆくと，Fig. 41の図のように1～4類の段階を考えられる。1類は終末，又は庄内式土器の併行期で，第64次調査の9号・12号・18号，第35次調査5号住居跡が属する。18号住居跡からは終末期の良好な土器が大量に出土している。9号住居跡からは庄内式併行期の甕片が出土しているが，遺物が少なく，住居跡の時期の断定はできない。住居跡構造は長方形プランの両袖にタテ長のベッド又は，コの字形のベッドを設ける。コの字形のベッドを有する18号住居跡が後出する形状である。炉は中央に存在し，主柱は長軸方向に2本もつものが多い。2類は古留式古相に位置づけられる住居跡で，第64次調査の3号・7号，第35次調査の2号・6号～8号住居跡が属する。住居跡は大型・小型の2種類がある。大規模な2号・6号住居跡は平面形が，長方形又は，台形状を呈し，周壁内側にベッドを巡らしている。炉は中央に設け，主柱は長軸方向に2本である。小規模な住居跡の平面形は長方形ではあるが，幅が狭く，ベッドは両袖にL字形又は，L字形とタテ長形のベッドを組合せて用いる。主柱は長軸方向に2本で，炉は中央に設ける。特徴的なことは長辺の壁中央に位置する出入口の梯子穴を中心にしてベッドを巡らすことで，反対側の長辺にはベッドを巡らしていない。3類は古留式土器の新相，すなわち柳田氏のIIb[註1]に相当する時期で，第64次調査の2号住居跡がある。この時期は1軒だけである。住居跡の平面形は長方形で，両袖にコの字形のベッドを設ける。中央には炉を設け，主柱は長軸方向に2本である。この構造は第64次－18号住居跡に通じるもので，コの字形ベッドが，終末期以降用いられた構造である

ことが知られる。L字形ベッドがコの字形ベットより新式であることが判明したが，ベッドの構造は必ずしも時期の比定にはならず，各住人の好みを表わす程度のものであろう。4類は古留式新相に位置するもので，第64次調査の6号・10号住居跡である。6号住居跡出土の土師器は今光遺跡の溝2（V期）の出土遺物に相当しており，10号住居跡は今光遺跡の13・17号住居跡[註2]（VI期）出土遺物に特徴づけられる。この期も更に，2つの小期に分けることが可能である。この時期の住居跡は正方形に近く，4本柱を主柱としているが，竈は明らかではない。炉は住居跡の中央部に位置する。又，第64次－10号住居跡のように，1辺にベッド状遺構を意識した小溝を設ける。同様な例は第57・111次調査の住居跡の構造で明確にできているが，基本的にはベッド状の高まりは存在しない。5世紀代の住居構造であろう。

5類は6世紀代の住居跡で，第64次調査の4号・7号・13号・14号・16号・17号住居跡，第35次調査の1号住居跡が含まれる。第1小期は須恵器IIIaの時期で，第35次-1号住居跡，64次-4号・5号・14号住居跡が相当する。7号住居跡は須恵器が出土していないが，土師器の分類からは，須恵器IIに併行する可能性をもっている。第2小期の須恵器IVの時期には64次－13号・16号・17号住居跡が相当する。この期の住居跡は平面形が正方形を呈しているが，4類の住居跡に比らべると若干小型化の傾向がみられる。主柱は4本で，1辺に竈を設けるが，14号住居跡のように隅角に設ける例もある。7号住居跡は小型で平面形が長方形を呈し，2本柱であるが，前段階の住居構造を踏襲しておらず，特殊な用途に用いられた住居跡と考えられる。

ではこれらの時期の集落の単位を検討してみたい。有田地区の調査では，古墳時代の集落は単位集落が4～5軒で構成され，且つ，各単位集落は80～100mの距離をもって存在することを推測できた。当該調査の集落は長期安定集落ともいえるもので，同一地域での集落継続は著しい。これらの単位集落を検討すれば，各類は3～8軒の単位になる。ただし，住居跡の最も多い3類及び，5類は更に小期に分けられる。又，同じ土器型式での建て替えもあるので，最終的には2～3軒の数字になるのであろう。但し，この舌状台地での住居跡の総数が把握できていない現状では明らかにできないが，少くとも1時期1型式の単位集落を構成する住居跡は5～6軒を超えるものと考えたい。有田地区の散在的単位集落とは違う単位構成をもっているものと推測する。又，住居跡が谷地に偏在することは，水利の便が考えられる。第90次調査では谷地より井戸を検出しており，且つ，水田基盤と考えられる整地層を検出していることは生産と生活の場の関連を示すもので，住居跡偏在の理解につながるものと思われる。

以上，住居跡の構造と変遷について述べた。集落を100%把握した上での分類ではないので，構造や時期決定については課題を残しており，今後とも資料の増加を待って整理してゆきたい。

IV期は奈良・平安時代である。第64次調査では梁行3間，桁行4間の総柱遺物を2棟と，これらの建物を約半町四方で囲む3本柱の2重の柵を検出した。時期は不詳であるがこの時期に相当すると考えられる。遺物には須恵器坏，蓋，高坏の他[註3]，越州窯系の瓶などが出土している

が，全体的に少ない。

V期の中世前半には中国製の白磁椀や青磁椀が出土するが，遺物量は少なく，遺構も明らかではない。第64次調査の2号溝は方形区画の溝で，中国陶磁器を多量に出土しており，時期は12～13世紀である。この矩形を呈する溝は幅1.3～1.5mの逆梯形を呈しており，屋敷地の区画と考えられる。中世後半期には「中園名」「下中園屋敷」が在ったことが，飯盛神社文書の記事の中にみられる。16世紀中頃に大内氏の早良郡代であった大村興景は知行地として，この「下中園屋敷」を与えられており[註4]，Fig. 4の字図ではこの舌状台地上に「中園」の小字を残しており，この地域を屋敷地又は，名の中心地と考えることができる。今回検出した溝3条は道路の側溝的機能が充分に考えられる。この溝は西側の延長線状では第64次調査の16世紀の濠に接する。その他，16世紀の溝には第86次調査の2～4号溝がある。第86次調査の4号溝に接続する第64次-3号溝はV字溝であるが，この溝も方形区画の溝である。時期は第86次調査にて李朝の皿，瓦質土器，石臼などが出土しており，概ね16世紀に位置づけられる。当該調査の溝や第64次調査の濠はともに方位を同一にしており，屋敷構造の手懸りとなり得る。以上のことから，この地域が，古くは12～13世紀以降，屋敷地として開発されていたことを実証することとなった。屋敷地の規模や範囲及び変遷については今後の課題としたい。

註1　柳田康雄「三～四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982
註2　東急不動産株式会社「今光遺跡，地余遺跡」1980
註3　福岡市教育委員会「有田・小田部第4集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集　1983
註4　福岡市教育委員会「飯盛神社関係史料集」1981
註5　佐伯弘次「大内氏の筑前国守護代」『九州史学69』所収 1980

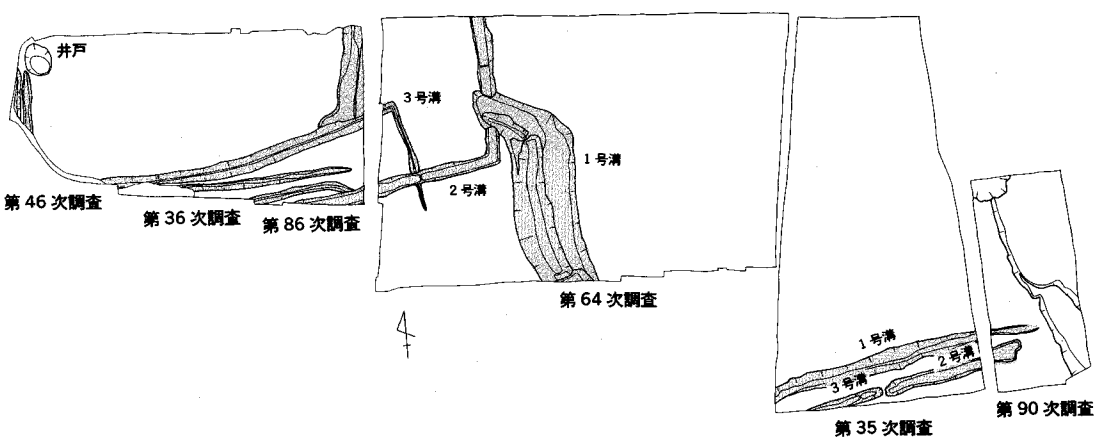


Fig. 42　中世溝配置図（縮尺 1/800）

2．第70次調査　（調査番号　8211）

1）調査地区の地形と概要

当該地は，福岡市早良区有田1丁目17－1・2番地に所在し，調査対象面積は191m²である。

有田地区の台地は北西，北東方向から浅い谷が深く切り込み，台地の平坦地は約200m四方に限られる。この周辺の発掘調査は進んでおり，弥生時代から中世までの遺構を検出している。当該地はこの平坦地の北東側にあり，北方向からの浅い谷の谷頭に接している。この浅い谷には昭和40年代から市営住宅があったが，改築に伴い，昭和58年度に第81次調査を実施している。当該地の発掘調査は専用住宅建設に伴うもので，期間は昭和57年6月17日～6月30日まで実施した。又，当該地の周囲は住宅に囲まれているため，残土の処理方法が大きな問題であったが，原因者（施主）との協議の結果，全ての排土を調査区外に持ち出し，投棄することになった。現標高は10.5mを測り，道路面と同高を示すが，調査区の北側は削平を受けている。

当該地の周辺では第61次・第71次・第81次・第83次調査を実施しており，古墳時代から中世末の遺構を検出しているが，特に中世の濠は集中して検出できる。第83次調査は当該地の南に約50mに，第61次調査は約20m西に位置し，いずれも当該調査検出の溝と接続する中世濠を検出している。現地表は50～70cmの盛土で，その下の耕作土，床土の下層には暗灰色粘質土の整地層があり，深さ10～20mを測る。遺構面はローム層，又は八女粘土の茶褐色粘質土である。

遺構は中世の溝2条，道路状遺構1条，土坑3を検出した。遺物には中国青磁・白磁，李朝青磁・白磁，土師器皿・坏，土師質土器，瓦質土器，瓦，石鍋などを検出した。

2）　遺構各説

溝（SD）

3条の溝を検出した。大きな溝2条は，第83次調査の礫敷の道を伴う溝に接続するもので，第83次調査1号溝は当該調査の1号溝に，2号溝は同じく当調査の2号溝に相当するが，溝の規模・形状に大きな変化をもたらしている。当該調査区では礫敷の道は存在しない。

1号溝（Fig. 43・45, PL. 29・31）

第83次調査1号溝に相当する。溝の上面は著しい削平を受けており，溝南側の復元幅は約4.5mに対して，溝北側では幅1.75mを測る。溝の深さは75～46cmを測り，断面形は逆梯形又は皿状を呈する。この溝の北側が極端に幅が狭くなっており，陸橋部を意識しているのかもしれない。覆土は暗茶褐色粘質土を主体として，下層には水の堆水，又は流水を示す黒灰色粘質土，暗灰色粘質土が堆積している。溝の形状は第83次調査の1号溝に似るが，当該調査では第83次

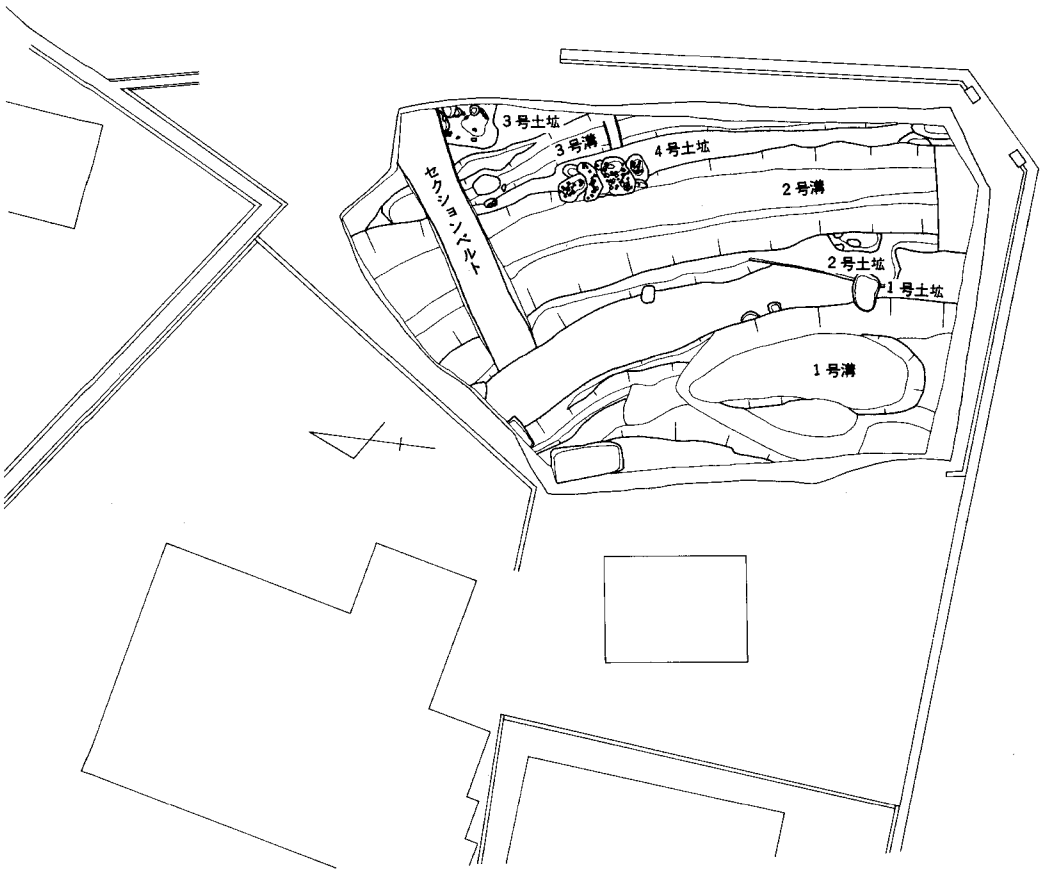


Fig. 43　第70次調査遺構配置図（縮尺 1/200）

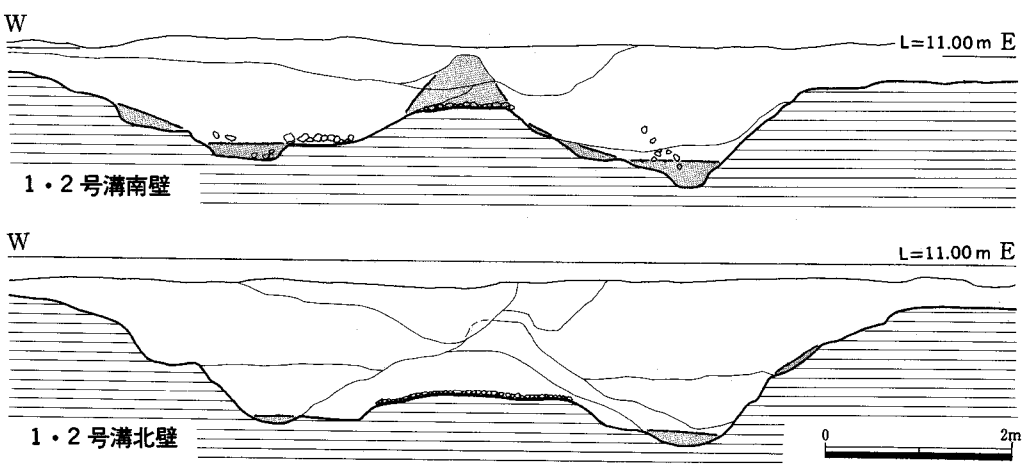
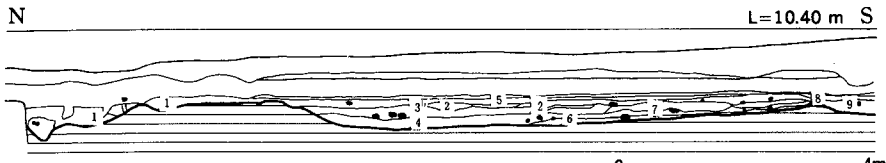


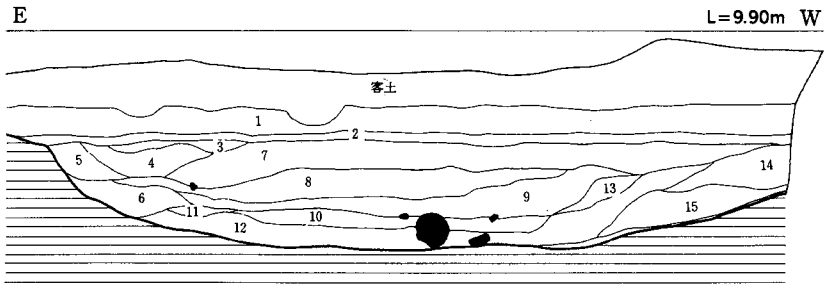
Fig. 44　第83次調査1号・2号溝断面図（縮尺 1/40）



調査区東側壁面土層名称

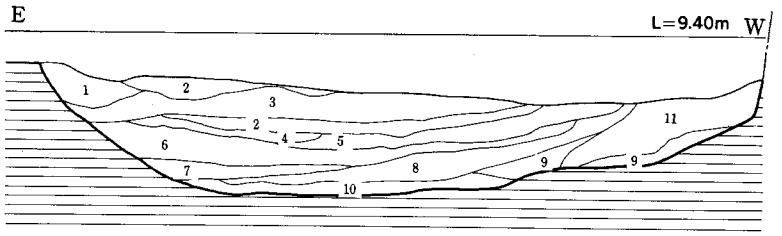
①淡黒色粘質土（鉄分・マンガン混入）
②暗灰褐色粘質土（八女粘土大ブロック多く混入）
③暗灰褐色粘質土（鉄分・マンガン多く混入）
④暗灰青色粘質土（八女粘土粒子・鉄分・マンガン混入）
⑤黒灰色粘質土
⑥暗灰橙色粘質土（八女粘土ブロック多く混入・マンガン混入）
⑦暗灰色粘質土と八女粘土の混合土
⑧暗茶褐色粘質土（八女粘土のブロック混入）
⑨暗灰青色粘質土（暗茶褐色粘質土と八女粘土ブロック多く混入）

0 4m (1/120)



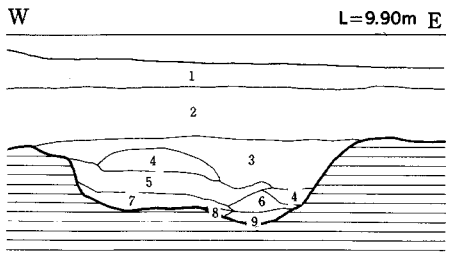
1号溝南側土層名称

1．暗灰色粘質土
2．暗茶褐色粘質土
3．暗茶褐色粘質土（2より灰色が強い）
4．暗灰色粘質土（黄褐色粘質土・八女粘土が多く混入）
5．暗茶褐色粘質土（灰色土と黄褐色土のブロック混入）
6．茶褐色粘質土（灰色土多く混入）
7．暗灰色粘質土（マンガン・鉄分混入）
8．7に暗茶褐色土多量に混入（マンガン・鉄分混入）
9．暗灰色粘質土（7に比べマンガン・鉄分の混入少ない）
10．7に炭化物と八女粘土の粒子・砂粒が混入
11．暗黄灰色粘質土
12．暗茶褐色粘質土（灰色土ブロック・八女粘土ブロック混入）
13．暗灰橙色粘質土（八女粘土多く混入）
14．暗茶色粘質土（八女粘土多く混入・マンガン・鉄分・灰混入）
15．暗橙色粘質土（八女粘土多く混入）



1号溝中央部土層名称

1．暗茶褐色粘質土
2．黒灰色粘質土
3．暗茶褐色粘質土（マンガン・鉄分混入・八女粘土少し混入）
4．暗灰色粘質土（マンガン混入）
5．2に濁茶褐色粘土が混ざる
6．茶灰色粘質土（マンガン・鉄分混入）
7．暗灰色粘質土（茶灰色土混入）
8．暗灰色粘質土（マンガン・鉄分混入）
9．暗灰色粘質土（マンガン・鉄分混入・砂質多い）
10．暗灰色粘質土
11．暗茶褐色粘質土（八女粘土のブロック多く混入）



1号溝北側土層名称

1．表土
2．暗灰褐色粘質土（マンガン・鉄分混入）包含層
3．暗茶褐色粘質土（マンガン・鉄分多く混入）
4．3に比べ鉄分粒子多い，灰色が強い
5．暗灰色粘質土（八女粘土大ブロック混入・鉄分・マンガン混入）
6．暗灰青色粘質土（八女粘土小ブロック多く混入）
7．暗灰色粘質土（八女粘土混入）
8．暗桃色八女粘土（灰色土混入）
9．暗灰青色粘質土（灰黒色土・八女粘土粒子多く混入）

0 2m (1/40)

Fig. 45　調査区東側土層図（縮尺1/120），及び1号溝土層図（縮尺1/40）

調査の１号溝で検出した溝の西側法面に存在する幅60～130cmのテラスが認められない。出土遺物には土師皿・杯，青磁椀，土師質土器鍋，瓦質土器鉢，瓦片，板碑片，砥石，石鍋片，鉄滓などがある。

２号溝（Fig. 43・46, PL. 30・31）

第83次調査の２号溝に接続する。溝幅は2.75～5.3m，深さ1.5～1.4mを測る。断面Ｖ字形の溝である。この溝は北側で，西方向にわずかにカーブする。北側の第81次調査では溝を検出していないため，西側の第71次調査区の方向へ曲がるものと思われる。溝の東側肩部には部分的に小礫の貼り付けが認められる。２号溝と１号溝の間は幅1.2～２ｍを保っている。上面には礫が部分的に存在するが，敷いた状態ではない。覆土は暗茶褐色粘質土を主体としており，下層には堆水を示す暗青灰色粘質土層が存在する。遺物には越州窯系青磁椀，龍泉窯系青磁，李朝白磁・青磁，染付椀，瓦質土器鉢，土師質土器鉢，石臼，砥石，鉄滓などが出土している。

３号溝（Fig. 46, PL. 31）

２号溝の東側に沿った小溝である。幅は75cm以上，深さ約22cmを測り，断面形は皿状を呈している。北側では２号溝に接続する。覆土は暗茶褐色粘質土，及び暗灰色粘質土である。溝内には礫が多く混入している。この溝は２号溝北側の土層図(Fig. 46)でみるかぎり，２号溝肩部に位置しており，２号溝に先行又は，同一溝を形成するものと考えられる。第83次調査の１号溝の東側肩部には段を有しており，この段が北側では形骸化して，溝として残るものと思われる。遺物には瓦質土器の鉢，鉄滓がある。

土　坑（SK）

いずれも１号・２号溝と同一の時期で，１号・２号溝に伴う遺構であろう。

１号土坑（Fig. 47, PL. 32）

１号溝の東側肩部に位置する。不整楕円形を呈し，長さ105cm，幅65cm，深さ35cmを測る。横断面形は逆梯形を呈する。覆土は黄橙色の八女粘土ブロックを含んだ暗茶褐色粘質土である。

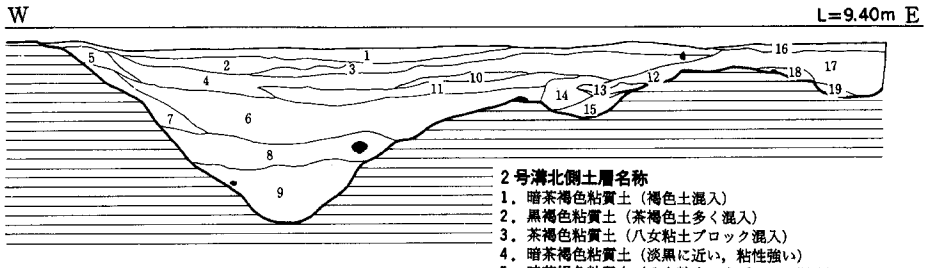
遺物には明代の染付椀片がある。

２号土坑（Fig. 47）

２号溝の西側肩部に位置する。現状では溝に半折された状況を示しているが，元来の状態と考える。不整隅丸長方形を呈す。現存長144cm，最大幅50cm，深さ14cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土に黄橙色の八女粘土ブロックを含む。

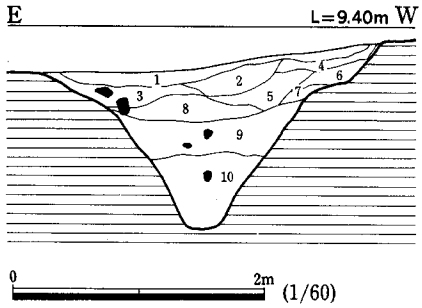
３号土坑（Fig. 47, PL. 32）

北東境界地にあるため形状は不明だが，不整隅丸方形を呈している。底面は起伏が多く一定していない。断面形は皿状である。覆土は暗茶褐色粘質土を主体としており，内部には礫が多く混入している。南北の最大長は160cmを測る。



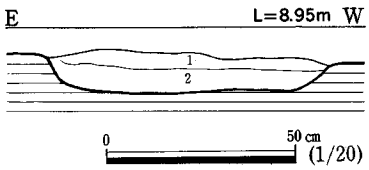
2号溝北側土層名称

1．暗茶褐色粘質土（褐色土混入）
2．黒褐色粘質土（茶褐色土多く混入）
3．茶褐色粘質土（八女粘土ブロック混入）
4．暗茶褐色粘質土（淡黒に近い，粘性強い）
5．暗茶褐色粘質土（八女粘土の小ブロック混入）
6．暗茶褐色粘質土（八女粘土の粒子多く混入，暗灰色土混入）
7．暗黄褐色粘質土（褐色土，黄褐色土混入）
8．暗灰青色粘質土（八女粘土粒子混入）
9．暗青灰色粘質土
10．茶灰褐色粘質土（八女粘土混入）
11．4に近似し，灰茶褐色土混入
12．10に八女粘土（黄白色）多く混入
13．暗黄褐色粘質土と八女粘土の混合土
14．暗茶褐色粘質土（灰色土少し混入）
15．暗灰色粘質土（鉄分混入）
16．暗灰褐色土（耕作土）
17．暗茶灰色粘質土（八女粘土粒子・小ブロック混入，マンガン，鉄分多い）
18．暗灰青色粘質土（八女粘土粒子多い，マンガン，鉄分多く混入）
19．17に黄白色の八女粘土混入



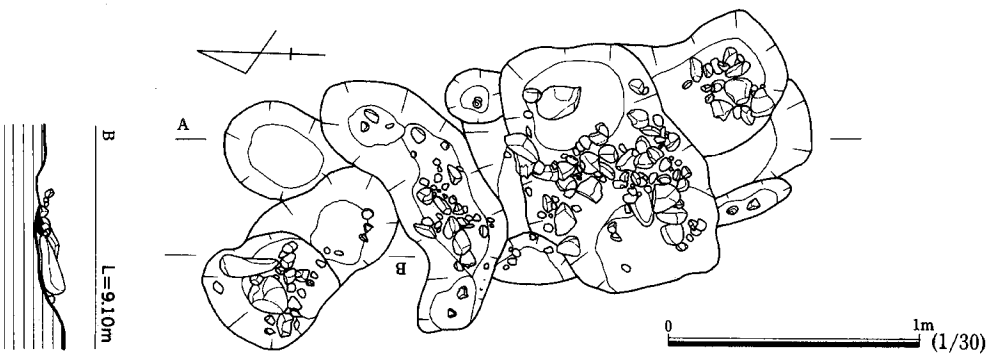
2号溝南側土層名称

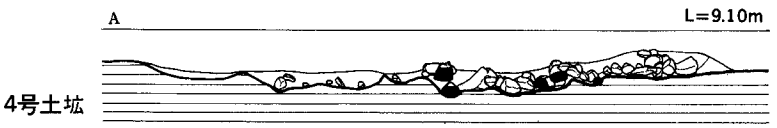
1．暗茶褐色粘質土（黒色に近い）
2．1に比べ明るい（八女粘土の粒子多く混入）
3．1と同じ（八女粘土の粒子多く混入）
4．1と同じ（八女粘土の小ブロック多く混入）
5．2と同じ（暗茶褐色土混入）
6．茶褐色粘質土（八女粘土の粒子多く混入）
7．2と同じ
8．暗茶褐色粘質土と暗灰色粘質土混入
9．暗灰青色粘土
10．暗青灰色粘土（黒色に近い）



3号溝土層名称

1．暗茶褐色粘質土
2．暗灰色粘質土





4号土坑

Fig. 46　2号・3号溝土層図（縮尺 1/60，1/20），4号土坑（縮尺 1/30）

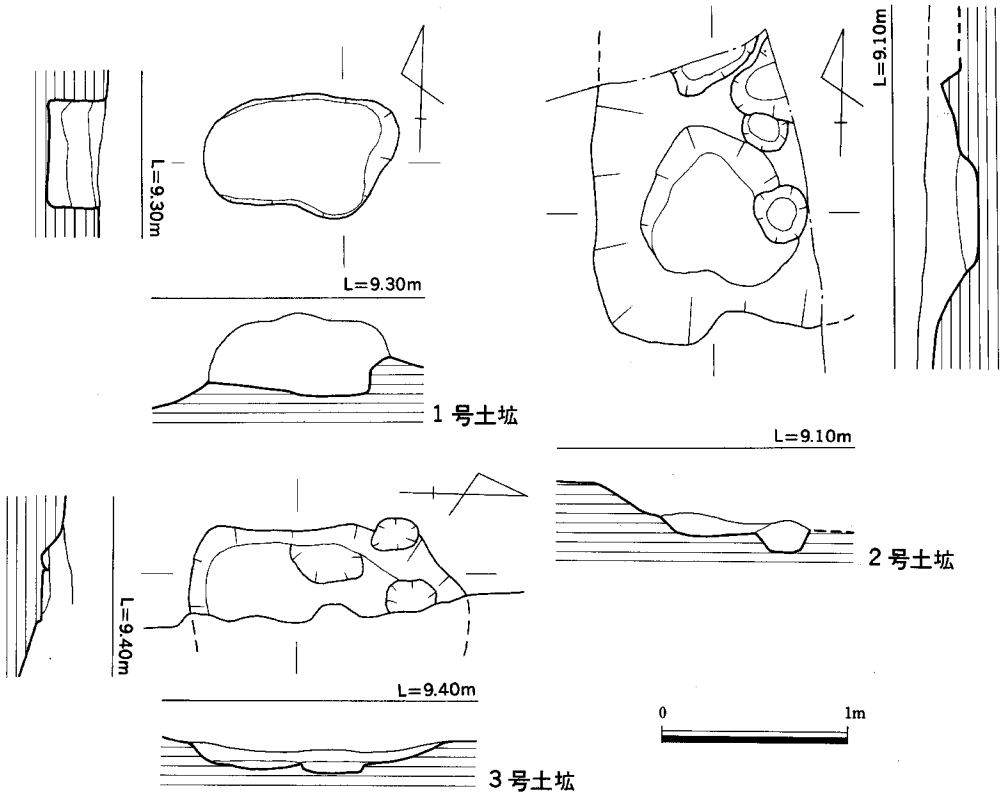


Fig. 47　1号～3号土坑（縮尺 1/40）

4号土坑 (Fig. 46, PL. 31)

2号溝の東側肩部に位置する。土坑と言うには非常に不定形である。小ピットの集合体状を示しており，土坑の全長は2.5m，最大幅1.04m，深さ9cmを測る。底面は小ピットを形成する如く，非常に凸凹が著しく，土坑内には5～20cm大の小礫が集中する。2号溝の東側肩部には部分的に小礫群が貼り付いた状態を示しており，この土坑の礫も元来は，2号溝の肩部に貼り付けられていたものと考えられる。

遺物は，礫内から中国製の青磁椀・白磁椀片が出土した。

3）　遺物各説

1号溝出土遺物 (Fig. 48～50, PL. 33・34)

土師器

皿（1～18）　体部はいずれも大きく外へ開いているが，若干丸味をもつものと（1・4・7・

17）と，外弯するものに分類できる。いずれも糸切り底で，7・10には板目が残る。体部はヨコナデ調整であるが，3・4の体部外面にはベンガラ塗布の痕跡がある。口径7.4～8.6cm，底径5.3～6.5cm，器高1.2～2cmを測る。胎土は精良で，金雲母を含むものが多く，1・3・6・7・9・11～18が相当する。

坏（19～26）　体部は大きく外反しており，26のみ体部が丸味をもつ。口径は11.7～12.2cm，底径7.3～8.1cm，器高2.4～3.2cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整である。胎土は精良で，いずれも金雲母を含む。

青磁・白磁

青磁・椀（27～29）　いずれも龍泉窯系で，27は復元口径15.6cmを測る。口縁端部を強く外反させる。28は高台径7.1cmを測る。体部外面に幅広い蓮弁文を施す。くすんだオリーブ色釉を厚目に施す。29は小椀で，高台径7cmを測る。青緑色釉を厚目に，高台内側まで施す。

皿（30）　同安窯系である。内底に猫描き文やヘラ彫りの草文を施す。灰緑色の釉を外面まで厚目に施す。底径は4.8cmを測る。

盤（33）　高台径15.9cmを測る。濃緑灰色釉を高台内側まで厚目に施す。

白磁・椀（31）　玉縁口縁の白磁椀である。灰色釉は気泡が多く溶け切っていない。

土師質土器・瓦質土器

土師質土器・鍋（32～36・39・40）　32は口縁部を折り返して小さな玉縁を作る器形で，体部は球体に近い。34～36・39・40は同一器形である。34の器高は深い。底部は丸底を呈し，口縁部は外反し，頸部に稜を有している。35～36・39・40の口縁部は内弯する。内面はヨコハケ調整，外面はナデ調整である。いずれも胎土に砂粒を多く含み，黄褐色，又は褐色を呈する。外面には煤が付着している。

土師質土器・鉢（43）　擂鉢である。口縁部を肥厚させ，端部は断面形を方形に形成する。内面はヨコハケ調整後，おろし目を施す。焼成は良好。

瓦質土器

鉢（37・41・42）　擂鉢である。37は土師質の鍋の形状に近似するが，口縁部が短く，大きく開かない。内外面にタテハケ調整を施し，内面に4本単位のおろし目を施す。体部下位は使用のため摩滅している。41は口縁部を肥厚させ，内面はヨコハケ，外面はタテハケ調整後，ナデ調整である。42は体部内面にヨコハケ調整を施した後，目の深いおろし目を施す。いずれも胎土に砂粒を含み，37には角閃石片をも含む。37は淡灰色，41は黄灰色，42は灰黒色を呈する。

須恵質土器

鉢（38）　東播系の捏鉢で，口線部は玉縁状を呈している。復元口径27.2cmを測る。胎土に砂粒を含み，青灰色を呈する。焼成はやや甘い。

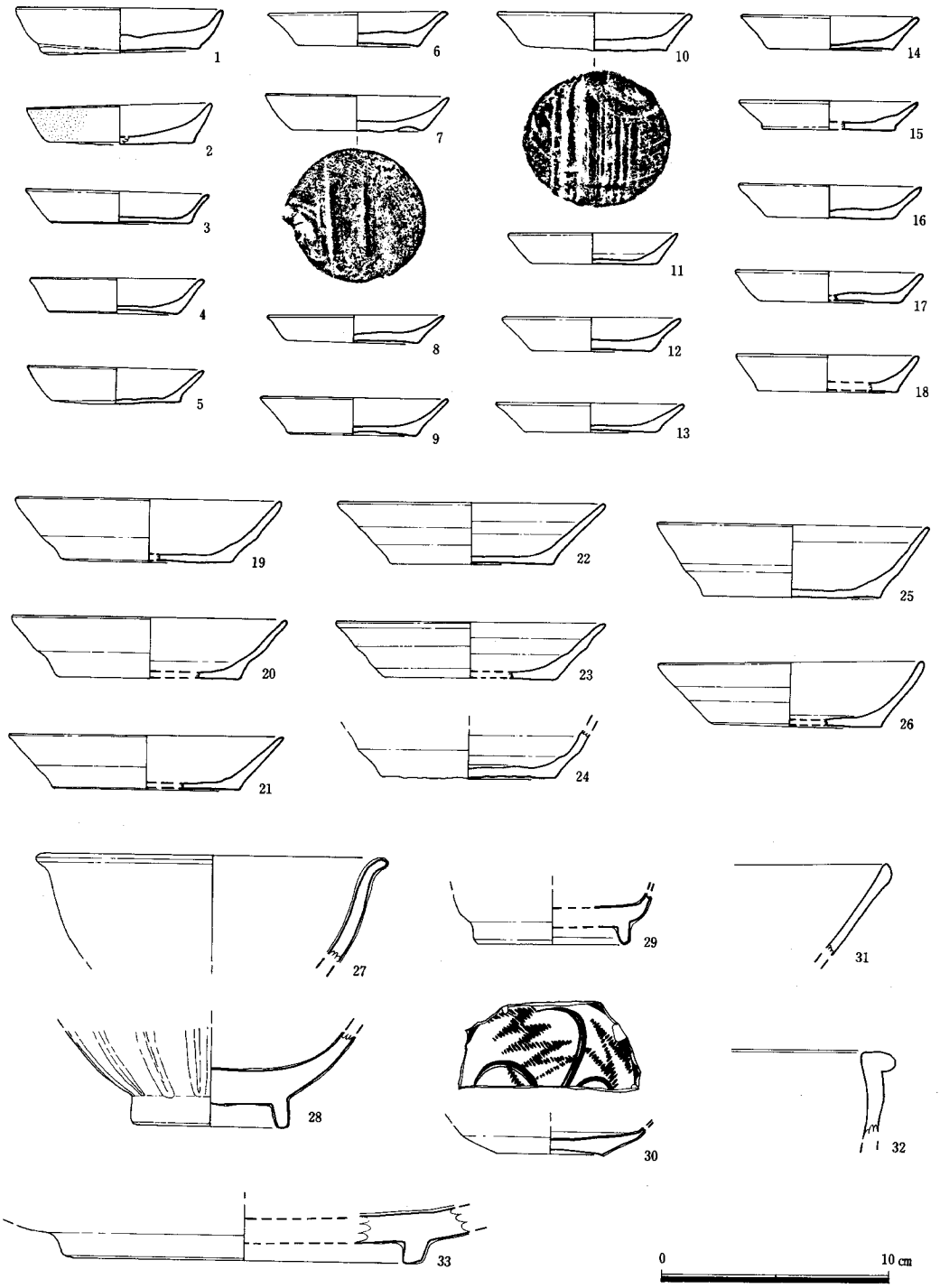


Fig. 48　1号溝出土遺物（縮尺 1/3）

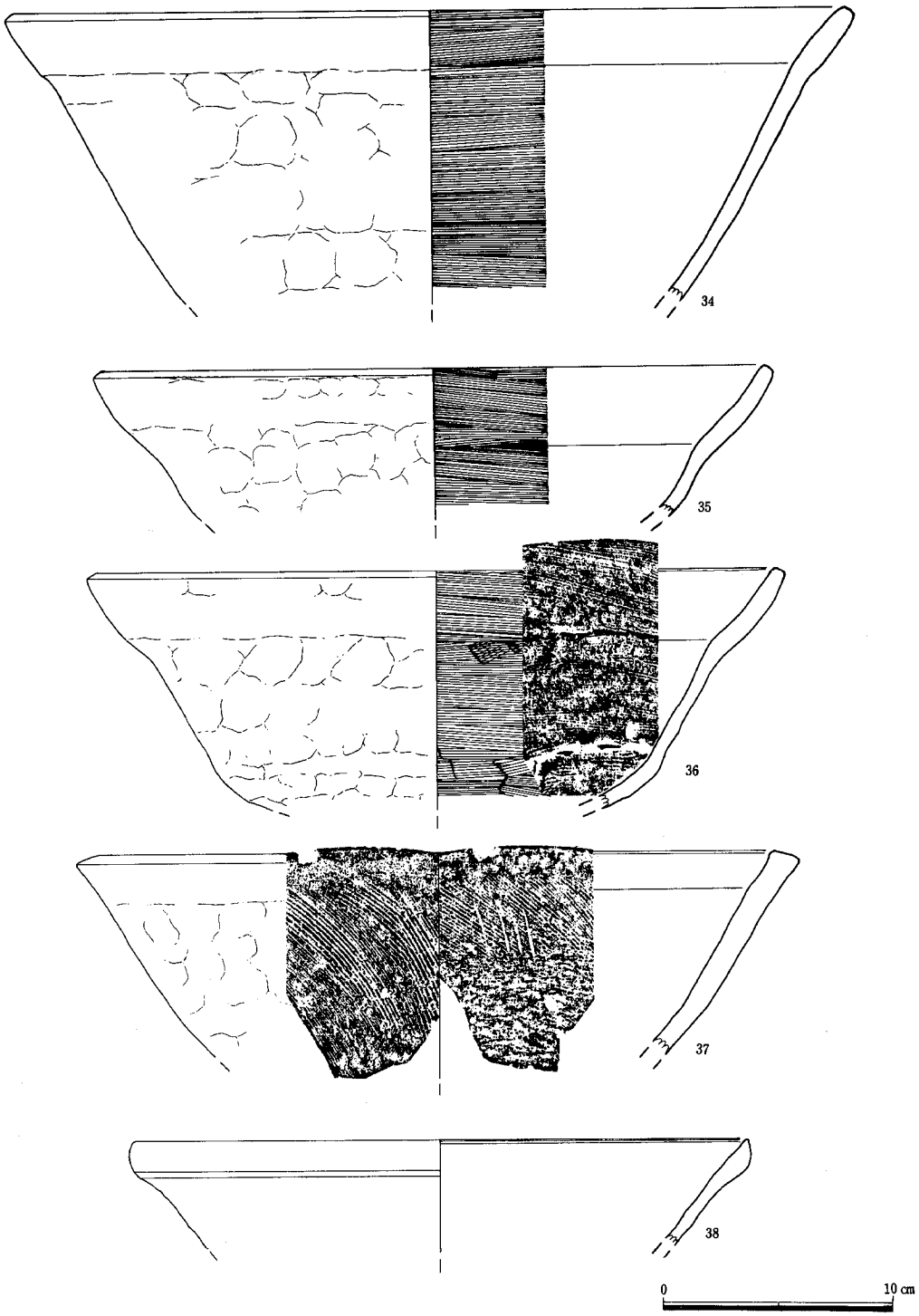


Fig. 49　1号溝出土遺物（縮尺 1/3）

瓦・土製品・石製品

軒丸瓦（47）　瓦片は全部で22点出土した。47は三巴文瓦で，内区に左回りの巴文を，外区に珠文を配している。内区・外区の境はなく，巴文の尾が長く，次の尾に接続するため圏線状を呈する。同型は第19次調査に例がある。

その他に格子目叩きを施した瓦片(46)がある。内面に布目が残り，暗青灰色を呈する。須恵質である。

土錘（48）　現存長7.8cm，最大径4cm，孔径1.3cmを測る。胎土に砂粒を含む。

板碑・砥石（49・51）　49は板碑片で，砂岩製である。碑面に梵字がある。51は砂岩製の砥石で，A・B面，及び側面の5面を利用している。

石鍋（50）　外面にタテ長のケズリを施し，内面にはノミ痕を残す。良質の石材で茶灰色を呈している。器壁は2.5cmを測る。

以上の他，中国陶器の鉢・甕，鞴の羽口，甕棺片（45），須恵器甕片（44）がある。44は外面格子目叩きを施し，部分的にカキ目を施す。又，1号溝の下層からは獣骨が出土している。

2号溝出土遺物 (Fig. 51・52, PL. 35)

青磁・白磁

青磁・椀（1～9）　1は越州窯系の青磁で，大宰府分類のII－2類に属する。底径7.8cmを測る。内面の釉はオリーブ色を呈する。2～7は龍泉窯系で，2はI－1類の無文の椀である。5は口縁部外面に雷文，体部下位に退化した蓮弁文を施す。6は内底に魚文を印刻し，7は同じく内底に草花文を印刻する。3・4は体部をきれいに打ち欠いており，泥面子状に成形したものと考えられる。釉は2がオリーブ色，3・5～7が緑灰色を呈し，3・6・7は厚目に施している。4は緑色釉を厚目に施す。9は高麗青磁と考えられ，高台径6cmを測る。全体にうぐいす色の釉を薄目に施し，焼成は良好。胎土は灰褐色を呈し，畳付に目痕が残る。8は李朝青磁と思われ，暗いうぐいす色の釉を全体に施す。外底に砂が付着するが，畳付の目痕は研磨によって消している。焼成は良好で，胎土は暗青灰色を呈し，目が粗い。

香炉（10）　高台径6cmを測る。底部と体部の境は明瞭で，直角に曲がっている。高台外面まで青灰色釉を施し，外底，及び内面は露胎である。内面には釉垂れがみられる。胎土は灰青色で，目が粗い。李朝と考えられる。

白磁・椀（11・13～15）　11は李朝で，高台径5.6cmを測る。白灰色釉を全体に施す。内底に5～6カ所の目痕と畳付に目痕がある。目痕は胎土目である。13・14は中国製で，13は大宰府分類のIV類，14は大宰府分類のVIII類である。15は体部外面に菊花状の蓮弁を陽刻しており，半透明の灰白色釉を施す。胎土は乳白色を呈している。

皿（12）　大宰府分類のIX類の皿で，口縁部は口禿であろう。体部外面まで灰白釉を施し，底

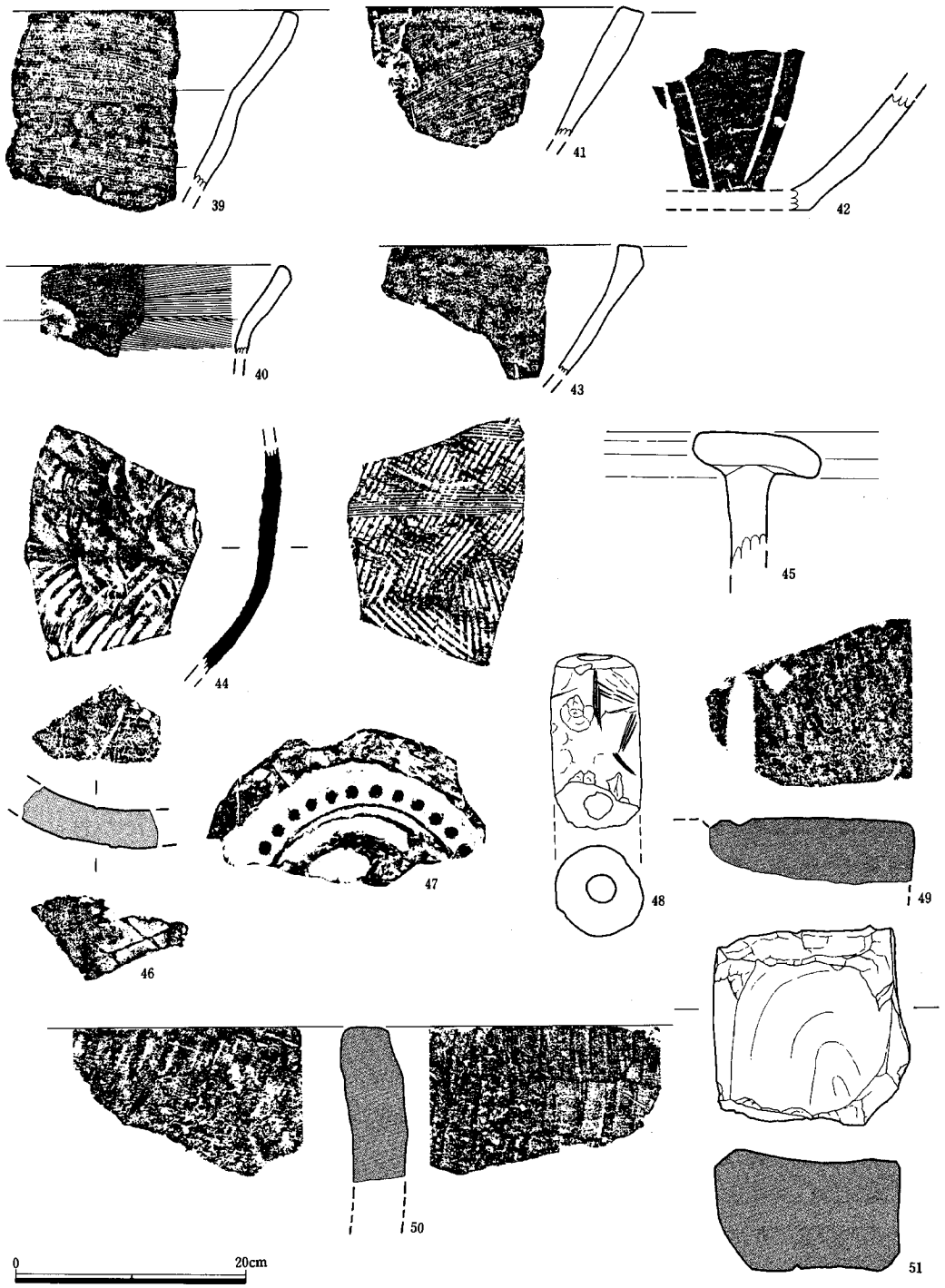


Fig. 50　1号溝出土遺物（縮尺 1/3）

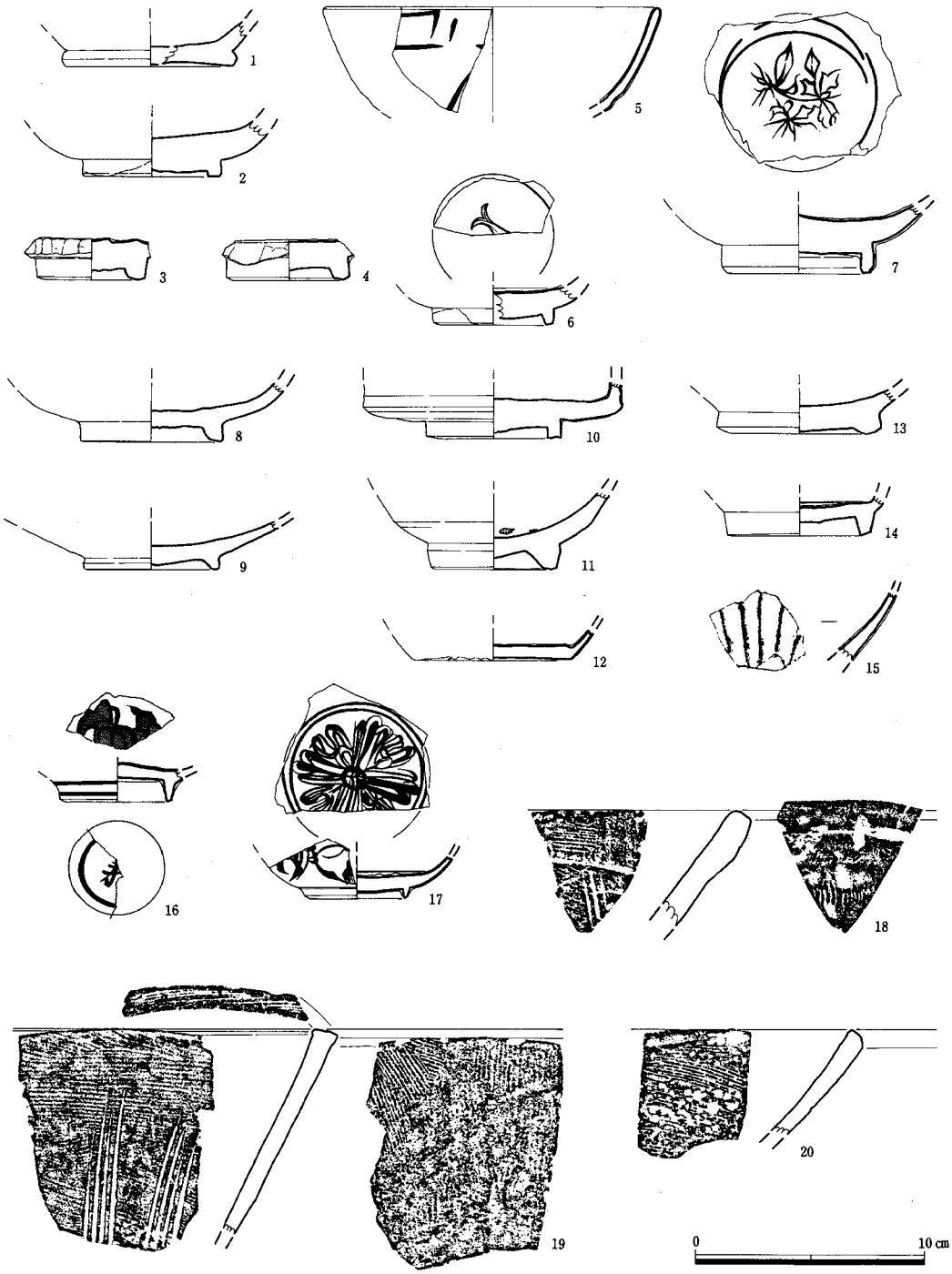


Fig. 51　2号溝出土遺物（縮尺 1/3）

部はふき取っている。

染　付

椀（16・17）　明代の染付で，16は饅頭心の底部である。内底に草花文，外底に「寿」の文字を配す。高台外面に2条の圏線がある。17は内底に十字花文を施し，外面には唐草文を描く。釉色はいずれ灰青色で，全面に施している。畳付のみ釉をカキ取っている。17の内外底には砂が付着し，釉には氷裂がみられる。

瓦質土器・土師質土器・須恵質土器

瓦質・鉢（18・20）　いずれも擂鉢である。18は口縁部を肥厚させ，内面はヨコハケ，外面はタテハケ後ナデ調整を施す。おろし目は3本以上である。20は口縁端部を丸く仕上げ，内面はヨコハケ，外面はナデ調整である。いずれも灰白色を呈し，焼成は甘い。

土師質・鉢（19）　擂鉢である。口縁端部を平坦に仕上げる。内面はヨコ・ナナメ方向のハケ調整を，外面タテハケを施す。内面のおろし目は4本を単位とする。胎土に砂粒・金雲母を含む。胎土は土師皿・坏と同一の粘土を使用していると思われる。焼成はやや軟く，茶褐色を呈する。

須恵質・鉢　東播系の鉢が1点出土している。

石製品

石臼（22）　上臼の破片を砥石として利用している。臼の厚さは8.2cm，復元径は23cmを測る。分画，及び主溝，副溝の本数は不明。石材は砂岩と考えられるが，気泡が多いので，花崗岩の可能性もある。

砥石（23）　2点出土したが，図化したのは1点である。最大長16.2cm，最大幅13.4cm，厚さ7.7cmを測る。砥面には5面を利用。細かい粒子の砂岩である。

その他には瓦片（平瓦・丸瓦・塼）10点，鼎片1点，備前焼鉢（21）・甕片，鉄釘1点，獣骨1点が出土した。

3号溝出土遺物 (Fig. 52, PL.35)

瓦質土器

鉢（23）　擂鉢片である。口縁端部を両端につまみ出して，T字形の平坦面を形成している。口縁部内外面はヨコナデ，内面はヨコハケ調整後，3本単位のおろし目を施す。外面はタテハケ調整で，内外面は黒色を呈する。胎土に砂粒を多く含み，灰褐色を呈する。

その他に，瓦片（平瓦・丸瓦）7点，鉄滓2点が出土している。

1号土坑出土遺物 (Fig. 52, PL.35)

図化できるのは1点のみである。他には丸瓦片1点，瓦質土器の擂鉢片1点，須恵質土器の

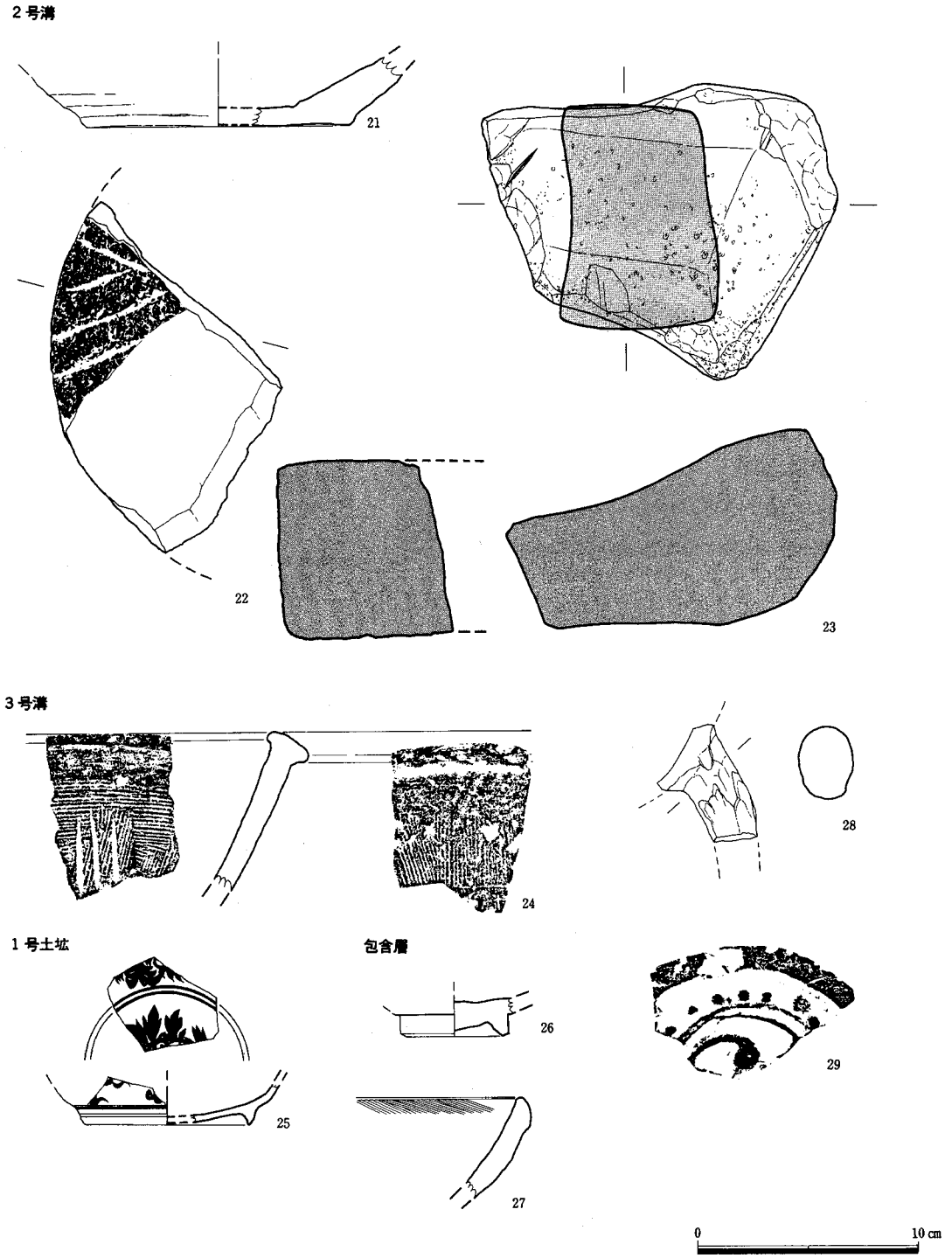


Fig. 52　出土遺物（縮尺 1/3）

瓶片1点，鉄滓2点が出土している。

染付・椀（24）　高台径7.6cmを測る。内底には草花文を，内面には唐草文を施し，外面には如意頭文を呉須にて施す。釉は灰青色を呈し，胎土は乳白色である。

包含層出土遺物（Fig. 52, PL. 35）

青磁・瓦質土器・瓦類

青磁・椀（25）　同安窯系青磁で，高台径5cmを測る。

瓦質土器・鉢（26）　玉縁状の口縁部で，内面に細かいハケ調整を施している。胎土に砂粒を含み，黒色を呈する。

鼎（27）　脚部片で，断面径は2.5×3.3cmを測る。胎土は精良で，内外面は灰黒色を呈する。

瓦・軒丸瓦（28）　1号溝出土の軒丸瓦と同型である。三巴文で，巴文は左回りである。尾は次の尾に接続するため外区・内区の境の圏線はない。青灰色を呈する。

以上の他，鉄滓1点が出土している。

4）小　　結

当該地の遺構は第83次調査と直接的に関係するもので，1号・2号溝ともに第83次調査の溝に接続する。第83次調査で検出した道路状の遺構は今回検出できなかったが，これは削平の影響を充分に考えることができる。又，第83次調査でも礫敷の機能については道路の他，土塁基底部を想定したが，当該地においては溝がコーナー部分を形成することとも関連して道路又は土塁が途切れる可能性もある。道路及び，土塁の問題は今後の調査に委ねることとして，これらの溝が従来の有田地区で検出している濠と有機的に結びつき，郭を形成することはいうまでもない。時期については遺物の項で詳述してきたが，李朝青磁・白磁，中国染付椀，土師質土器鍋の形態により16世紀代を考えることは妥当であろう。

3．第71次調査　（調査番号　8212）

1）調査地区の地形と概要

調査対象地は福岡市早良区有田１丁目22―４・７番地にある。対象面積は383m²である。

有田地区の台地最高所は標高14m前後を測り，平坦部の北側は北東方向と北西方向から谷が入り込むため，幅約150mの狭長な地形をなしている。当該地はこの狭長な平坦地の東側縁辺に

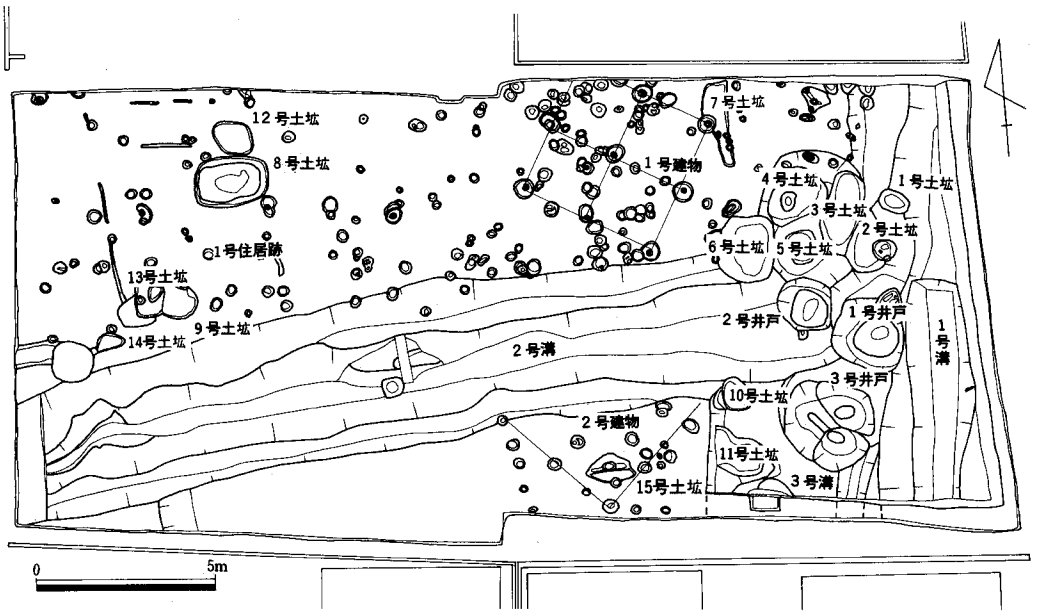
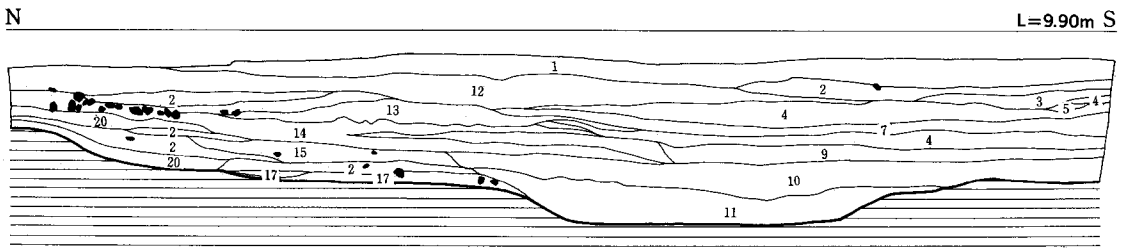


Fig. 53　第71次調査遺構配置図（縮尺 1/200）



1号溝東側土層名称

1．黒褐色粘質土（白色粘土を含む）
2．淡茶褐色粘質土（砂粒を多く含む）
3．茶褐色粘質土（茶・白・褐色土のブロックが混入）
4．淡茶褐色粘質土（砂粒が少ない）
5．茶褐色粘質土
7．4より砂粒をほとんど含まない
9．4より茶褐色土が多い
10．暗青灰色粘質土（11より明るい）
11．暗青灰色粘質土
12．淡茶褐色粘質土
13．茶褐色粘質土（砂粒を含む）
14．淡茶褐色粘質土（茶褐色土を含む）
15．14より茶褐色土の粒子が少ない
17．淡橙色砂質土
20．茶褐色粘質土

0　2m

Fig. 54　調査区東側土層図（縮尺 1/80）

位置し，東側は浅い谷に接している。現標高は12m前後を測る。当該地周辺では西側に第53次・第30次調査，東側に第70次・第81次調査地が接している。第30次・第53次調査では古墳時代～中世迄の住居跡，掘立柱建物，火葬墓，中世濠などを検出した。第70次調査では中世の溝などを検出した。第70次調査の溝は第81次調査で検出していないため，西に方向を曲がるものと思われ，当該地の溝と接続すると考えられる。当該地の地目は畑地であったが，専用住宅建設の計画が具体化したため国庫補助を得て発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和57年8月30日から10月4日迄実施した。排土処理の関係から調査区を東・西の2区に分けて行った。遺構は表土直下のローム層上面に検出できる。表土の耕作土は約20cmの深さであった。当該地は昭和41～43年の区画整理によって上面は削平を受けている。検出した遺構は古墳時代住居跡1軒，掘立柱建物1棟，中世の溝2条，平安時代末～中世の井戸5基，古墳時代～中世の土坑16基を検出した。

2）遺構各説

住居跡（SC）

1号住居跡 (Fig. 55, PL. 37)

著しい削平のため周壁は全く遺存していない。但し，周溝を確認しており，片袖にベットを

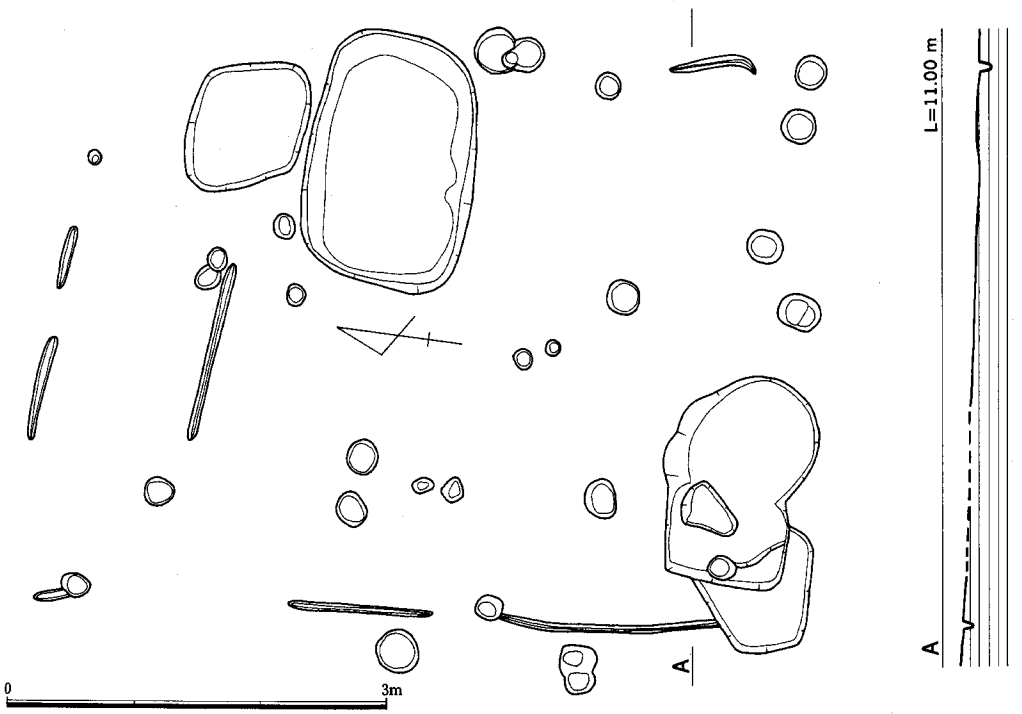


Fig. 55　1号住居跡（縮尺 1/60）

有した形状であることが判明した。住居跡の全長は約5.7m，幅4.6m，ベッド幅1.4mを測る。周溝幅は3cmを測り，狭い溝である。炉及び，主柱は共に不明である。遺物は全くない。

土　坑（SK）

調査区東側では井戸の他，不定形の土坑を多く検出した。又，調査中，ピットとして取り扱った内，P68・P80・P85はここでは土坑として報告する。P68は12号，P80は13号，P85は14号土坑である。

1号～7号・10号・11号土坑は調査区の東側に存在する。これらの土坑は1号溝と切り合っており，溝に先行する。

1号土坑（Fig. 56, PL. 38）

平面形は楕円形を，横断面形は舟底状を呈している。覆土は茶褐色粘質土に八女粘土のブロックを含む。遺物は全く出土していない。現存長90cm，最大幅60cm，深さ45cmを測る。

2号土坑（Fig. 56, PL. 38）

3号土坑と切り合う。不整形の土坑で，現存長1.8m，最大幅1.8m，深さ13cmを測る。覆土は茶褐色粘質土で，八女粘土を含む。土坑の北側には小ピットが切り込む。遺物の出土は無い。

3号土坑（Fig. 56, PL. 38）

ふたつの土坑の切り合った形状を呈し，南側をA号，北側をB号とする。先後関係はB号が後出する。A・B号共に平面形は不整楕円形を，断面形はU字形を呈し，A号の長さ1.53m，幅1.16m，深さ23cmを測る。B号は現存長1.0m，幅1.0m，深さ50cmを測る。覆土は茶褐色粘質土に八女粘土を含む。遺物の出土は無い。

4号土坑（Fig. 56, PL. 38）

3号・4号・5号土坑共に最大径約4.0mの大土坑内底に作られた小土坑である。4号土坑の平面形は不整楕円形を，断面形はU字形を呈している。長さ1.8m，最大幅1.48m，深さ93cmを測る。底面は平坦で，中央寄りに最大径50cmを測る不整形ピットがある。覆土は暗茶褐色粘質土に八女粘土を含んでいる。遺物の出土は無い。

5号土坑（Fig. 56, PL. 38）

4号土坑同様に径4.0mの大土坑の内底に位置する。平面形は不整楕円形を，断面形はU字形を呈し，長さ1.02m，最大幅90cm，深さ26cmを測る。覆土は4号土坑と同じである。遺物の出土は無い。

6号土坑（Fig. 56, PL. 38）

2号溝と切り合う。2号溝に先行する。平面形は不整隅丸長方形を呈し，断面形は逆梯形状である。当初は井戸の機能を考えたが，底部が砂質層に達していない。長さ1.96m，最大幅1.73m，深さ72cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。遺物の出土は無い。

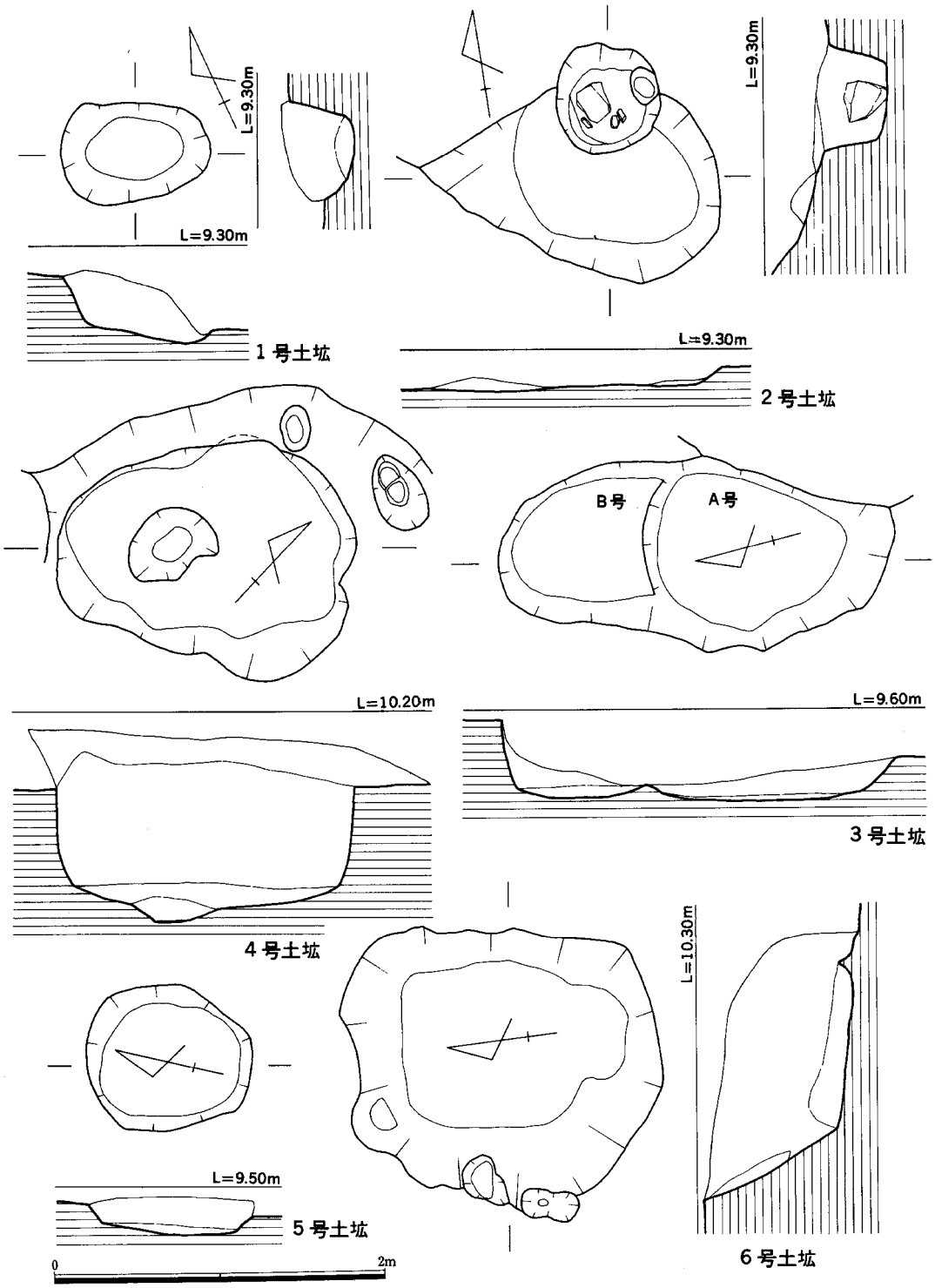


Fig. 56　1 号～ 6 号土坑（縮尺 1/40）

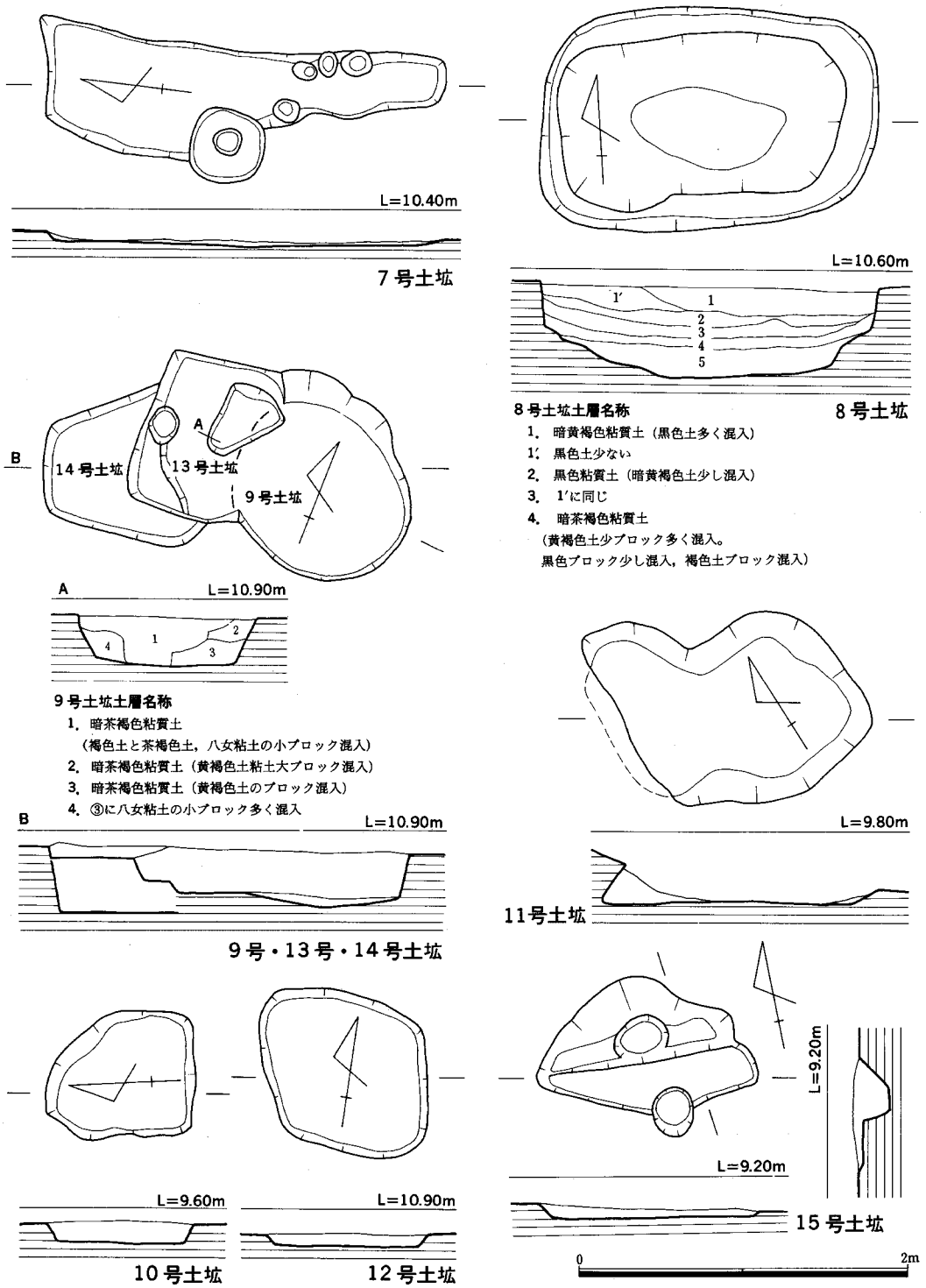


Fig. 57　7号～15号土坑（縮尺 1/40）

1号～6号土坑は平面形が不整形を呈しており，無遺物であるため人工的か否か検討したが，八女粘土のブロックを含む覆土をもつものや，掘り方のしっかりしたものがあることから粘土の採掘跡とも考えられる。

7号土坑（Fig. 57）

平面形は不整長方形を呈し，長さ2.45m，最大幅73cm，深さ12cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。土器は全く細片にすぎない。住居跡の貼り床部分とも考えられるが，確かではない。

8号土坑（Fig. 57, PL. 39）

1号住居跡と重複する。平面形は隅丸長方形を呈し，断面形は二段掘りで，一段目の掘り方は逆梯形，二段目は舟底状を呈している。覆土は土層図に示したとおり，黒色粘質土を主体としている。遺物は土器細片のみである。長さは上端が2.05m，幅1.88m，二段目の長さは1.75m，幅1.10mを測り，最大の深さ55cmである。二段掘りの構造からみて，墓跡と考えるのが妥当であろう。

9号土坑（Fig. 57, PL. 40）

13号・14号土坑と切り合う。13号土坑に後出する。平面形は楕円形を呈しており，断面形は逆梯形を呈する。中軸線状で切った断面図では，中央に柱痕状の掘り込みが存在しており，この土坑を柱穴と考えるのが妥当である。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とする。

遺物は糸切り底の土師器坏が3点出土している。

10号土坑（Fig. 57）

調査区の東南側で，2号溝の肩部に位置する。不整長方形を呈し，長さ88cm，幅76cm，深さ12cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していないが，この土坑を覆っていた黒褐色粘質土からは平安時代の遺物が多量に出土している。

11号土坑（Fig. 57）

10号土坑と同じく，調査区東南側の黒色粘質土の包含層下部より検出した。不整形の土坑で，最大長185cm，最大幅116cm，深さ32cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

12号土坑（Fig. 57）

P68と称していた。平面形は不整方形を呈し，最大長1.0m，最大幅93cm，深さ10cmを測る。覆土は黒色粘質土である。遺物は土器細片にすぎない。

13号土坑（Fig. 57）

9号土坑に切られる。P80と称していた。平面形は隅丸長方形を，断面形は逆梯形状を呈するが，底面は一定していない。覆土は黒褐色粘質土である。長さ1.0m，幅75cm，深さ25cmを測る。

14号土坑（Fig. 57）

13号土坑に切られる。平面形は不整隅丸長方形を呈し，現存長98cm，最大幅100cmを測る。覆

tab. 7　第71次調査土坑一覧表　（単位：cm）

番号	形態		規模（計測値）			方位	出土遺物	時期	切り合い関係	備考
	平面形	断面形	長	幅	深					
1	楕円形	舟底状	90	60	45	N66°W	鉄滓			
2	不整形	レンズ状	180	180	13	N80°W			3号土坑と切り合う	柱穴状の Pit がある
3 A	不整楕円形	舟底状	153	116	23	N18°E			A・Bふたつの土坑と切り合う	
3 B	不整楕円形	舟底状	100	100	50	N 9°E				
4	不整楕円形	舟底状	180	148	93	N46°30′E				
5	不整楕円形	舟底状	102	90	26	N12°30′W				
6	隅丸長方形	逆梯形	196	173	72	N 8°E			2号土坑と切り合う	
7	不整長方形	レンズ状	245	73	12	N 8°W	土器細片			
8	隅丸長方形	1段目 逆梯形 2段目 舟底状	205 175	188 110	55	N95°W			1号住居跡と重複する	
9	楕円形	逆梯形	98～	108	29	N 4°E	土師器杯	14世紀代	13・14号土坑と切り合う	
10	不整長方形	逆梯形	88	76	12	N 3°E				土坑を覆っていた黒褐色粘質土から平安時代の遺物出土
11	不整形	袋状	185	116	32	N57°W				
12	不整形	逆梯形	100	93	10	W 8°S	土器細片			旧番号は Pit68
13	隅丸長方形	逆梯形	100	75	25	N 4°W			9号土坑に切られる	旧番号は Pit80
14	不整隅丸長方形	逆梯形	98	100	45	N68°E			13号土坑に切られる	旧番号は Pit85
15	不整形	1段目 レンズ状 2段目 逆梯形	135 122	85 28	10 20	N78°30′W				

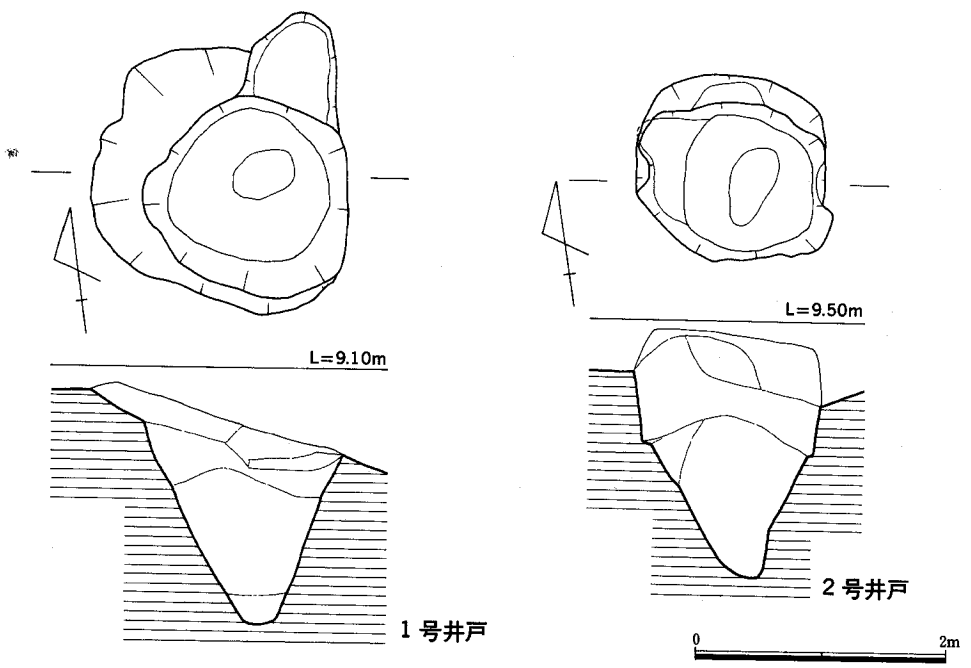


Fig. 58　1号・2号井戸（縮尺 1/60）

土は暗黄褐色粘質土である。削平が著しい。P85と呼称した。

15号土坑（Fig. 57）

平面形は不整形で，二段掘りになっている。一段目の断面形はレンズ状，二段目の平面形は

3号井戸土層名称

1．茶褐色粘質土
2．黄色土・黒褐色土・茶褐色土ブロックの混合土
3．暗茶褐色粘質土
4．茶褐色粘質土（暗茶褐色土の粒子，黄色土のブロック・砂粒を含む）
5．茶褐色粘質土（多く黄褐色土のブロック，暗茶褐色のブロックを含む）
6．茶褐色粘質土（茶褐色土が2より多い）
7．黄色土・黒褐色土・茶褐色土のブロックの混合土（茶褐色・黒褐色土が2より多い）
8．褐色粘質土
12．茶褐色粘質土（黄色土の大きなブロックを含む）
13．茶褐色粘質土（12よりブロックの大きさが小さい）
14．茶褐色粘質土（黄色土のブロックを多量に含む）
15．黒褐色粘質土（黄褐色土のブロックを含む）
16．茶褐色粘質土（砂粒を多く含む）
17．茶褐色粘質土（砂粒を含まない）
18．暗茶褐色粘質土（褐色土の大きなブロックが混入）
20．暗青灰色粘質土（細かい砂粒を含む）
21．暗青灰色粘質土(20よりわずかに黒い。砂粒を含まない)
22．暗青灰色粘質土（わずかに茶褐色がかかる。砂粒を含まない）
24．暗青灰色粘質土（黒色土・白色土のブロックを多量に含み，砂粒が多い）
26．暗青灰色粘質土（わずかにピンクがかった層）
28．暗青灰色粘質土
30．暗青灰色粘質土（八女粘土のブロックが混入する層）
31．暗青灰色粘質土（植物遺体を多量に含む。黒色が強い）
32．暗青灰色粘質土（植物遺体を多く含む。ヒョウタン出土）
33．暗青灰色砂質土（地山の八女粘土を多量に含む）

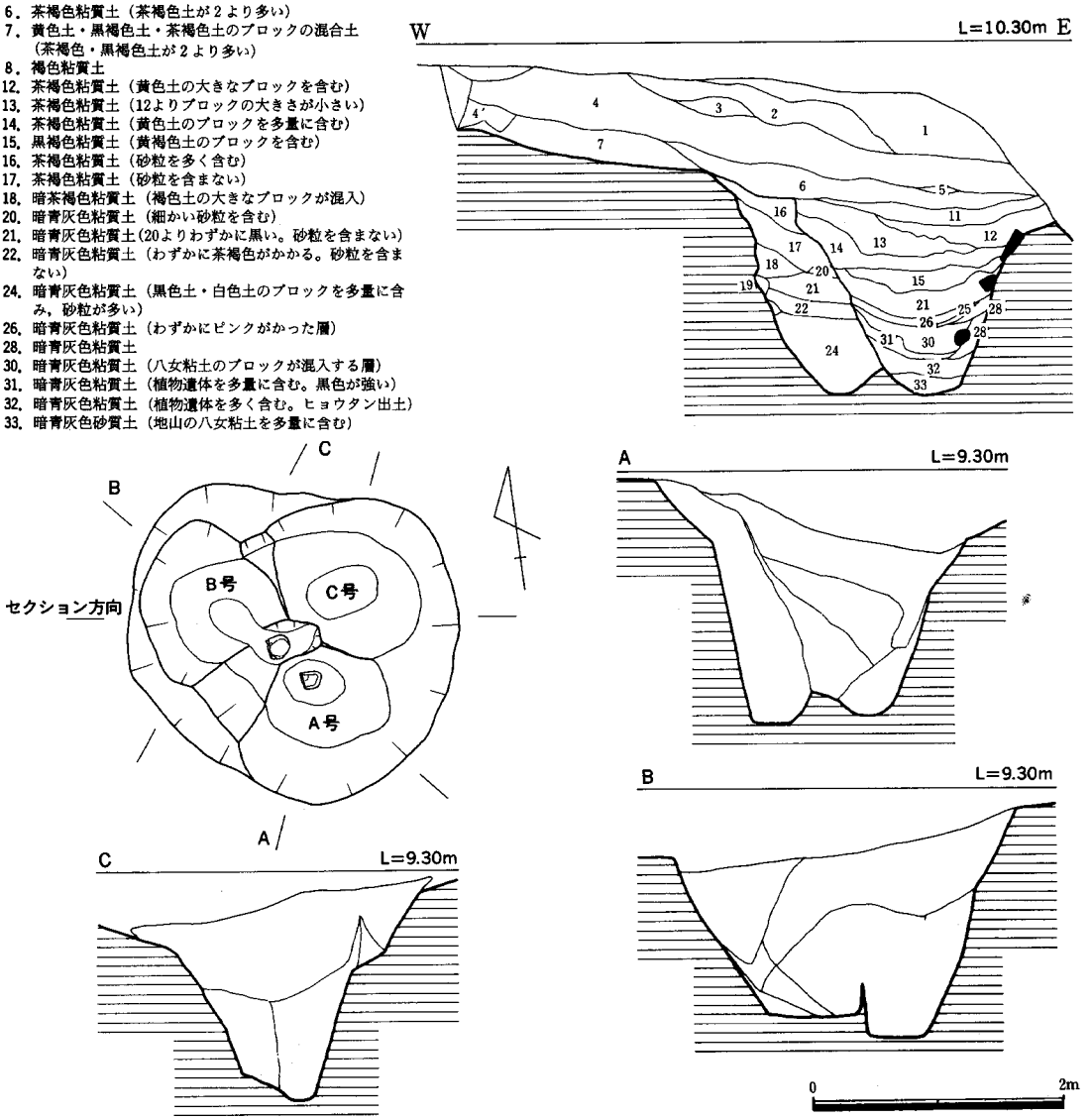


Fig. 59　3号a・b・c井戸（縮尺 1/60）

隅丸長方形で，断面形は逆梯形を呈する。一段目の長さ135cm，最大幅85cm，深さ10cm，二段目は長さ122cm，幅28cm，深さ20cmを測る。覆土は黒色粘質土である。

井　戸（SE）

井戸はいずれも素掘りの井戸で，1号・2号溝に切られる。特に1号・2号井戸は2号溝の底面より検出した。

1号井戸 (Fig. 58, PL. 40)

1号溝と2号溝の接点部分に位置する。最大径2.05m，深さ1.9mを測る。喫水面の部分で削平を受けているため，規模を特定できない。平面形は不整円形を呈しており，一部に突出部分がみられるが，これは喫水線にあたるため水に抉られた部分であろう。この突出部分に礫や粘土があったが，井戸壁の修復に用いたものと思われる。井戸の断面形は逆円錘形を呈している。下部は暗灰色砂質層に達しており，湧水がある。覆土は黒褐色粘質土で，下層は暗青灰色粘質土である。遺物は土師器坏が出土。1点は墨書土器である。

2号井戸 (Fig. 58, PL. 41)

2号溝の東側底部より検出した。やはり，井戸の喫水面で削平を受けているため平面形は不整隅丸方形を呈し，一部に突出した部分が存在する。側壁の凸凹部分には粘土などを充塡している。断面形は上位が円筒形，下位が逆円錘形を呈している。最大径1.5m，深さ1.96mを測る。覆土は上部が黒色粘質土，下部が暗青灰色粘質土である。井戸底は地山の砂質層に達しているため湧水がある。

遺物は玉縁口縁白磁椀や土師器坏・椀，木製品，鉄滓等が出土している。

3号井戸 (Fig. 59, PL. 41)

井戸は2号溝により上部を削平されている。遺存状態は悪い。平面形は不整楕円形を呈している。最大径は2.7mを測る。井戸の上層には土層図のように暗茶褐色土層が覆っている。その下層は黒褐色粘質土が主体となり，井戸下部は暗青灰色粘土である。暗茶褐色土層は2号溝の覆土と考えられる。この井戸は当初，単独井戸として調査を進めていた。井戸下位及び井戸底において3つの井戸が切り合うことが判明した。3つの井戸の先後関係は，B号→C号で，A号との先後関係は不明である。したがって出土遺物には混同がある。C号井戸遺物についてのみ分離できた。B・C号は断面形が逆円錘形状を呈しているが，A号は逆截頭円錘形を呈している。井戸底はいずれも地山の暗灰色砂質土層に達しており，湧水は著しい。

遺物は多量に出土した。土師器坏・椀・甕，須恵器坏，瓦片，横櫛などがある。3－C号出土遺物は土師器坏・椀，瓦片がある。

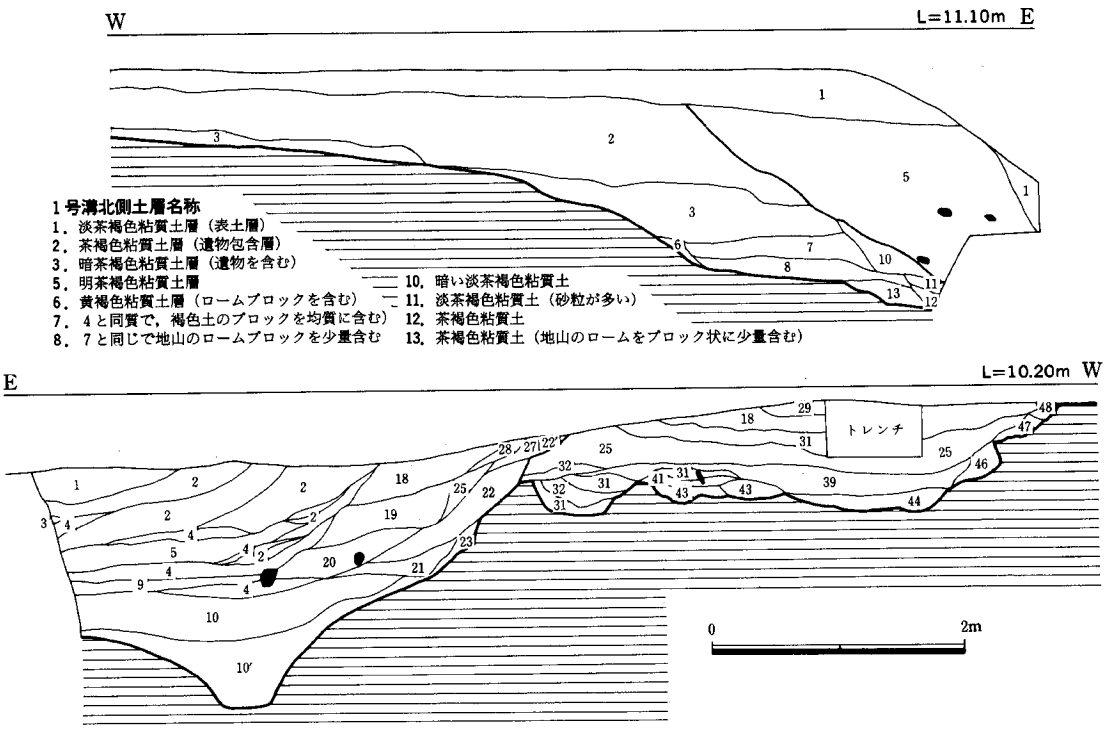
溝（SD）

3条の溝を検出したが，3号溝は規模が小さく，一部を検出するにとどまった。1号・2号溝は濠としての機能をもっている。

1号溝 (Fig. 60, PL. 42)

調査区の南北方向に延びる溝であるが，境界地に位置するため，溝幅及び溝構造は不明である。溝の南側では二段掘りになっており，一段目はレンズ状，二段目は箱薬研堀である。ただし，溝底は南から約6.6mの部分で，直角に立ち上がる。溝の北側は一段目の掘り方のみの浅い溝を形成する。溝の現存幅は南側で4.3m，二段目の幅は2.15m，最大の深さは2.16mを測る。北側の溝現存幅は3.95m，深さ1.12mを測る。一段目の覆土は暗茶褐色粘質土を主体とするが，二段目は暗青灰色粘質土を主体とする。二段目は暗灰色砂質土に掘りこんでいるため湧水が著しい。

遺物は土師器椀，高麗青磁椀，中国青磁椀，白磁椀，染付椀，須恵質鉢，瓦片などが出土した。



1号溝北側土層名称

1. 淡茶褐色粘質土層（表土層）
2. 茶褐色粘質土層（遺物包含層）
3. 暗茶褐色粘質土層（遺物を含む）
5. 明茶褐色粘質土層
6. 黄褐色粘質土層（ロームブロックを含む）
7. 4と同質で，褐色土のブロックを均質に含む）
8. 7と同じで地山のロームブロックを少量含む
10. 暗い淡茶褐色粘質土
11. 淡茶褐色粘質土（砂粒が多い）
12. 茶褐色粘質土
13. 茶褐色粘質土（地山のロームをブロック状に少量含む）

1号溝南側土層名称

1. 黒褐色粘質土層（白色土を含む）
2. 淡茶褐色粘質土（砂粒を多く含む）
3. 茶褐色粘質土層（茶・白・褐色土のブロックが混入する）
4. 淡茶褐色粘質土（砂粒が少ない）
5. 淡茶褐色粘質土（茶褐色土が4より多い）
9. 淡茶褐色粘質土（茶褐色土が4より多い）
10. 暗青灰色粘質土（明）
10′. 10より暗い
18. 茶褐色粘質土
19. 茶褐色粘質土（茶・白・褐色土のブロックが混入する）
20. 茶褐色粘質土（青紫色粘質土が混入する）
21. 黒褐色粘質土（暗い）
22. 黒褐色粘質土（明）
23. 黒褐色粘質土（地山のロームが混入する）
25. 暗茶褐色粘質土（灰色土が混入する層）
28. 褐色粘質土（灰色土のブロックが多く混入する）
29. 茶褐色粘質土（白色土・黄色土のブロックを含む）
30. 茶褐色粘質土（白色土・黄色土のブロックを含む）
31. 暗茶褐色粘質土（黄色土のブロックを少量含む）
32. 暗茶褐色粘質土（黒褐色土・黄褐色のブロックを含む）
33. 暗茶褐色粘質土（地土ロームブロックを含む）
39. 茶褐色粘質土（25より明るい）
41. 暗茶褐色粘質土（黄色土と黒褐色土のブロックを含む）
43. 黒褐色粘質土

Fig. 60　1号・3号溝土層図（縮尺 1/60）

2号溝（Fig. 61，PL. 43）

調査区の中央を東西方向に貫流する溝で，東側は1号溝に接して終わっており，西側は底部が立ち上がっている状況から第53次調査の1号溝（濠）に接して終わるもので，復元全長は約30mである。溝上面は削平を受けており，現存幅3.1m～4.7mを，深さ1.26m～2.0mを測る。溝の断面形は箱薬研堀を呈し，東端及び西端はレンズ状，又はU字形を呈している。溝の覆土は暗茶褐色粘質土を主体としており，下位は部分的に暗青灰色粘質土が存在する。溝底は部分的に地山の砂質土層を掘りこんでおり，湧水が著しい。又，溝底は湧水のため起伏が著しい。

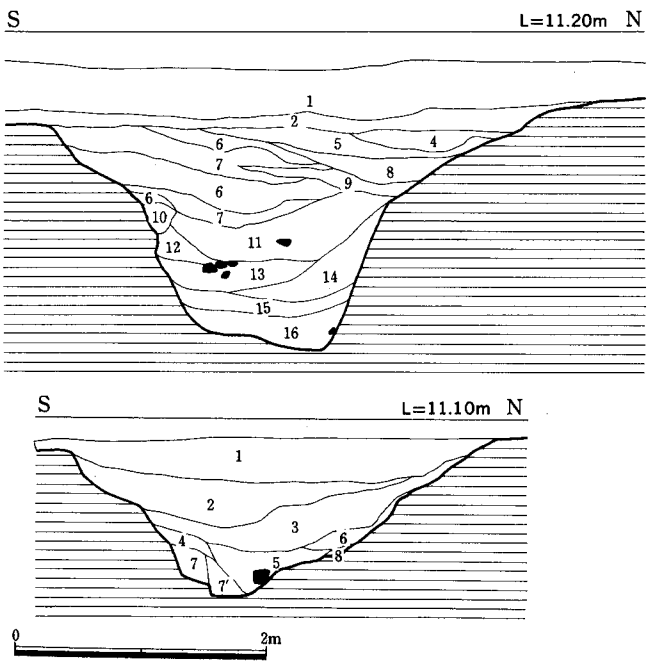
遺物は土師器坏・椀，瓦質擂鉢，中国白磁椀・皿，染付椀，李朝青磁皿，須恵質甕が出土している。以上より溝の埋没時期は白磁皿，染付椀，李朝陶器などから16世紀を考えることが可能である。

3号溝（Fig. 60，PL. 44）

1号溝の西側に沿った溝で，南北方向である。3号井戸，2号溝に重複しているため溝の一部を検出したにすぎない。溝の断面形は逆梯形を呈し，現存長100cm，幅80cm，深さ30cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とする。土層図（Fig. 60）で観察すれば1号溝が後出する。

掘立柱建物（SB）

遺構面の削平が著しく，ピットの遺存状態は悪い。掘立柱建物は2棟検出した。



2号溝南側土層名称

1. 耕作土
2. 茶褐色粘質土（ロームのブロックを一部含む）
包含層
4. 暗茶褐色粘質土
5. 明茶褐色粘質土
6. 茶褐色粘質土（黄色土，黒色土のブロックを含む）
7. 茶褐色粘質土
（6より黒色土のブロックが多い）
8. 茶褐色粘質土（黄色土，黒色土のブロックを多く含む）
9. 茶褐色粘質土（黄色土，黒色土のブロックを含む）
10. 黄色粘質土
11. 茶褐色粘質土（砂粒を多く含む）
12. 暗黄色粘質土
13. 茶褐色粘質土
14. 茶褐色粘質土（黄色土のブロックを少量含む）
15. 茶褐色粘質土（黄色土のブロックを多量に含む）
16. 淡茶褐色粘質土（ロームブロックを含む）

2号溝西側土層名称

1. 暗茶褐色粘質土
（黄褐色土，炭化物粒子混入）
2. 1に比べ，やや暗く八女粘土（赤橙色）粒子混入
3. 暗茶灰色粘質土（炭化物粒子を含む）
部分的に黒灰色の淡い層がある
4. 暗茶灰色粘質土（八女粘土の粒子を含む）
5. 暗茶灰色土（八女粒土の粒子を多く含む）
6. 暗茶灰色粘質土（灰白八女粘土を多く含む）
7. 淡い茶灰色（八女粘土の粒子を多く含む）
7'. 鉄分の粒子が多量に混入
8. 黄灰色粘質土（茶褐色土混入）

Fig. 61　2号溝土層図（縮尺 1/60）

Tab. 8　第71次調査掘立柱建物計測表　(単位：cm)

番号	規模	方向	桁行		梁行		方位	床面積 m²	柱穴状態					備考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	長径	短径	柱根径	
1号	2 ? × 2 ?	南北	400(13.3)	6.7,6.7	400(13.3)	6.7,6.7	N26°30′E	16.00	5	20～36	29～46	27～41		東半分を欠く
2号	2×2	東西	393(13.1)	6.3,6.8	330(11.0)	5.9,5.1	N42°30′E	12.97	9	22～58	45～59	41～55	14～22	

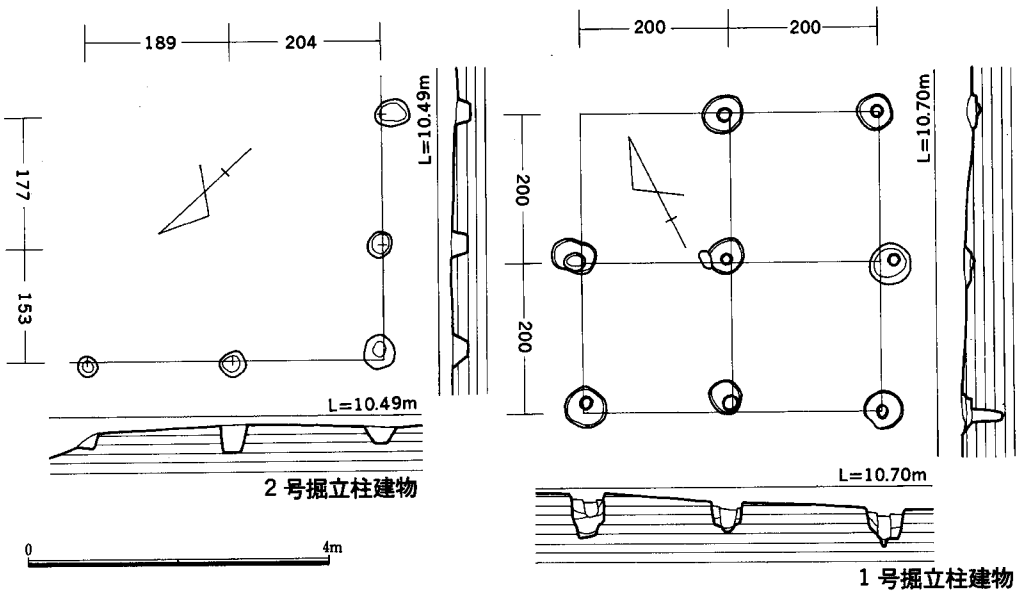


Fig. 62　1号・2号掘立柱建物（縮尺 1/100）

1号掘立柱建物 (Fig. 62, PL. 44)

東側の境界地に一部かかる。梁行2間，桁行2間の総柱建物で，桁行実長4.0m，梁行実長4.0mを測り，各柱間は6.7尺である。柱穴は円形，又は楕円形を呈し，長径22～58cm，深さ22～58cmを測る。柱根径14～22cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

2号掘立柱建物 (Fig. 62)

1号溝に北側部分を切られるため規模は不明である。現状では梁行2間，桁行2間の規模で，側柱だけの建物である。梁行実長は3.3m，桁行実長は3.93mを測り，柱間平均は梁間が約5.5尺，桁間が約6.5尺を測る。覆土は黒褐色粘質土である。本来の規模は桁行3間，梁行2間の建物であろう。

3）遺物各説

包含層出土遺物 (Fig. 63)

当該調査区の包含層は，調査区東側に存在した黒褐色粘質土を覆土とした段落ち部分しかな

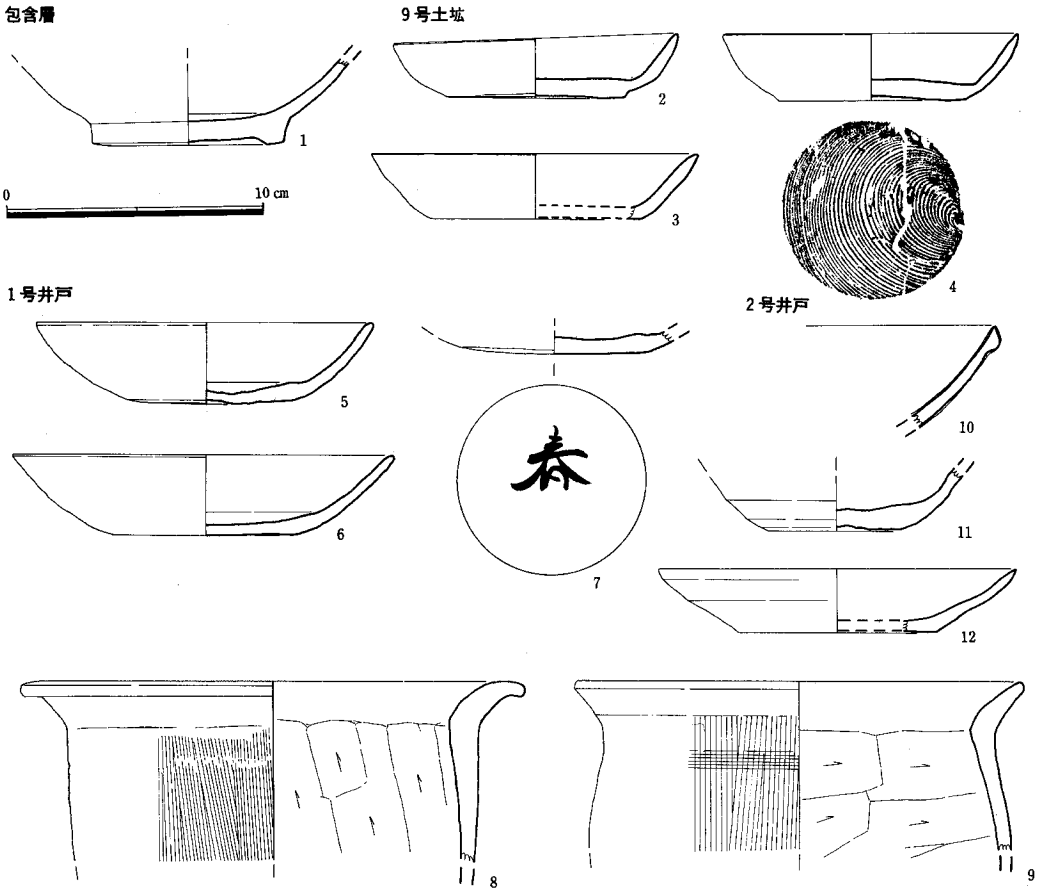


Fig. 63 包含層，9号土坑，1号・2号井戸出土遺物（縮尺 1/3）

いので，この段落ち部分から出土と思われる。

白磁・椀（1） 玉縁口縁の白磁椀で，高台径7.9cmを測る。大宰府分類IV－1類に相当する。

9号土坑出土遺物 (Fig. 63, PL. 45)

土師器・杯（2～4） 2・4は完形品である。いずれも糸切り底で，口径は11.4～11.8cm，底径7.0～8.3cm，器高2.6～2.65cmを測る。2・4の体部は丸味をもち，内外面はヨコナデ調整である。焼成は良好で，褐色又は暗黄土色を呈する。

1号井戸出土遺物 (Fig. 63, PL. 45)

土師器・杯（5～7） 5・6は完形品である。いずれもヘラ起こしで，底部は丸味をもっている。5・6の口径は13.4cm・15.2cm，底部は7.1cm・7.4cm，器高は3.3cm・3.2cmを測る。い

ずれも胎土に砂粒及び金雲母を含む。5は淡黄褐色，6は黄橙色，3は暗黄灰色を呈する。7の外底部には「春」の墨書がある。5は上層，6は下層出土である。

以上の他，1号井戸からは小型の土師器甕（8・9）と椀，及び越州窯系の青磁椀が出土し

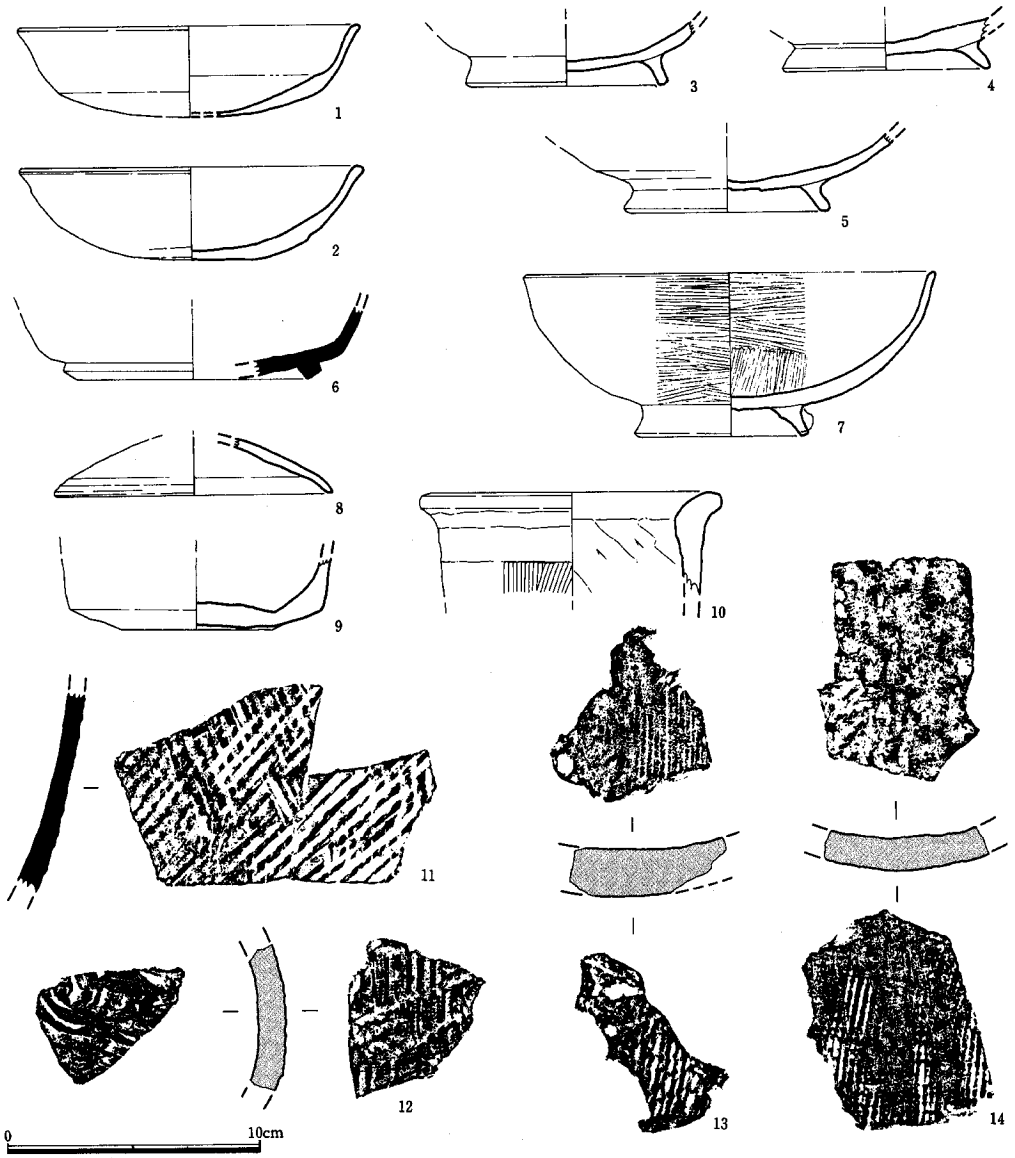


Fig. 64　3号井戸出土遺物（縮尺 1/3）

ている。甕は，8の口径20cm，9の口径17.6cmを測り，内面調整は8がタテ方向，9はヨコ方向のケズリである。越州窯系の椀は体部外面に縦沈線を施す器形である。

2号井戸出土遺物 (Fig. 63)

白磁・椀 (10)　玉縁口縁を有した白磁椀で，大宰府分類のⅣ－1類に属する。灰白色釉を厚目に施す。

青磁・椀　大宰府分類のⅠ－1類の椀である。高台径3cmを測る。釉は淡緑灰色を呈し，厚目に施している。胎土は灰青色である。

その他，土師器坏 (12)，椀 (11)，拳大の鉄滓2点，炭化した木製品1点が出土している。

3号井戸出土遺物 (Fig. 64, PL. 45)

土師器・須恵器

土師器・杯（1・2）　完形品で，底部はヘラ起こしである。口径は13.6cm・13.7cm，器高3.6cm・3.7cmを測る。底部は丸味をもち，体部との境は小さな段をもっている。口縁部はヨコナデ，底部はヘラナデ調整である。5は胎土に砂粒と金雲母を含み，灰褐色を呈する。6は胎土精良で，淡黄灰色である。

椀（3～5・7）　3～5の高台径は8～8.4cmを測る。7は完形品で，口径16.4cm，器高6.5cm，高台径6.9cmを測る。いずれも底部はヘラ起こしである。5の内底はヘラミガキを，7は体部内外面にヘラミガキを施す。口縁部はヨコナデ調整である。いずれも胎土に砂粒を含み，2には金雲母を含む。4は暗黄灰色，5は灰褐色を呈する。7は内面が黒色を，外面は口縁部の一部を除き淡い黄土色を呈する。内黒土器である。

蓋（8）　底径11cmを測る。胎土に砂粒を含み，淡い黄土色を呈す。

鉢（9・10）　いずれも小型の鉢で，10は復元口径12cmを測る。口縁部は厚く肥厚させており，体部内面はヘラケズリ，外面はタテハケ調整である。焼成は良好で，胎土に砂粒を含む。9は底径5.1cmを測り，直立する体部を有している。体部内外面はヨコナデ調整である。内面は黄灰色，外面は暗茶褐色である。

須恵器・杯（6）　高台径12cmを測る。胎土は灰色で，砂粒を含む。内外面はヨコナデ調整である。

甕 (11)　外面に平行タタキを綾杉状に施す。内面はナデ調整。胎土に砂粒を多く含む。青灰色を呈する。

瓦　類

平瓦（12・13・14）　14は須恵質で，13は焼成が甘い。13は谷部に布目痕を残し，背部は縄目のタタキを施す。14は谷部ナデ調整，背部は細かい縄目のタタキの後，タテ方向のナデを施す。12は谷部に青海波のタタキを残し，背部は平行叩きである。須恵器の甕片と考えるには非常に軟質であるため瓦とした。13・14は胎土に砂粒を含むが，13には金雲母を含む。12は灰色，13

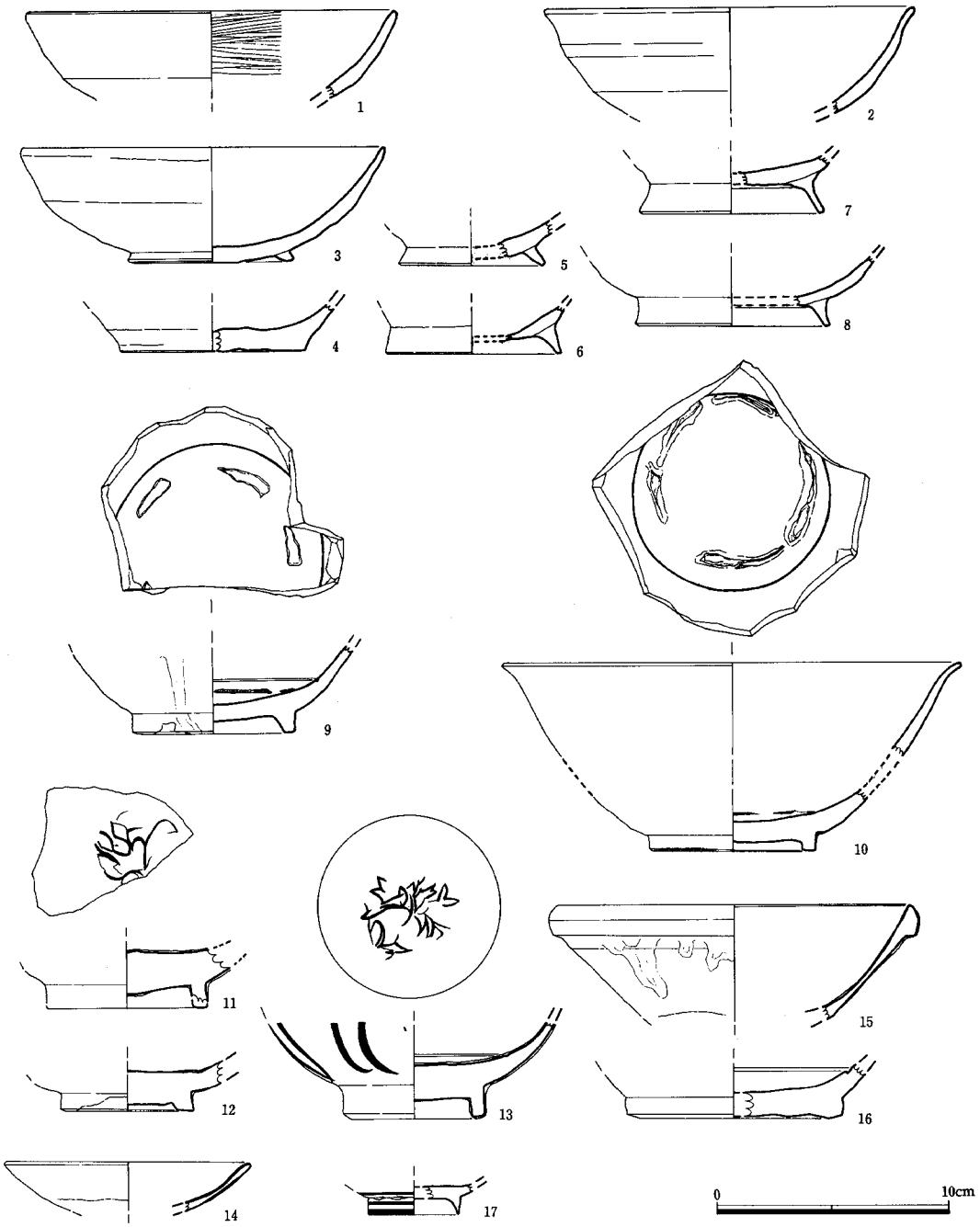


Fig. 65　1号溝出土遺物（縮尺 1/3）

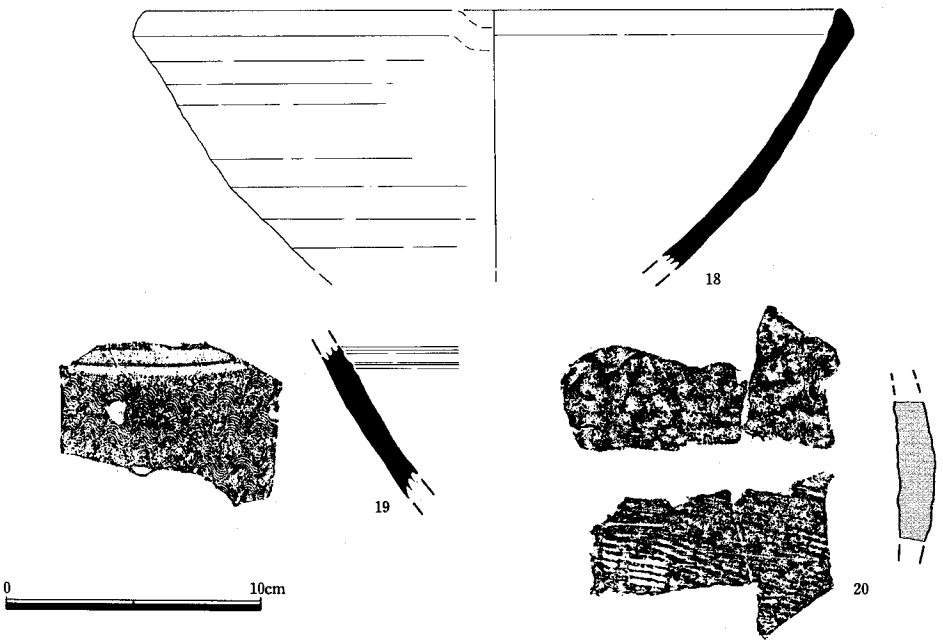


Fig. 66　1号溝出土遺物（縮尺 1/3）

は淡褐色，14は灰青色を呈する。12は浦ノ原窯跡A地区竪穴式遺構出土例に近似する。

木製品

櫛（PL. 45）　横櫛であるが，2分割しており遺存状態は悪い。歯は1cmあたり12本である。背はゆるやかな弧を描いており，歯の緻密さから梳櫛と考えられる。幅3.6cm，厚さ11cmを測る。歯の長さは29cm，幅0.1～0.9cmである。材質は不明である。

その他，滑石製石鍋片2点，鉄滓5点出土している。鉄滓の内，人頭大のもの2点は3－C号井戸より出土した。

以上の出土遺物の内，3－C号井戸の出土遺物は，1・4・7・8・13である。

1号溝出土遺物（Fig. 65・66，PL. 46）

土師器

杯（4）　底径8cmを測る。平底である。胎土に砂粒を含み，暗黄褐色を呈する。

椀（1～3・5～8）　5～8は高く細い高台を有しており，高台径は6.4～8.4cmを測る。いずれも胎土に砂粒を含むが，6・7には金雲母を含む。淡黄褐色，暗褐色，暗灰黄色を呈している。5は内面黒色であり，内黒土器と思われる。1・2は黒色土器で，口径は16cmを測る。内面にヘラ研磨を施す。2は口縁端部を若干外反させる。胎土は精良で，2は砂粒を少し含む。3は口径16.4cm，器高5cm，高台径7.2cmを測る。高台は断面三角形を呈し，低い。胎土に砂粒を含み，外面は暗灰色，内面は暗黄灰色を呈する。高台周辺はヨコナデを施す。瓦器椀である。

青磁・白磁

青磁・椀（9～13）　9・10は高麗青磁である。高台径は9が7.3cm，10が7.2cmを測る。10の復元口径は20cm，器高8.2cmを測る。内底見込み，及び畳付に目痕がある。内底の目痕は，9が5ヵ所，10は輪状を呈し，6ヵ所である。釉は外底部まで施すが，畳付はカキ取っている。釉は緑灰色で、薄目に施す。胎土は9が灰青色，10が青灰色で，9には灰白色の砂粒を含んでいる。11～13は龍泉窯系の椀で，11と13の内底には印花文を施す。13の外面にはヘラ彫りの大きな蓮弁を施す。11・13が緑色釉を厚目に外底まで施すが，外底は輪状にカキ取っている。12は淡緑灰色釉を薄目に高台外面まで施す。高台径は11が7cm，12が5.7cm，13が6.2cmを測る。

白磁・椀（15・16）　いずれも大宰府分類のⅣ類である。15は玉縁口縁が肥厚する。15の復元口径16cm，16の高台径は9.4cmを測る。釉は15が灰色で，厚目である。16は黄灰色釉で，釉が溶け切っていない。

皿（14）　復元口径10.6cmを測る。釉は灰黄色釉で，厚目に施す。貫入あり。

染　付

椀（17）　高台径4cmを測る。灰青色釉を薄目に施し，呉須によって見込みに圏線，内底に草花文を描く。高台外面に2条の圏線，体部下位に1条の圏線がある。畳付には打欠きがみられる。

須恵器・須恵質土器

須恵器・器台（19）　外面に波状文を10本単位で4段に施す。内面はヨコナデ調整，外面には緑灰色自然袖がかかる。

須恵質・鉢（18）　東播系の鉢で，稜が強い玉縁状の口縁部を形成する。体部は丸味を持っている。復元口径は28.7cmを測る。胎土に砂粒を含み，灰青色を呈する。

瓦　類

平瓦（20）　谷部はナデ調整，背部は細かい縄目タタキを行った後，ナデ調整を施す。胎土に砂粒を含み，灰色を呈する。須恵質である。3号井戸出土に同形態のものがある。

その他，瓦質の瓦は上層から8点出土している。平瓦・丸瓦片で，16世紀の所産と考えられる。

石製品・鉄滓

石鍋　3点出土。石鍋は鍔付のもの，把手付のものがある。平面が隅丸方形状を呈した大型の石鍋で，長方形の把手が4ヵ所に付く器形である。

鉄滓は拳大のものが10点出土している。

以上の遺物には上層（一段目の掘り方）の暗茶褐色粘質土層出土のグループと下層（二段目の掘り方）の暗青灰色粘質土層出土グループに分けられ，相互に大きな時期差が認められる。暗茶褐色粘質土層からの出土は1・2・4～6・8・10・11・13・15～17である。他は暗青灰

色粘質土からの出土である。上層には古式の土師器や青磁を含むが，13の明代青磁，14の染付などから15～16世紀の層であることが理解できる。下層には瓦器椀（3）・高麗青磁椀（9）・龍泉窯系青磁椀・白磁皿など12世紀～13世紀の遺物が集中することは，上・下の掘り方の埋没時期に時期差があることを推測させる。

2号溝出土遺物 (Fig. 67・68, PL. 46・47)

土師器・須恵器

土師器・杯（1～7）　1～4は糸切り底，5はヘラ切り底である。1～4の口径は11.4～12.4cm，底径7.2～8.6cm，器高2.5～3cmを測る。体部は丸味をもち，内外面はヨコナデ調整である。胎土には砂粒を含み，1・2・4には金雲母を含む。黄褐色，又は淡黄褐色である。5は器形に歪みがあり，体部が大きく外反する。口径11.4cm，器高3.8cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整である。7は大型の杯で，口径17.4cm，器高4.4cm，底径8cmを測る。底部周辺にヘラケズリ状の痕跡がある。胎土は精良で，淡橙色を呈する。

椀（8～10）　8は口径15.6cm，器高6cm，高台径6.8cmを測る。口縁部は端反りである。体部上位はヨコナデ調整である。9は口径15.6cm，10は口径15cmを測る。いずれも胎土には砂粒を含むが，10には金雲母を含む。淡黄褐色である。

須恵器・杯（6）　口径13cm，器高3.6cmを測り，体部は直線的に開く。体部内外面はヨコナデ調整。底部はヘラ切りである。灰青色を呈する。

白磁・青磁

白磁・椀（11・12）　11は大宰府分類の椀IV－1類に，12はVIII－1類に相当する。14の口径は16cm，15の高台径は6.7cmを測る。釉は半透明で，11が灰黄色，12が灰白色を呈し，いずれも厚目に施す。胎土は灰白色である。他に椀I類の破片（16）が1点出土している。

青白磁・椀（17）　青白釉を厚目に高台外面まで施す。露胎部分は茶褐色を呈している。

白磁・皿（18・20）　18は明代の皿で，三角形の高台をもつ。灰白色の透明釉を外底まで施し，畳付はカキ取っている。20は李朝の皿である。釉は半透明で，青味を帯びた灰色釉を高台内側まで施す。内面は釉が厚目で，外面は釉を薄目に施す。外面の一部は露胎である。目痕はない。胎土は灰褐色を呈する。

その他，白磁皿II類，及び瓶の破片が出土している。

青磁・椀（13・14・15）　14は龍泉窯系の椀で，高台径5.1cmを測る。緑灰色の釉を高台内側まで厚目に施す。外底には粘土が付着している。15は高台径6cmを測り，外面にはヘラ彫りの退化した蓮弁を，内面には花文を印刻する。釉は緑色を呈し，外底まで施す。外底は釉を輪状に掻き取っている。胎土は青灰色である。13は小椀で，内外面に淡緑色釉を厚目に施すが，高台内側は褐釉を施している。胎土は灰青色である。その他，外面に線描きの蓮弁を施した椀，内面に双魚文を印刻した椀，及び大宰府分類の龍泉窯系I－2類の椀，同安窯系椀，高麗青磁片

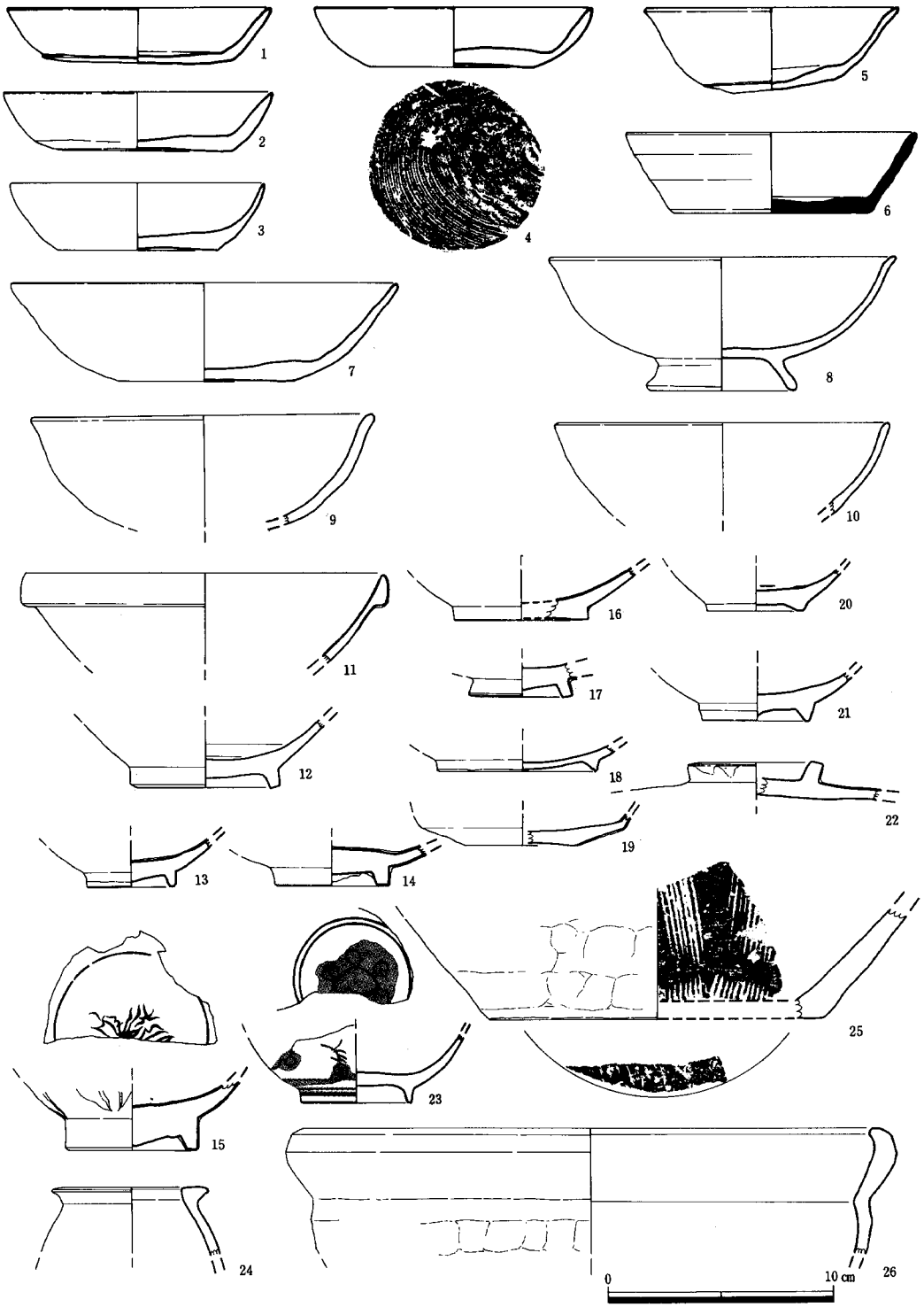


Fig. 67　2号溝出土遺物（縮尺 1/3）

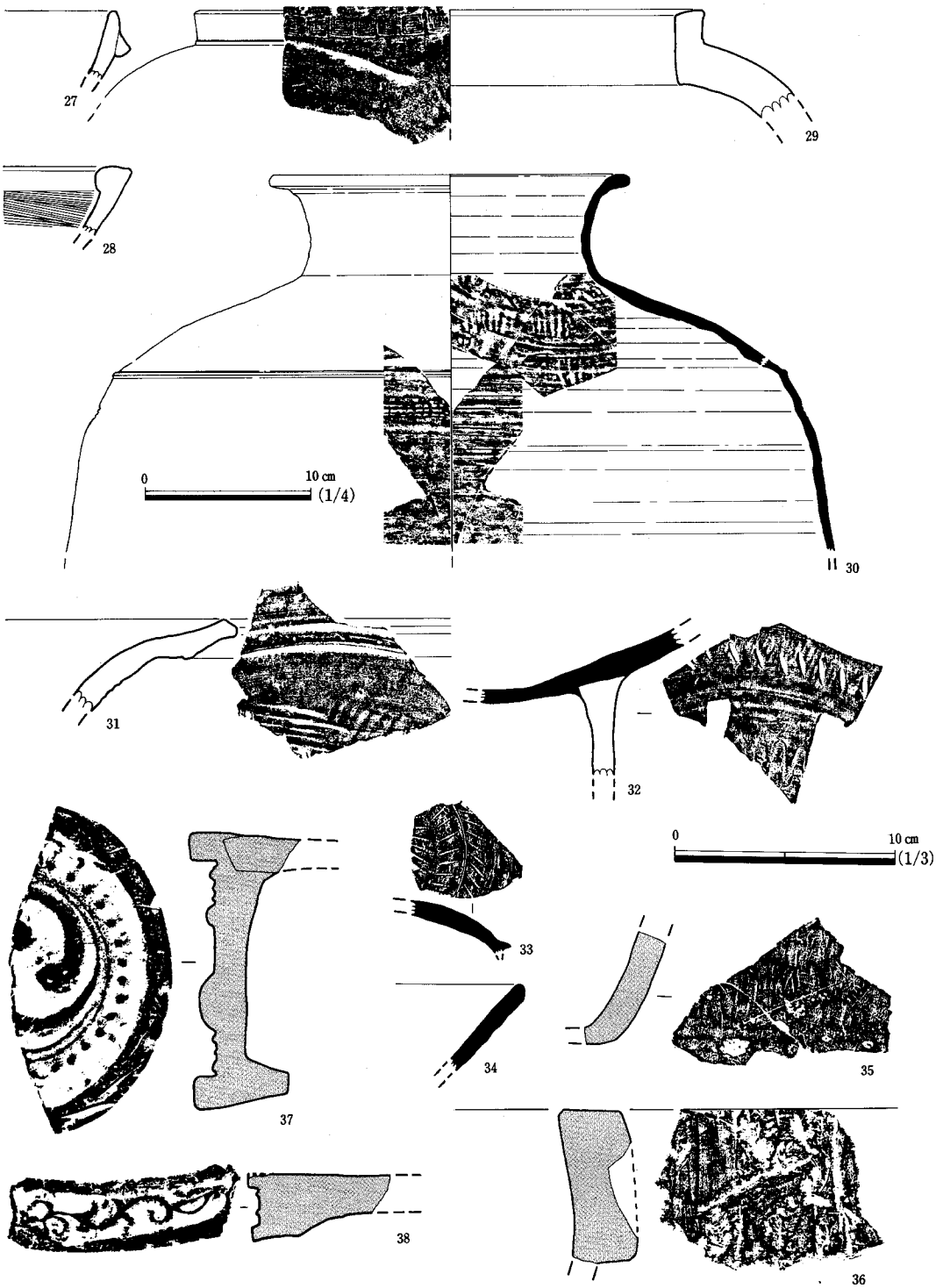


Fig. 68　2号溝出土遺物（縮尺 1/3・1/4）

2点が出土している。高麗椀の1点は内面に白色象嵌を施している。

蓋（22）　小片のため正確な器形は不明。内面及び高台内側は茶褐色に発色している。外面の釉は緑灰色を呈し，厚目に施している。胎土は青灰色である。香炉の可能性もある。

皿（19・21）　龍泉窯系，同安窯系，李朝の皿が出土。19は同安窯系の皿で，底径5cmを測る。内底にヘラ彫りの草文及び猫描き文を施している。緑灰色を呈した半透明の釉を厚目に施す。21は李朝の皿で，内底見込みと畳付に5ヵ所の目痕がある。釉は半透明で，青灰色を呈し，高台内側まで施す。胎土は灰青色で，白色の粒子を含んでいる。高台径4.9cmを測る。

染付・陶器

染付・椀（23）　明代の染付椀で，底部は饅頭芯である。高台径は3.5cmを測る。釉は青味を帯びた半透明の白色を呈し，畳付のみ掻き取っている。内底には呉須による2条の圏線を巡らし，内側に花文を描く。外面は唐草文状の文様を描く。溝の下層出土である。

皿は外面に梵字状の文様を描いたものが1点出土している。

陶器・瓶（24）　袖釉陶器で，口径7.1cmを測る。胎土は暗青灰色，釉は暗茶褐色を呈す。中国産である。

その他に，備前IV～V期の波状壷片や中国陶器の甕片がある。

瓦質土器・須恵質土器

瓦質・鉢（25・27）　25は擂鉢で，底径15cmを測る。外面はナデ，内面は細かいヨコハケ後，10本単位の条線を施す。外底には板目がある。胎土は精良で，微砂を含む。黒灰色を呈する。27は捏鉢である。口縁外面に断面が三角形の突帯を貼り付けた器形で，筑前では少ない器形である。胎土に砂粒を含み，内面は黒色を呈する。

鼎（26）　破片である。復元口径25.9cmを測る。体部内面にはヨコハケを施し，他の部分はヨコナデ調整である。内外面は黒色を呈し，胎土は灰黄色である。他には包含層からも出土している。

湯釜（29）　大型品の破片で、風炉の可能性もある。口縁部は直立し，外面には雷文のスタンプを施している。外面と口縁部の内外面には丁寧なヘラミガキを施す。内面はナデ調整。胎土に砂粒を含み，外面は黒灰色，内面は茶褐色を呈する。

須恵質・壺（30）　各部位の破片から図上復元した。復元口径は22cm，胴部最大径46.8cmを測る。外反する口縁端部は丸味をもち，肥厚する。肩部に1条の突帯がある。外面は格子目タタき後，ナデ消しを行い，内面は青海波のタタキ痕を行った後，強いヨコナデで消している。内外面の色調は青灰色又は灰青色であるが，胎土は茶褐色である。胎土は精選され，砂粒を含まない。この種の土器は博多28次調査や大宰府南条坊調査でも出土しており，中世期に出現する。口縁部の形態は博多28次調査・南大宰府条坊では二重口縁を呈しており，器形に変化があるものと思われる。南条坊では平底の底部である。胎土から国産品とは考え難い。

以上の他には12世紀前半代の東播系と考えられる鉢の破片（34）が１点出土している。

滑石製品

石鍋（35・36）　全部で８点出土している。36はタテ長の把手を付けており，平面形が隅丸方形を呈した器形である。外面は幅広いタテ長のケズリを施す。口縁端部及び内面の調整は粗雑である。良質の石材で，銀灰色を呈する。

瓦　類

総点数は56点を数え，その内軒平瓦１点，軒丸瓦１点，塼が１点出土している。

軒丸瓦（37）　瓦当面径は約12.5cmを測り，周縁は幅1.2cm，高さ１cmを測る。中央には三巴文を配し，その外面に径４mmの珠文を施している。巴文の尾が長く，他の尾に接するため圏線状を呈している。胎土に砂粒を含む。焼成は弱く，灰色を呈している。

軒平瓦（38）　瓦当厚は2.8cm，周縁の高さ3.5cmを測る。内区に均整唐草文を配している。唐草は２回反転するが，中心飾りと１回目の反転の間には１対の子葉，１回目と２回目の反転の間には２対の子葉がある。顎は曲線顎で，丁寧なヘラケズリを施している。谷部は丁寧なナデ調整である。胎土に砂粒を含み，内外面は暗青灰色を呈している。

調査区東側段落内出土遺物（Fig. 69・70，PL. 46・47）

土師器

皿（１）　口径10cmを測る。胎土に金雲母・砂粒を含む。底部の切り離し方法は不明。

坏（７）　完形品で，口径15.6cm，器高4.6cmを測る。底部はヘラ切りである。体部は丸味をもち，口縁部は端反りする。胎土は砂粒を含み，淡黄灰色を呈する。

椀（３～６・８）　高台径は6.8～８cmを測る。５・６の高台は細身である。３・４・８の底部はヘラ切りである。胎土には砂粒を含み，５・６には金雲母を含む。３・５は淡褐色，４は黄褐色，６は茶褐色を呈する。８の高台径は8.1cmを測り，黄褐色を呈する。

須恵器

蓋（９・10）　９は擬宝珠形のつまみをもつ。10は口縁端部を小さく内側へ折り曲げる。10の口径は13cmを測る。胎土に微砂を含み，９は青灰色，10は暗灰色を呈する。

坏（11～14・16～18）　11～14・17・18は高台を有している。11・12の口径は15.6cm・15cm，13・14・18の高台径は10cm・10cm・７cm，17は小型の杯で，高台径6.21cmを測る。体部はヨコナデ調整である。13・14・18の高台は体部と底部の境に貼り付ける。16は口径12.4cm，器高3.1cmを測る。内外面ヨコナデ調整である。胎土には微砂，又は砂粒を含み，11・12は暗灰色，13・14は青灰色，16は灰色，17は黒灰色を呈する。

壺（15）　長頸壺の底部と思われる。高台径12cmを測る。高台は強く外へ張り，胎土に砂粒を含む。

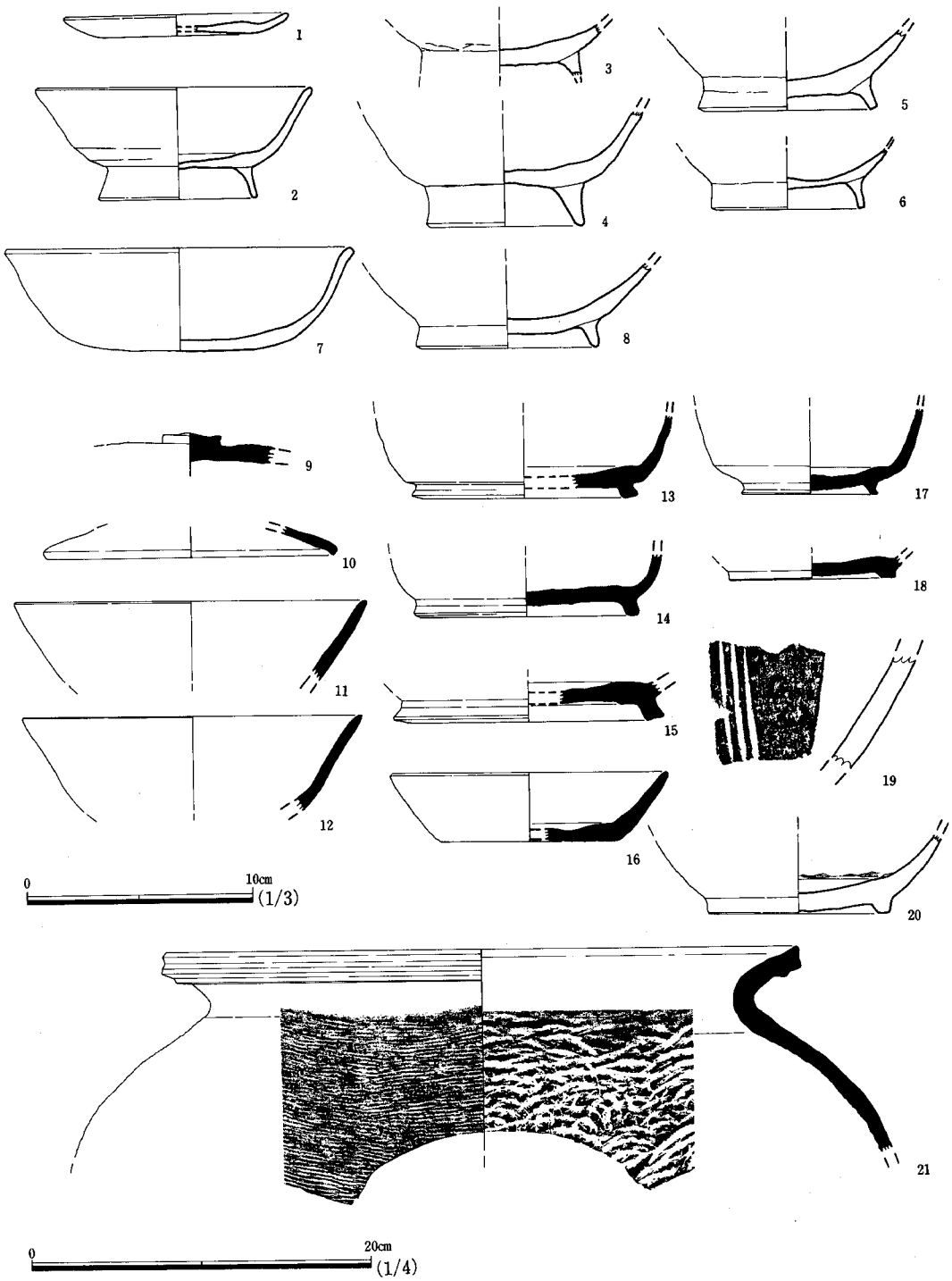


Fig. 69 調査区東側段落ち出土遺物（縮尺 1/3）

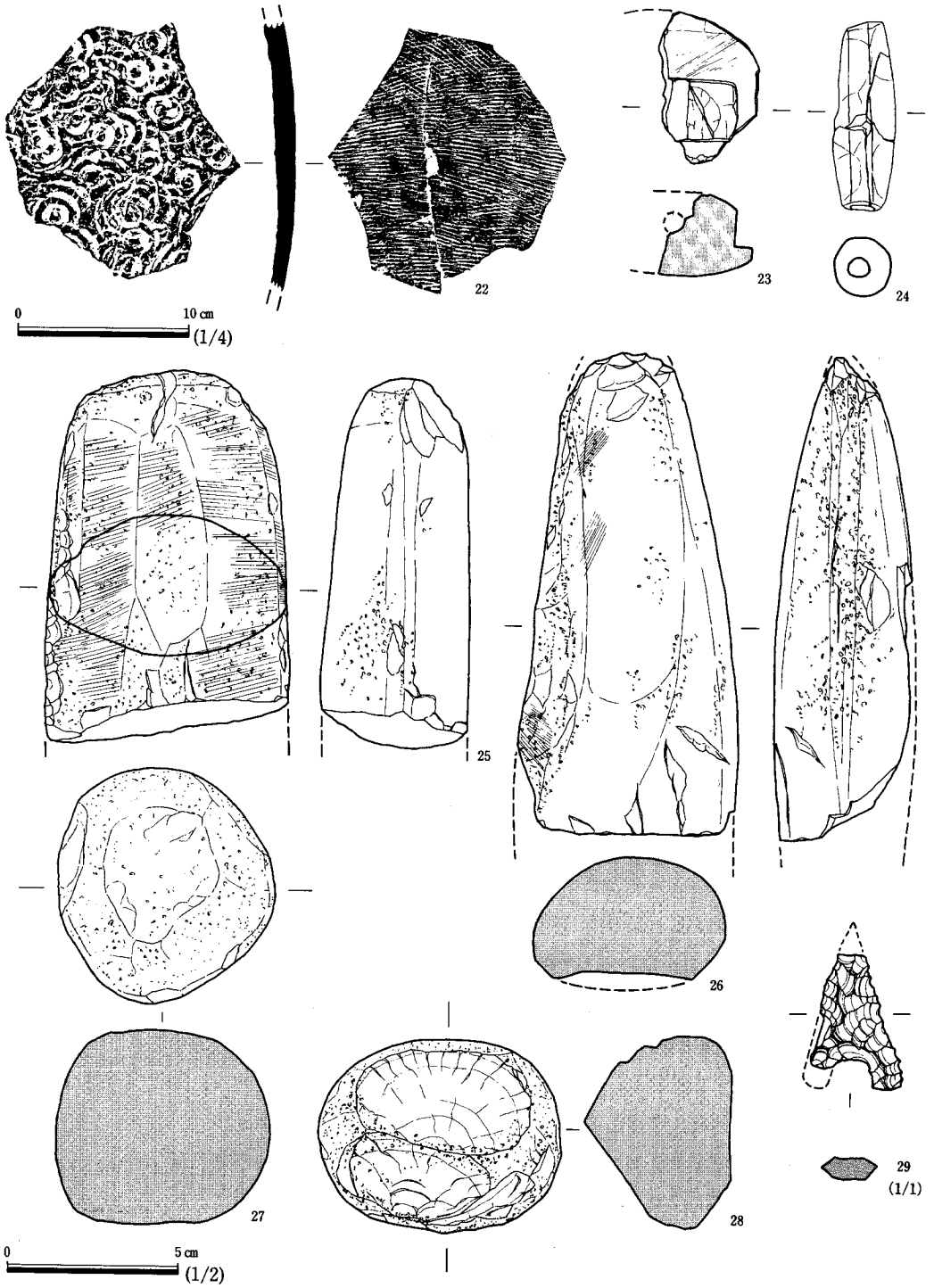


Fig. 70 調査区東側段落ち出土遺物及びその他の遺物（縮尺 1/4・1/2・1/1）

甕（21・22）　同一個体と考えられる。口径は38cmを測る。口縁部は強く外反し，端部の中央をくぼませて如意形とする。口縁外面に１条の突帯を設ける。体部外面は細かいヨコ方向の平行タタキ，内面は青海波の当て具痕がある。体部の当て具痕は同心円状を呈している。胎土に微砂を含み，内外面は黒灰色を呈する。

青磁・椀（20）　越州窯糸青磁である。高台径5.4cmを測り，内面見込みと畳付に目痕がある。釉は濁オリーブを呈し，外底まで施している。胎土は青灰色であるが，釉には白色の粒子を含んでいる。

土師質土器

鉢（19）　擂鉢である。内面はナデ調整で，４本以上の太いおろし目を施す。胎土には砂粒及び金雲母を含む。淡黄褐色である。

土製品・鉄滓・石製品

土錘（24）　長さ5.6cm，最大径1.8cm，孔径６㎜を測る。外面の一部に丹彩の痕跡がある。焼成は良好で，黄灰色又は，黒灰色を呈する。

蓋（23）　蓋形の器形で半分を欠いている。平面形は楕円形を呈し，底面は丸味をもち，滑らかである。つまみは長方形で，幅は1.9cm，高さ2.5cmを測り，側面中央に穿孔がある。孔径は６㎜を測り，内側には鉄銹が付着している。

滑石製の石鍋の破片は20点出土したが，鍔付の器形はない。鉄滓は28点出土している。

以上の遺物の他には黒色土器や内黒土器，或いは瓦質の鼎片１点，軽石１点が出土している。

その他の遺物（Fig. 70, PL. 47）

１号・２号溝より，縄文時代～弥生時代の石器が出土したので報告する。

磨製石斧（25・26）　25は玄武岩製の蛤刃石斧である。側辺や基部に剝離調整痕を残し，全体に敲打痕がある。研磨はA・B両面に施されるが，完全に終了していない。現存長16.1cm，最大幅7.2cm，最大厚3.2cmを測る。２号溝出土。26はいわゆる乳房状石斧で，刃部は欠いている。基部や側辺に剝離痕を残しており，且つ，A・B両面に敲打痕がある。左側辺に研磨痕がある。現存長14.5cm，最大幅6.6cm，最大厚3.8cmを測る。安山岩製である。１号溝出土。

石鏃（29）　２点出土しており，いずれも黒曜石で，１点は未成品である。29は先端を欠いている。現存長２cmを測る。内面の調整は丁寧で，脚の抉り込みは深い。

以上の石器の他，敲石が２点（27・28）ある。28は玄武岩製で，２号溝下層より出土。27は緑泥片岩製で，包含層より出土している。いずれも敲打の際に角を利用するために摩滅し楕円形の丸味をもっている。

4）小　　結

検出した遺構は土坑15(内土坑墓１基)，住居跡１軒，井戸５基，溝３条，掘立柱建物２棟である。大きく時期はⅠ～Ⅳ期に分けることができる。

Ⅰ期は古墳時代，Ⅱ期は平安時代，Ⅲ期は中世前半，Ⅳ期は中世後半である。

Ⅰ期には住居跡と１号掘立柱建物が属する。住居跡は既に削平のため，周壁内の周溝を僅かに残しているにすぎないが，平面形態を読み取ることは可能である。この住居跡は長方形の片袖にベットを持っているが，ベットが元来，両袖に存在し，且つベット形態がＬ字，又はコの字形になることも考えられる。片袖のベット又は両袖で，タテ長のベットであれば，弥生時代の終末期に相当するが，両袖のＬ字形，又はコの字形ベットであれば古墳時代初頭に位置づけられる。住居跡の長さ約６ m，幅4.5m の規模は有田第32次・35次調査で検出した布留式土器併行の住居跡の規模に近い数値を示している。１号掘立柱建物は２間×２間の倉庫と考えられる。平面形が正方形を呈している。北側の第30次調査において検出した２間×２間の総柱建物の内，１号・３号建物を構成する柱穴内からは６世紀代の須恵器片が出土しており，当該調査の１号建物も概ねこの時期に相当するであろう。

Ⅱ期の平安時代には，１号井戸及び３－Ｃ号井戸が相当する。１号井戸出土の坏は大型で，体部は丸味をもち，小さな平底で，且つ法量は口径15cm前後，器高3.5cm前後を測る。この特徴は大宰府史跡のＳＥ1081出土の土師器坏の大型品に非常に近似するところから，同時期の土師器と考えて良いであろう。よって１号井戸の埋没時期は８世紀後半以降である。３号井戸は重複した３つの井戸の前後関係を明確にしなかったため，３－ａ・ｂ号井戸については遺物が混入しており時期比定は困難かと思われる。３－Ｃ号井戸出土の土師器 Fig. 64－1.2は，丸い体部から口縁端部を外反させる特徴をもち，口径は14cm未満，器高は４cm前後を測る。器形・法量からは大宰府史跡のＳＫ802土坑・ＳＥ1083井戸出土の土師器丸底杯に近い。このＳＥ1083より古式のＳＫ674土坑出土の丸底坏は口径・器高ともに大きく，又ＳＤ1330出土の丸底杯は口径が13～19cmの間で，底部と体部の境が不明瞭になるなど，当該井戸出土の器形・法量に相当しない。ＳＫ802の丸底坏は口縁端部を若干肥厚するが，ＳＥ1083の丸底坏の口縁端部はシャープに仕上げるものが多く，当該井戸の丸底坏は大宰府ＳＫ802土坑の丸底坏に相当するものといえる。Fig. 64－７は内黒土器であるが，口径は16.4cm，器高6.5cmを測り，ＳＫ674出土の椀よりも法量は大きく，SK1083出土の椀の法量に近い。よって，これらの土師器の時期は10世紀後半から11世紀前半代に位置づけておく。３－ｃ号井戸の埋没時期を示すものである。３－ａ・ｂ井戸出土の土師器の坏は，３－ｃ号井戸出土の坏と同形を示すが，３～５の椀の高台径は大宰府ＳＫ674の法量に近いので，３－ａ・ｂ号井戸が先行するものと考えられる。

この時期の井戸は，第３次調査で検出した溝・掘立柱建物や第55次・117次調査などで検出し

た1町四方の方形区画溝を構成する溝とも近い時期を示すものである。墨書土器の出土や第3次調査出土の石帯（巡方），第117次調査出土の円面硯などは官衙の存在を強く裏付けている。

III期は中世前半期で，2号井戸及び1号溝下層の遺物が相当する。2号井戸は遺物が少なく時期の比定は困難であるが，出土した白磁の玉縁は小さく，大宰府分類のIII類の特徴をもつ。このIII類椀は武蔵寺経塚の9号経塚に伴っているが，この経塚からは大治元年（1126年）銘の経筒が出土しており又，経塚外容器の須恵器甕は12世紀初頭〜前半代の特徴をもっている。2号井戸の年代も又，12世紀前半以降に埋没したものと考えたい。1号溝下層出土遺物には高麗青磁椀・瓦器椀等がある。瓦器椀は小さな三角高台で，器高は深くない。口径15.8cm，底径7.2cm，器高5.0cmを測り，森田編年[註3]の椀II aの特徴に合致する。又，高麗青磁椀は山本分類[註4]のII類で，このII類の出土時期は12世紀代に集中しており，よって1号溝の下層の青灰色粘土層（2段目の掘り方）は12世紀以降の埋没を考えることが可能である。又，9号土坑は，出土した土師坏が糸切り底で，形態・法量からみて大宰府のSK830出土の器杯に対応するため，その時期を14世紀におくことが可能である。

IV期の中世後半期は1号溝，及び2号溝がある。2号溝下層出土の土師器杯1〜4は，9号土坑出土の土師器と同形・同法量で，同じく大宰府SK830出土の坏に対応する。又，8の椀は11世紀前半代に位置づけられる。ただし全体として，11〜14世紀代の遺物が多いけれども，2号溝の下層からは明代の白磁皿や李朝の皿が出土している。又，1号溝の1段目掘り方の茶褐色粘質土層からは明代の青磁の他，染付椀が出土しているので，1号・2号溝の埋没時期，及び使用時期は概ね16世紀代を考えることができる。1号溝の長さは不明だが，Fig. 71によれば，南側の第61次調査で検出した濠は南北から東西方向に屈曲する。1号溝は第61次調査の溝に接するもので，少なくとも50m以上の長さである。又，2号溝は南側が1号溝に接して終る。西側は溝底が立ち上がり，第53次調査検出の1号溝の深さと方向が合致しないことから，直接接続しないものと考えられる。又，当該溝の西端が道路中央まで及ばないことを考え合わせれば，第53次調査の濠と当該調査の2号溝との間には陸橋が存在したことが想定できる。

註1　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4　1978
註2　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」九州歴史資料館研究論集2　1976
註3　森田勉「九州地方の瓦器椀について」考古学雑法59—2　1972
註4　山本信夫「日本における初期高麗青磁について—大宰府出土品を中心として—」貿易陶磁器研究No.5　1985

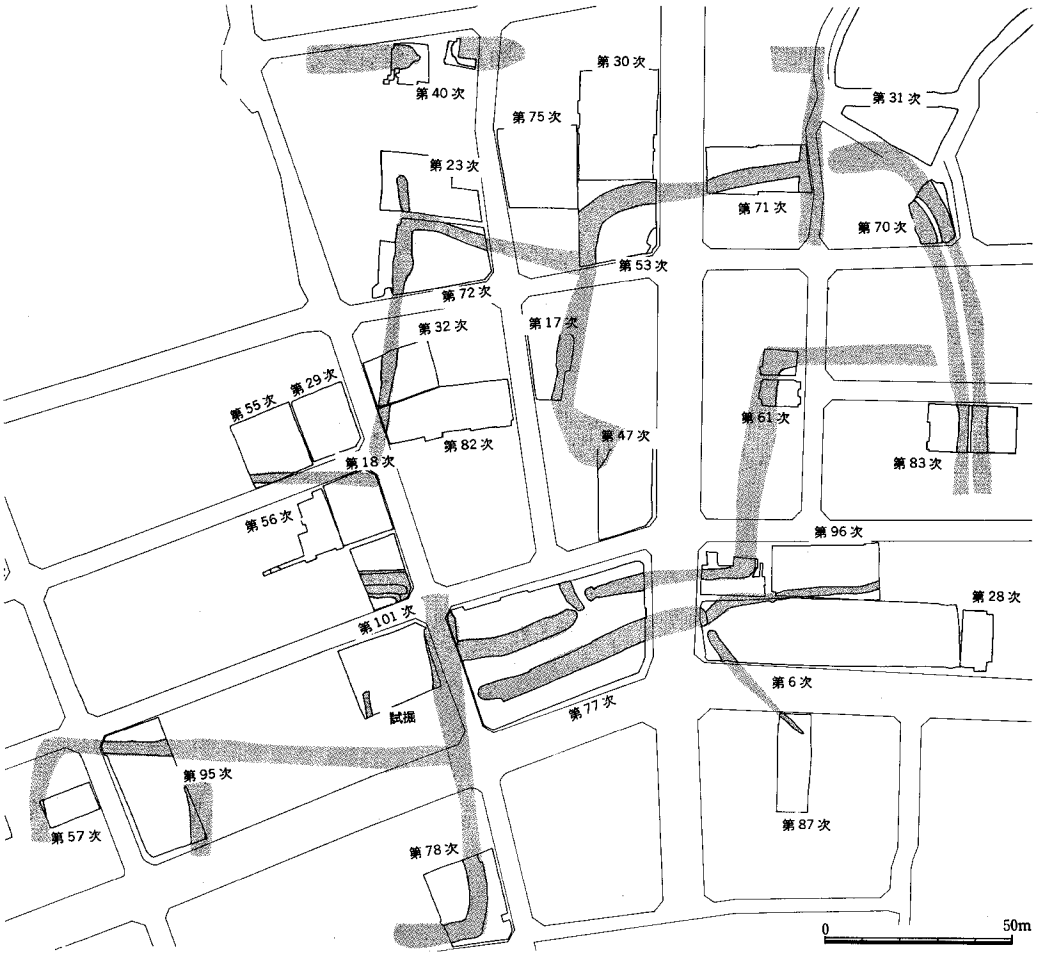


Fig. 71　有田地区検出の中世濠の状態（縮尺 1/2,000）

4．第72次調査　(調査番号　8213)

1）調査地区の地形と概要

調査対象地は福岡市早良区有田1丁目26－3番地に所在し，対象面積は394m²である。

有田地区の最高所は標高15mを測り，平坦部を形成する。これより北側は東方向，北西方向から谷が深く切りこむために，幅150m，標高12m前後を測る狭長なくびれ部を形成する。この地域の発掘調査は進んでおり，近接する調査地は10数ヵ所に及び，弥生時代～中世に至る遺構を検出している。当該地に隣接する第23次・32次調査では，中世の遺構を検出しており，当該地も同様な遺構の存在が予想された。専用住宅の改築計画のため発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和57年9月22日～10月21日迄実施した。調査の関係上，残土は調査区外へ搬出した。表土は耕作土，及び客土で，深さ約20cmである。遺構は標高12m前後を測るローム層上に形成されるが，昭和41～43年の区画整理による削平が著しく，遺存状態は悪い。調査区の北西側は谷頭に接しており，遺構面は北西側に下降する。この調査区西側には東西方向に康申道が通っている。

遺構は古墳時代～中世の掘立柱建物4棟，弥生時代の土坑1，中世の土坑2，中世の溝10条を検出した。

2）遺構各説

土　坑（SK）

1号土坑（Fig. 73，PL. 49）

平面形は不整円形を呈し，断面形は袋状を呈する。上端の直径は南北約2.2m，東西約3.05m，底面の直径は148～220cm，深さは1.55mを測る。底面の西隅には短径87cm，長径100cm，深さ26cmを測るふたつの不整楕円形Pitが存在する。壁面などは一定しておらず，起伏がある。覆土は第1～4層は黒色土系の粘質土で，第5層以下は黒色土と褐色粘質土の混合土，又は地山のローム土や黄褐色土のブロックの混合土である。6層以下は明らかに埋戻しに際しての投げ込み層と考えられる。遺物は土師皿・坏，瓦器椀，白磁椀，青磁椀，陶器，瓦質土器，須恵質土器，滑石製品が出土している。

2号土坑（Fig. 73・74，PL. 50）

1号溝の中央部分で切り合っており，溝に切られる。平面形は不整楕円形を呈し，断面形は袋状を呈している。現存長は6.4m，最大幅5.3m，深さ約2.0mを測る。床面は起伏に富んでいるが大きく5ケ所ほどの浅い窪みを設ける。しかしこの窪みは黄褐色粘質土で充填されている。

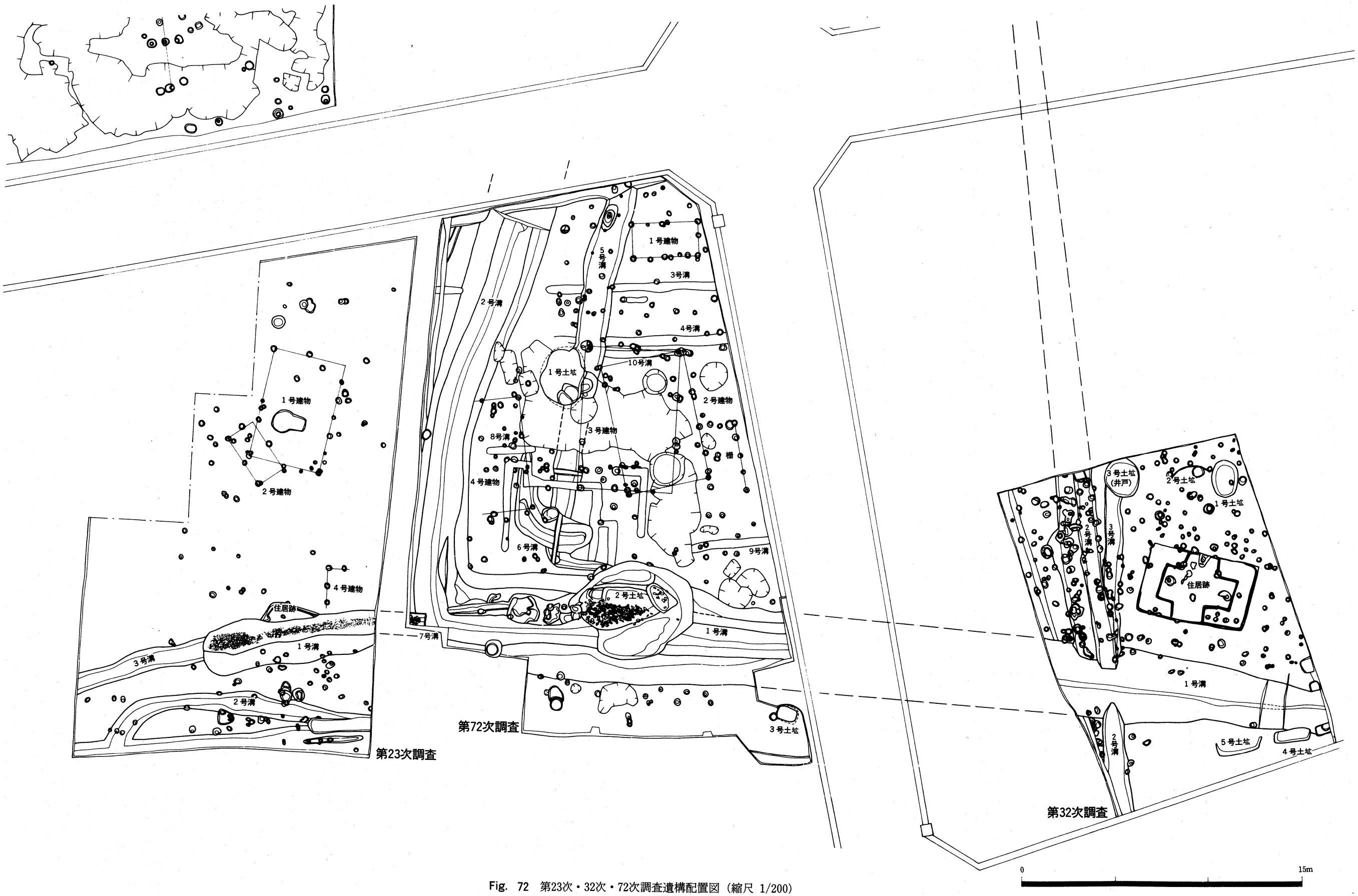
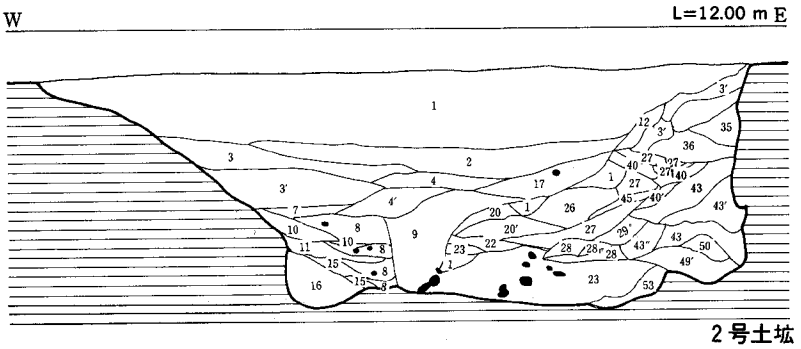


Fig. 72　第23次・32次・72次調査遺構配置図（縮尺 1/200）



2号土坑

2号土坑土層名称

1. 暗褐色粘質土層
2. 暗褐色粘質土層（黄褐色ブロック混入）
3. 暗褐色粘質土層（2よりブロック多い）
4. 暗褐色粘質土層（2よりブロック少ない）
8. 暗茶灰色粘質土層
9. 暗茶灰色粘質土層（8よりやや明るい）
10. 暗茶灰色粘質土層（黄褐色土のブロックが混入する層）
13. 暗茶灰色粘質土層（10に黒褐色土のブロックが混入）
15. 暗茶灰色粘質土層（13よりやや暗い層）
16. 暗茶灰色粘質土層（15に大型の淡黄褐色土のブロックが混入する層）
17. 暗茶灰色粘質土層
20. 暗茶褐色粘質土層（黄色土のブロックを含む）
22. 暗茶灰色土層（黄褐色土のブロック少量含む）
23. 暗茶灰色土層（黄褐色土のブロック大量に含む）
26. 暗茶灰色粘質土層（淡黄土色のブロックを多量に含む）
27. 黒色粘質土層（黄褐色土のブロックを少量含む）
28. 黒色粘質土層（黄褐色土のブロックが多量に混入する）
31. 褐色粘質土層
32. 暗褐色粘質土層（褐色土のブロックが混入する）
33. 茶褐色粘質土層
35. 淡茶褐色粘質土層（しまりがない）
36. 暗茶灰色粘質土層（しまりがない）
40. 黒色粘質土層（27よりブロックが少ない）
43. 茶褐色土・黒褐色土・淡黄土色のブロックの混合土層
45. 暗茶灰色粘質土層（黒褐色土のブロックが混入する）
49. 43より大型の淡黄色土のブロックを含む層
50. 褐色砂質土ブロック
53. 茶褐色粘質土層

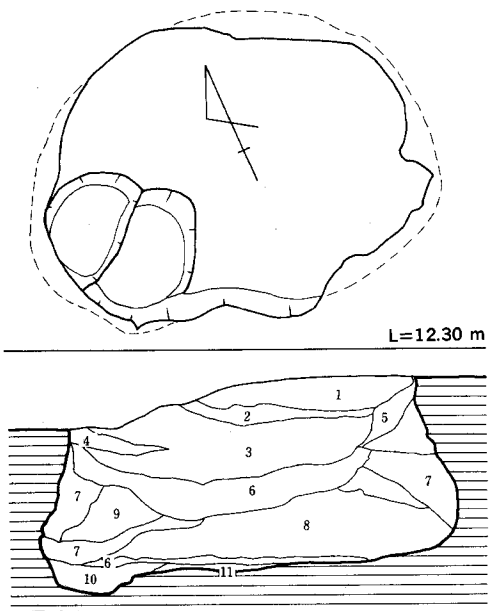
0　2m　(1/60)

1号土坑土層名称

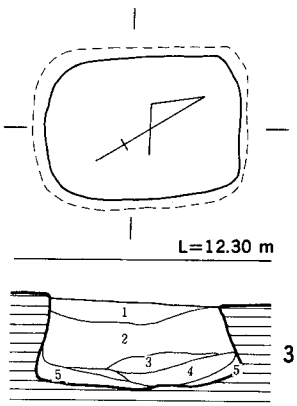
1. 黒色粘質土層
2. 黒褐色粘質土層（褐色粒子混入）
3. 黒色粘質土層（褐色土粒子少し混入）
4. 黒褐色粘質土層（褐色土の粒子が多く混入）
5. 暗褐色粘質土層（黒色土混入）
6. 黒色粘質土層（黄褐色土ブロックが多く混入）
7. 黒色土と黄褐色土の混合土層
8. 黄褐色土大ブロックと暗褐色土の混合土層（黒色土混入）
9. 黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土層
10. 褐色土の風化土層
11. 黒色土層（黄褐色土大ブロックが混入）

3号土坑土層名称

1. 真黒色粘質土層
2. 1に褐色土粘質土を含む
3. 1に暗黄褐色土のブロックを含む
4. 黒色粘質土層（褐色土のブロックを含む）
5. 暗黄褐色粘質土層（黒色土を含む）



1号土坑



3号土坑

(1/40)

Fig. 73　1号・2号・3号土坑（縮尺 1/60・1/40）

又，床面は一部地山の砂質層に達しており湧水が著しい。中央の窪みには2号溝の中軸に沿って北方向から拳大から人頭大の礫が流下した状態で敷き詰められている。覆土の上層は暗茶褐色粘質土系の土層が占め，下層は1号土坑同様に黒褐色粘質土ブロックや地山の褐色土ブロックが混合した層となる。埋戻しの際の状態を示すもので，下層ほど土の締りはない。礫群は北方向が流れ落ちた状態を示しているが，この土坑の北側には2号溝の法面に掘り込んだ不定形土坑が接続する。この土坑は長さが約3.5m，幅約1.5m程であるが，底面の起伏は著しい。床面は2号土坑よりも約58～75cm高い。こうした構造をもつ土坑の例は有田第40次調査の1号溝，第108次調査1号・2号土坑が相当する。いずれも礫群が存在し，当該土坑のように床面に密着していないが，土坑の一方向から流れ込んだ状態を示している。いずれの時期も16世代を示し，当該土坑の規模，時期と合致する。溜水用の機能が考えられる。

遺物は床面の礫群より集中して出土した。土師器皿，瓦器椀，中国青磁椀・白磁椀皿，瓦質土器鉢，土師質鉢，滑石製石鍋・滑石製品，瓦などである。

3号土坑 (Fig. 74, PL. 49)

調査区の西南隅で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し，断面形は壁がオーバーハングした袋状を呈する。上面の長さ92cm，幅87cm，深さ5.1cmを測る。覆土は漆黒色粘質土を主体とする。基底部の第5層のみ暗黄褐色粘質土を主体とした土層である。遺物の出土は全くない。漆黒色土は有田遺跡の場合，弥生時代の最古期，又は以前に逆のぼる場合が多いことを注意しておきたい。

4号土坑

1号・2号溝の西北コーナー部分で検出した。溝の埋没後に作られており，平面形は隅丸長方形を呈する。現存長1.15m，幅80cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土で，遺物の出土はない。

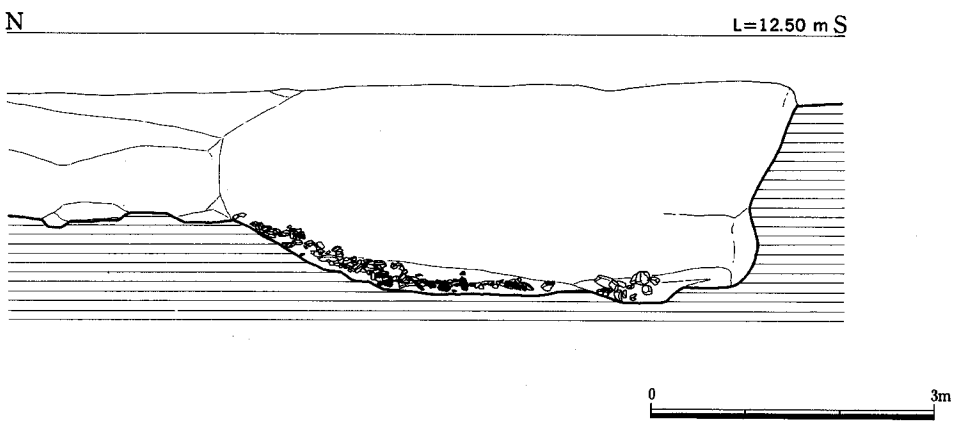


Fig. 74　2号土坑断面図（縮尺 1/80）

溝（SD）

溝状遺構を含めて，10条を検出した。この内，1号・2号溝は濠的な規模を示すが，両者は同一の溝を構成する。よって，ここでは，1号・2号溝を1号溝と呼称し，2号溝は欠番とする。

1号溝（1号・2号溝）(Fig. 75, PL. 51・52)

東西方向から南北方向へ矩形に曲がる溝である。2号土坑，及び7号溝と切り合っており，これらの土坑，溝よりも後出する。溝底は東西方向では東側に高くなっており，南北方向では南側に高くなる。東側の延長は第53次調査のL字形濠に接して終り，南端の溝延長部分は第32次調査の1号溝に接続する。溝幅は東端が3.7m，南北方向の中央では5.7m，南端では4.2mを測る。深さは東端が1.38m，南北方向の中央では1.62m，南端では1.3mを測り，2号土坑と切り合う部分では最も深く1.7mを測る。この部分の断面形は2段掘りになっており，1段目は逆梯形を呈し，2段目は幅67cm，深さ60cmの箱薬研堀になっている。両側に張り出したテラスは陸橋部を意識するものだろうか検討の余地がある。溝の他の部分の断面形は溝コーナー部分や南端はV字形，東端はU字形，南北方向の中央部では箱薬研堀である。覆土は暗茶褐色粘質土，暗黄褐色粘質土を主体とする。遺物は2号土坑との切合い部分から多く出土した。調査中，完全に分離できていなかったので，2号土坑の遺物の混入もあると思われる。

遺物には土師器皿，中国白磁椀・皿・青磁椀・盤，李朝椀・皿，中国陶器，国産陶器・鉢，瓦質土器鉢・湯釜・鼎・焙，土師質土器鉢，瓦片，滑石製品などが出土している。

3号・4号溝 (Fig. 72)

南北方向の小溝で，5号溝を切っている。同様な小溝には9号・10号溝がある。3号溝の幅は40～50cm，深さ約10cm，4号溝の幅は50～60cm，深さ約10cmを測る。いずれも断面形はU字形を呈し，覆土は暗茶褐色粘質土である。遺物は非常に少ないが中国の白磁・青磁を出土している。

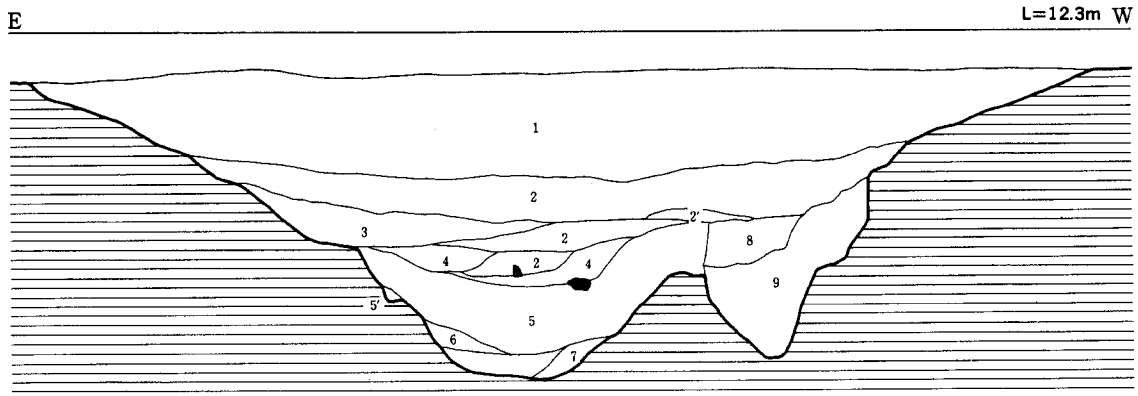
5号溝 (Fig. 76, PL. 53)

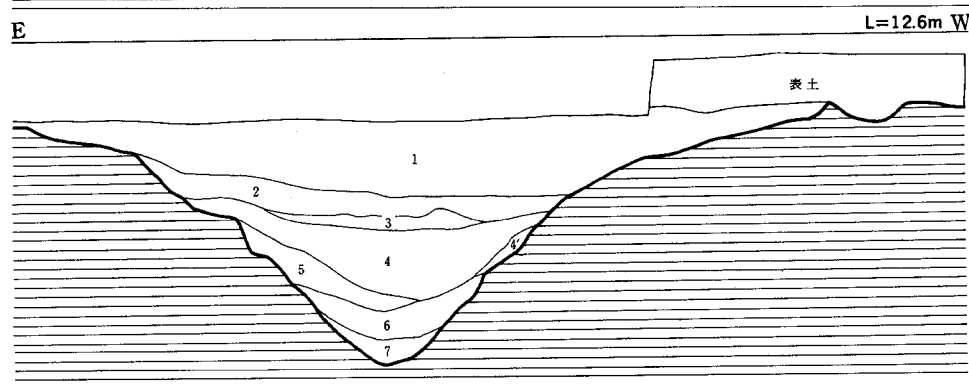
東西方向から南北方向へ曲がる溝である。1号土坑，6号・10号溝と切り合うが，10号溝が先行し，6号溝が後出する。且つ，2号・3号掘立柱建物に切られる。1号土坑との先後関係不明。溝上面の削平は著しく，溝幅は約2.0m，深さ約15cmを測る。溝の断面形はレンズ状を呈し，覆土は黒褐色粘質土である。

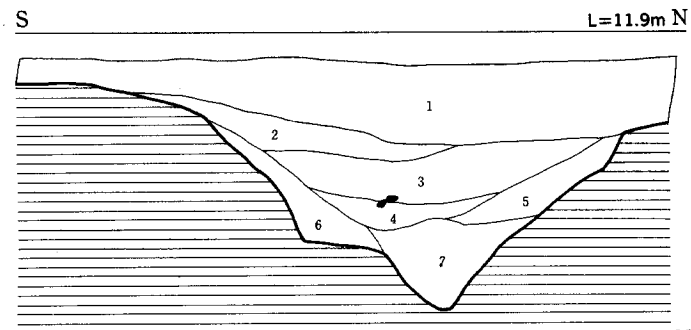
遺物は土師器椀，白磁椀片，龍泉窯系の青磁椀などが出土している。

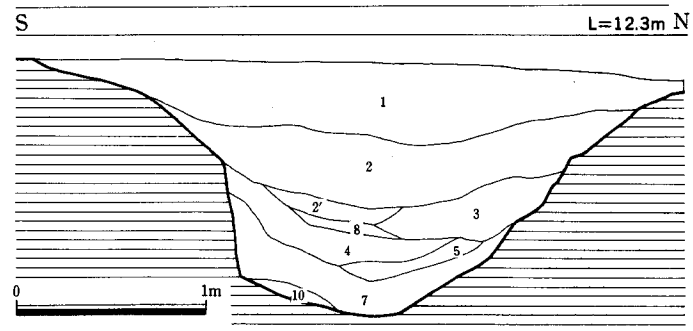
6号溝 (Fig. 76, PL. 53)

4号掘立柱建物に切られる溝で，削平が著しいため，東西から南北方向へ曲がる溝のコーナー部分しか遺存していない。溝幅は1.5～1.8m，深さ28cmを測る。断面形はレンズ状を呈するが，底面には起伏がある。覆土は第1層が茶褐色粘質土で，第2層以下は真黒色粘質土を主体









1号溝土層名称

1号溝土層名称
1. 暗茶褐色粘質土
2. 1層に黄褐色の小ブロックを多量に混入。(しまりない)
2'. 2より黄褐色の小ブロックの量が多い。
3. 暗茶褐色粘質土（黒灰色に近い黄褐色のブロックを少し含む。しまりない)
4. 暗茶褐色粘質土（黒灰色に近い。しまり良い)
4'. 八女粘土のブロックを多く含む。
5. 暗茶灰色粘質土
5'. 暗茶灰色粘質土（5より暗い)
6. 暗茶灰色粘質土（褐色土の粒子が多く混入)
7. 暗茶灰色粘質土（黒灰色に近い。しまり悪い。)
8. 2と同じだがやや暗い。(しまりない)
9. 茶灰色粘質土（地山の砂質ブロックを多量に含む)

2号溝土層名称
1. 暗茶褐色粘質土
2. 1に褐色土のブロック。ブロック少ない。しまり悪い。
2'. 1に褐色土のブロックを少し含む。
3. 暗茶褐色，粘質土黒灰色を帯びる。
3'. 3よりしまり悪い。
4. 茶褐色，しまり良い。やや灰色を帯びる。
4'. 茶灰色，しまり悪い。
5. 暗茶灰色粘質土（黒色に近い。褐色土のブロックを少し含む)
6. 2と同じ。2よりブロック多い。
7. 暗灰茶褐色粘質土
8. 明茶灰色粘質土
10. 暗褐色粘質土

Fig. 75　1号・2号溝　(縮尺 1/40)

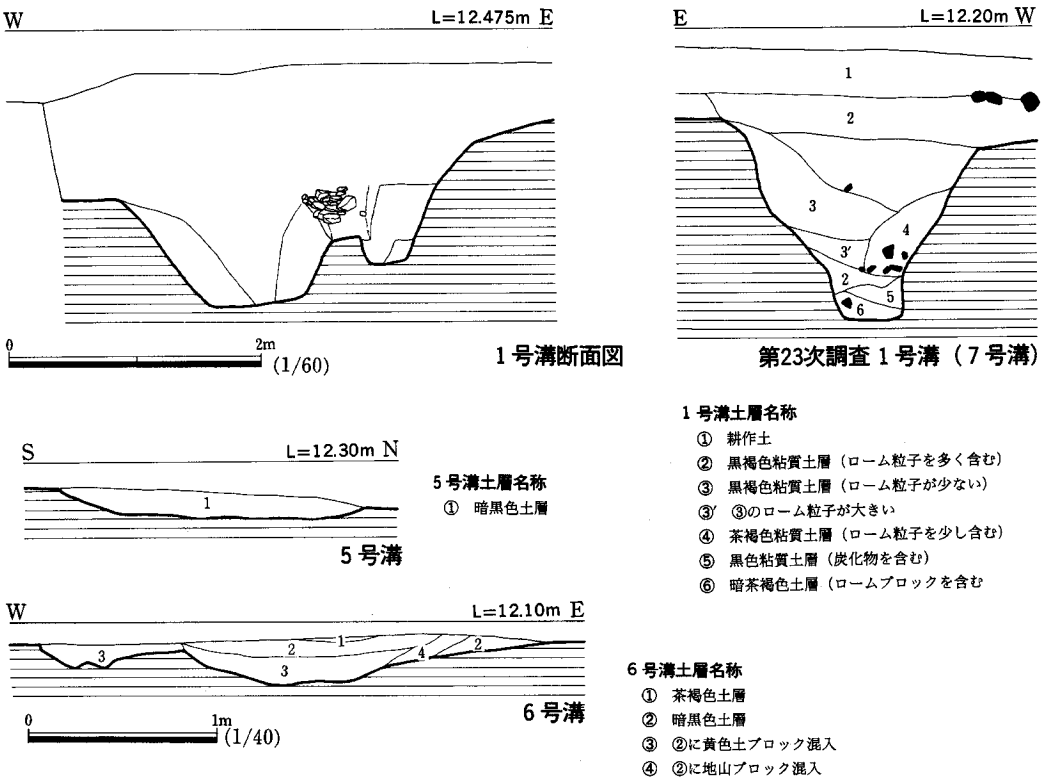


Fig. 76　1号・5号～7号溝（縮尺 1/40・1/60）

とした層である。

遺物は土師器皿，白磁椀，土師質土器鍋が出土している。

7号溝 (Fig. 76, PL. 54)

1号溝から削平を受ける。1号溝のコーナー部分の底面と南北方向の法面に一部検出した。この溝は第23次調査の1号溝に接続する。第23次調査ではこの溝は幅1～1.5m，深さ1.5mを測り，断面形はU字形を呈している。全長は6m程であるが，北端部では袋部を形成して終っている。底面には拳大の礫を敷き詰めており，床面は北側袋部へ傾斜する。当該調査区でも，1号溝のコーナー部分で礫敷き部分を認めた。又，1号溝の南北方向の東側法面で検出した幅40～50cm，深さ約45cmの小溝は断面形がV字形を呈しており，底面からは礫などを検出していないが7号溝の延長方向に位置する。更に，この小溝は2号土坑から北へ伸びた土坑状の不定形遺構に接続している。小溝の底面が7号溝方向へ傾斜していることや7号溝と方向が一致することなどから，この小溝は7号溝の延長部分と考えたい。覆土は7号溝が黒褐色粘質土，小溝が茶褐色粘質土であるが，第23次調査の1号溝の下層第4層，第6層は茶褐色粘質土であるので，覆土については問題ないと思われる。土坑状の不定形遺構と小溝が接続することから2号土坑とも結合する可能性をもっている。現状では2号土坑と全く別機能を考える積極的な材

料はない。2号土坑の湧水の著しさは，用水機能を考えた場合，7号溝との関連を強く印象づける。

遺物は敷石の礫群内より，同安窯系の椀，瓦質土器の鉢が出土したが，第23次調査では土師器杯・皿，中国白磁椀・青磁椀・皿，備前甕・鉢，瓦器椀，瓦質土器鉢・湯釜，須恵質土器鉢，滑石製石鍋・滑石製品，平瓦片が出土している。

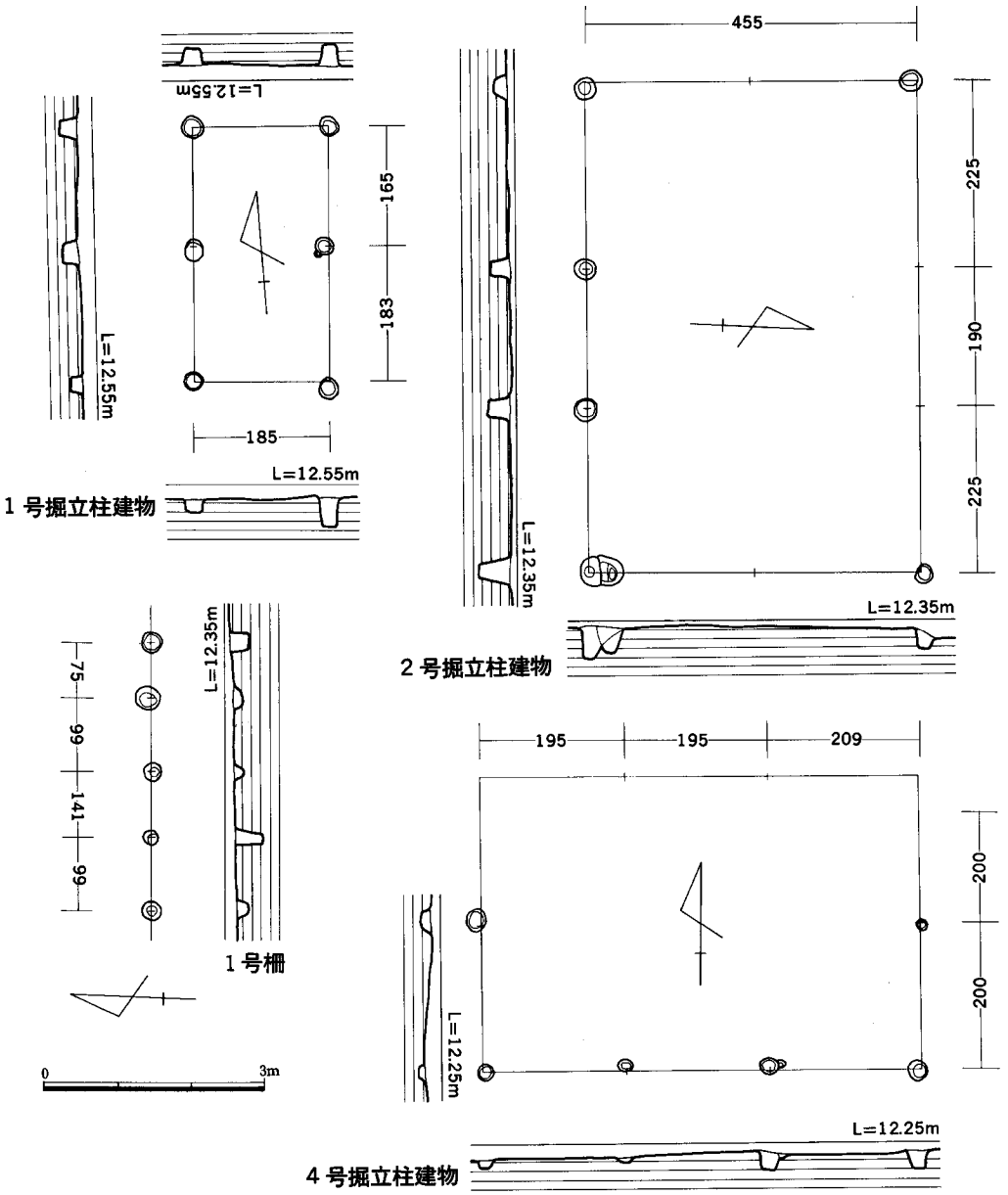


Fig. 77　1号・2号・4号掘立柱建物，1号柵（縮尺 1/100）

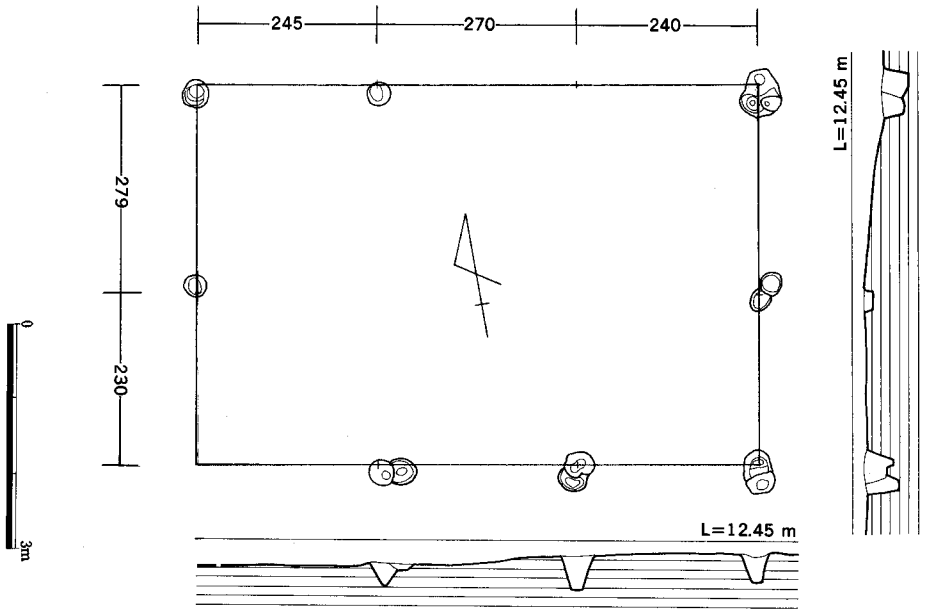


Fig. 78　3号掘立柱建物（縮尺 1/100）

8号～10号溝（Fig. 72）

3号・4号溝と同様な規模の溝である。いずれも削平のため全長を遺存していない。南北方向の溝である。8号溝は幅50cm，深さ13cm，9号溝は幅45～50cm，深さ5cm，10号溝は幅25～40cm，深さ5cmを測る。覆土はいずれも暗茶褐色粘質土である。遺物は細片にすぎない。これらの小溝の機能は全く不明。時期は中世末～近世であろう。

掘立柱建物（SB）

削平及び，攪乱坑が著しく建物を確認することは困難であったが，4棟を検出した。

1号掘立柱建物（Fig. 77，PL. 55）

南北方向の建物で，桁行2間，梁行1間の側柱だけの建物である。桁行実長3.48m，梁行実長1.85m，各柱間は梁間は6.2尺，桁間は5.8尺である。柱穴掘り方は不整円形で，径は25～32cm，深さ20～46cmを測る。柱穴覆土は黒色粘質土である。この建物は境界地にあるが，2間×2間の総柱建物になる可能性がある。

2号掘立柱建物（Fig. 77，PL. 55）

攪乱坑のため柱穴の大部分を欠く。東西方向の建物で，桁行3間，梁行2間の側柱だけの建物と考えられる。桁行実長6.7m，梁行実長4.55m，各柱間は桁間平均約7.4尺，梁間平均約7.6尺である。柱穴掘り方は円形，又は楕円形を呈し，径は36～40cm，深さ10～45cmを測る。

3号掘立柱建物（Fig. 78, PL. 55）

削平のため一部柱穴を欠いている。2号掘立柱建物とP1で重複しているが，P1が2号建物の柱穴を切っており，3号建物が後出する。東西方向の建物で，桁行3間，梁行2間の側柱

だけの建物である。桁行実長7.55m，梁行実長5.09m，各柱間は平均で，桁間8.4尺，梁間8.5尺を測る。梁行の中間柱は南側へ寄っている。柱穴掘り方は不整円形，又は楕円形を呈し，径30～42cm，深さ16～54cmを測る。

4号掘立柱建物 (Fig. 77, PL. 55)

東西方向の建物であるが，1号溝のため，北側桁行部分が削平される。桁行3間，梁行2間の側柱だけの建物と考えられる。桁行実長5.99m，梁行の現存長2.0m，各柱間平均は桁間約6.7尺，梁間約6.6尺を測る。柱穴掘り方は不整円形，又は楕円形を呈するが，削平のため小さく，径20～31cm，深さ10～26cmを測る。覆土は黒色粘質土である。

柵（SA）

1号柵 (Fig. 77, PL. 55)

南側の境界地に位置しており，柱穴5個が一列に並ぶ。掘立柱建物になる可能性をもつ。柱列実長は5.14m，各柱間平均は約4.3尺を測る。目隠し的な機能を考えたい。柱穴掘り方は不整円形を呈し，径は21～33cm，深さ12～37cmを測る。方向は3号建物の桁行に合致しており，3号建物の目隠し屏とも考えられる。

Tab. 9　第72次調査掘立柱建物計測表　(単位：cm)

番号	規模	方向	桁行		梁行		方位	床面積 m²	柱穴状態					備考
			実長（尺）	柱間寸法(尺)	実長（尺）	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	長径	短径	柱根径	
1号	4×2	南北	348(11.6)	5.8	185(6.2)	6.2	N5°E	6.44	6	11～40	25～30	23～25		
2号	3×2	東西	670(22.3)	8.5、6.3、7.5	455(15.2)	3.8、11.3	W3°S	30.49	6	10～45	36～40	24～30		柱穴10
3号	3×2	東西	755(25.2)	8.2、9、8	509(17)	7.7、9.3	W10°N	38.42	8	16～54	30～42	30～35	25	〃 〃
4号	3×1	東西	599(20)	6.5、6.5、7	200(6.7)	6.7	N89°W	11.98	6	10～26	20～31	15～27		〃 〃

3）遺物各説

1号土坑出土遺物 (Fig. 79, PL. 56)

上層からの出土が多く，下層出土の遺物は少ない。

土師器・瓦器

土師器・皿（1・2）　口径は8.5cm・9.4cm，器高1.1cm・1.7cm，底径6.0cm・7.9cmを測る。1は糸切り底，2はヘラ切り底である。2の器壁は厚く，体部は強く立ち上がる。2は褐色を呈し，胎土には砂粒及び金雲母を含む。

杯（5）　底径8.9cmを測る。糸切り底で，胎土には微砂，及び金雲母を含む。

瓦器・椀（3・4・6・7）　3はヘラ切り底，5は糸切り底である。3の内底部は黒色研磨を施し，5・6は内外面ヨコナデ，又はヘラ研磨である。3・4・7の高台は小さく，断面三角形状を呈し，径は6.6～6.7cmを測る。6の復元口径は17.9cmである。胎土はいずれも精良で，

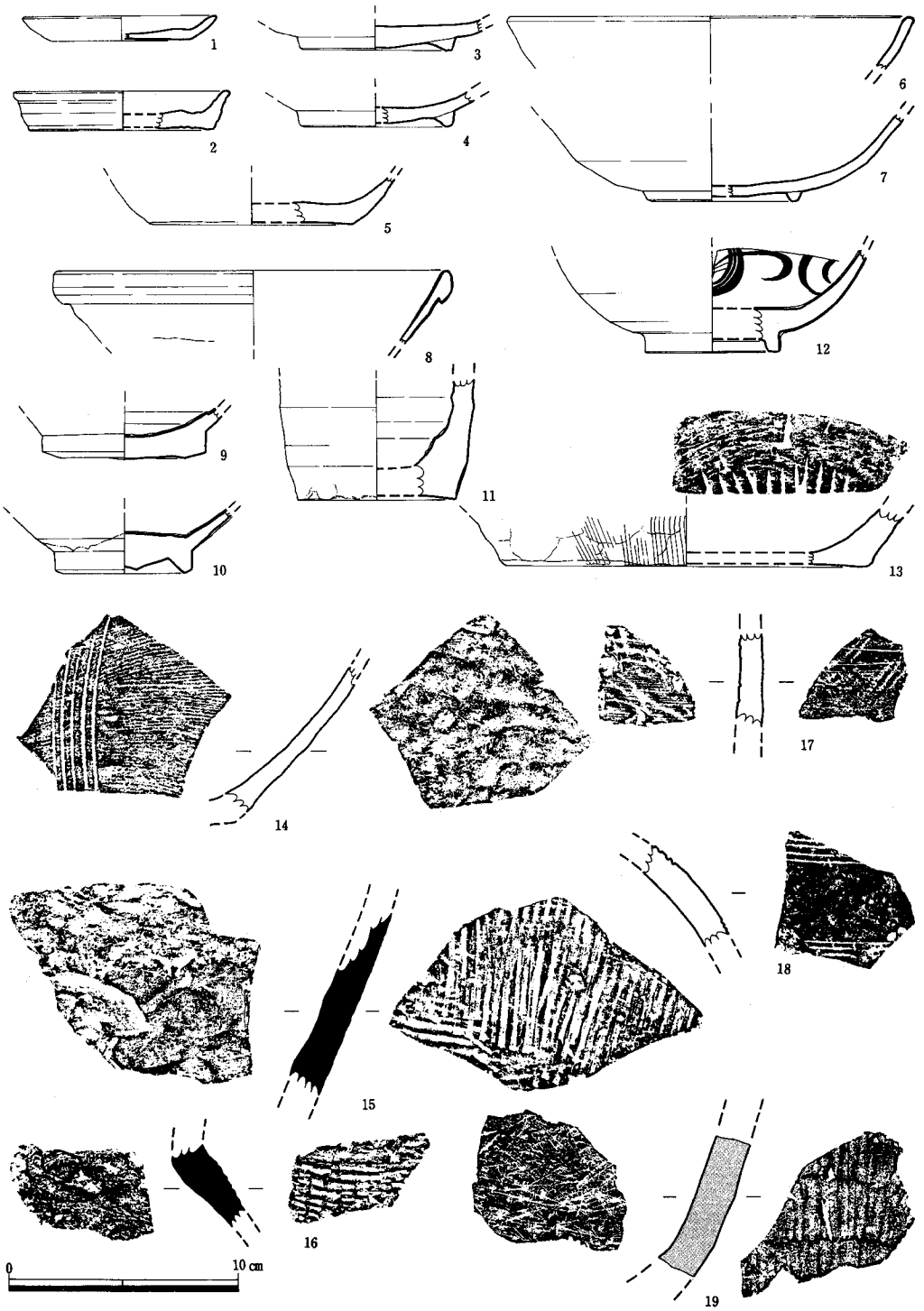


Fig. 79　1号土坑出土遺物（縮尺 1/3）

微砂を含むが，3・4・7には金雲母を含む。3は淡灰色，4は黄灰色，6の外面は黒色，7は灰黄色を呈する。

白磁・青磁・陶器

白磁・椀（8・9）　中国製の白磁椀で，大宰府分類のIV—I類である。玉縁の白磁椀で，8は口径17.4cm，9の高台径7.1cmを測る。釉は8が灰白色，9が黄灰色で，厚目に施している。

青磁・椀（10・12）　10は大宰府分類の同安窯系椀I—1類，12は龍泉窯系椀I—2類に相当する。12の内面には，ヘラ片彫りの草花文を施す。高台径は10が5.0cm，12は6.0cmを測る。10は黄灰色釉，12は緑灰色釉で，いずれも厚目に施す。12は畳付の釉を拭き取っている。

陶器・瓶（11）　小型品で，底径は6.9cmを測る。胎土は青灰色で，暗緑灰色の半透明釉を外面に施す。内面は一部釉がガラス質化している。底部の畳付き部分には付着物があり，目痕と思われる。

甕・壺（17・18）　17は甕と思われる。外面に格子目叩きを施し，内面には青海波の当て具痕を残す。胎土は灰色で，外面は茶褐色である。18は備前焼の波状文壺である。備前編年のIV～V期に属する。沈線は3～5条以上で，二段に施している。内面はヨコナデ調整，外面には黄褐色釉が薄くかかる。胎土に砂粒を含む。

土師質土器・須恵質土器

土師質・鉢（13・14）　いずれも擂鉢で，13は底径16cmを測る。13の内面は使用のため非常に磨滅しており，条痕が消える。条痕の単位は4本である。外面にはタテハケ調整後，ナデ調整を施す。14は内面にヨコハケを丁寧に施した後，5本単位の条痕を施す。外面には成形痕を残す。13は灰色，14は灰黄色を呈する。

須恵質・甕（15・16）　須恵質の甕片で，15は外面に幅広い平行叩きをタテ・ヨコ方向に施す内面は荒いナデ調整である。16は外面にヨコ長の格子目叩き（幅2.5×5.5mm）を施し，内面はナデ調整で，口縁部はヨコナデである。胎土に砂粒を含み，15は外面が暗灰色，又は褐色，16は灰色を呈する。

石製品

石鍋（19）　体部片で，外面はタテ長のケズリ痕がある。内面は細かい条痕が縦横に走る。暗灰青色を呈し，良質材である。

その他石器には砥石・磨石などが出土している。

2号土坑出土遺物 (Fig. 80・81, PL. 56・57)

土師器・瓦器

土師器・皿（1～3）　口径は1が10.5cm，2・3が10cm，器高は1が1.3cm，2が1.4cm，3が1.0cmを測る。いずれも底部はヘラ切り底で，板目痕がある。2の体部は1・3に比べ，立ち

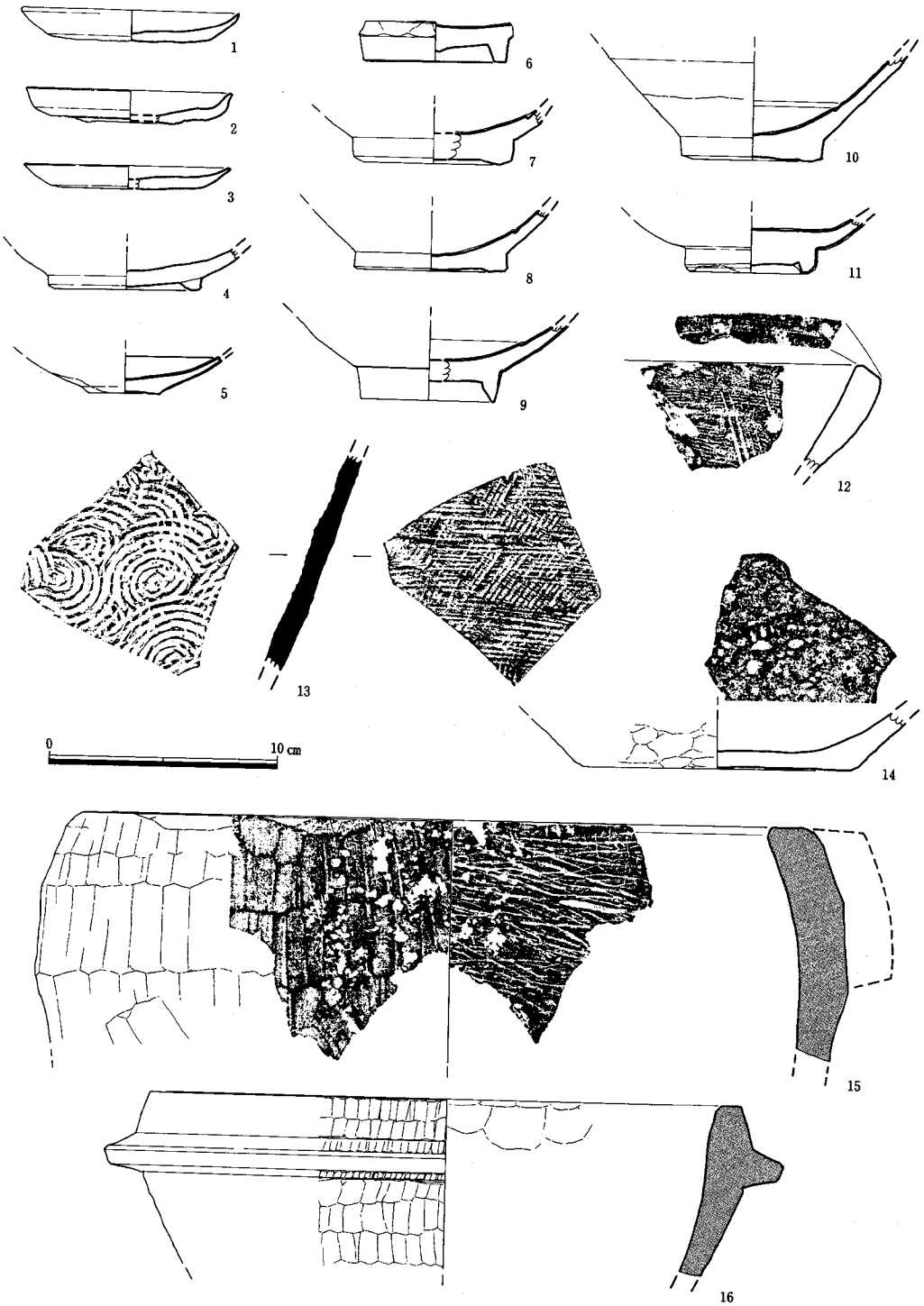


Fig. 80　2号土坑出土遺物（縮尺 1/3）

上りが強い。胎土には砂粒，及び金雲母を含む。1・3は黄灰色，2は暗灰黄色である。

瓦器・椀（4）　高台径6.7cmを測る。内外面は黒色を呈し，胎土は黄灰色である。細かい砂粒を胎土に含む。

白磁・青磁

白磁・椀（6～10）　大宰府分類では7・8・10はⅣ－1類に，6はⅧ類，9はⅤ－2類に相当する。7・8・10の高台径は6.4～7.1cmを測り，7は白色の透明釉，8・10は灰白色の半透明釉を施す。6は体部を丸く掻き取って円形に仕上げており，泥面子と同じものと思われる。

青磁・皿（5）　Ⅳ－1類に相当するものであろうか。底径が3.2cmを測り，非常に小さい。釉は黄灰色を呈し，外面まで施す。内面には圏線を有し，露胎は灰青色を呈している。

椀（11）　龍泉窯系で，Ⅰ－2類と考えられる。内底は無文である。緑灰色釉を高台内側まで厚目に施す。

瓦質土器・土師質土器・須恵器

瓦質・鉢（12）　擂鉢である。口縁部を肥厚させ，端部は平担に仕上げる。内面から口縁端部まではヨコハケ調整である。内面の条線は5本単位である。内外面は灰黒色を呈し，胎土に砂粒を含む。

土師質・鉢（14）　擂鉢で，底径12cmを測る。内面には6本単位の条痕を施すが，使用のため条痕は磨滅している。色調は灰黄色を呈する。

須恵器・甕（13）　内面には同心円の当て具痕，外面は細かい格子目叩きを施した後，ヘラ条工具によってヨコナデを施す。外面は黒色を呈し，釉薬がかかったように光沢をもっている。胎土，及び内面は紫色を呈する。胎土に微砂を含んでいる。

石製品

滑石製品（15～19）　15～17は石鍋である。15・17は平面形が隅丸方形状を呈し，タテ長の把手を4ヵ所に設ける器形である。15の体部は大きく内弯する。復元口径は33cmを測る。外面はタテ長のケズリ痕を残し，内面にはヨコ方向の条痕がある。17のケズリ調整は荒く，外面のタテ長ケズリ調整は不規則で，表面に粗成形痕を残している。又，内面は粗ケズリの状態で，タテ方向のノミ痕を残す。外面中位に沈線がある。17の器壁の厚さは2.9cmを測る。未製品である。石鍋製品については，長崎県西彼杵郡一帯から生産・供給されるといわれており，未製品の段階においても供給されることがあったのか否か，今後に課題を残す資料である。15・17ともに材質は良質で，15は黒灰色，17は茶褐色，又は茶橙色を呈する。17には煤の付着がある。16は鍔付の鍋で，復元口径は13.5cmを測る。外面はタテ長のケズリ痕を残し，内面はケズリ痕を残さない。口縁部に若干，整形痕がある。良質材を用い，黒灰色を呈する。18・19は石鍋片を再加したものである。18は方形に切り取った素材の縁辺部に更に段を設けているもので，縁辺には打撃調整痕やノミ痕を残している。再加工は完了していない。内外面を平坦にするため

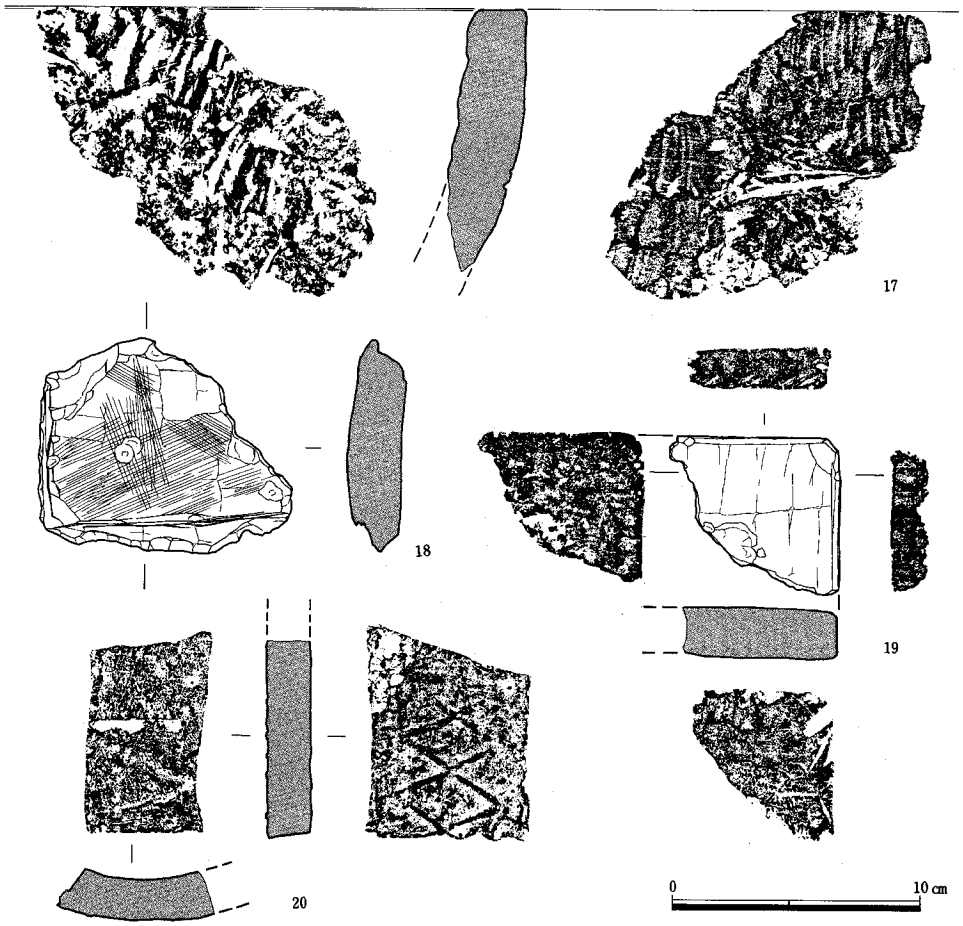


Fig. 81　2号土坑出土遺物（縮尺 1/3）

に研磨を行っている。19は方形を呈し，側面は丁寧なケズリを施している。全体にケズリ痕は顕著ではない。18は現存長10.7cm，最大厚2.3cm，19は現存長7.2cm，厚さ2.2cmを測る。材質は良質で，18は灰白色，19は暗灰褐色である。19には煤が付着している。

瓦　類

平瓦（20）　須恵質で，非常に焼成が良い。谷部に布目，及び縄目痕が残り，背部には斜格子目の叩きを施す。側面はヘラによる切り離しで，小口はヘラ調整である。胎土に砂粒を含み，青灰色を呈する。

1号溝出土遺物 (Fig. 82～85, PL. 57・58)

土師器

皿（1・2）　1の口径6.8cm，器高1.4cm，底径4.0cmを測る。底径と口径の比は大きい。胎土

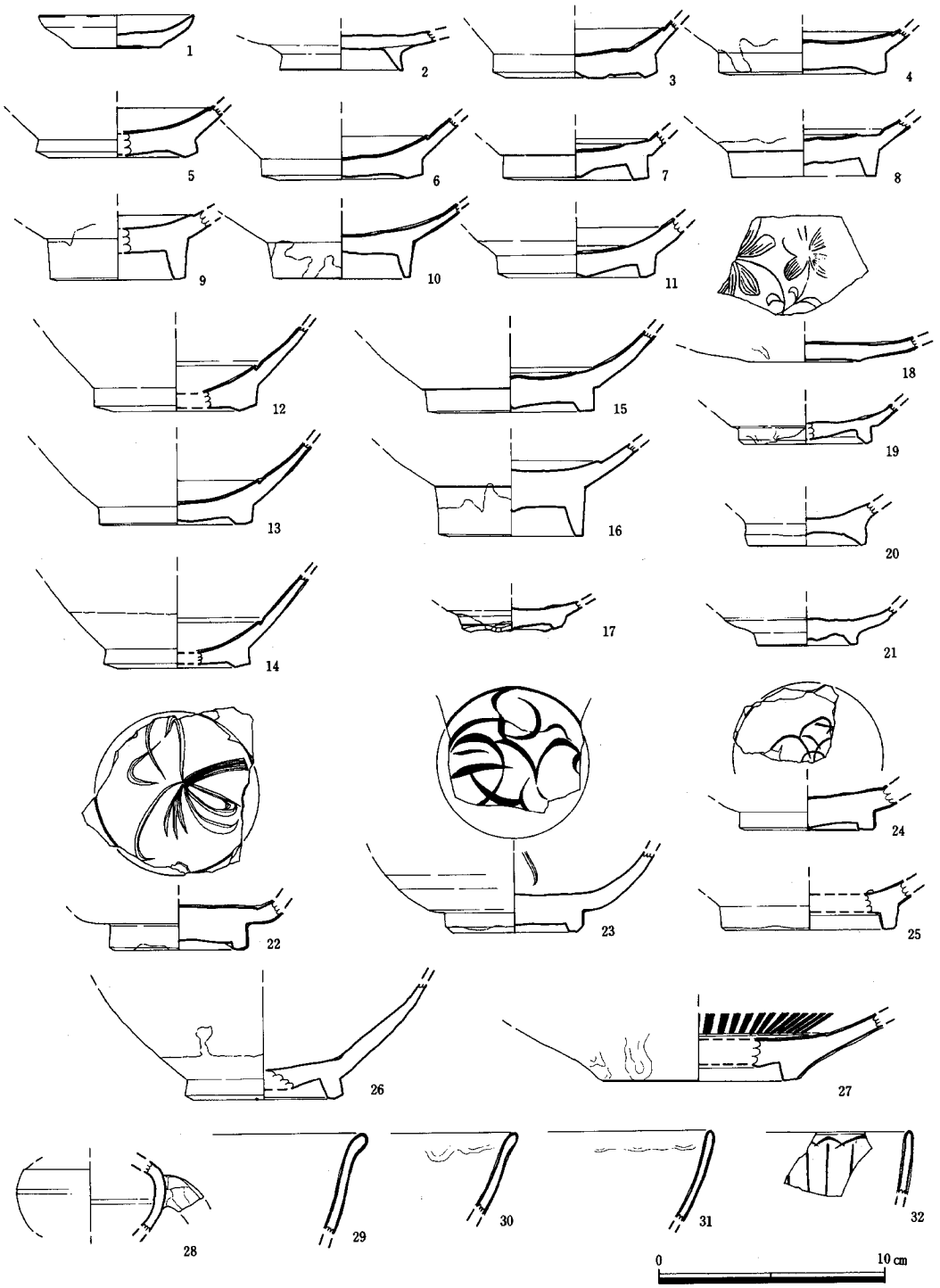


Fig. 82　1号溝出土遺物（縮尺 1/3）

に砂粒，金雲母を含む。2は台付皿で，高台径5.5cmを測る。1は褐色，2の内外面は黒色で，高台は赤橙色である。

白　磁

椀（3～6・13～17・21・22）　3～17は中国製である。大宰府分類では3～6・12～14がⅣ－1類で，見込みに沈線を施し，玉縁口縁を有する。釉は灰白色の半透明釉で，厚目に施す。高台径は6.6～7.4cmを測る。7・8はⅧ－2，又はⅧ－3類で，内底見込の釉を輪状に掻き取っている。11・15はⅧ－1類で，見込みの釉を掻き取るが，15には目痕がある。7・8・15は緑味を帯びた灰色釉，11は灰色釉で，いずれも厚目に施す。高台径は6.2～7.4cmを測る。9・16はⅤ－2類に相当し，内底見込みに段を有している。10はⅤ－3類に相当し，内底見込みに沈線がある。9は緑色を帯びた灰色釉，10は灰白色釉，16は半透明の灰黄色釉である。高台径は9が6.0cm，10が6.2cm，16が6.4cmを測る。20は李朝の椀で，高台径5.3cmを測る。釉はやや緑味を帯びた灰色で，氷裂がある。胎土は淡黄褐色を呈し，陶器質である。目痕は畳付と内底にあるが，5ヵ所を数える。17は小椀で，高台畳付を5分割の輪花状にケズリ込む。高台径は4.6cmを測る。外底に墨書があるが，判読できない。

皿（18・19）　18は底形5.0cmを測る。内底には草花文を線彫りする。釉は半透明の灰白色を呈し，厚目に施す。19は李朝と考えられる。高台径は6.0cmを測り，緑味を帯びた灰色釉を外底まで施す。気泡が多く，内底は充分に釉が塗布されておらず露胎を呈している。内面の釉は刷毛目状である。胎土は淡黄褐色で，陶器質である。

以上の他，把手の付いた小形壺状の破片(28)がある。器形は不明で，緑味をもった灰色釉を外面に施している。

青　磁

椀（22～26・29～32）　25は高麗青磁で，高台径は7.5cmを測る。器表面のケズリ調整は荒く，うぐいす色の釉を外底まで施す。内底と畳付に目痕があるが，畳付は掻き取っている。胎土は灰青色で，灰褐色の粒子を含む。22～24・29～32は龍泉窯系の青磁で，29～32は明代である。22・23は大宰府分類のⅠ－2類，24は同じくⅠ－5類に相当する。22・23の内底には草文をヘラ片彫りし，24の内底には印文を施す。釉は22が青緑色，23がうぐいす色，24が淡緑灰色である。高台径は23・24が6.2cm，25は6.0cmを測る。29・30は端反りの椀で，緑灰色釉を厚目に施す。31・32は蓮子椀で，31は無文，32は外面に線描きの蓮弁を描く。31は淡緑灰色釉，32は緑灰色釉で，厚目に施す。26は同安窯系の椀であろう。高台径は7.0cmを測る。緑灰色釉を体部下位まで施すが，黄色の斑点が吹いている。胎土は灰青色で，釉は充分に溶けていない。

皿（21・27）　21は李朝の皿で，高台径4.5cmを測る。釉は褐色を帯びた緑灰色である。畳付と見込みに目痕がある。目痕は胎土と砂の混合土である。胎土は灰褐色を呈する。27は龍泉窯系の大皿で，高台径は8.6cmを測る。緑色釉を厚目に外面まで施す。体部内面には菊花状にヘラ彫

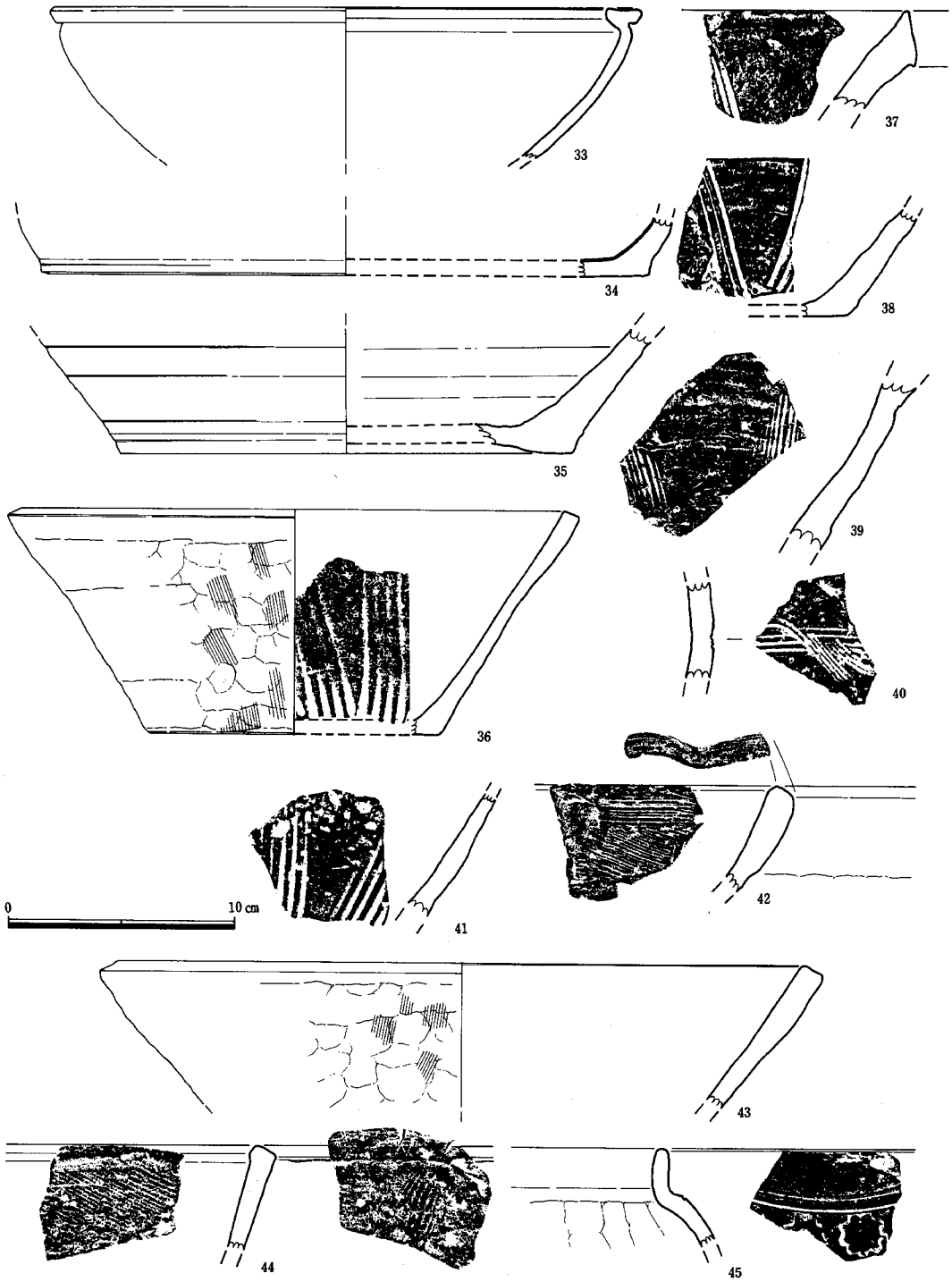


Fig. 83　1号溝出土遺物（縮尺 1/3）

りしている。

陶　器

盤（33・34）　33・34は中国製である。33は口径25,7cmを測る。オリーブ色の釉を内外面に施す。胎土は暗灰色である。34は底径26,9cmを測り，内面に黄緑色釉を厚目に施す。胎土は褐色である。黄釉盤と思われる。

鉢（37〜39）　国産陶器で，備前焼の擂鉢である。37の口縁は端部をつまみ出して平坦にしており，IV類に相当する。おろし目は，37が3本以上，38が4本以上，39が9本以上を単位とする。39の下位はおろし目が使用により磨滅している。37は胎土が灰色，内外面は褐色，38は灰黄色，39は茶褐色を呈する。

甕・壺（35・40）　35は底径20cmを測る内外面はヨコナデ調整で，外面は茶褐色釉を施す。胎土は砂粒を含み，灰青色である。国産品である。40は備前焼の波状文壺の破片で，外面に数状の横線を施す。内面はヨコナデ調整。胎土に砂粒を含む。備前焼のIV〜V期に相当する。

以上の他，東海系の灰釉長頸壺片が1点出土している。猿投窯の可能性がある。

瓦質土器

鉢（36〜44）　36・41は擂鉢で，他は捏鉢か否か不明。36は口径25.3cm，器高10cmを測る。内面には細かいヨコハケを施す。おろし目は4本単位であるが，使用のため磨滅している。外面はタテハケ後，ナデ調整である。41は内面に5本以上の単位でおろし目を施す。いずれも胎土に砂粒を含み，36は淡黄褐色，41は黄橙色である。42〜44は口縁部を肥厚させ，42の端部は丸味をもち，43・44は平坦に仕上げる。43の復元口径は31.9cmを測る。片口の捏鉢であろうか。いずれも内面はヨコハケ調整で，42は平坦部まで施す。43・44の外面にはタテハケ痕がある。胎土に砂粒を含み，42・43は黄灰色，44は灰白色を呈す。

湯釜（45〜47）　45・47は非常に硬質の焼成で，45の肩部には沈線，及び印花文を施す。46の外面も同じく花文を施す。47の肩部は四菱の印文を施す。いずれも口縁内面と外面はヨコナデ調整である。45は灰色，47は黒色，46は灰褐色で，胎土は精良である。46には金雲母を含む。

鼎（48）　体部の破片で，外面下位に格子目叩きを施す。体部にはタテハケ痕が残る。内面はヨコハケ又はヨコナデ調整。黒色又は黒灰色を呈する。

火舎（49・50）　50の外面は2条の小さな突帯を貼り付け，その間に雷文を印刻する。内面はヨコハケ調整である。49は火舎の脚で，横断面形は三角形状を呈し，側辺に唐草状のヘラ彫りを施す。外面はヘラによるナデ調整を行っている。外面はいずれも黒色で，49の胎土は精良，50の胎土には砂粒，及び金雲母を含む。

以上の瓦質土器の他，器種不明の(54)がある。この土器は体部が弯曲しており，鍋などの底部と思われるが，形状が把握できない。外面に斜格子目の叩きを施し，赤色顔料を塗布している。内面はナデ調整である。一部に叩きの無い個所があり，脚の貼り付け部分とも考えられる。

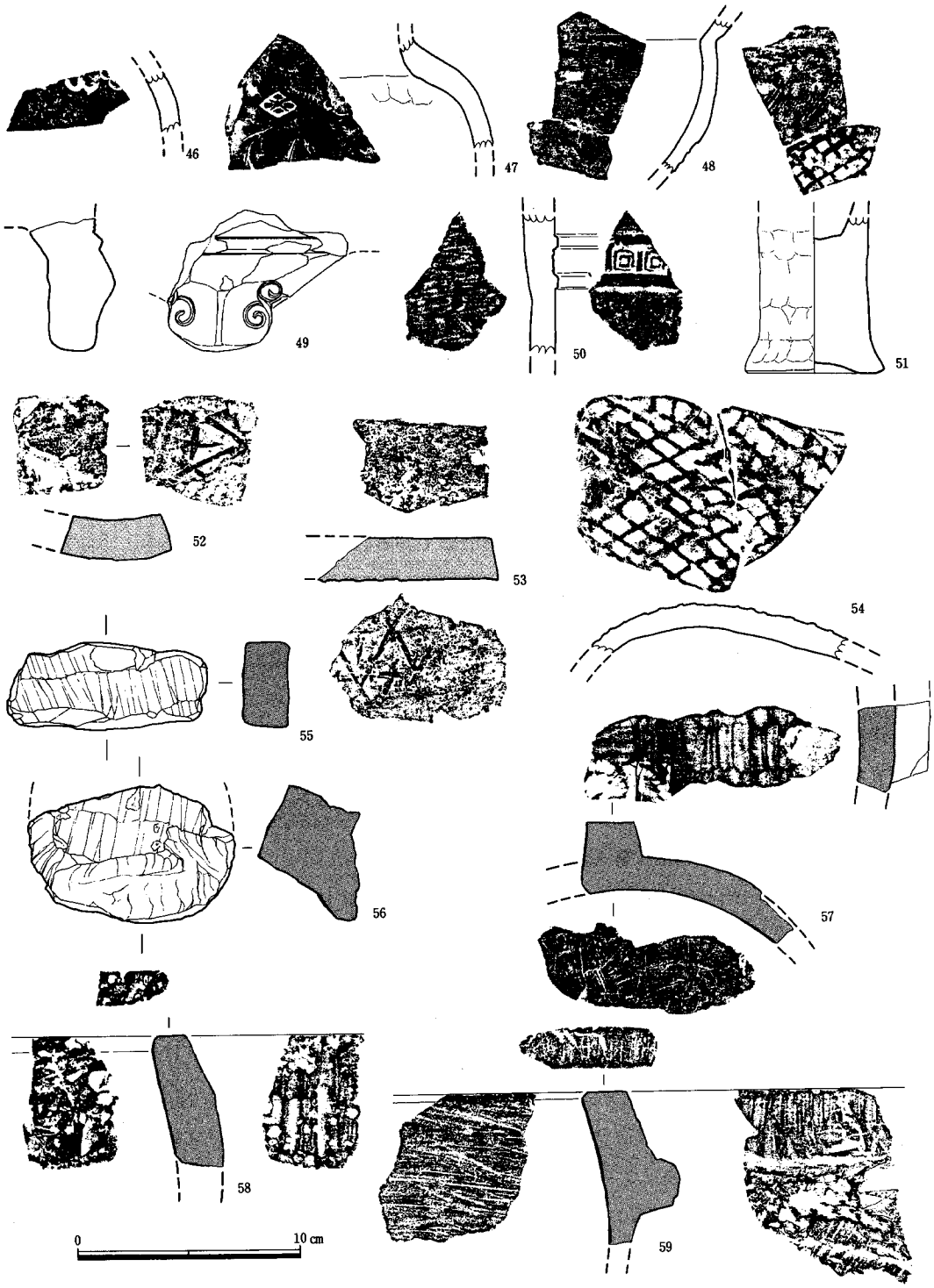


Fig. 84　1号溝出土遺物（縮尺 1/3）

三脚鍋であろうか。胎土は精良で，黄灰色を呈する。

瓦　類

平瓦（52・53）　いずれも背部に斜格子目叩きを施し，53の谷部はナデ調整で，52の谷部には布目が残る。52の側面はヘラ切り離しである。胎土に砂粒を含み，青灰色を呈する。須恵質の焼き上がりである。

石製品・土製品

石鍋（57～61）　全部で26点出土。57・58・61はタテ長の把手を有する器形で，外面はタテ長のケズリ痕を残し，内面は丁寧なケズリである。57の内面には条痕が残る。59は鍔を有した器形であるが，外面のケズリが荒く，又，鍔の高さも起伏がある。更に内面にはヨコ方向の条痕が残っており，完全に仕上がっていない。未成品であろう。60は大型の石鍋で，体部と底部外面にタテ長のケズリ痕を残し，内底にはノミ痕を残している。未成品と思われる。ただし，この石鍋は再利するために体部や底部が切断されており，体部の一部にも切断用の溝がある。全体に煤が付着している。材質は良質で，57は灰青色，58は茶褐色，59は緑灰色，61は淡赤橙色を呈する。55は石鍋再成品で，長さ9cm，幅39cm，厚さ2cmを測る。側面は面取りを行っている。石錘の用途が考えられる。銀灰色で材質は良好である。56は滑石の塊りを平面形が楕円形になるよう成形しているもので，縁辺は面取りのケズリを施している。A面にはタテ長のケズリ痕を残し，B面は粗成形である。側面の大部分が自然面を残す。石鍋未成品の転用と考えられる。黒灰色を呈し，一部緑味をもつ。硬質で，質は余り良好ではない。

土製品（51）　支脚と考えられるが，上端に径3cm，深1.0cmの窪みがあるため即断できない。底部が張り出した円柱状を呈し，現存高7.1cm，底径6.2cmを測る。窪みの部分は表面が荒れて

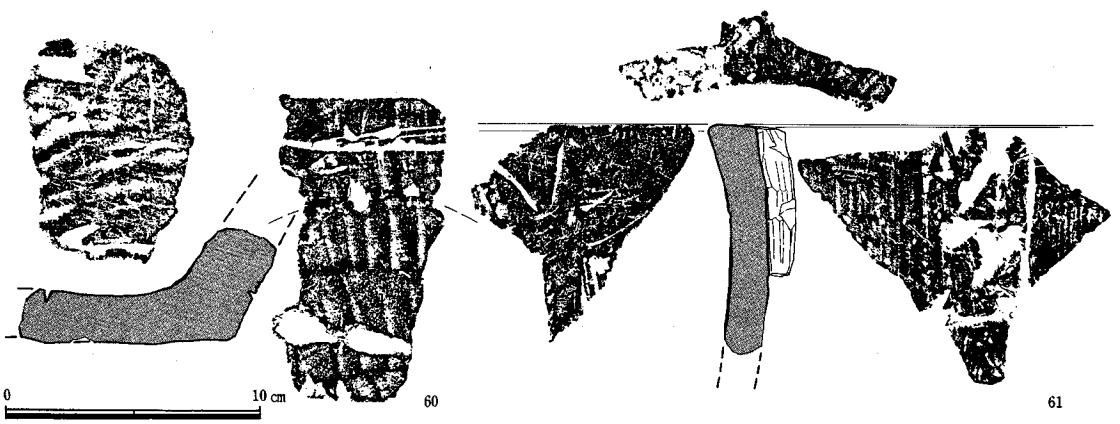


Fig. 85　1号溝出土遺物（縮尺 1/3）

おり，粘土の接合面の可能性もある。内外面はナデ調整。胎土に砂粒を含み，黄褐色を呈する。

その他，馬の歯と考えられる獣骨や，鉄滓５点が出土した。

５号溝出土遺物 (Fig. 86, PL. 58)

土師器・杯（１）　糸切り底で，底径8.0cmを測る。胎土には砂粒，雲母を多く含み，褐色を呈する。

白磁・椀（２）　小さな玉縁口縁である。灰白釉を厚目に施す。大宰府分類のIII類であろう。

青磁・椀（３）　龍泉窯系で，内底にヘラ彫りの草文，体部内面にヘラ彫りの草花文と櫛描文を施す。釉は厚目で，緑灰色を呈する。大宰府分類のＩ－２ｂ類に相当する。高台径は7.0cmである。

その他，石鍋片１点，鉄滓１点が出土している。

６号溝出土遺物 (Fig. 86, PL. 58)

土師器・皿（４・５）　口径は7.2cm・7.0cm，器高1.7cm・1.9cm，底径5.3cm・5.8cmを測る。底部は糸切りで，体部はヨコナデ調整である。胎土に砂粒と金雲母を含む。黄灰色を呈する。

白磁・椀（６）　大宰府分類のIV－１類である。高台径6.2cmを測る。厚目の灰黄釉には貫入がある。

土師質土器・鍋（７）　口縁部は内弯気味に外反し，内面はヨコハケ調整。外面には媒が付着する。胎土に砂粒を含み，内面は黄褐色，外面は暗褐色を呈する。

その他，鉄滓２点が出土している。

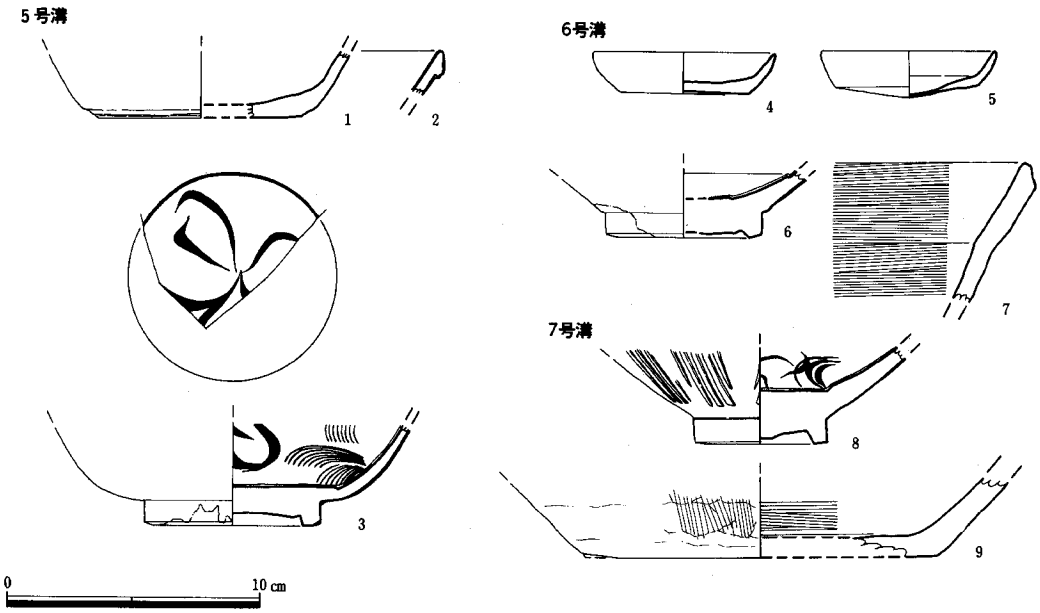


Fig. 86　５号・６号・７号溝出土遺物（縮尺 1/3）

7号溝出土遺物 (Fig. 86, PL. 58)

青磁・椀（8） 同安窯系椀で，高台径5.2cmを測る。体部外面にヘラ彫りの櫛歯文を，内面にはヘラ彫りの雲文を施す。釉は厚目で，濁緑灰色を呈する。大宰府分類のIII類である。

瓦質土器・鉢（9） 捏鉢で，内面にヨコハケ調整。外面はタテハケ痕がある。内外面は黒色を呈する。

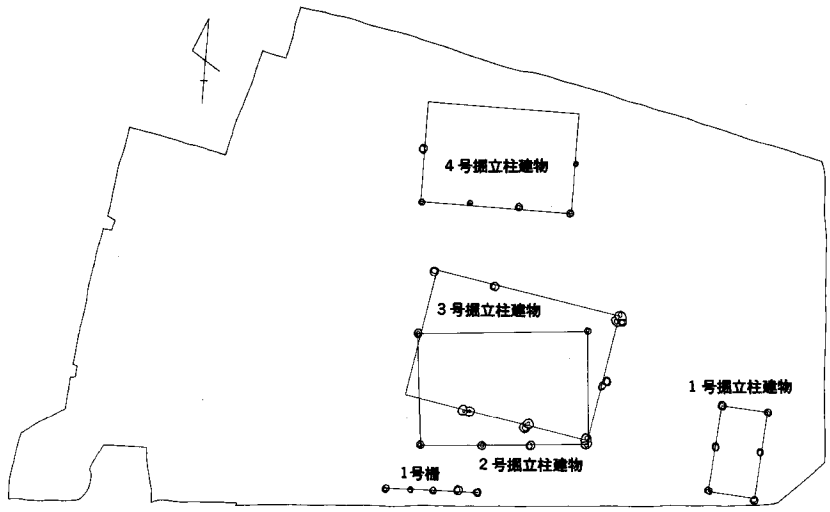
4）小　　結

遺構は土坑4，溝10条，掘立柱建物4棟である。遺構面の削平が著しく，1号溝や1号・2号土坑を除いて，いずれも遺存状態が悪い。特に掘立柱建物に関しては，柱筋が並ぶものが多いが，柱穴自体が不足しており，建物としては把握することはできなかった。

土坑の内，1号土坑・2号土坑は埋め戻しの覆土が地山のブロックを多く含み，覆土自体に締りがなく，且つブロック間に隙間がみられるなど短期間で埋め戻しが行われたことを示しており，自然埋没やゴミ処理などの土坑とは考え難い。2号土坑に関しては溜水用の土坑を想定したが，1号土坑についても周壁に起伏があり，壁の剝落が著しいなど溜水用の土坑と考える方が妥当かもしれない。1号土坑の遺物は12～13世紀を主体とするが，上層からの土師器2・5は14世紀以降の器形を示し，又備前焼の波状壺なども出土しているので，埋戻しの時期については14世紀～15世紀を考えたい。2号土坑の底面の礫中からは同じくヘラ切りの土師皿の出土もあるが，同じく礫中より出土した石鍋(16)は13世紀代に比定できる。又，土坑覆土中より出土した土師質・瓦質鉢の(12・14)は，少なくとも13世紀後半以降のものと考えたい。よって，土坑底の礫群においては，第23次調査1号溝とほぼ同時期を示すものと思われる。又，埋戻しの時期は，少なくとも1号溝掘削以前と考えたい。

溝は10条を検出した。1号溝は矩形に曲がる溝で，濠の機能を有している。東側の溝底は立ち上っており，第53次調査の1号溝に接して終るもので，東西長は約47mが推定できる。又，溝の南側は第32次調査の1号溝と接続し，第55次調査検出の東西方向の1号溝と接して終わるもので，南北長は約68mと考えられる。郭を形成する濠ではあるが，湧水の著しさも考えると，全くの空濠とは考え難い。溝からは備前鉢，瓦質湯釜・鼎，青磁連弁椀，瓦などが出土しているが，鼎や備前鉢は16世紀に出現するものである。又，瓦質の瓦は第19次調査で出土した平瓦，丸瓦と同形・同質である。よって，溝の時期は16世紀代と考える。5号・6号溝はやはり，東西方向から南北方向への矩形を呈する溝で，重複関係から同一機能をもっていたと考えたい。溝は削平を受けているが，本来1m前後の深さをもっていたと考えられる。溝の形状や深さから考えて建物や屋敷地を区画する溝である。5号溝は12～13世紀代，6号溝は土師質鍋の材質・形状でみるかぎり，15世紀後半～16世紀の幅を考えておきたい。7号溝は，第23次調査の1号

溝に接続するもので，遺構各説で述べたように2号土坑と有機的な結合をもつ可能性がある。そうすれば，この溝の機能は濠と考えるよりも用水的な役割が大きい。第23次調査でもこの溝



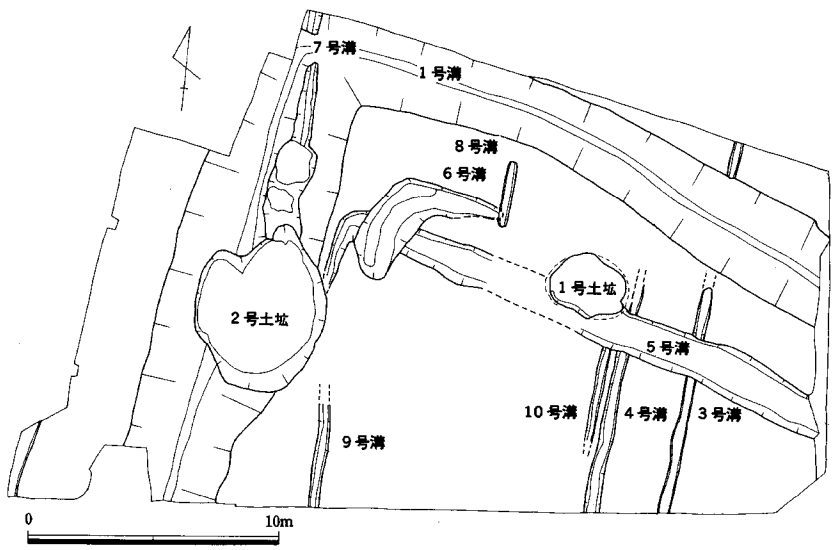


Fig. 87　掘立柱建物，溝配置図（縮尺 1/300）

の大部分が断面形袋状を呈し，且つ壁が荒れている点を指摘したが，溜水との関係を強く伺わせるものである。第23次調査では出土した豊富な遺物によって，14～16世紀に位置づけた。再度遺物を検討すれば，土師器坏の器形・法量は観世音寺子院・金光寺跡調査の黒色・黒灰色土層出土の土師器坏に近い。この層は16世紀前半～中頃を考えられており，当該調査出土の土師器坏も16世紀を前後する時期としたい。よって礫中から出土した遺物が，12～13世紀を主体とするものの，溝の埋没時期は16世紀と考えたい。これらは出土した瓦が，第19次調査の16世紀の溝から出土した瓦と同質であることからもいえる。

3号・4号・8号～10号溝は幅50cm，深さ10～20cm程度の小溝であるが，いずれも断面形がU字形を呈し，南北方向である。機能は当初，畑地の地割的役目をもつものと考えたが，各々

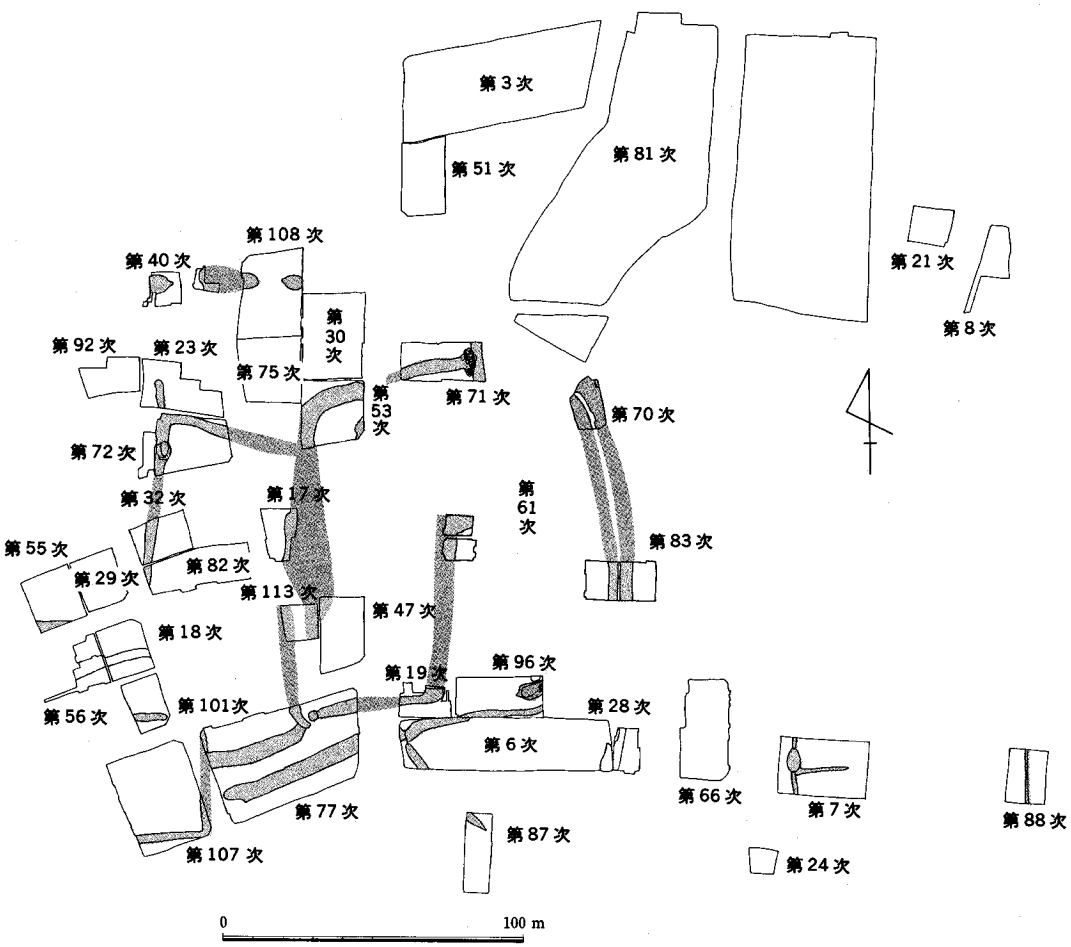
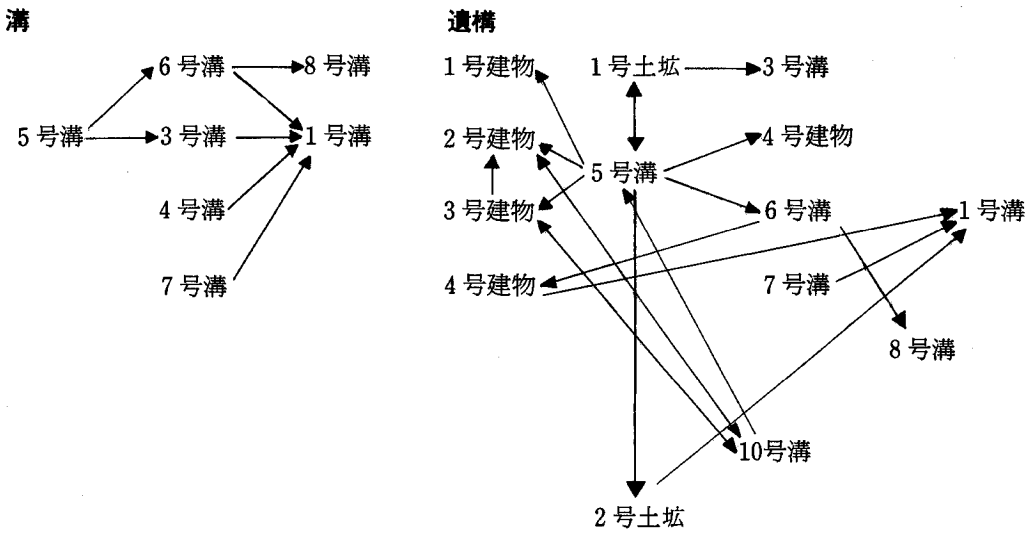


Fig. 88　有田地区中世濠の状態（縮尺 1/2,500）

の溝の間が等間隔ではないことや，又，地割溝にしては深さや幅が一定しているなどから，別の機能を考えたい。各溝そのものも方位には若干のズレもあり，又，４号・10号小溝のように重複する小溝もあることから，時期差も存在すると考えられる。３号・４号溝は同一方向で，両者の溝の間が約2.4mを測る。溝は平行関係にあるので，道路の側溝としての機能も充分に考えられる。とすれば，10号・11号小溝は道路改修の痕跡であろうか。３号・４号溝は５号溝を切っており，時期は３号溝が12世紀以降，４号溝は，糸切り底の坏や土師質の擂鉢などから14世紀以降のが考えられる。８号溝は瓦質の平瓦片が出土しており，16世紀前後である。以上の小溝は遺物においては大きな差をもっているが，覆土には大きな差が無いので，非常に近い時期の使用と考えられる。

掘立柱建物の時期は不明であるが，３号・４号建物は同一方位を示しており，同時に存在したと考えられる。同じく，１号・２号建物も同一方向を示しており，併存したものかと考えられ，３号建物は２号建物に先行するので，１・２号建物，３・４号建物の関係が成立する。又，１号・３号建物は第23次調査の１号建物とも方向が合っている。時期は２号・３号建物を構成する柱穴が，いずれも４号・５号溝，10号小溝を切っており，又，１号建物の柱穴も５号溝を，４号建物は６号溝を切っている。以上からこれらの建物は１号建物が12世紀以降，２号・３号建物は14世紀以降，４号建物は15世紀後半以降の建物であることが理解できる。先行関係は以下のとおりである。（井沢）



註　九州歴史資料館「大宰府史跡昭和55年度発掘調査概報」昭和56年３月
註　福岡市教育委員会「有田・小田部第１集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集　1980
註　福岡市教育委員会「有田・小田部第４集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第16集　1983

5．第102次調査　（調査番号　8512）

1）調査地区の地形と概要

調査地は，福岡市早良区小田部２丁目154番地に所在する。対象面積は330m²で，調査面積は290m²である。

八つ手状に伸びる小田部地区台地の中央に位置し，標高約10.9mを測る。周辺はわずかに北

Fig. 89　第102次調査遺構配置図（縮尺 1/200）

に傾斜するが，地内は削平のためほぼ水平である。

当該地北側では第4・48次調査を行ない，古墳時代の竪穴住居跡などの遺構を検出している。今回の調査は農業用の個人倉庫建設に先立って実施し，調査期間は昭和60年9月26日～11月7日まで行った。

深さ10～20cmの表土の下に遺構面であるロームを検出した。調査区東側には，堆肥置き場と思われる大きな攪乱などがあり，遺構の多くは西側で検出した。検出した遺構は，古墳時代後期と思われる大型の柱穴を持つ掘立柱建物1棟，それに伴うと思われる3本柱の柵，近世以降の埋甕，ピット群である。これらの遺構群もほとんどが削平のため，残りが悪い。

2）遺構各説

掘立柱建物（SB）

1号掘立柱建物 (Fig. 90, PL. 59, 60)

南北に主軸をとる3×3間の総柱建物で，1号柵に並行する。桁行全長5.85m，梁間全長4.5mを測る。柱穴掘り方は，本来方形を呈していたと思われるが，削平のため様々な形をしている。柱穴掘り方は一辺の長さ90～145cm，柱根径は39～48cmを測る。削平のため遺構の残りは悪く，柱穴の深さは20～65cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。出土遺物は量的には多いものの小片がほとんどで，黒曜石，土師器片，須恵器片が出土した。土師器がもっとも多く，須恵器は少ない。時期の分かるものは少ないが，それらはすべて古墳時代後期に属する。

柵（SA）

1号柵 (Fig. 90, PL. 59)

1号掘立柱建物に並行する3本柱の柵である。柱穴の配置から見て，調査区北側で曲がるものと思われ，北西隅で検出した柱穴につながるものと思われる。柱穴掘り方径35～55cm，柱根径は14～28cm，深さ15～50cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。一列の柱間距離90～120cm，直線部分の各列の間の距離は約2.25mを測る。出土遺物はきわめて少なく，土師器・須恵器の小片のみである。

Tab. 10　第102次調査掘立柱建物計測表

建物番号	規模	方向	桁行		梁間		方位	床面積(m²)	備考
			実長(m)	柱間寸法(尺)	実長(m)	柱間寸法(尺)			
1号建物	3×3	南北	5.85	6.5、6.5、6.5	4.5	5、5、5	N－6°－W	26.325	総柱

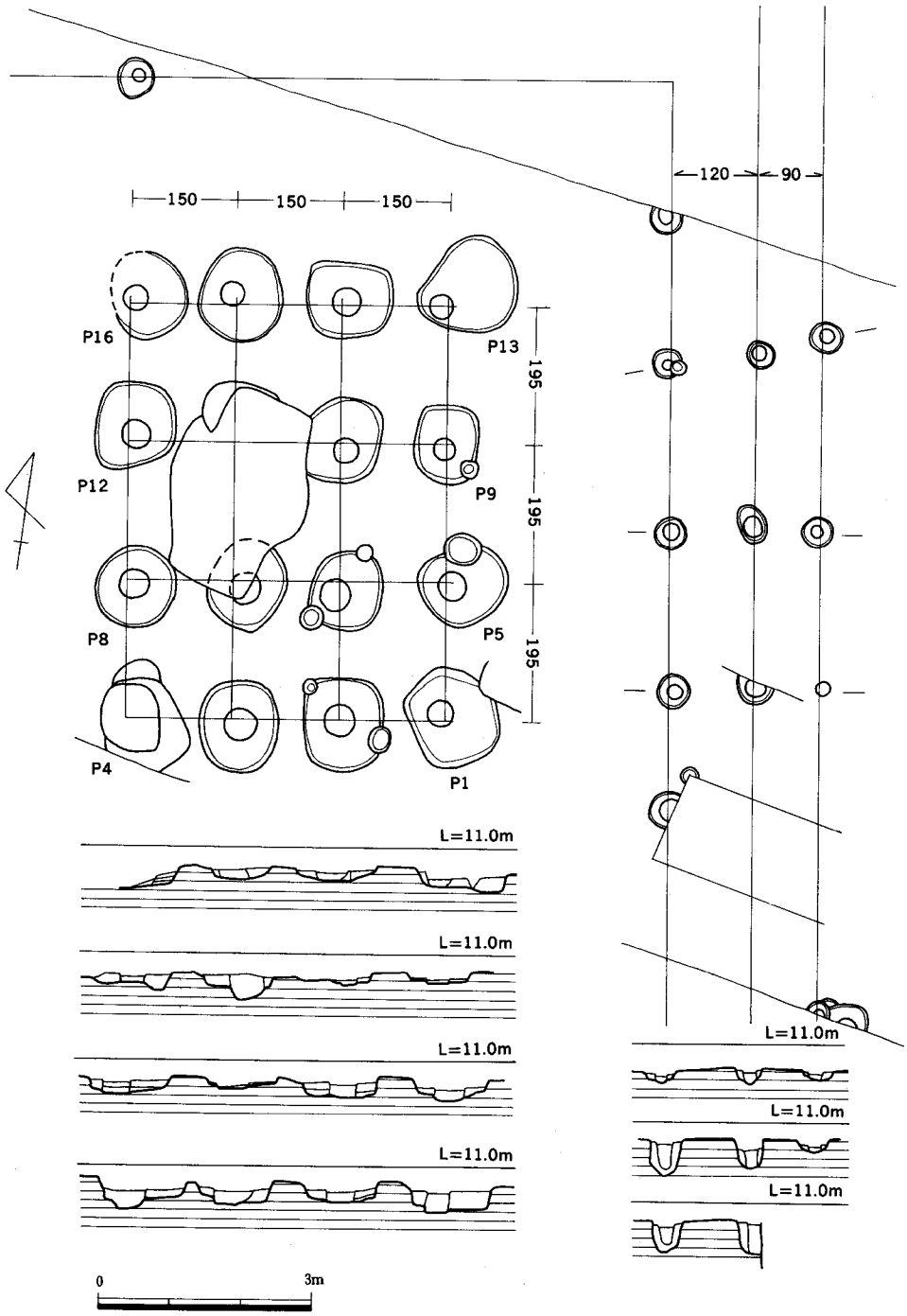


Fig. 90　1号掘立柱建物，1号柵（縮尺 1/100）

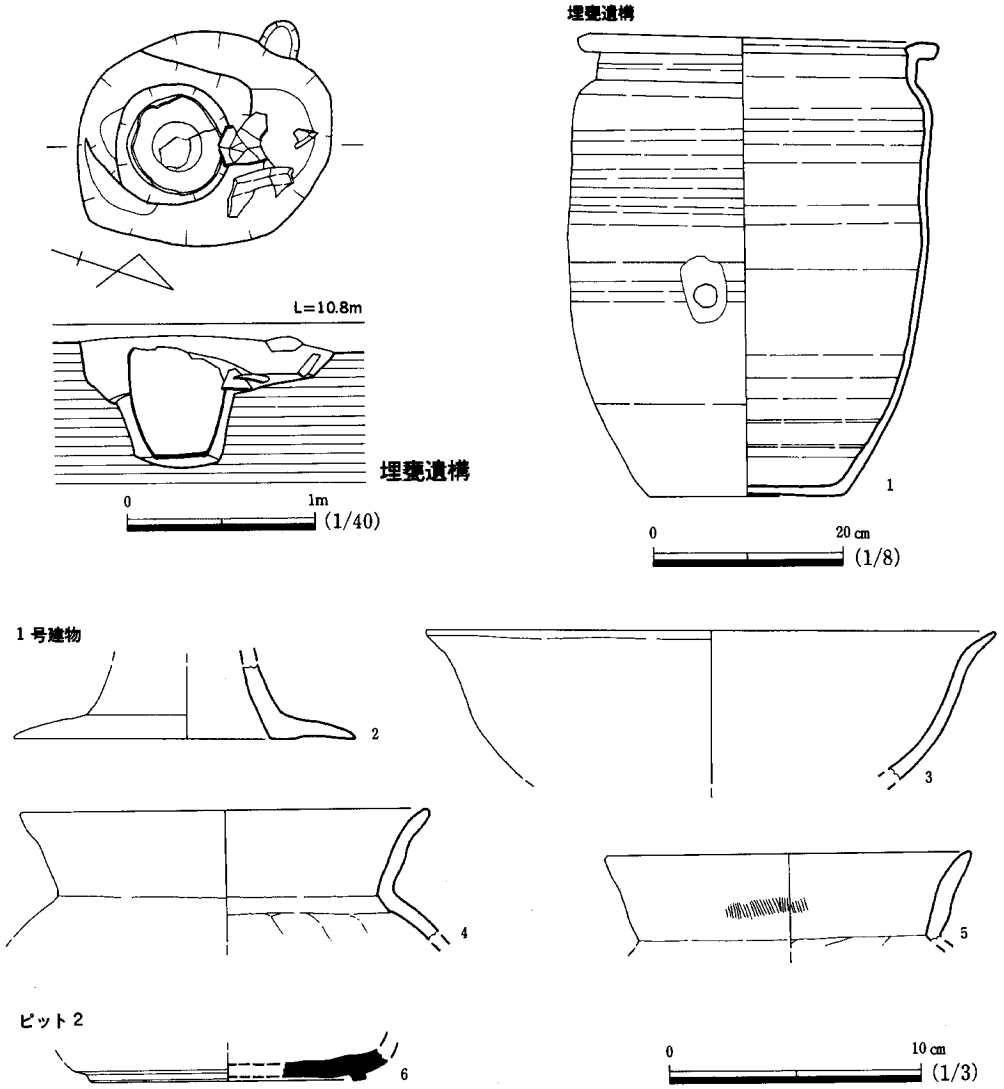


Fig. 91 埋甕遺構（縮尺 1/40），及び出土遺物（縮尺 1/8・1/3）

その他の遺構（ＳＸ）

埋甕遺構 (Fig. 91, PL. 60)

１号掘立柱建物の南側で検出した。掘り方プランは楕円形を呈し，二段掘りである。掘り方の長辺1.34cm，短辺1.15cm，深さ70cmを測る。甕は素焼きで，掘り方の底に据えられていた。

3）遺物各説

1号掘立柱建物出土遺物 (Fig. 91, PL. 60)

古墳時代後期などの土器片が出土したが，図示した以外はすべて小片である。

土師器

甕（4・5）　ともに外傾する「く」の字形の口縁部片である。5は口径14.5cmを測り，口縁部内面はヨコナデ，同外面はタテハケの後ヨコナデ，頸部内面にはケズリを施す。明黄褐色を呈し，胎土に石英粒を多く含む。4は口径16.1cmを測る。頸部内面にはヘラケズリを施し，その他はヨコナデ調整を施す。両面とも赤橙色を呈する。ともに柱穴No.5から出土した。

鉢（3）　口縁部は外反し，胴部は緩やかな丸みを帯びる。破片が小さいために，口径は推定に近いが22.7cmを測る。調整は不明瞭であるが，両面ともナデ調整と思われる。外面は橙色を，内面は黄橙色を呈する。柱穴No.7から出土した。

高杯（2）　底径13.5cmを測る底部片である。裾部と筒部の境は明瞭で，裾部の先端は細くなっていく。摩滅が著しく，調整は分からない。両面とも橙色を呈する。柱穴No.1の出土。

埋甕遺構出土遺物 (Fig. 91, PL. 60)

土師質土器

甕（1）　器高49.6cm，口径38.4cm，底径20.8cmを測る。無釉で，両面とも褐色味を帯びた橙色を呈する。胴部中央下部に，焼成後の穿孔が認められる。両面ともロクロ痕を明瞭に残す。

ピット出土遺物 (Fig. 91, PL. 60)

須恵器

椀（6）　高台径11.0cmを測る。高台付き椀の底部片である。高台の高さは0.3cmと低い。両面ともやや青みを帯びた灰褐色を呈する。柱穴No.2から出土した。

4）小　　結

今回の調査で注目できるのは，3本柱の柵と大型の掘立柱建物である。主軸の方向から考えて，同時期のものと考えられる。柵からはほとんど出土遺物が無かったが，建物からは小片が多かったものの土器の出土量は比較的多かった。そのうち図示できる破片は，すべて古墳時代後期のもので，それ以外も奈良時代以降と確認できたものはない。時期の分かる土器から考えれば，もっとも新しいと思われるのは甕で，6世紀後半頃であろうか。大型の総柱建物と柵の組み合わせは，後で述べる第105次調査などでも検出されており，詳細はそこで述べたい。

（米倉）

6．第105次調査　（調査番号　8515）

1）調査地区の地形と概要

調査地は小田部２丁目18－８にあり，対象面積660m²で，調査面積は540m²である。発掘調査は専用住宅立替のため，昭和60年10月26日から11月22日まで実施した。

当該地は小田部地区の台地中央，第102次調査の南東約120mの所に位置し，標高約10.7mを

Fig. 92　第105次調査遺構配置図（縮尺 1/200）

測る。現況では調査地から東に向かって緩やかに下降する。遺構面はロームで，表土下約20cmで検出した。遺構は，古墳時代後期の竪穴住居跡１軒，土坑３基，溝１条，掘立柱建物１棟，柵１条，近世以降の製鉄関連遺構と埋甕遺構それぞれ１基である。遺構の残りは悪い。

2）遺構各説

住居跡（SC）

1号住居跡（Fig. 93，PL. 61）

平面形はほぼ方形を呈し，西壁中央にカマドを設けている。削平のため遺構の残りは悪く，カマドも最下部の粘土が残っているのみである。住居の北壁長4.53m東壁長5.10m南壁長4.47m西壁長4.77m深さ５～10cmを測る。南西隅にのみ幅15cmの溝がある。柱穴は４本あり，直径

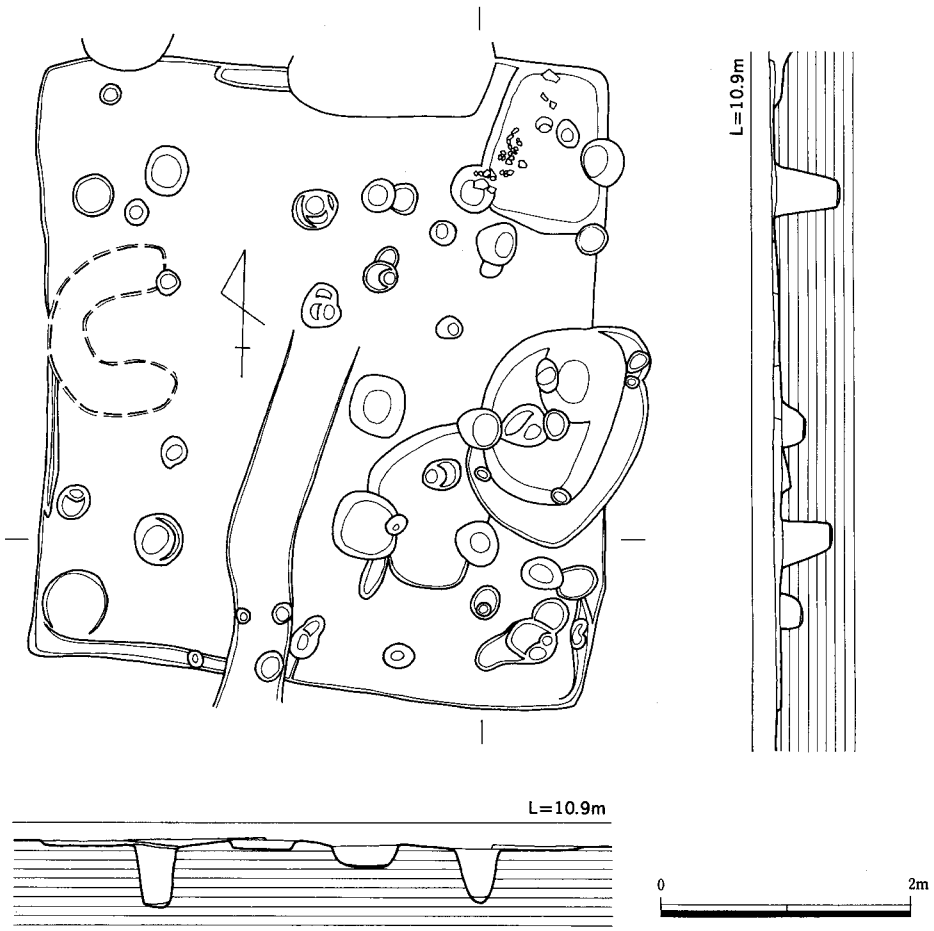


Fig. 93　1号住居跡（縮尺 1/60）

36～42cm，深さ42～51cmを測る。カマドは白色粘土で作られ，奥行の長さ105cm，間口の幅129cmを測る。カマド中央に焼土が認められる。なお住居北東隅にある2号土坑については後述する。出土遺物は古墳時代の土師器と須恵器で，住居跡北東隅にある2号土坑の直上で，土師器の小壺，須恵器の高杯などがまとまって出土した。

土　坑（SK）

土坑は3基検出したが，その他にも明治・大正時代頃と思われる穴が，調査区北側を中心に検出され，「帝国万歳」と銘のあるものを始め，有田焼・高取焼などの陶磁器が多く出土した。

1号土坑（Fig. 94，PL. 61）

1号竪穴住居跡の東壁を切る。平面形は楕円形に近く，長軸の長さ1.88m，短軸の長さ1.28m，深さ48cmを測る。二段掘りで，床面で大小のピット7つを検出した。出土遺物は土師器・須恵器の小片のみで，多くは古墳時代後期のものであるが，奈良時代の土師器（椀）の小片が

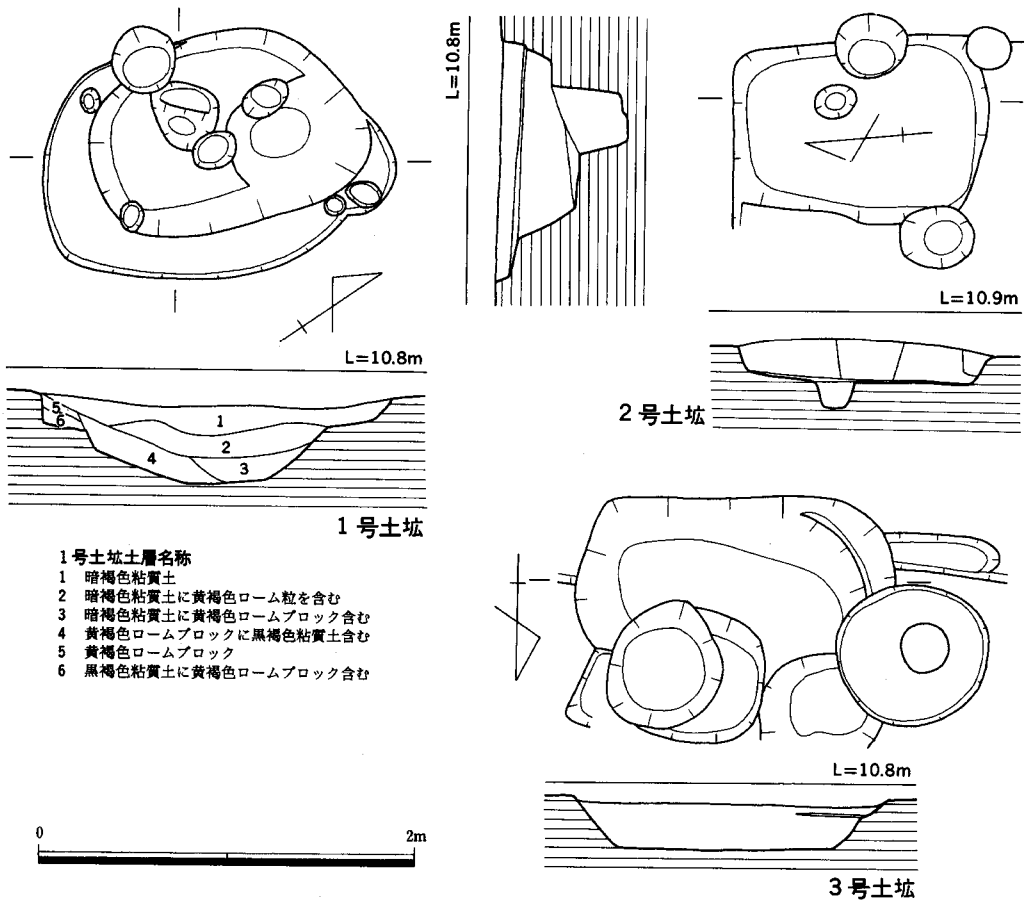


Fig. 94　1号～3号土坑（縮尺 1/40）

数点と馬歯が出土している。

2号土坑 (Fig. 94, PL. 61)

1号住居跡の北東隅で，住居跡の壁に沿って検出した。きれいに住居内に収まることから住居に伴うとも思われるが，住居の床面，すなわち土坑が埋まった上から住居の土器群がまとまって出土しており，少なくとも住居の廃絶時にはこの土坑は埋まっていることになる。住居の使用途中で埋めたと考えられないだろうか。土坑の平面形はほぼ長方形を呈し，長さ1.36m，幅1.2m，深さ24cmを測る。古墳時代後期の土器片が出土した。

3号土坑 (Fig. 94, PL. 61)

住居跡北壁の地点で検出し，住居跡および1号掘立柱建物に切られている。ほぼ隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形を呈し，長さ1.7m，推定幅0.9m，深さ30cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。出土遺物はそれほど多くなく，古墳時代後期の土器などが出土した。

溝（SD）

1号溝 (PL. 61)

1号住居跡中央付近から北に伸びる，長さ12.1m，幅1.2m，深さ15cmの溝である。住居跡を切っている。断面形はほぼ逆台形を呈する。覆土は黒褐色粘質土で，覆土より古墳時代後期の遺物が少量出土した。

掘立柱建物（SB）

1号掘立柱建物 (Fig. 95, PL. 62)

調査区北側で検出した，3×3間の総柱建物である。桁行方向には幅約75cmの布掘を持つ。削平のため，布掘は深さ約7cmと浅い。ほぼ南北方向に主軸をとり，桁行全長4.5m，梁間全長3.6mを測る。柱穴の平面形は円形か隅丸方形に近く，一辺65～110cm，深さ14～60cm，柱根の直径25～30cmを測る。出土遺物は土師器・須恵器の小片が少量出土した。時期もわからないものが多いが，判断できるものはすべて古墳時代後期のもので，奈良時代以降のものはない。

柵（SA）

1号柵 (Fig. 95, PL. 61)

1号掘立柱建物に並行する，3本柱の柵である。コーナー部分は放射線状に広がる。直線部分の各列の柱間距離は201～285cm，3本柱一列の柱間距離は90cmを測る。柱穴掘り方は円形を

Tab. 11 第105次調査掘立柱建物計測表

建物番号	規模	方向	桁行		梁間		方位	床面積 (m²)	備考
			実長 (m)	柱間寸法(尺)	実長 (m)	柱間寸法(尺)			
1号建物	3×3	南北	4.5	5、5、5	3.6	4、4、4	N－0°30′－W	16.2	総柱、布張り

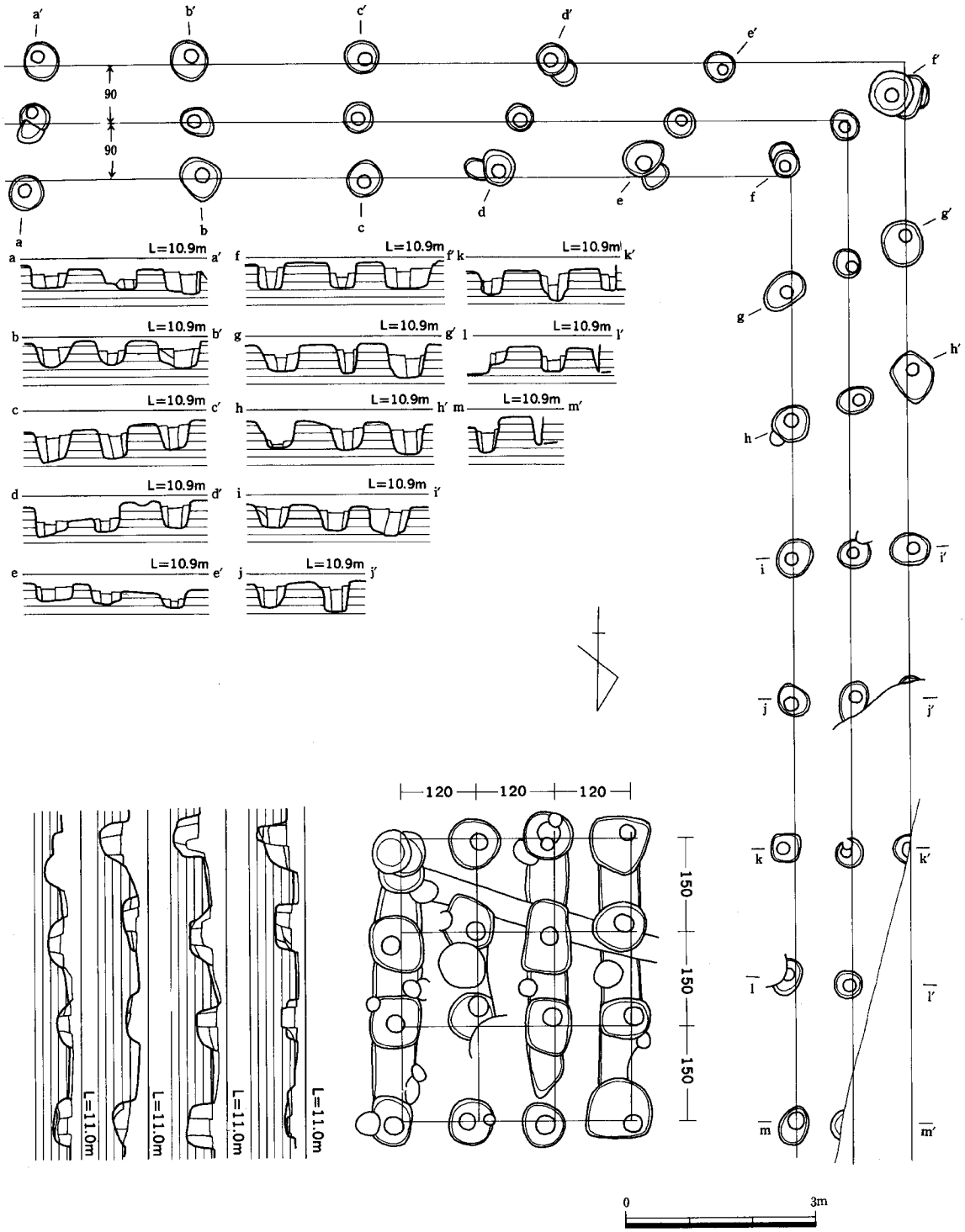


Fig. 95　1号掘立柱建物，1号柵（縮尺 1/100）

呈し，直径45～70cm，柱根径13～20cm，深さ28～55cmを測る。土師器の小片が少量出土した。

その他の遺構（ＳＸ）

製鉄関連遺構（Fig. 96，PL. 62）

１号掘立柱建物の柱穴を切っている。平面プランは円形を呈し，直径約1.35m，深さ約30cmを測る。掘り方内部から，多くの鉄滓やふいごの羽口が出土した。焼土塊や炭化物は認められたが，炉壁はなかった。その出土状況から鉄滓などの廃棄物を捨てた遺構と思われる。

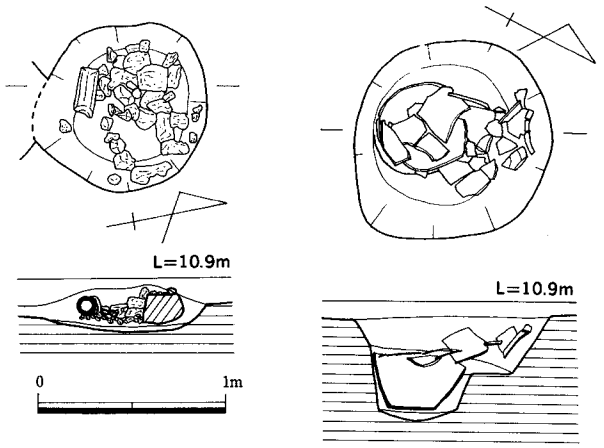


Fig. 96　製鉄関連遺構，埋甕遺構（縮尺 1/40）

埋甕遺構（Fig. 96，PL. 62）

調査区南側で検出した。平面プランは円形に近く，直径約1.6m，深さ85cmを測る。掘り方は二段掘りである。内部に，上部が破壊された土師質の甕が埋置されていた。近世以降のもので，甕の下部に穿孔があることから，墓と考えられる。

3）遺 物 各 説

１号住居跡出土遺物（Fig. 97，PL. 63）

須恵器

高坏（３）　杯部の破片で，口縁部径15.8cm，杯部の器高3.4cmを測る。口縁部は途中で屈折する。調整は外面下部にカキメを施す以外は，ヨコナデないしはケズリを施す。やや暗い灰色を呈し，焼成は良好である。

土師器

高坏（２）　２号土坑直上から出土した。ゆるやかに外に広がる筒部片で，両面ともナデ調整を施す。淡橙色を呈し，焼成は良好である。胎土は石英をやや多く含むが良好である。

壷（１）　住居北東隅の２号土坑直上から出土した。口縁部径8.3cm，胴部最大径11.9cm，器高9.3cmを測る。口縁部は短く直立する。胴部は球形に近く，底部は平底に近い。口縁部は両面ともヨコナデ調整を，胴部外面にはハケメ，内面にはヘラケズリの調整を施している。

１号土坑出土遺物（Fig. 97，PL. 63）

土師器

坏蓋（4）　須恵器の形態を模したもので，推定口径20cm，器高4.5cmを測る。体部と口縁部の境の稜は明瞭である。ヨコナデ調整を施す。橙色を呈し，焼成は良好である。

2号土坑出土遺物 (Fig. 97, PL. 63)

須恵器

坏身（6）　口縁部径12.2cmを測る。口唇部内面には軽く稜が走る。蓋の受け部径13.7cmを測る。両面ともロクロの調整痕を明瞭に残す。暗灰色を呈する。

土師器

甕（5）　強く外反する口縁部片である。破片が小さく，復元口径15.8cmを測る。両面とも頸部には粗いハケメを，口縁部はナデ調整を施す。褐色を呈し，胎土には金雲母を多く含む。

3号土坑出土遺物 (Fig. 97, PL. 63)

須恵器

高坏（7）　筒部の破片で裾部径8.1cmを測る。裾端部はやや跳ねあがる。透かしがはいるが，小片のため数は不明である。暗灰色を呈し，焼成は良好である。

土師器

甕（8）　口径11.1cmを測る口縁部片である。口縁部はゆるく「く」の字状に外反し，胴部はあまり張らない。調整は両面ともナデで，明橙色を呈する。焼成は良好である。

1号溝出土遺物 (Fig. 97)

須恵器

無頸壺（9）　短い口縁部と肩の張った胴部を有する。口唇部は尖りぎみである。口径8.4cm，胴部最大径13.7cmを測る。両面ともロクロによる横ナデ調整を施す。

製鉄関連遺構出土遺物 (Fig. 97, PL. 63)

土製品

鞴の羽口（12）　炉への取り付け口のほうが欠損している。直径7.8cm，断面の厚さ2.9cmを測る。吹き込み口はヘラで削りとっている。「博多金右ェ門」の銘が型押しされている。

埋甕遺構出土遺物 (Fig. 97, PL. 63)

土師質土器

甕（15）　口縁部径35.6cm，器高52.8cmを測る。口縁部は強く外反し，胴部はほぼ直線的で，

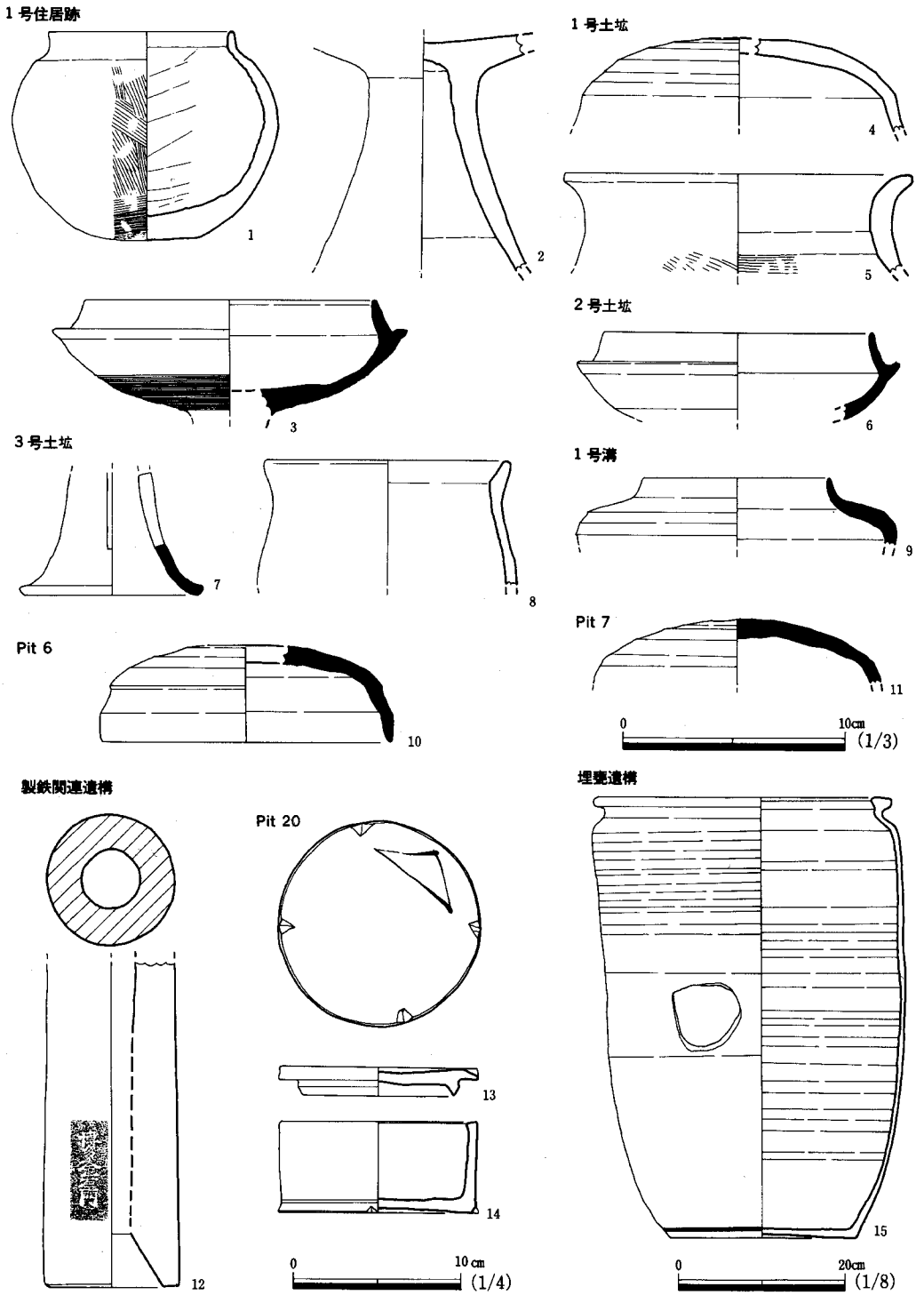


Fig. 97 出土遺物（縮尺 1/3・1/4・1/8）

胴部中央に径約8cmの穿孔が施される。両面ともロクロ調整を残す。無釉で，明橙色を呈す。

ピット出土遺物 (Fig. 97, PL. 63)

須恵器

坏蓋（10・11）　10は天井部片で天井は丸みを帯びる。口径12.8cm，器高4.5cmを測る。11は口縁部から体部の破片で，口縁部の中央と，口縁部と体部の境に稜を有する。口唇部内面を削り出しているため，先端は尖っている。10はピットNo.6，11はピットNo.7から出土した。

陶器・小鉢（13・14）　蓋（13）と身（14）のセットである。ともに無釉である。身は口径11.8cm，器高4.5cmを測る。蓋は口径9cm，器高1.7cmを測り，蓋の天井部及び身の底部にもほぼ相対する所に緊縛のための刻みが4カ所施される。天井部の隅に，三角のマークが墨書されている。13・14ともに明橙色を呈する。ピットNo.20から出土した。

4）小　　結

検出した遺構群は，製鉄関連遺構など近世以降のものや，その他一部の遺構を除いて，そのほとんどが古墳時代後期に属すると思われる。

1号竪穴住居跡は4本柱で，カマドを持つ。出土遺物から6世紀後半頃と考えられる。3基の土坑は1号が住居跡を切り，2号・3号が住居跡に切られるが，出土土器は1、2号がほぼ同じ時期のものである。2号については前述の通り住居跡に伴う可能性がある。1号溝もほぼ同時期のものと考えられるが，明らかに住居を切っている。用途は判然としない。3号は奈良時代か。

1号建物と1号柵はその方向性から少なくともある時期においては同時に存在したものと考えられる。1号柵は1号溝を，1号建物は1号住居及び3号建物を切っている。従って時期的には上限が6世紀後半以降であるが，下限について知りうる情報はほとんどない。出土遺物に奈良時代以降のものと断定できるものがないというだけで，これも遺物が小片のため使えうる資料とはならない。

総柱建物と3本柱の柵の組み合わせは，有田遺跡においては，当該地以外に第6次・66次・35次調査周辺，第102次・107次調査周辺の4地点で検出されている。詳細は各報告に譲るが，内部の建物群が不明な第6次・66次調査を除いて，いずれも柵の内部に倉庫と考えられる大型の総柱建物群を有する。このうち第107次調査周辺の柵は南北に並んで2つの柵があり，ここの柵だけは布掘りの掘り方をもつ。時期的には，第6次調査の柵は調査者によると5世紀代の遺物を含む。第35次調査周辺のものは8～9世紀代と報告者は考えている。第102次調査の建物には古墳時代後期後半の遺物を多く含んでいる。第107次調査は現在整理中のため詳細は不明であるが，他の建物群との切り合いから，時期は古墳時代後期から奈良時代始め頃の可能性が強い。

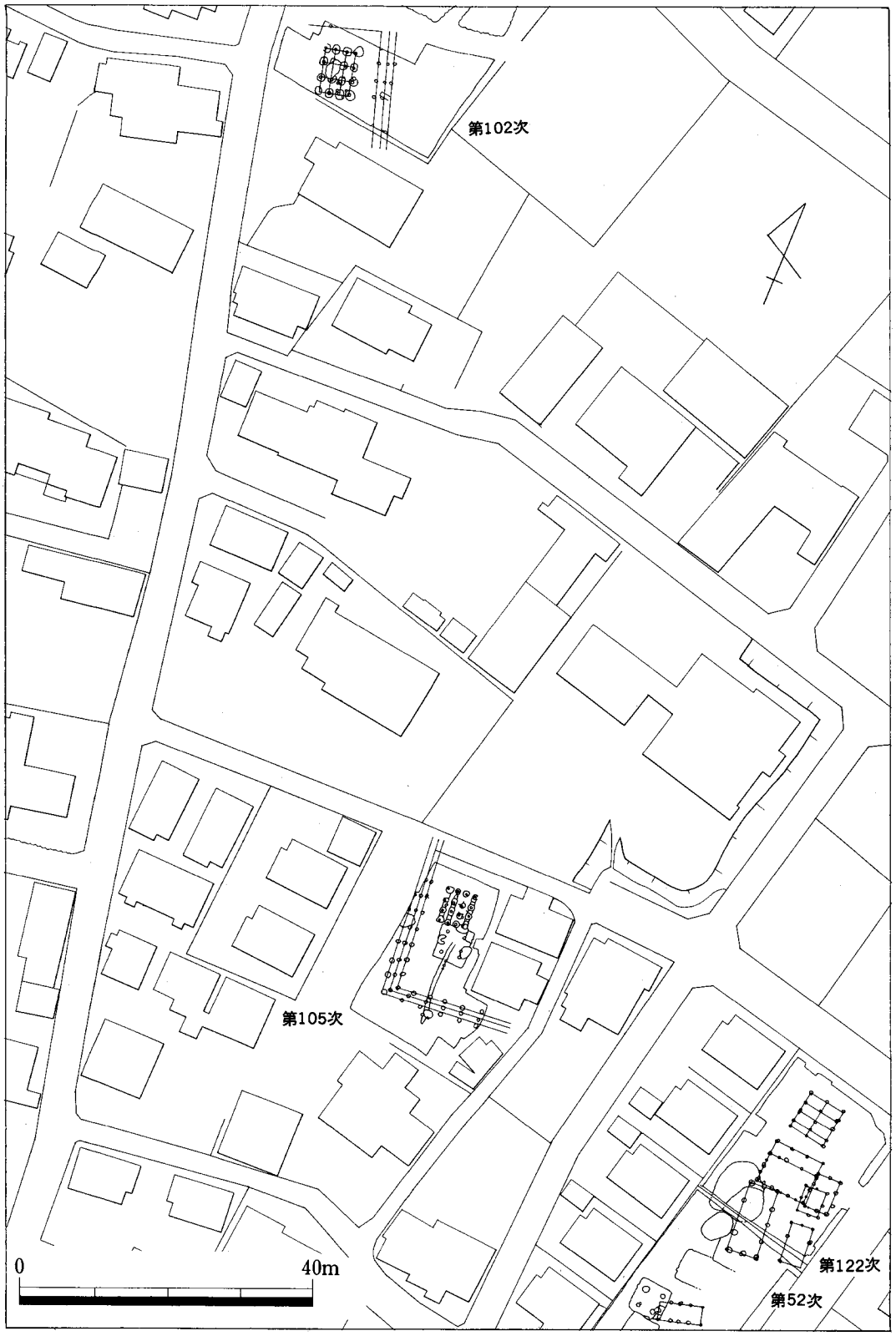


Fig. 98　第102・105次調査遺構配置図（縮尺 1/800）

これらの建物群が同時併存なのか。時期とともに移動していったのか，知るべき手だては今のところ皆無である。今後の課題であろう。

今回報告の第102・105次調査は，前述のように古墳時代後期後半，具体的には6世紀後半～7世紀初頭頃の可能性が強い。古墳時代後期の大型建物群は，全国的に見ると，難波宮跡，神戸市松野遺跡，和歌山市鳴瀧遺跡，群馬県三ッ寺遺跡など検出例が増えているが，倉庫群のみを，3本柱の柵で囲うという手法は，福岡市の比恵遺跡で検出されているのみである。比恵遺跡第7次・8次・13次調査では6世紀後半～7世紀頃に比定される、布掘りの3本柱の柵列と総柱建物群が2カ所で検出されており，「那津屯倉（なのつのみやけ）」の可能性も指摘された。その形態は有田遺跡の第107次調査例に近い。

以上のように，有田遺跡で検出されている3本柱の柵とそれに伴う建物群の位置付けは，現在のところ困難を極める。105次調査の柵に見られるコーナー部分の形態，布掘りの柵や建物の存在など建築史からのアプローチも含めて，現在整理中の資料が出揃った段階で再検討する必要があろう。（米倉）

7．第109次調査　（調査番号　8611）

1）調査地区の地形と概要

調査地は，有田１丁目37－８番地にある。調査対象面積は290m²で，調査面積は110m²である。発掘調査は昭和61年５月30日から６月13日まで実施した。

当該地は，有田地区の台地最高所を西へ下った台地端部にあり，標高8.7mを測る。東側隣接地は昭和55年に第39次調査が行われ，掘立柱建物34棟，土坑８基など，弥生時代から中世の遺構を検出している。

今回の調査地点では申請地東側部分にのみ台地があり，その下は急激に落ちている。台地の端には薄い遺物包含層（黒褐色粘質土層）がある。検出した遺構は土坑２基とピット群である。

2）遺構各説

土　坑（ＳＫ）

１号土坑（Fig. 100，PL. 64）

調査地区北側の台地へり近くで検出した。包含層上面より掘り込む。調査者の不手際により，一部を削平してしまった。平面形は楕円形を呈し，復元直径約1.6m，深さ32cmを測る。内部に鉄滓，焼土，炭化物が詰まっていたが，炉壁はなく，土層の状態から製鉄後の廃棄物処理の穴と思われる。時期の分かる遺物は出土していない。

２号土坑（Fig. 100，PL. 64・65）

調査区南側で検出した。台地端にあり覆土は包含層とほぼ同じである。最長部の長さ4.4m，最深部の深さ72cmを測る。床面は凹凸が激しく，ピット状の落ち込みが認められる。北側壁面はややえぐれている。これらのことからこの遺構は自然に形成されたと考えられる。出土遺物は包含層とほぼ同時期で，弥生時代から中世の遺物が出土したが，奈良時代の遺物が多い。床面中央から須恵器の碗，ピット状の落ち込み内から土師器の甕の大破片が出土している。

3）遺物各説

２号土坑から多量の土器群が，また１号土坑から多くの鉄滓が出土した以外は，ピット及び包含層から少量の土器片が出土しただけである。

２号土坑遺物（Fig. 101，PL. 65）

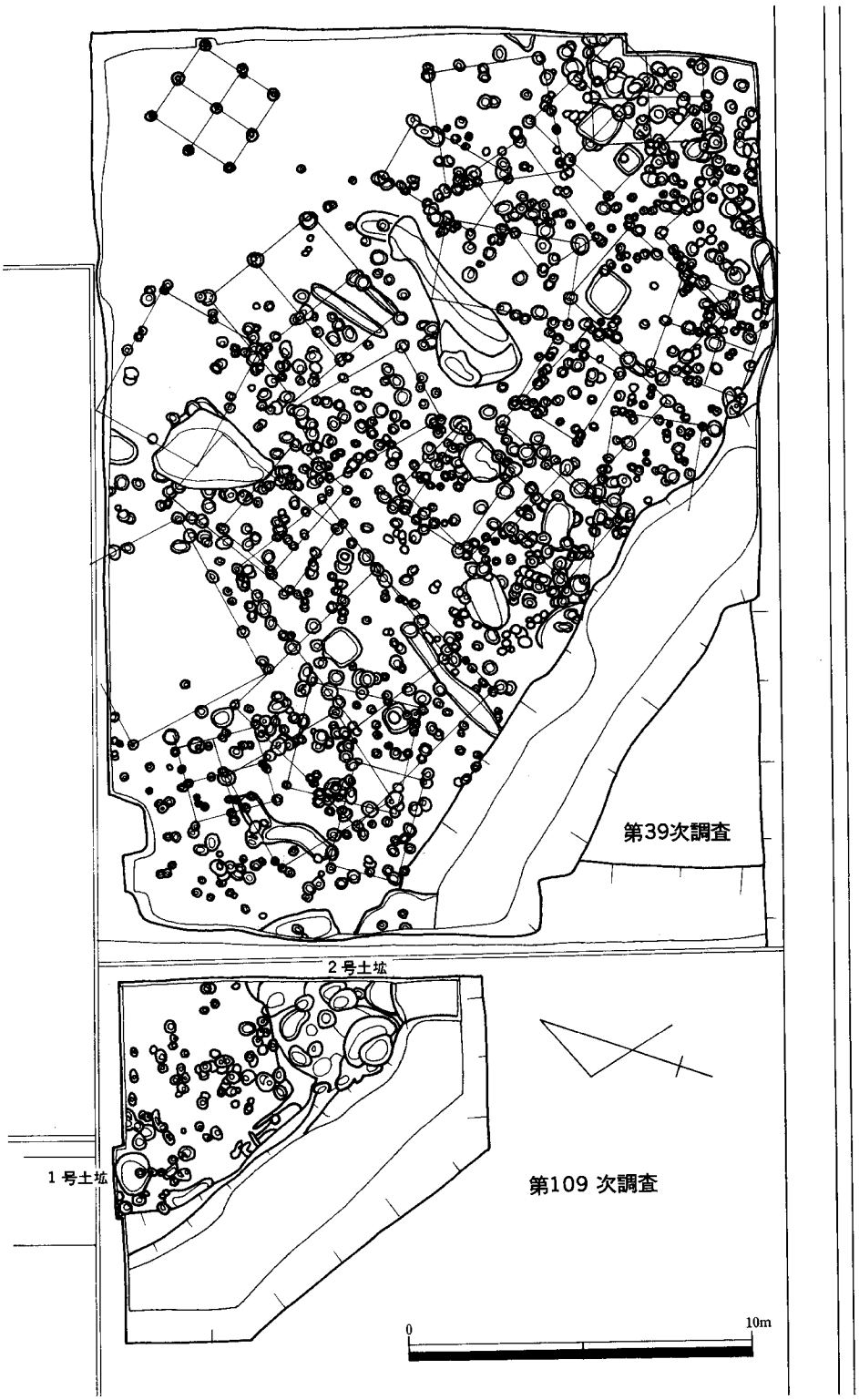
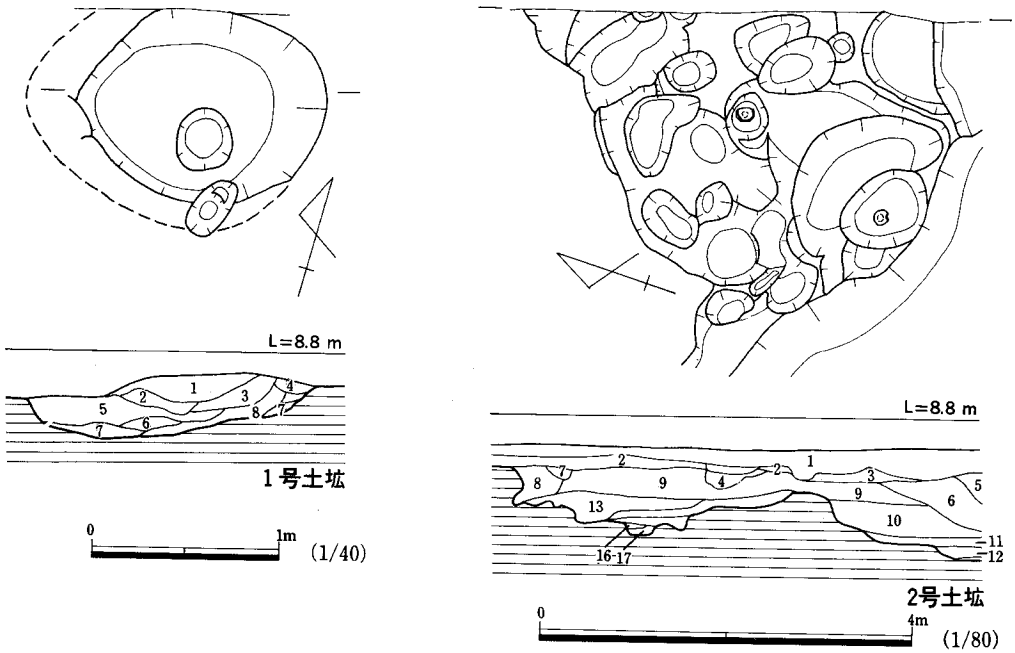


Fig. 99 第39・109次調査遺構配置図 (縮尺 1/200)



1号土坑土層名称

1；焼土，炭化物の混合
2；褐色土に焼土・炭化物・鉄滓を含む
3；2より明るい
4；黒褐色粘質土に焼土・炭化物を含む
5；2より鉄滓多い，炭化物少ない
6；4よりかなり明るい
7；黒褐色粘質土と白色粘土の混合土
8；4よりやや明るい
9；黒褐色粘質土

2号土坑土層名称

1；表土
2；褐色土
3；黒色粘質土にロームブロック含む
4；5より黒い
5；褐色粘質土にロームブロック少量含む
6；5よりロームブロック多い
7；暗褐色土
8；黒色粘質土
9；黒褐色粘質土
10；黒灰色粘質土
11；黒色粘質土に白色粘土ブロック含む
12；11に灰色味を帯びる
13；黒褐色粘質土に白色粘土ブロックを含む
14；白色粘土
15；黒褐色粘質土
16；14に同じ
17；黒色粘質土

Fig. 100　1号・2号土坑（縮尺 1/40・1/80）

この遺構からは弥生土器，古墳時代・奈良時代の土師器・須恵器が出土し，最上層から中世の磁器片が少量出土した。

須恵器

椀（1～3）　1は完形で，床面直上から出土した。口径16.2cm，器高5.3cm，高台径8.8cmを測る。口縁部はかなり歪む。高台はやや内径し，体部と底部の境より内側に張り付ける。両面ともヨコナデ調整で，底部はヘラ起こしである。2は高台径12.3cmを測る。高台は体部と底部の境に付く。両面ヨコナデ調整で，かなり黒味を帯びた青灰色を呈する。3は低い高台と丸みを帯びた体部を有する。高台径は8.1cmを測る。両面ともヨコナデ調整を施し，暗青灰色を呈する。

皿（5）　口径13.8cm，器高2.4cm，底径11cmを測る。底部は丸みを帯びる。両面ともヨコナデ

調整を施し，やや暗い青灰色を呈する。胎土に石英の大粒を含むが，精良に近い。

甕（4）　頸部の小片で，復元した頸部径20.4cmを測る。外面に平行タタキ，内面に同心円タタキを施す。やや暗い灰色を呈し，焼成はやや甘い。

蓋（6）　天井部径8.3cm，復元口径14.7cm，器高2.3cmを測る。両面ともロクロによるヨコナデ調整を施す。ほぼ全面青味を帯びた灰色であるが，口縁部のみ黒味を帯びる。

土師器

坏（7・8）　いずれも底部片で，7は底径6.6cm，8は8.7cmを測る。両面ともナデ調整を施

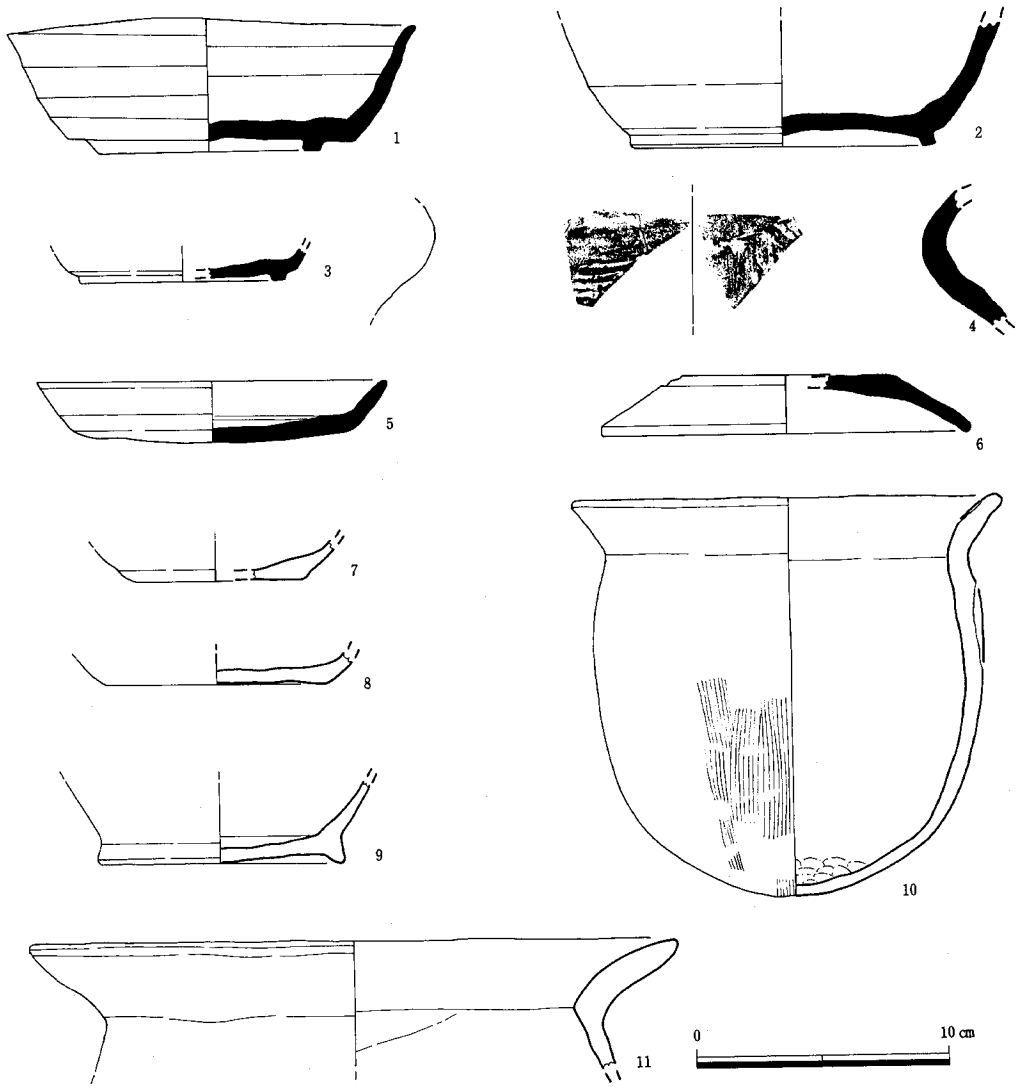


Fig. 101　2号土坑出土遺物（縮尺 1/3）

し，８の底部には指押さえの跡が残る。７はピンク色，８は橙色を呈する。

椀（９）　高い高台と直線的に開く体部を有する。高台はやや外に開きぎみで，高台径9.8cmを測る。両面ともヨコナデ調整で淡灰色を呈する。

甕（10・11）　10はほぼ完形で，口径17.1cm，器高15.9cmを測る。口縁はゆるく外反し，直立ぎみの胴部から丸い底部に移行する。調整は外面がハケメ，内面はヘラケズリである。11は「く」の字状に外反する口縁部片で，口径25.7cmを測る。先端部は丸みを帯びる。頸部内面には稜が明瞭に走る。やや焼成が甘い。ともに暗橙色を呈し，胎土には石英などを多く含む。

４）小　　結

当該地は有田の西側台地端にある。台地下は急激に落ち，激しい湧水を伴う。台地の端部は部分的に抉れており，水によって侵食されたことを物語っている。２号土坑も状況は似ており，前述のように自然に形成された穴と考えられる。その埋没年代は奈良時代である。台地端に薄くある包含層も奈良時代の土器片を含んでおり，その上から掘り込まれている１号土坑はそれ以降のものであるが，時期的には明確ではない。またピット群については隣地との関係で建物がある可能性があるが，把握し切れなかった。　（米倉）

8．第111次調査　(調査番号　8624)

1）調査区の地形と概要

申請地は福岡市早良区有田１丁目37－３番地にあり，調査対象面積は135㎡である。

申請地は有田地区台地で一番幅広い平坦地を持つ地区の西側にあり，標高約12mを測る。周辺の調査では西側で第１次・２次・12次・39次調査が，北側で第57次調査が，東側で第95次・107次調査が実施されており，第12次や39次・107次調査では律令期の掘立柱建物群，第95次調査では弥生時代前期のＶ字溝が検出されている。

調査の契機は昭和59年に埋蔵文化財事前調査願いが文化課に提出された事に始まる。北側の第57次調査の南側境界地で検出した古墳時代中期の竪穴住居跡の残りが当地にもかかっていることから調査を実施した。調査は昭和61年７月11日から29日迄行った。遺構は表土20cm下の鳥栖ローム面上に検出され，主な検出遺構は古墳時代竪穴住居跡１棟，土坑２基，溝２条である。各遺構からの出土遺物は全体に少ない。

2）遺 構 各 説

住居跡（ＳＣ）

１号住居跡（Fig. 103，PL. 66・67）

調査区の西北部境界地で検出した昭和56年の第57次調査区の続きの住居跡である。一辺の長さが約5.1mを測り，平面形は略方形を呈す。遺構の残りは悪く，ほとんど周壁溝が廻るだけである。柱穴は４本で構成されている。南壁と東壁から直交して延びるベッド状遺構の名残りと思われる幅15cm前後の仕切り溝が1.1～1.3m程度確認された。また南壁周辺には入口部と思われる直径60cm，深さ37cmの略円形のピットがあった。出土遺物は少ない。「有田・小田部第６集」でこの住居跡について詳しく報告しており，全体の概要についてはそれを参照にされたい。

掘立柱建物（ＳＢ）

１号掘立柱建物（Fig. 104，PL. 66）

１号住居跡の南で検出した主軸をＮ－10°－Ｅに取る２×２間の建物である。桁行全長4.05m～4.20m，梁間全長3.60m～3.95mを測り，台形に近いいびつな平面形を呈す。柱筋は通らない。柱穴径は30～60cm，深さは15～50cmを測る。遺物は各柱穴より土師器・須恵器の小片が出土した。

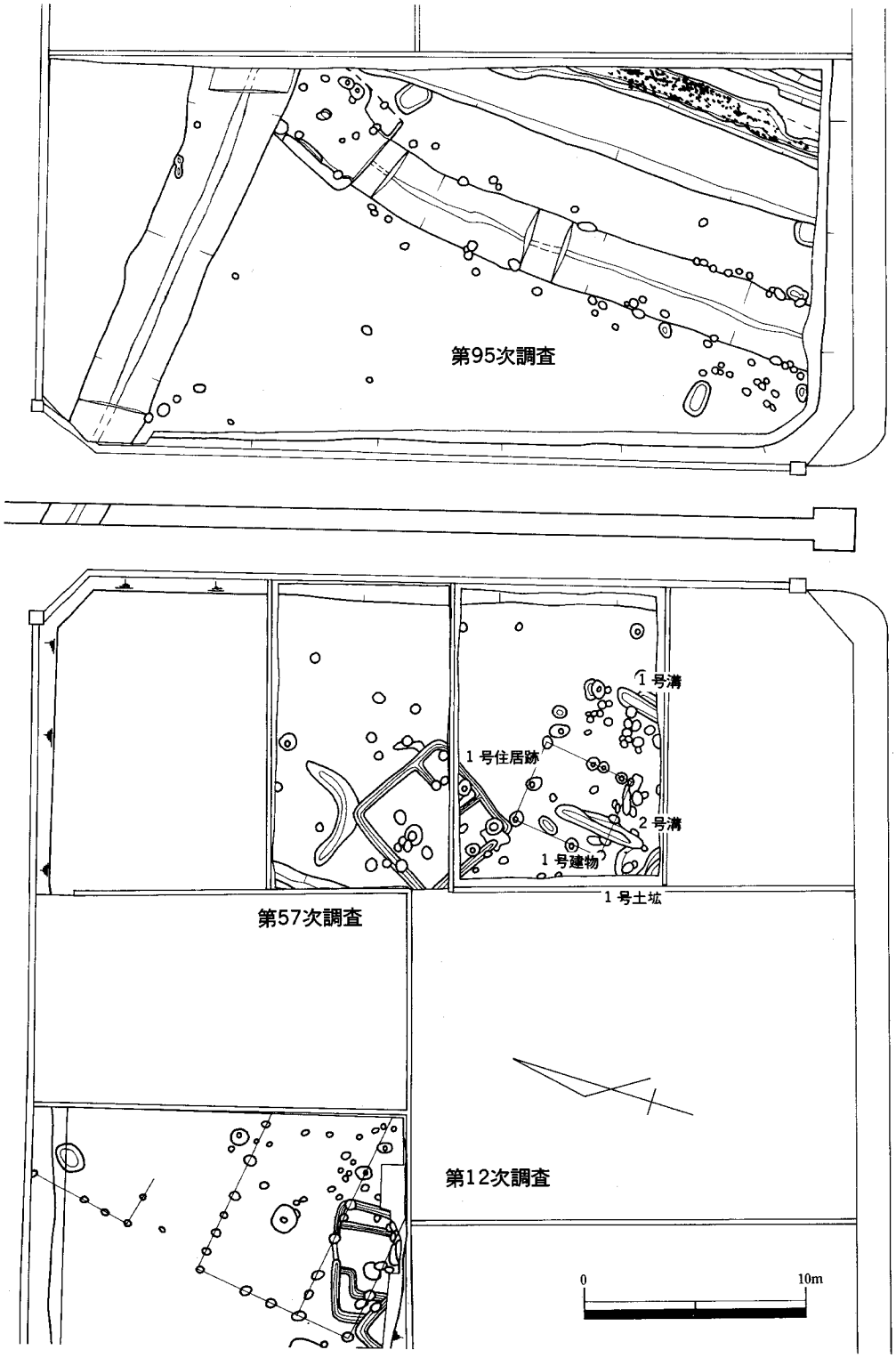


Fig. 102 第95・111次調査遺構配置図（縮尺 1/300）

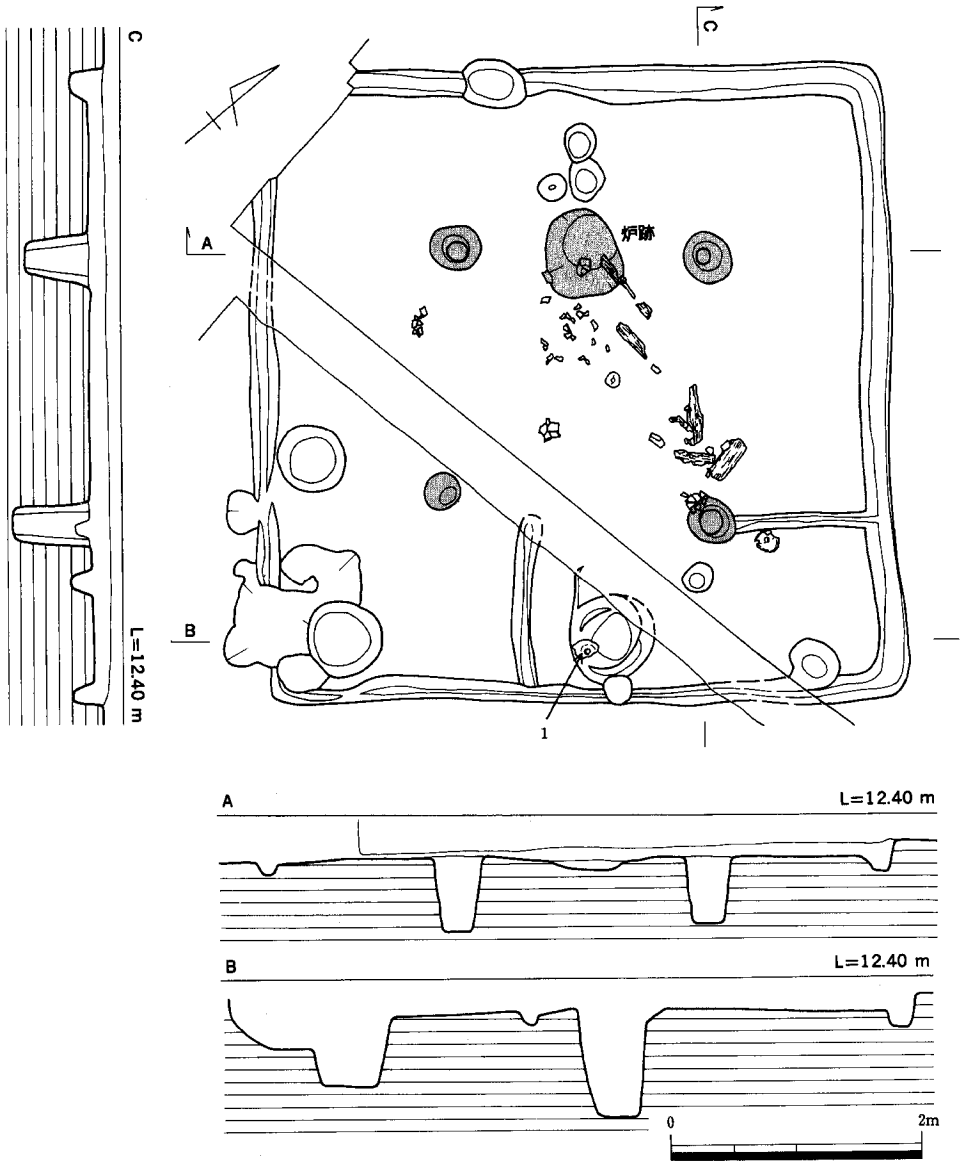


Fig. 103　1号住居跡（縮尺 1/60）

土　坑（SK）

1号土坑 (Fig. 104, PL. 67)

南西隅で検出した。北西コーナーの一部を検出したのみで，全容はつかめない。南側は攪乱で不明である。確認全長は北壁で約1.3m，東壁で約1.4m，壁の遺存高は北壁で25cmを測る。床面はほぼ平坦で，直径が60cm，深さ約33cmと直径22cm，深さ22cmを測る２ヶ所の不整円形の

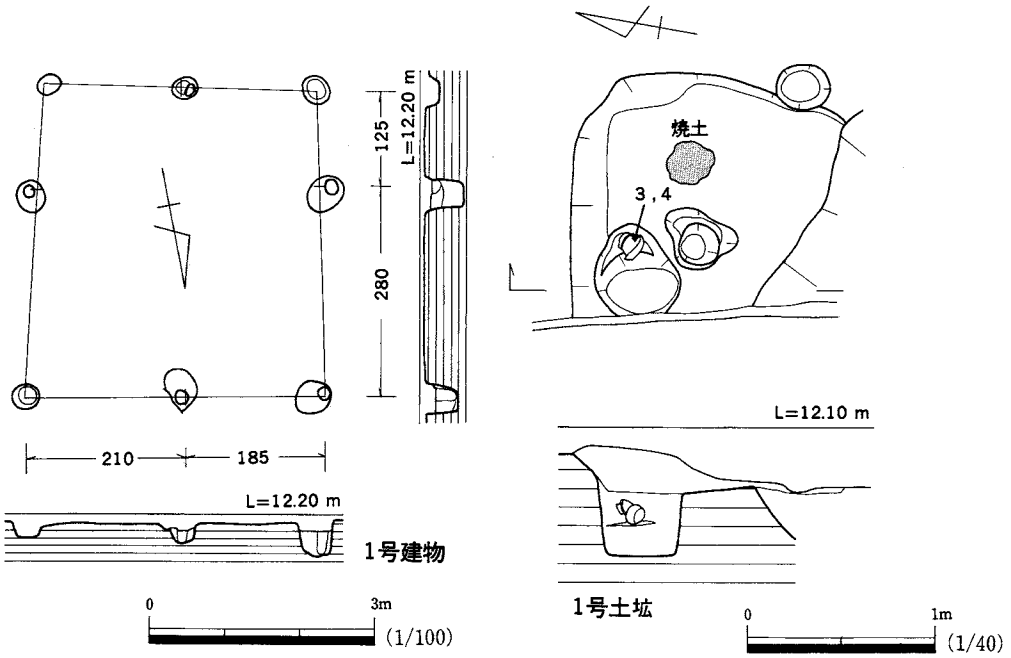


Fig. 104　1号掘立柱建物，1号土坑（縮尺 1/100・1/40）

ピットがある。大きい方のピットから土師器の高台付椀と坏が各1出土した。またピットの東側に直径25cm程度の焼土面を検出した。

溝（SD）

図示していないが調査区南側で，いずれも北北東に延びる浅い小溝を2条検出した。東側の1号溝は確認長2m，幅55cm，深さ4cm程度の小溝で，覆土は黒褐色粘質土で，滑石製石鍋の小片などが出土した。2号溝は西側の溝で確認長4.65m，最大幅0.8mを測るが，深さは13cmと浅い。覆土は暗褐色粘質土である。弥生式土器の底部片などを少量含む。覆土，遺物から見て両溝とも中世頃の時代が考えられるが，1号溝が覆土の色から古い可能性がある。

3）遺物各説

1号住居跡出土遺物 (Fig. 105, PL. 67)

土師器・高坏（1）　坏部片で，入口と思われるPitから出土した。口径は19.8cmを測る。体部から口縁部へかけて明確な段を有し，口縁部は外へ軽く開く器形である。外面は斜のハケメ調整である。色調は桃褐色を呈し，胎土に石英粒を多く混入する。

甕（2）　口縁部¼片で，復元口径18.2cmを測る。口縁部は軽く外反し，端部を平坦におさめる。色調は桃褐色，胎土は石英粒を多く混入する。

なお第57次調査では，小型丸底壺4個，坏2個，高坏4個＋α，甕4個，紡錘車1個などが出土しており，それらについては「有田・小田部第6集」を参照にされたい。

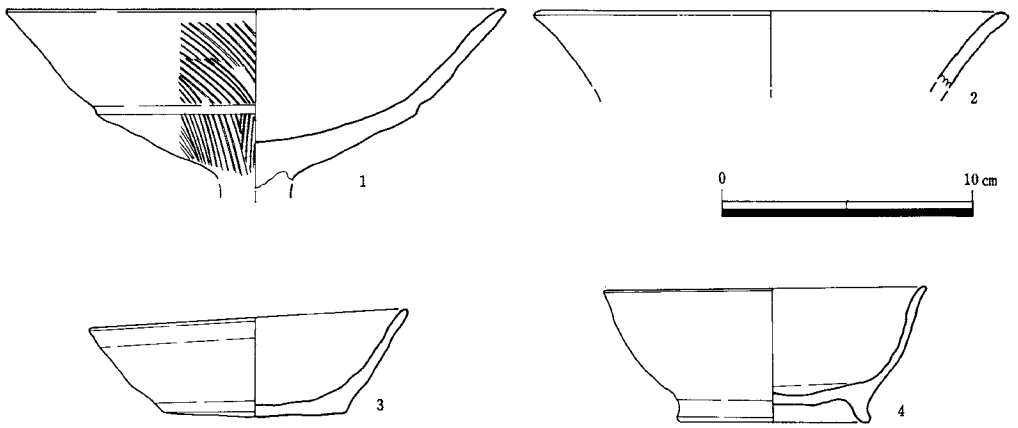


Fig. 105 出土遺物（縮尺 1/3）

1号土坑出土遺物 (Fig. 105, PL. 67)

土師器

坏（3） 口径12.4cmを測り，全体の4/5程遺存している。かなり焼きひずむ。内外面共ヨコナデ調整，色調は黄桃色，胎土は精良である。焼成は良好。

高台付椀（4） 口径12.7cm，器高5.4cmを測る。やや外側へ開く高台で，体部は丸みを持ち，口縁部が軽く外反する。ヨコナデ調整で，底部に板目痕がわずかに残る。色調は褐色。

4）小　　結

当地点は調査面積が極めて狭いため，北側の第57次調査の成果と考え合わせてまとめとしたい。

当地点における遺跡の時期は大きく2時期に分ける事が出来る。I期は1号住居跡に代表される古墳時代中期の時期である。II期は1号土坑の時期で，出土した土師器の坏，高台付椀から平安時代前半の時期である。当地点で特に注目すべき事は，古墳時代中期の住居跡である。この時期の住居跡は，有田第8集で報告されているように住居跡形態が長方形，ベッド状遺構，主柱が2本柱の古墳時代前期の形態から，後期の方形のカマド付，主柱4本柱の形態へ変化して行く中間時期で，主柱は4本柱，平面形が方形で，カマドを持たない形式の住居跡である。この時期の住居跡は有田遺跡群内では他時期の遺跡に比べて少なく，わずかに第63次，106次，125次調査で発見されているに過ぎない。有田遺跡ではカマドを持った住居跡の出現は6世紀代であり，この住居跡の時代5世紀中頃の間に半世紀前後の空白時期がある。この空白時期の矛盾をどう解決して行くのかは今後の調査課題としていきたい。（山崎）

9．第117次調査　（調査番号　8657）

1）調査地区の地形と概要

申請地は福岡市早良区小田部３丁目３番14号にあり，調査対象面積は219m²である。

昭和60年に実施した第103次調査の南側に隣接する。

今回の調査の契機は昭和61年に農業用倉庫建設のために埋蔵文化財事前調査願が提出された事に始まる。家屋解体後，試掘調査を行い，遺構が検出されたため，発掘調査を実施する事となった。調査は昭和62年３月２日から３月25日迄行った。遺構は表土（厚さ10～40cm）下の鳥栖ローム面上で検出された。家屋があったためか攪乱が著しかった。主な検出遺構は柵２条，敷石ピット２基，土坑５基，井戸３基と溝状遺構である。遺構の年代は江戸時代の中期以降で，各遺構からその時代以降の唐津焼・伊万里焼などの肥前系陶磁器，土師質の鍋，陶器の摺鉢，大型甕，石臼，硯，鞴羽口などが出土した。

2）遺構各説

柵（ＳＡ）

１号柵（Fig. 106，PL. 68）

調査区北側で検出した東西方向，主軸をＮ－86°－Ｅに取る。各柱間は，2.25～2.85m（7.5～9.5尺）と一定していない。柱穴径は20cm前後で，深さも６～26cmで，小さく浅い。埋土は灰褐色～黒褐色土である。遺物の出土はない。

２号柵

第103次調査の３号柵の続きと思われるもので柱間隔3.42m（11.4尺）を測る。

ピット（Fig. 108，PL. 70）

遺構番号ではPit ９・11である。平面形はいずれも不整な隅丸方形を呈し，Pit ９は長径0.68

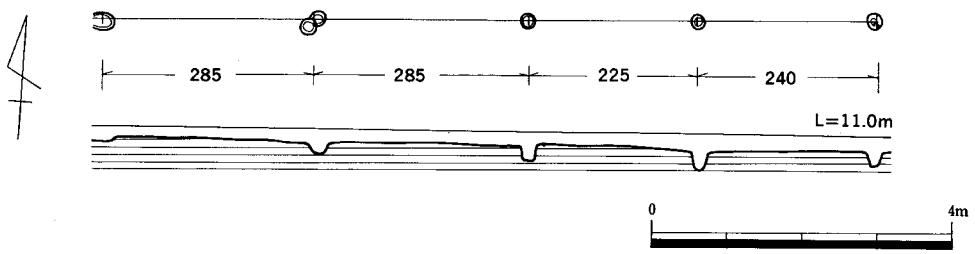


Fig. 106　１号柵（縮尺 1/100）

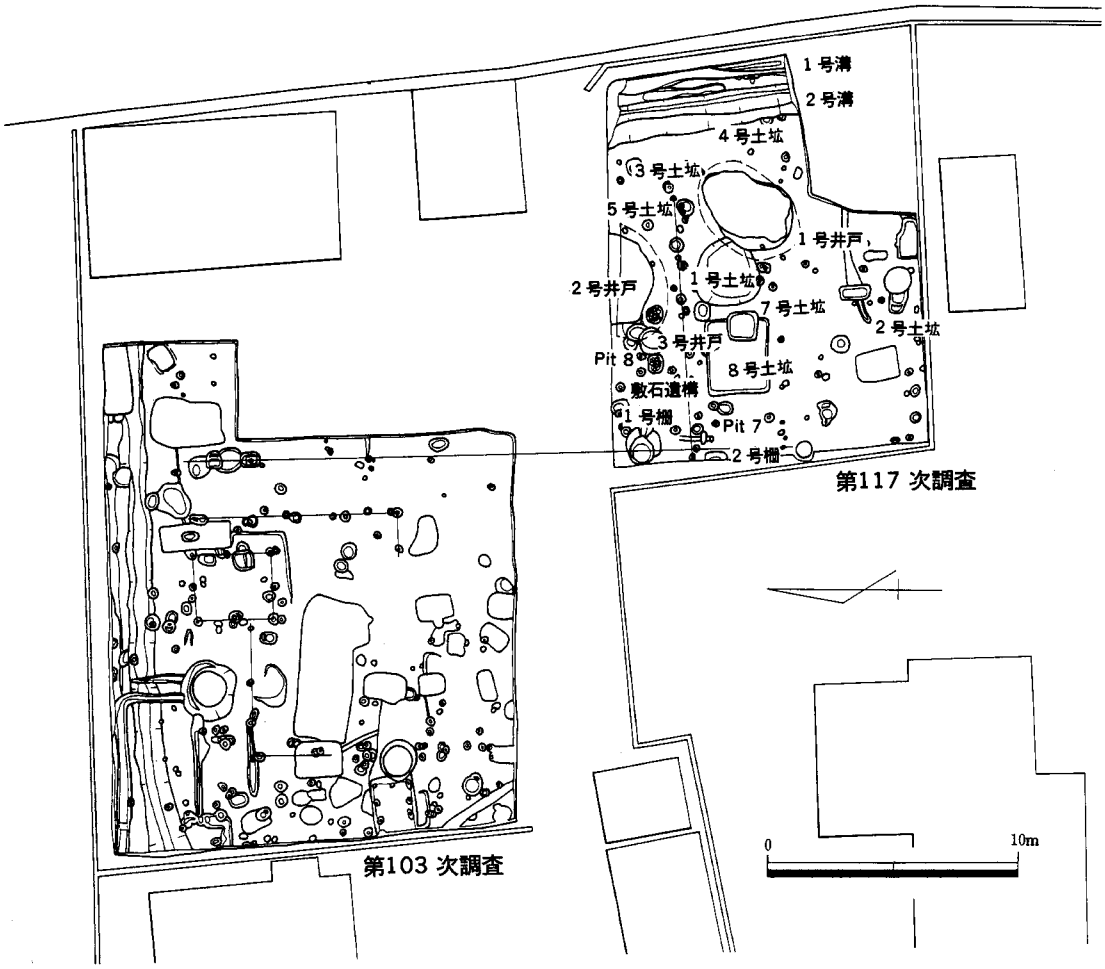


Fig. 107　第117次調査遺構配置図（縮尺 1/300）

m，短径0.60m，深さ0.18m，Pit11は長径0.72m，短径0.62m，深さ0.36mを測る。両ピットの間隔は中心で2.0m（6.6尺）を測り，その主軸方位はN—86°—Eとなり1号柵と平行する。いずれも6～20cm位の花崗岩円礫を床面につきかためて敷いていた。礫中より近世瓦片が出土している。建物柱穴の根石と思われる。

土　　坑（SK）

全部で8基検出した。内3～5号土坑は近世埋甕で図示している。

1号土坑（Fig. 108，PL. 69）

中央にあり，1号井戸に切られる。平面形は不整円形で，直径2.73m，深さは0.2mを測り浅い。床断面は皿状である。覆土は褐色土。瓦と土師器の細片が各1点出土した。

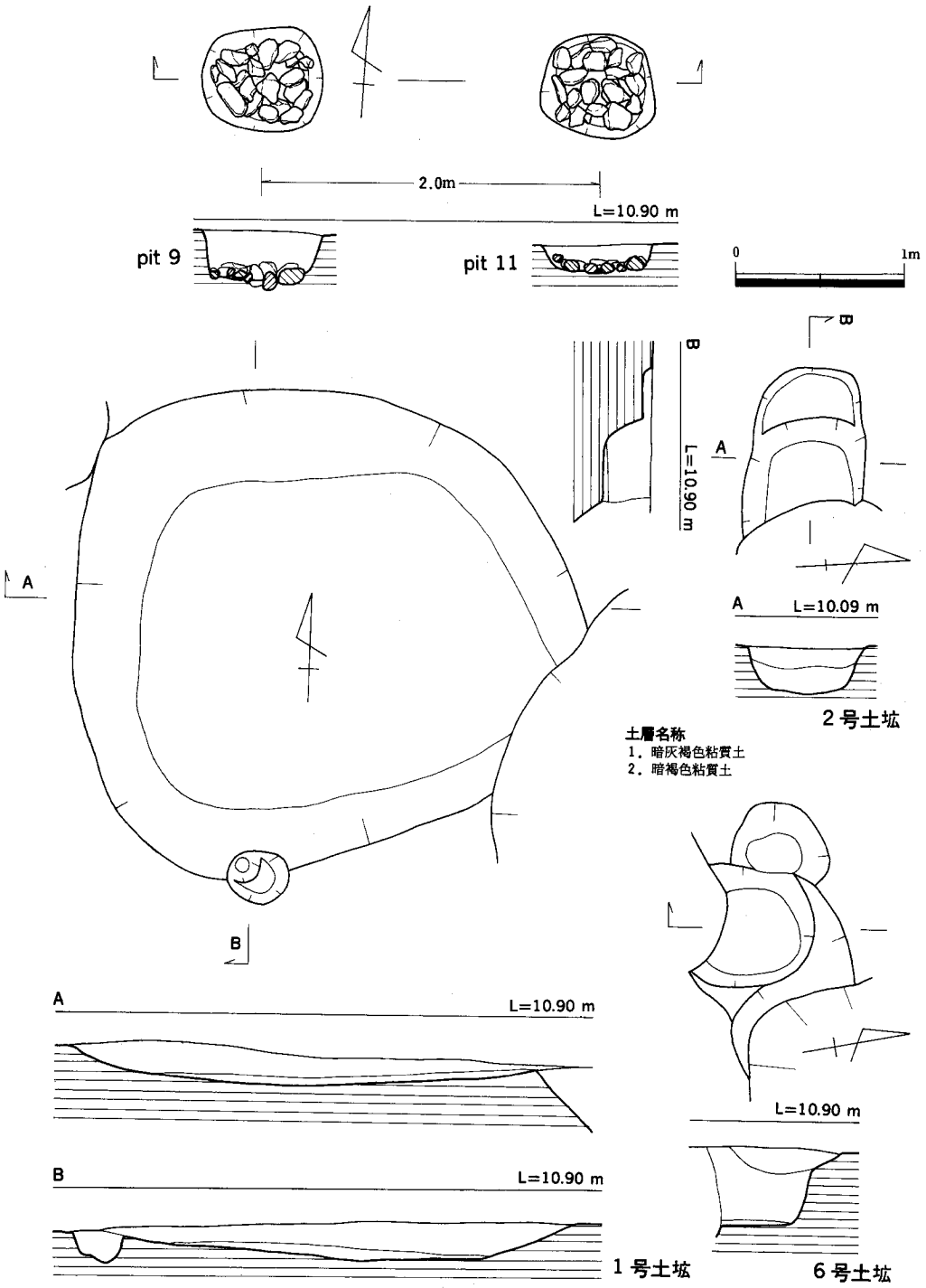


Fig. 108 ピット及び1号・2号・6号土坑（縮尺 1/40）

2号土坑（Fig. 108）

調査区南側で検出。近代井戸に切られ，全容は不明。西側にテラスを持つ。瓦片を転用したと思われる。土製品が1点出土した。

6号土坑（Fig. 108）

3号井戸に切られ，全体の形状，規模は不明。覆土は暗灰褐色土である。遺物の出土はない。

7号土坑（Fig. 109，PL. 70）

8号土坑の下から検出した。一辺が1.16～1.24m，深さ0.26mを測り，平面形は略方形。断面は逆梯形を呈する。覆土は明黄褐色ロームブロックで，底面に薄く緑灰色粘質砂が堆積していた。出土遺物はない。

8号土坑（Fig. 109，PL. 70）

長辺が3m，短辺が2.65m，深さが0.2mを測る。平面形が長方形を呈する浅い土坑である。床面はほぼ水平で，きれいな白砂がつまっていた。遺物の出土はない。

井　戸（SE）

3基検出した。1号・2号井戸については大きさや形状から井戸でない可能性が強いが，ここではあえて井戸として報告する。

1号井戸（PL. 69）

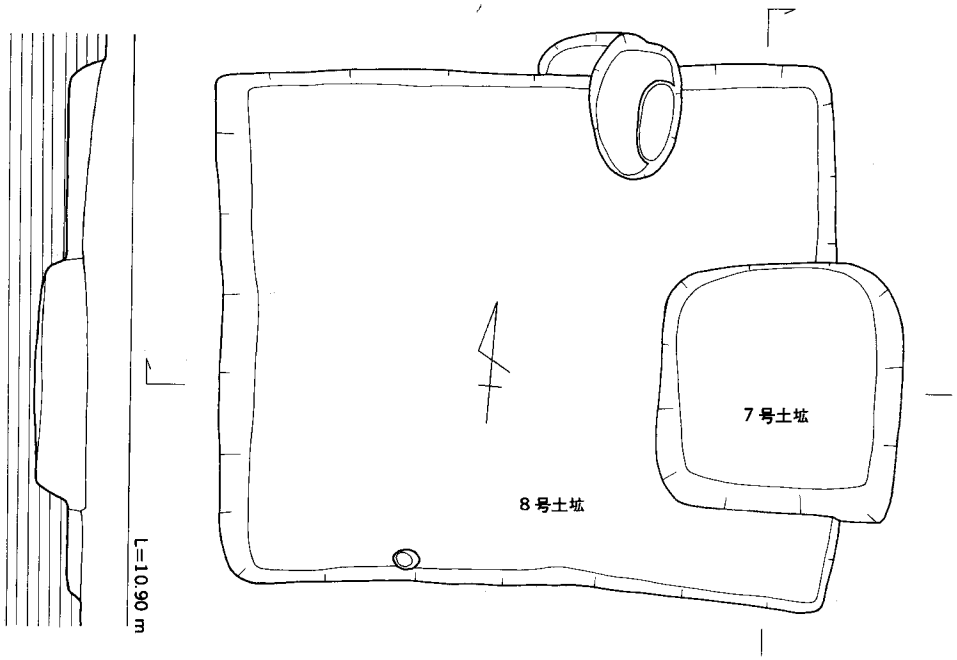
調査区中央で検出した。平面形が卵形を呈し，長径4.15m，短径2.9m，深さ2.5m以上を測る。断面形は袋状を呈す。壁が上端より奥に入り込み，崩壊の危険性があった事，又湧水がある事から完掘出来なかった。埋土は黄褐色ロームや，桃色の八女粘土，黒褐色土などが雑然とブロック状に堆積しており，人為的に埋立てられたものと思われる。遺物は江戸時代中後期（18～19世紀）を中心とした肥前系の白磁，染付，陶器や擂鉢などが出土した。

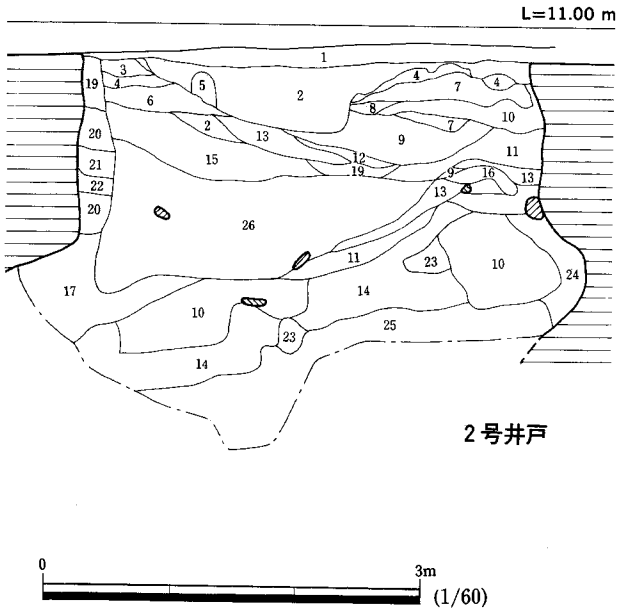
2号井戸（Fig. 109，PL. 69）

調査区北側境界にかかり，全形は窮えないが，1号井戸と同様の形状を呈すと思われる。長径3.6m、深さ3.2m以上を測る。壁は深さ1.5mの所で奥に深く抉り込む。抉り込みの奥行と遺構の底面の確認は，壁崩壊の危険があった為出来なかった。埋土は，上部は桃色又は黄褐色ロームブロックや黒褐色粘質土などがブロック状に入り混り，下部では黄褐色や明黄褐色ロームブロックが主体である。遺物の出土は少ない。上面より石臼片（24）や瓦質の擂鉢片，土師器細片がわずかに出土した。

3号井戸（PL. 69）

直径1mを測り，平面形は不整円形を呈す。3m以上の深さを持つ。遺物は明の青磁細片や18世紀から幕末にかけての高取系や京焼系の陶器片，瓦質土器や土師質土器の細片が少々，石斧の破片が1点出土した。





2号井戸土層名称

1. 表土
2. 暗褐色土に黒褐色土小ブロック混入
3. 2よりややくらい
4. 黒灰色砂質土
5. 1に9を多く混入
6. 2より黒褐色土の混入多い
7. ピンク色八女粘土
8. 9に黒褐色土混入
9. 黄褐色ロームブロック混入
10. 9に7を混入
11. 9に暗褐色土，黒色土混入
12. 黒色土と22の混合
13. 黒褐色土に明褐色ローム小ブロック混入
14. 黒褐色土に黒色土少量混入
15. 7に黒褐色粘質土，暗褐色粘質土混入
16. 12より黒色土の混入少ない
17. 4で粘性が強い
18. 11に23を混入
19. 20に23を少量混入
20. 暗褐色土
21. 20に7を混入
22. 20と7の混合
23. 明褐色ロームブロック
24. 10に暗褐色粘土を混入
25. 23と10の混合
26. 15よりロームの混入すくない

Fig. 109　7号・8号土坑，2号井戸土層図（縮尺 1/40・1/60）

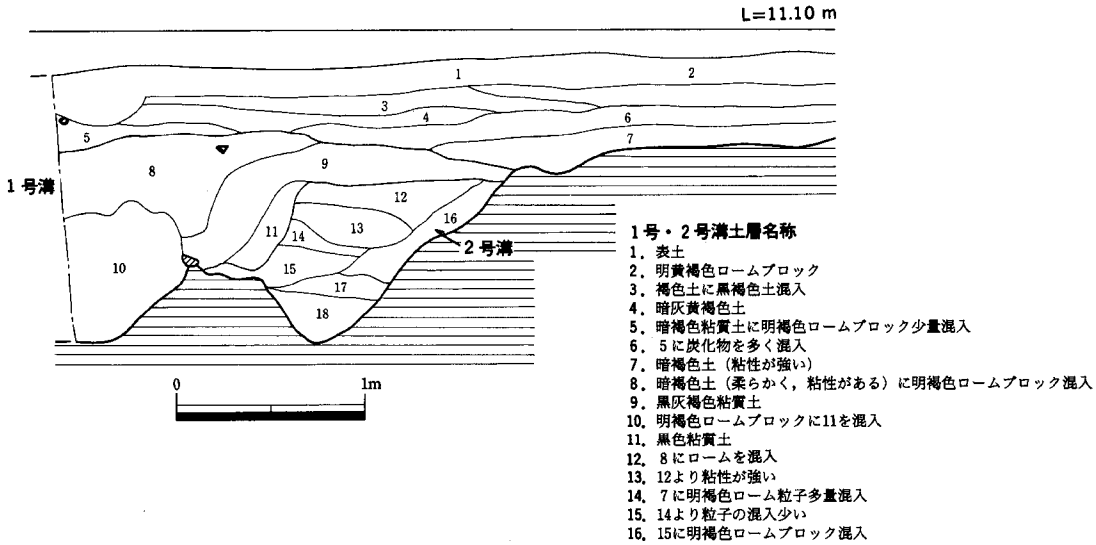


Fig. 110　1号・2号溝西壁土層図（縮尺 1/40）

溝（SD）

調査区東側で2条検出した。2条は重複しいずれも南北に貫流する。新しい溝を1号溝，古い溝を2号溝とする。

1号溝（Fig. 107・110，PL. 70）

2号溝が埋没した後の溝で，深さは1.1m以上，南の方が深くなる。埋土は上層が黒褐色土，黒灰褐色粘質土，下層が明褐色ロームブロックで黒色粘質土を混入又は明褐色粘土である。南側では先を鋭く尖らせた直径5cm，長さ50cm前後の丸太杭が5本検出された。昭和の初頃迄，丁度東側境界あたりに南側100m程離れた谷部に流れる水路があったという事で，その水路の一部と考えられる。遺物は17～19世紀頃の染付や高取系の陶器・擂鉢・硯やいぶしの入った瓦，鉄滓1点などがあるが量は多くない。

2号溝（Fig. 107・110，PL. 70）

1号溝より古く，深さ1.1～1.2mを測り，断面はV字形を呈す。埋土は上層が黒褐色土主体，下層が暗褐色土又は褐色土でロームブロックが混入する。水性堆積物がなく，通常は水が流れていなかったと思われる。遺物は少なく，肥前の染付，白磁，瓦片が数点出土した。

3）遺物各説

1号井戸出土遺物 (Fig. 111・112, PL. 71)

青　磁

香炉（1）　小片で復元口径9.0cm。外面は幅広の凹線がめぐる。発色が悪く焼成は不良。

白　磁

皿（3）　小片で口縁部を輪花状にカットする。復元口径10.5cm。見込は蛇の目状に釉をかき取る。明代末期の中国南部地方産と思われる。

小坏（2）　口縁部が端反りを呈し，高台はケズリ出す。肥前磁器である。

染　付

椀（4・5・6）　4は口径11.4cmを測り，体外部に梅花と雪の輪を描く。5は口径10.4cmを測り，外面に牡丹唐草を描く。焼成は良い。6は底部片で体外部に梅花を描く。いずれも肥前磁器である。

皿（7・8）　7は型打ち成形で，復元口径14.5cmを測る。体外面は唐草，内面は窓絵と唐草を描く。8は口径11.6cmを測り体外面に唐草，見込に井戸とつる草を描く。高台内部には「大明年製」の銘がある。いずれも肥前磁器である。

瓶（9・10）　いずれも底部小片で，復元底径は9が8.7cm，10が4.2cmを測る。9は高台と体下半部に3条の呉須による圏線が廻る。いずれも内面は露胎で，肥前系のものである。

陶　器

椀（11・12）　11は体部が直立し，口縁部がやや端反る。口径9.7cm，器高5.7cmを測る。明黄褐色の色調で，焼成は不良。12は口径10.6cm，器高6.9cmを測り，器壁はやや厚い。褐色釉がかかり，ハケメを施す。11は福岡産の可能性があり，12は唐津系であろう。

皿（13～16）　13は復元口径12.8cmを測る。内底見込に鉄絵を描き、砂目が残る。高台はケズリ出し，露胎である。14と15は同じ器形で復元口径はそれぞれ，13.5cm，11.6cmを測り，内外面に青緑色，淡緑色の銅緑釉がかかる。高台部は露胎で，カンナケズリ痕が残る。見込は蛇の目状に釉をかき取る。16は型打成形の角皿で，口縁部は口銹がつく。見込はハケメに，呉須と鉄漿による草花を描く。色調はくすんだ黄緑色を呈する。13は唐津焼，14・15は唐津内野山窯，16は現川窯である。

火入（17）　灰褐色の銅緑釉がかかり，口縁部は内側に直に内折する。唐津焼である。

擂鉢（19～22）　19～21は口縁部片で，復元口径は19が26.0cm，20が26.6cm，21が33.4cmを測る。19は一見，玉縁状を呈す口縁で，9～10本の条線が入る。20の口縁は外へ折返し，指圧による強い凹線が巡る。条線は7本。21は口縁直下に粘土を貼り付け，一見折返したように見え

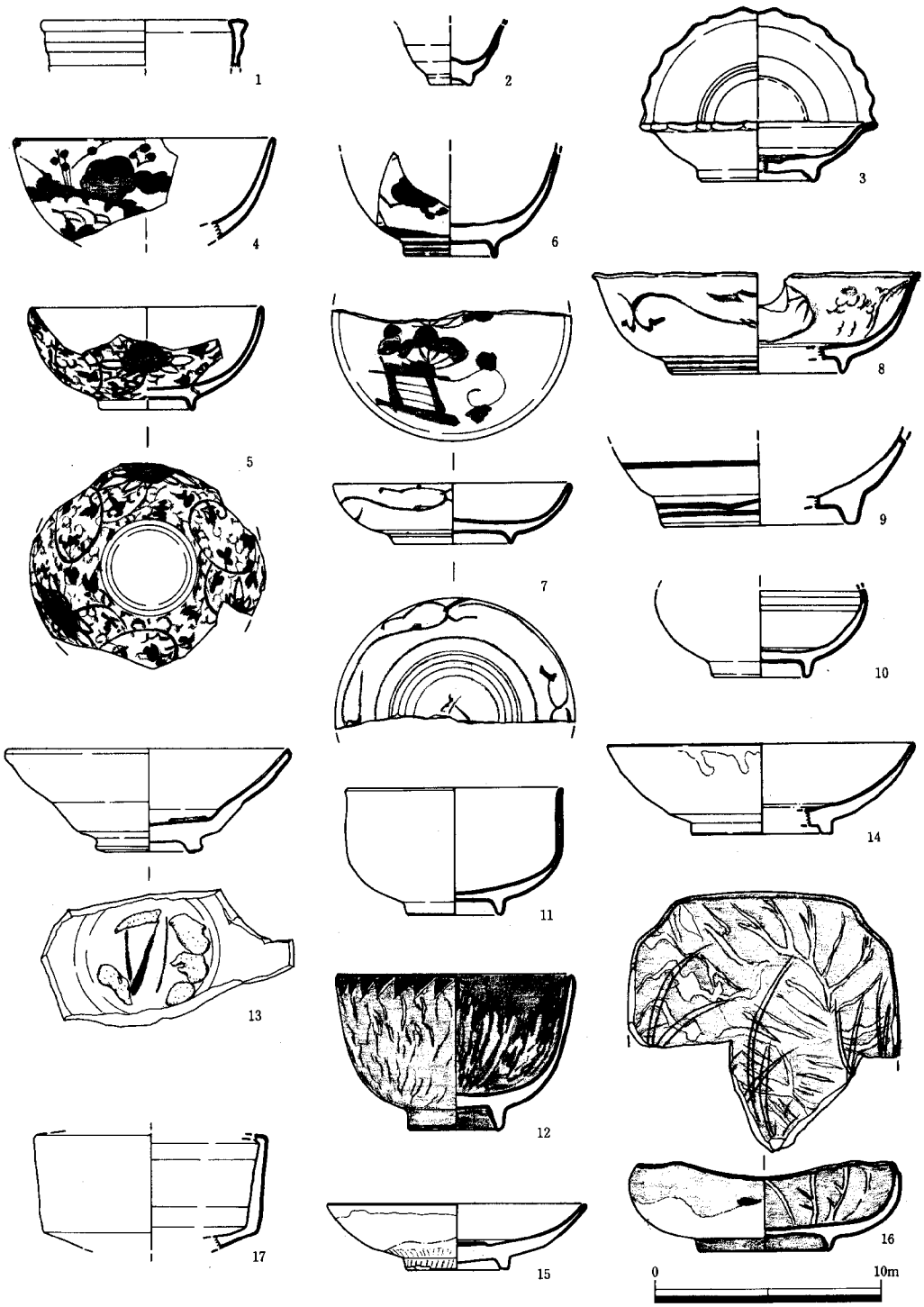


Fig. 111　1号井戸出土遺物（縮尺 1/3）

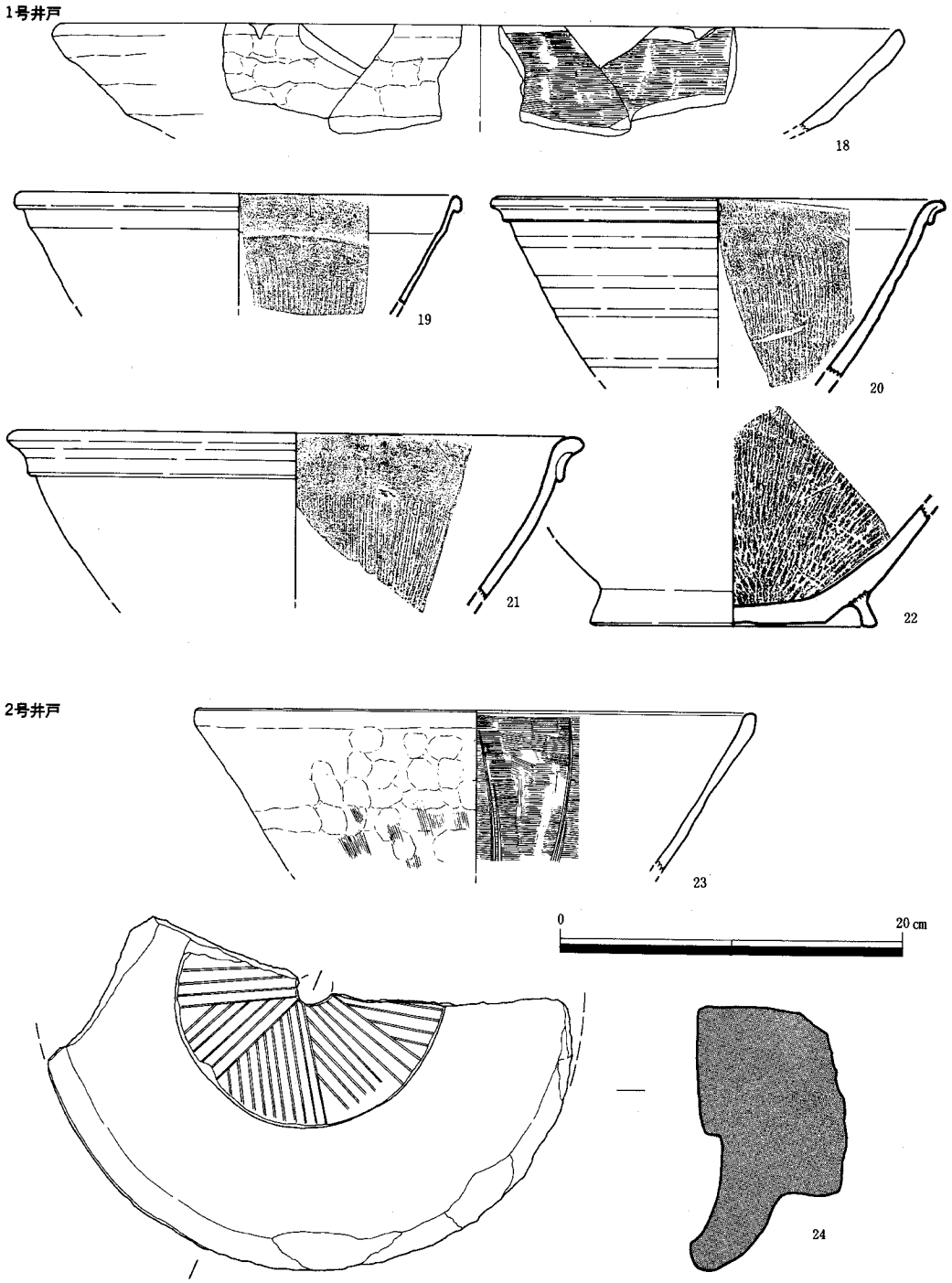


Fig. 112　1号井戸及び2号井戸出土遺物（縮尺 1/4）

る。条線は6～7本単位である。22は平底の底部に高台を貼りつける器形で，6本単位の深い条線が入る。色調はいずれも赤褐色を呈する。20以外は唐津系である。

土師質土器

鍋（18）　小片であるが復元口径49.8cmを測る。外面は指おさえ調整，内面はヨコハケ。外面には使用により煤が厚く付着する。

2号井戸出土遺物（Fig. 112, PL. 71）

瓦質土器

擂鉢（23）　口縁部1/4片で，復元口径32.9cmを測る。外面はナナメハケ後ナデ，指おさえ痕が明瞭に残る。内面は細かいヨコハケ。条線が2条ずつ入る。

石製品

石臼（24）　下臼½片で，復元受皿部径31.5cm，展部径15.7cm，芯棒孔径1.8cmを測る。展部は右回りの八分画八主溝で，副溝9本である。凝灰岩製で茶臼であろう。

3号井戸出土遺物（Fig. 113, PL. 71）

陶器椀（25）　底部片で，底径4.3cmを測る。見込は蛇の目状に釉をかき取る。内外面濃褐色の釉がかかる。高取系である。

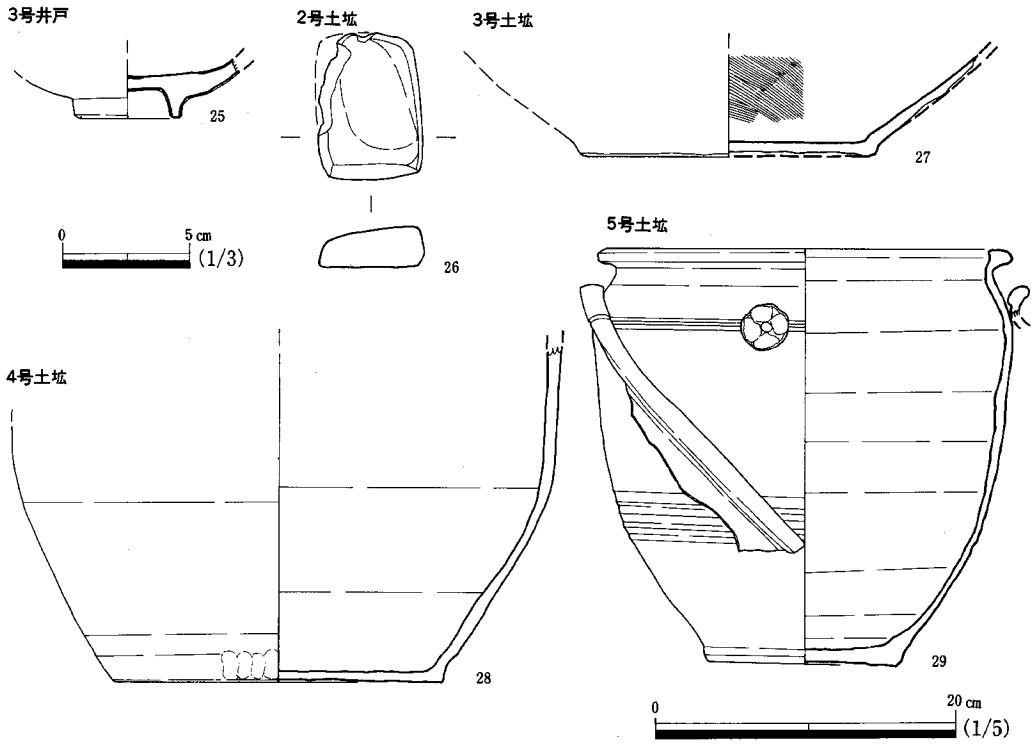


Fig. 113　出土遺物（縮尺 1/3・1/5）

2号土坑出土遺物 (Fig. 113, PL. 71)

土製品 (26)　瓦片の転用で，形状は長方形を呈す。全長58cm，最大幅4.2cmを測る。全面に研磨を加える。色調はやや暗い灰色を呈す。

3号土坑出土遺物 (Fig. 113)

瓦質土器・甕 (27)　素焼の甕の底部で，熱を受けてもろく，表面は剝落が著しい。内面はナナメのハケを施す。

4号土坑出土遺物 (Fig. 113, PL. 71)

土師質土器・甕 (28)　底径22.1cmを測り，体部と底部の境には指押え痕が残る。近世の埋甕であろう。

5号土坑出土遺物 (Fig. 113, PL. 71)

陶　器

甕 (29)　1号井戸上面で検出した埋甕である。口径27.7cmを測り，全体にゆがむ。肩部に2カ所花文を貼り付ける。内外面に濃緑褐色の釉がかかる。不良品で重ね焼時の甕の口縁部が癒着する。17世紀代の上野高取系である。

1号溝出土遺物 (Fig. 114・115, PL. 71)

染　付

椀 (30～35)　30・32～34は底部片である。30は外面に網目文を施す。高台内面は露胎である。31は口縁部片で，広東椀と思われる。口縁内面の2条の圏線間に4本単位の×帯が入る。32は外面に牡丹唐草を描くが，余り明瞭でない。33は内面見込みが三方銀杏割，高台部は蓮弁である。34は高台内面に「大明年製」銘が入る。発色が悪く，やや緑っぽい。35は口径10.3cmを測る。体外面は梅に雪の輪で，高台内面にはデフォルメされた「大明年製」銘が入る。31・33が肥前系，他は肥前磁器である。30が17世紀中頃，他は18世紀～19世紀初頃迄である。

皿 (36～37)　いずれも底部片である。36は見込みに鶯梅文が入り，フキ墨技法によるものである。37は見込みに秋草，高台内面には渦福字名が入る。38は見込みに5花弁のこんにゃく判が入る。36の焼成は悪い。いずれも肥前磁器で，37が17世紀前半代でやや古い。

陶　器

瓶 (39)　竹の節をイメージしており，外面に黄味の強いオリーブ釉がかかる。高取焼系である。

深皿 (40)　復元口径24.4cmを測る。体部から口縁部が段をつけて屈折し，外へ開く器形である。内外面白化粧土によるハケメ文が入る。唐津焼である。

擂鉢 (41～43)　いずれも口縁部片である。口径はそれぞれ27.2cm，24.0cm，32.8cmを測る。41は備前焼，9本単位の条線で，使用によりかなり摩滅する。42は小型である。10本単位の条線が密に入る。43の口縁部は玉縁状を呈し，溝の深い条線が密に入る。色調は41が暗赤褐色，

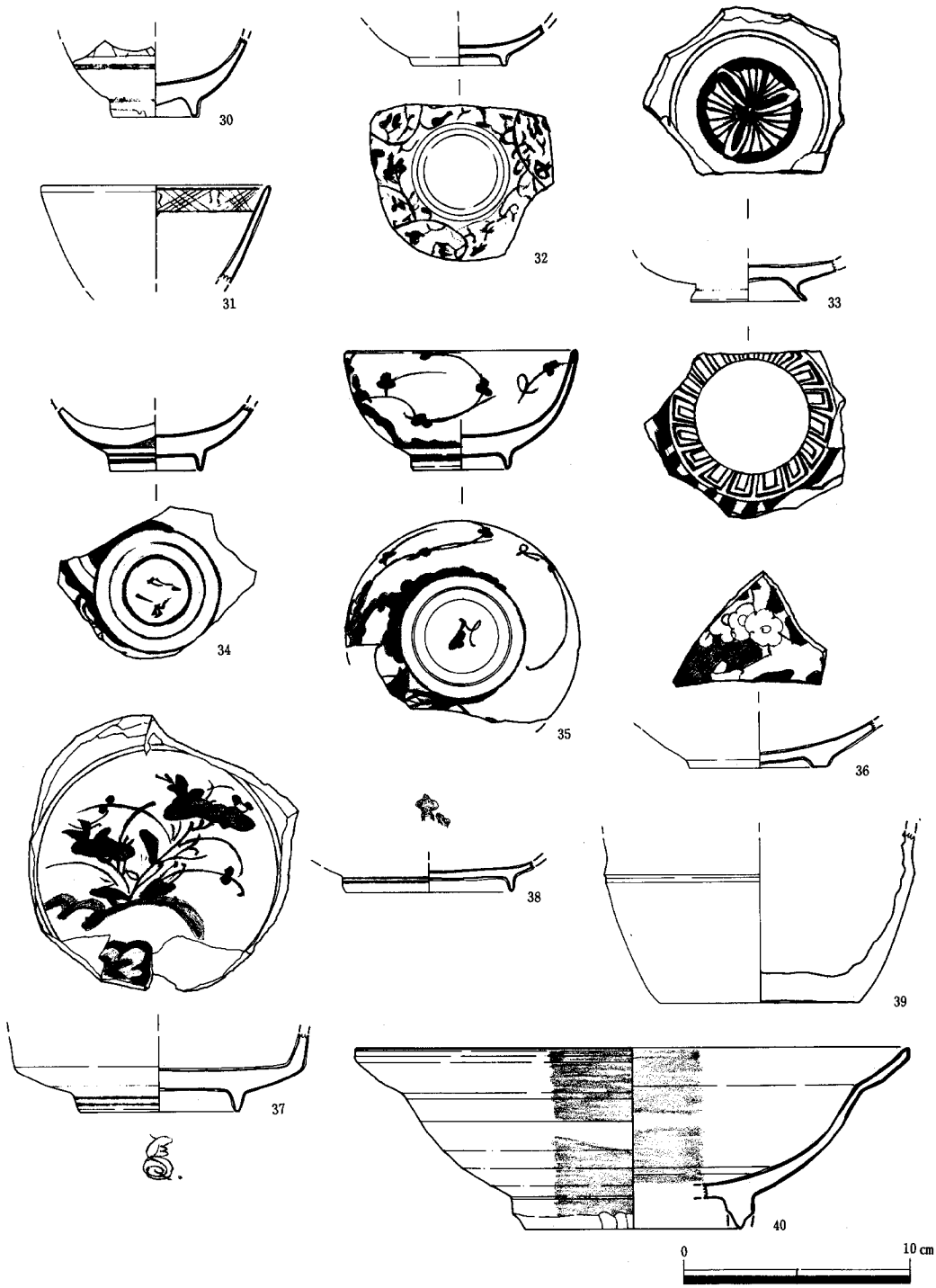


Fig. 114　1号溝出土遺物（縮尺 1/3）

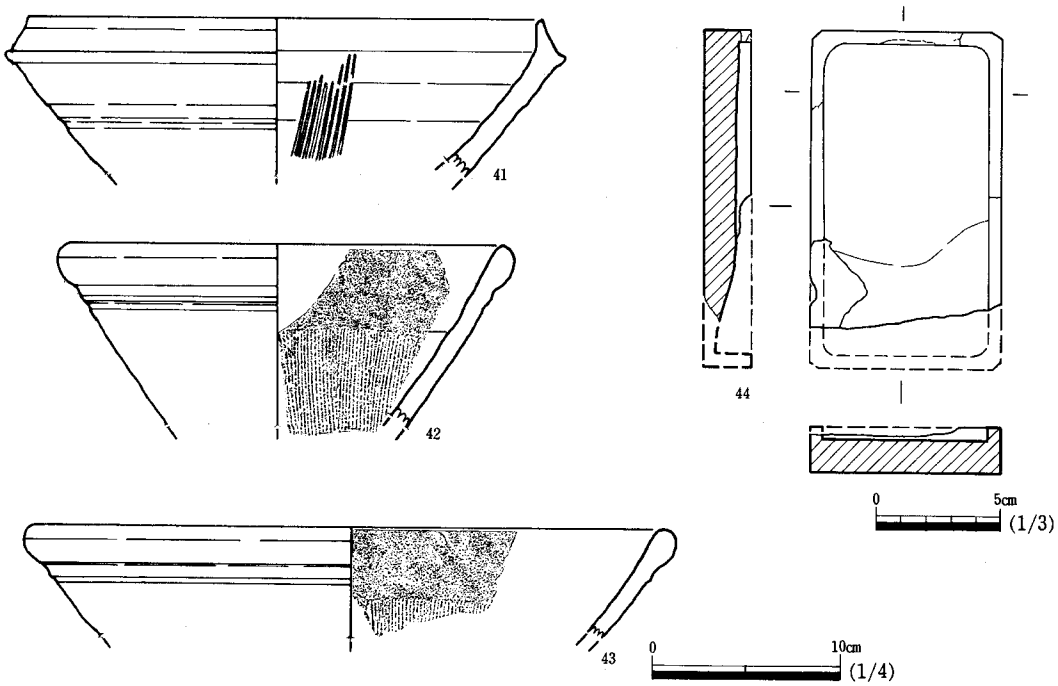


Fig. 115　1号溝出土遺物（縮尺 1/3・1/4）

42・43が赤紫色である。胎土はいずれも砂粒を含み，焼成は良好。41が15世紀～16世紀初，42・43は18～19世紀である。

石製品

硯（44）　黒灰色の粘板岩製で，池部を欠失する。現存長は11.7cm，最大幅7.7cmを測る。各側面は丁寧な研磨仕上げであり，四隅は面取している。使用によりかなり摩滅している。

ピット出土遺物（Fig. 116, PL. 71）

45はピット8，46はピット7より出土した。

染　付

皿（45）　口径22.5cmを測る大皿。見込に呉須で，蝶と草花を描くが，砂が付着し少し汚れている。高台内面にハリ支痕が残る。焼きひずんでいるが，焼成は良い。肥前系である。

土製品

鞴羽口（46）　羽口の先端片である。現存長9.9cm，孔径3.0cmを測る。外面はヘラナデ調成，内面にしぼり痕が残る。先端部は鉄分がタール状に黒色に付着し，熱により桃色に変化する。

4）小　　結

以上調査の概要について述べた。ここではそれらについて若干のまとめを行ないたい。今回の調査で検出された遺構はほぼ江戸時代中期頃である。北隣の第103次調査区とほぼ同時期のも

のである。２号柵のように第103次調査地点から続く遺構もある。１号・２号溝については南側の谷に向って流れる地割と排水施設を兼ねた溝であり，２号溝が埋没した後，１号溝が掘り直されている。１号溝については，昭和の初めの頃，埋立てられたという事である。ピット７出土の鞴羽口は，作りがやや稚拙で，江戸時代のものよりは古い印象を受けるが，いずれにしても，この地域で鍛冶関係の工房があったと思われる。（山崎）

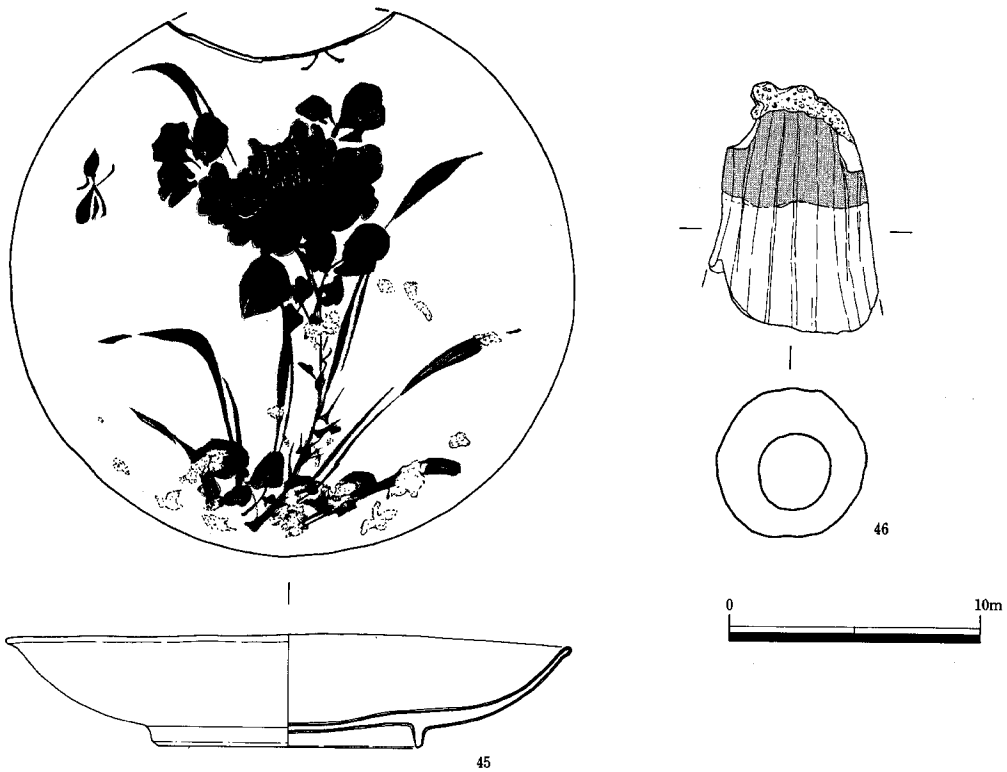


Fig. 116　ピット出土遺物（縮尺 1/3）

10. 第122次調査　(調査第号　8707)

1）調査地区の地形と概要

調査地は早良区小田部2丁目1―16に所在し，対象面積は425m²，調査面積は375m²である。

当該地は八つ手状に延びる細長い台地の中央付近に位置し，北から切り込んだ谷部の西側に隣接し，調査区東端で湧水を伴う段落ちを確認した。地内は東に向かって傾斜し，標高は西側で9.3m，東側で9.0mを測る。遺構面は橙色のロームである。後世の整地のため，地内中央に南北方向の段落ちがある。調査区の南側隣接地では第52次調査がを行ない，古墳時代の竪穴住居跡4軒，土坑12基，掘立柱建物3棟などの遺構を検出している。

発掘調査は，昭和62年5月25日～6月26日まで行なった。検出した遺構は，土坑5基，掘立柱建物6棟，である。このうち掘立柱建物2棟と5号土坑は，第52次調査に続くものである。またかなり新しい時期の溝2条があり，第52次調査に続く。覆土は茶褐色を呈し，古墳時代などの土器と有田焼と思われる磁器片などを少量出土した。

2）遺構各説

土　坑（SK）

検出した土坑は5基で，その内1基はかなり新しい可能性がある。また，5号土坑は2基に分かれると考えられるが，遺構番号は5－a号，5－b号とした。

1号土坑（Fig. 118）

調査区西側で検出した。平面形は隅丸長方形にちかい。長さ1.56m，幅0.86m，深さ26cmを測る。覆土は主にロームブロックから成り，貝がらの破片が出土していることから，新しい時期の可能性が高い。その他には土器の細片が出土しただけである。

2号土坑（Fig. 118，PL. 72）

調査区中央南側で検出した。平面形は楕円形で，削平のため北側壁面が削り取られている。長径1.08m，短径0.88m，深さ24cmを測る。断面形は逆台形に近いものと思われる。中央のピットは樹根による攪乱である。出土遺物は土器の細片が少量出土しただけである。

3号土坑（Fig. 118，PL. 72）

調査区南東隅で検出した。平面形は方形に近い長方形で，長さ1.24m，幅1.1m，深さ22cmを測る。断面形は逆台形を呈し，覆土は黒褐色粘質土で，炭化物を多く含む。遺物は土師器，須恵器片が出土したが，小片が多い。土師質の瓦らしき物もあるが明確ではない。

Fig. 117　第52・122次調査遺構配置図（縮尺 1/300）

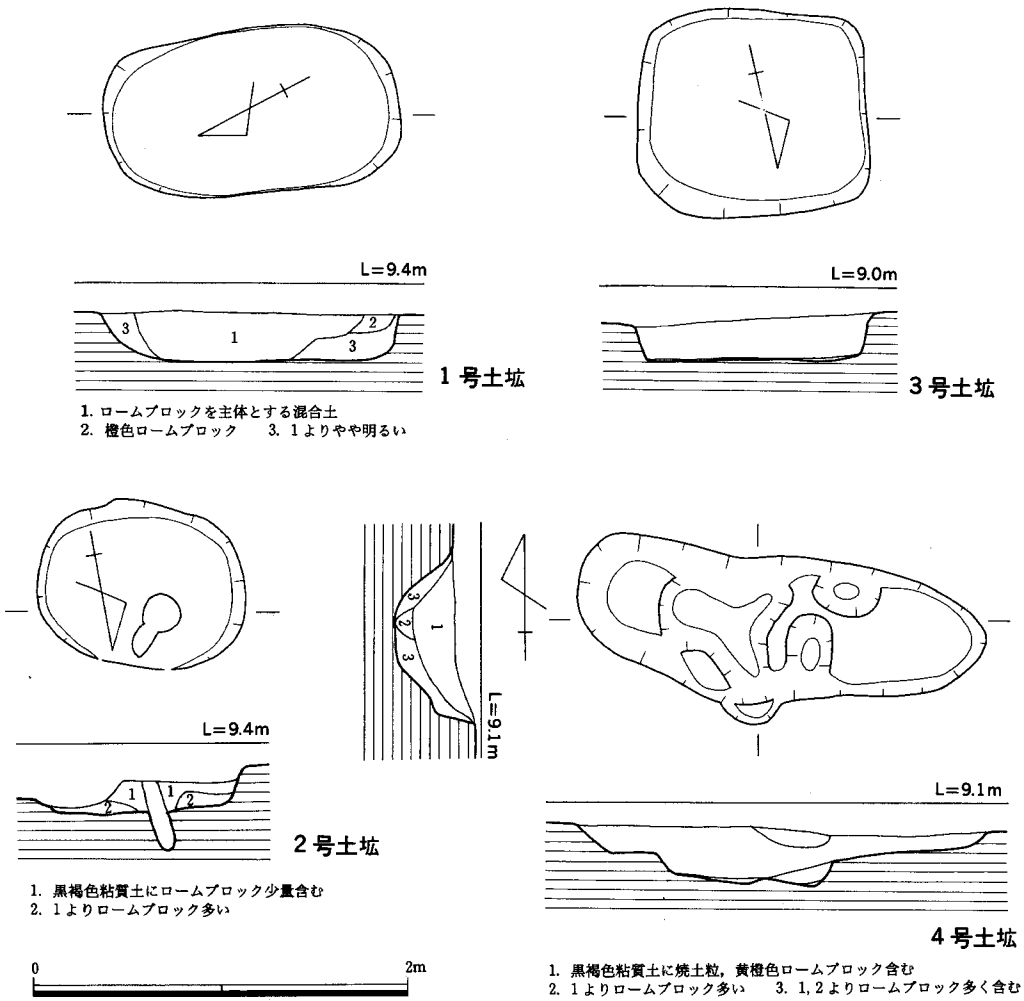


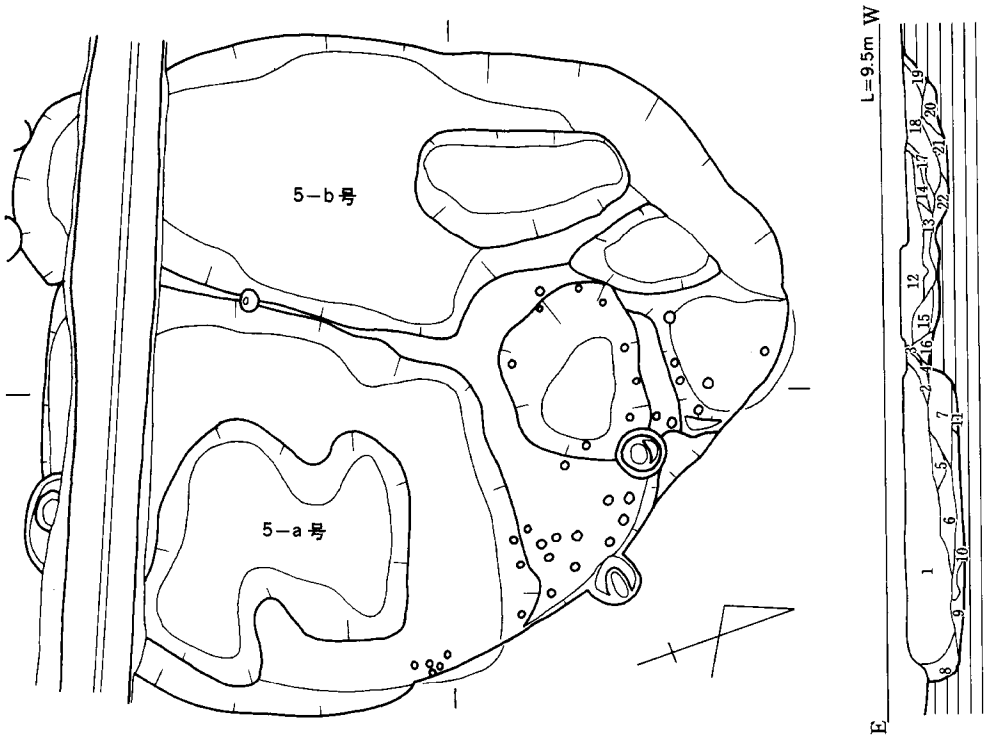
Fig. 118　1号～4号土坑（縮尺 1/40）

4号土坑（Fig. 118, PL. 73）

調査区南隅，3号土坑の西側で検出した。平面形は長楕円形に近く，2段掘りである。長さ2.2m，幅0.8m，深さ30cmを測る。中央のピットは4号建物の柱穴である。覆土は，地山である橙色ロームブロックに黒色土をまじえる。出土遺物はほとんどない。

5号土坑（Fig. 119, PL. 73・74）

調査区南側で検出し，第52次調査の11号土坑に続くものと思われる。1号建物に切られている。掘り下げる途中で全体の形状や土層断面から，2基の土坑の切り合いと判断したが，時期的にはほぼ同じである。遺構の南東隅にある新しいと判断した土坑を5－a号（SK－05－



東西断面土層名称

1； 黒褐色粘質土に暗褐色ローム粒混入
2； 暗褐色粘質土に焼土ブロック混入
3； 2よりやや明るい
4； 2に黄褐色ロームブロック混入
5； 暗茶褐色粘質土と黄褐色ロームの混合土
6； 2に炭化物を多く含む
7； 6よりやや暗い
8； 暗褐色粘質土と黒色土の混合土
9； 〃 と黒褐色土の混合土
10； 暗灰褐色粘質土に，八女粘土など混合
11； 褐色粘質土に黒褐色土混入
12； 黒色粘質土にローム粒混入
16； 褐色ロームに黒色少量混入
14； 暗茶褐色粘質土に明褐色ローム混入
15； 暗茶褐粘質土に黒色土混入
16； 〃 八女粘土混入
17； 〃 明褐色ローム混入
18； 黒褐色粘質土に褐色ローム混入
19； 黒色粘質土に褐色ローム混入
20； 19よりローム多い
21； 20より明るい
22； 褐色ロームブロックに黒褐色混入

南北断面土層名称

1； 黒褐色粘質土に暗褐色ローム混入
2； 1より暗い
3； 褐色粘質土と黄褐色ロームの混合（炭化物多い）
4； 暗褐色粘質土と黄褐色ロームの混合（焼土を含む）
5； 〃 に褐色ローム混入
6； 暗褐色粘質土（炭化物，焼土含む）
7； 暗茶褐色粘質土（炭化物，焼土多し）
8； 〃 に明褐色ローム混入
9； 7に八女粘土混入
10； 6より暗い
11； 9より炭化物，焼土少ない
12； 1とほぼ同じ
13； 黒褐色粘質土
14； 12より暗い
15； 1にほぼ同じ
16； 黒色土に褐色ローム混入
17； 16よりローム多い
18； 16よりローム少ない
19； 黒褐色粘質土と橙色ローム混合土
20； 19よりローム少ない
21； 褐色ローム
22； 暗灰色粘質土に褐色ローム混入
22； 12より明るい
24； 18よりローム多い
25； 暗褐色粘質土
26； 黒褐色粘質土に八女粘土混入

Fig. 119　5号土坑（縮尺 1/80）

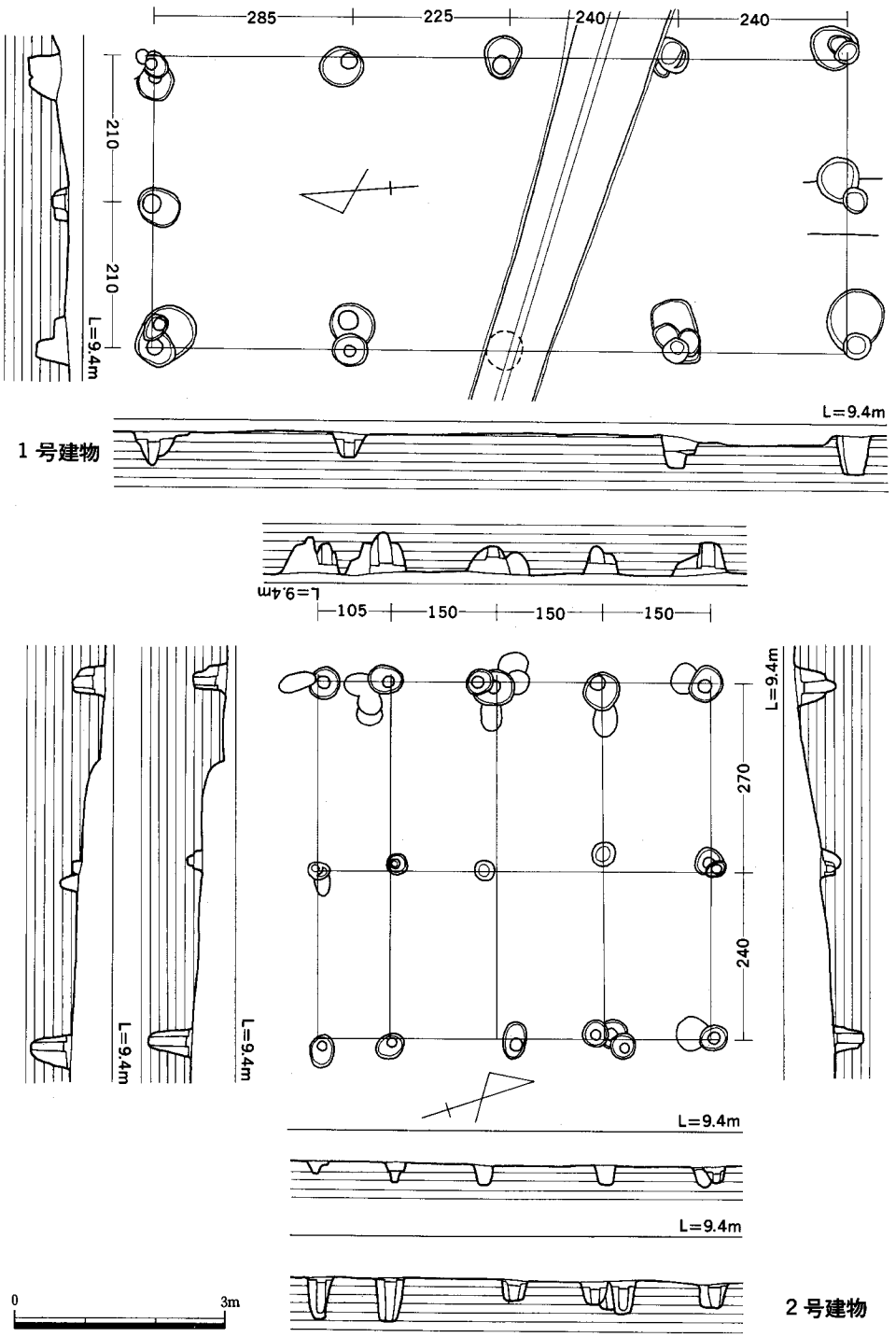


Fig. 120　1号・2号掘立柱建物（縮尺 1/100）

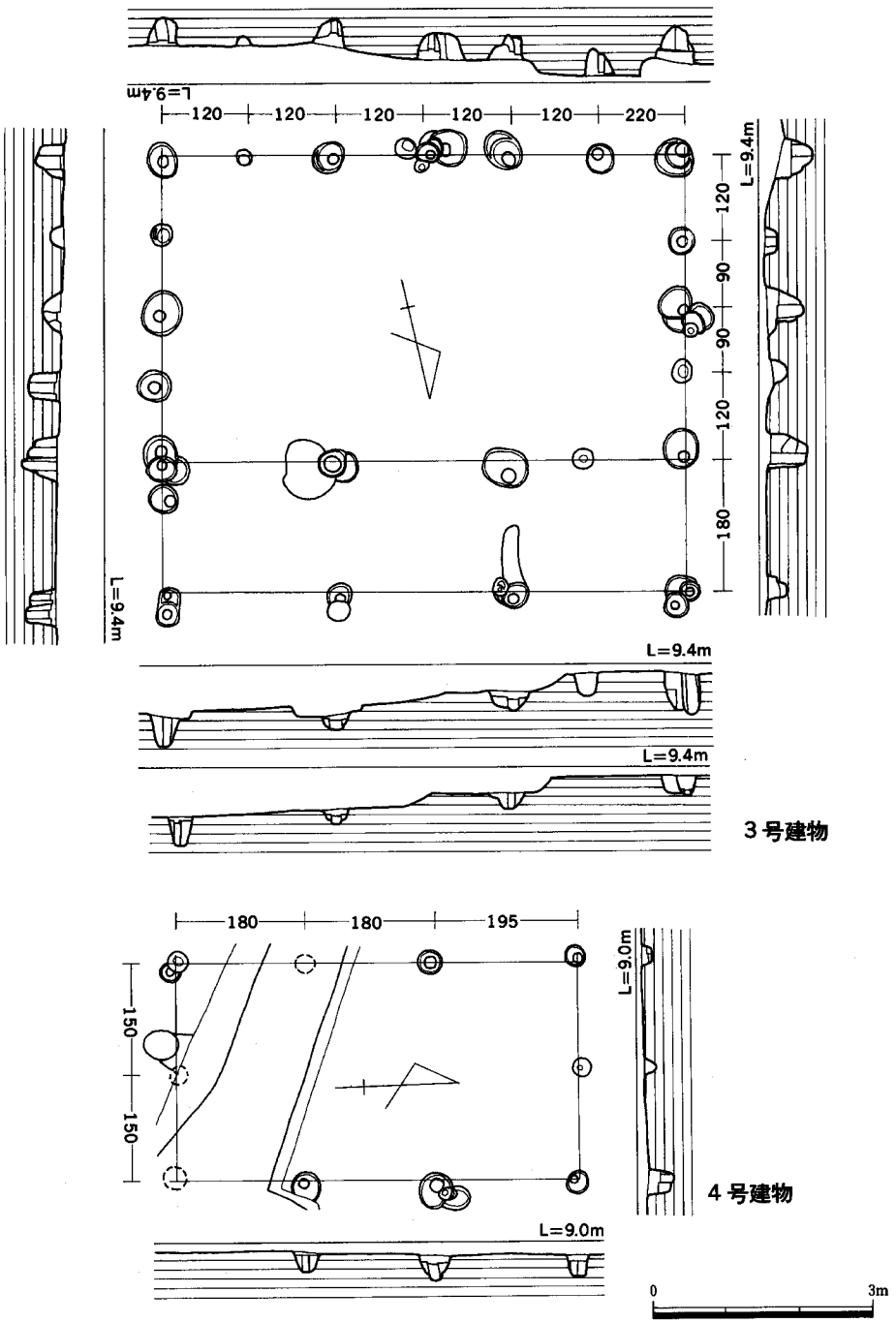


Fig. 121　3号・4号掘立柱建物（縮尺 1/100）

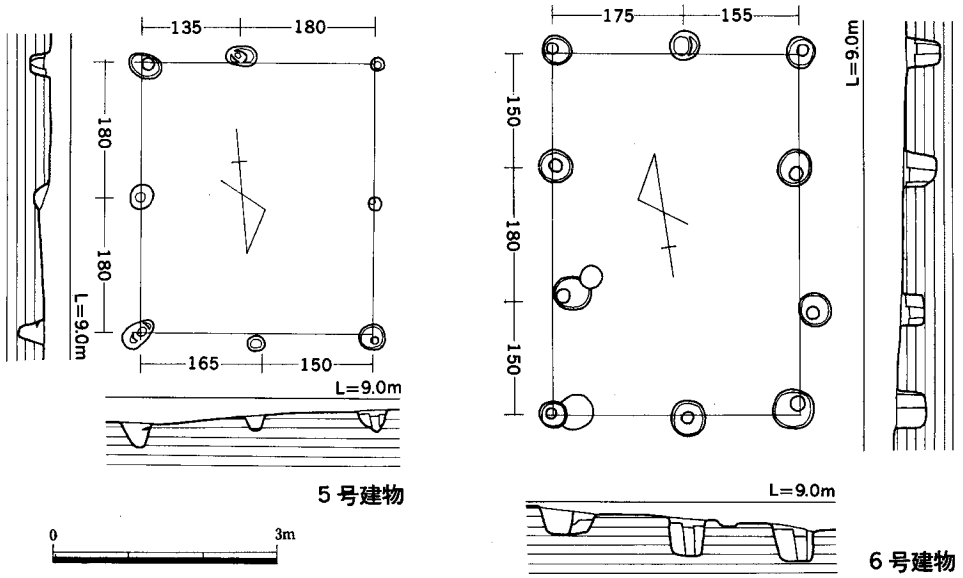


Fig. 122　5号・6号掘立柱建物（縮尺 1/100）

a），切られている大きな土坑を5－b号（SK05－b）とした。さらに北西側でもう1基切りあっている可能性もあるが，判然としなかった。5－a号は長径4.8m，短径4.45m，深さ75cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体とする。5－b号は長径8.35m，短径8.25m，深さ45～58cmを測る。覆土は橙色のロームブロックと黒褐色粘質土を主体とする。湧水が著しく，そのためにa号の東壁は抉れている。ともに古墳時代後期の土師器，須恵器を大量に出土したが，5－a号では土師器の甕が多く出土するなど，その構成にやや変化がある。

掘立柱建物（SB）

1号掘立柱建物（Fig. 120，PL. 74）

調査区南側で検出し，第52次調査に続く。5号土坑を切っている。主軸をN－5°30′－Wに置く，2×4間の側柱建物である。桁行全長9.9m，梁間全長4.2mを測る。柱穴掘り方は円形で，直径35～63cm，深さ23～55cm，柱根径15～25cmを測る。出土遺物は少なく，土師器と須恵器の小片が少量出土しただけである。

2号掘立柱建物（Fig. 120，PL. 74）

調査区北側で検出した。2×3間の庇付きの総柱建物である。庇を含めた桁行全長5.55m，梁間全長5.10mを測り，主軸をN－18°－Wにとる。西側桁行方向の柱穴はすべて切り合っており，建て替えがあるかも知れない。柱穴掘り方は略円形を呈し，直径25～55cm，深さ20～65cm，柱根径13～18cmを測る。土師器，須恵器の小片が少量出土した。

3号掘立柱建物 (Fig. 121, PL. 74)

調査区中央やや南側で検出した。東西方向に主軸をとる，3×2間の側柱建物である。北側に庇をもつ。北側桁行の東部分を除いて，主柱の間にやや小さめの間柱を建てる。桁行方向の全長7.2m，主柱穴間の距離2.4m，梁間方向は全長5.0m，庇を除いた梁間全長4.2m，主柱穴間の距離は2.1m を測る。出土遺物は土器片が出土した。

4号掘立柱建物 (Fig. 121, PL. 75)

調査区南端で検出し，第52次調査に続く。1号建物にほぼ平行し，4号土坑を切る。2×3間の側柱建物である。桁行全長5.55m，梁間全長3.0m を測る。柱穴掘り方は円形を呈し，直径25～50cm，深さ18～38cm，柱根径13～18cmを測る。土器片が少量出土した。

5号掘立柱建物 (Fig. 122, PL. 75)

4号建物の北側で検出した，2×2間の側柱建物である。4号建物にほぼ並行する。削平のためか特に西側の柱穴の残りが悪く，柱穴掘方径18～45cm，深さ20～35cmを測る。出土遺物は少なく，土師器・須恵器の小片がごく少量が出土した。

6号掘立柱建物 (Fig. 122, PL. 75)

5号建物の北側，調査区中央東側で検出した。2×3間の側柱建物である。柱穴は一直線上に無く，ややずれている。主軸方向をN－8°－Wに取る。柱穴掘方の直径36～56cm，深さ30～50cm，柱根径15～19cmを測る。土器片がごく少量出土した。

Tab. 12 第122次調査掘立柱建物一覧表

建物番号	規模	方向	桁行		梁間		方位	床面積(㎡)	備考
			実長 (m)	柱間寸法(尺)	実長 (m)	柱間寸法(尺)			
1号建物	2×4	南北	10.05	8、8、8、9.5	4.2	7.7	N－5°30′－E	42.21	
2号建物	3×2	南北	15.0(18.5)	5、5、5、(3.5)	5.1	9.8	N－18°－E	76.5	総柱、廂付き
3号建物	2×3	東西	7.2	8、8、8 (4、4、4、4)	4.2(6.0)	7.7(4、3、3、4.6)	N－77°－W	30.24	間柱、廂付き
4号建物	2×3	南北	5.55	6.1、6、6	3.0	3、3	N－3°－E	16.65	
5号建物	2×2	南北	3.6	6、6	3.15	5、5.5(6、4.5)	N－5°30′－E	11.34	
6号建物	2×3	南北	4.8	5、6、5	3.3	6、5	N－8°－E	15.84	

3）遺物各説

5号土坑以外からは，小片の土器片が出土しただけで，実測できるものはほとんど無かった。それらの出土遺物のほとんどは，古墳時代後期・奈良時代の土師器，須恵器片である。

3号土坑出土遺物 (Fig. 123, PL. 76)

出土遺物は少なくないが，ほとんど小片で，図示できるのは3点のみである。

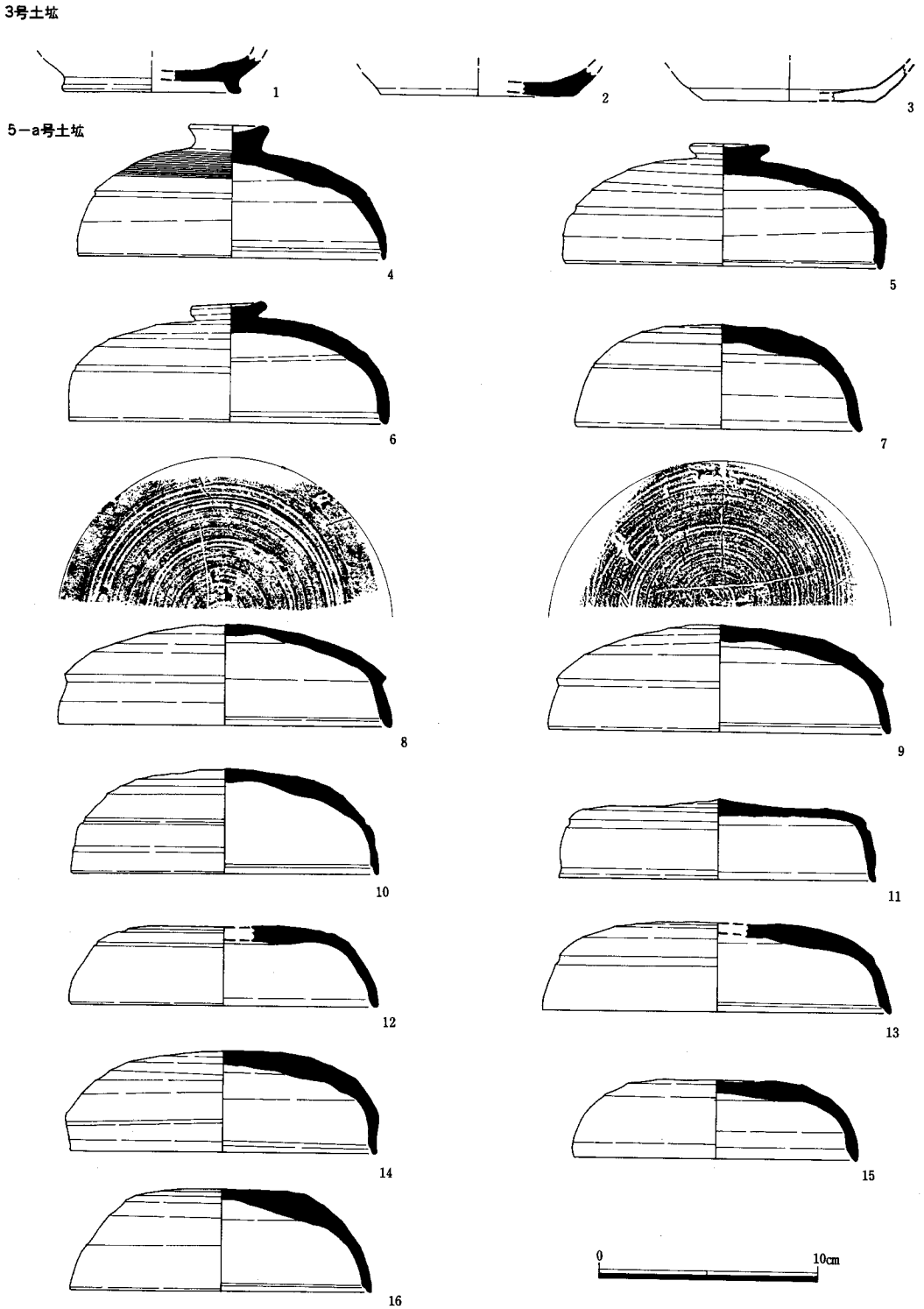


Fig. 123　3号・5－a号土坑出土遺物（縮尺 1/3）

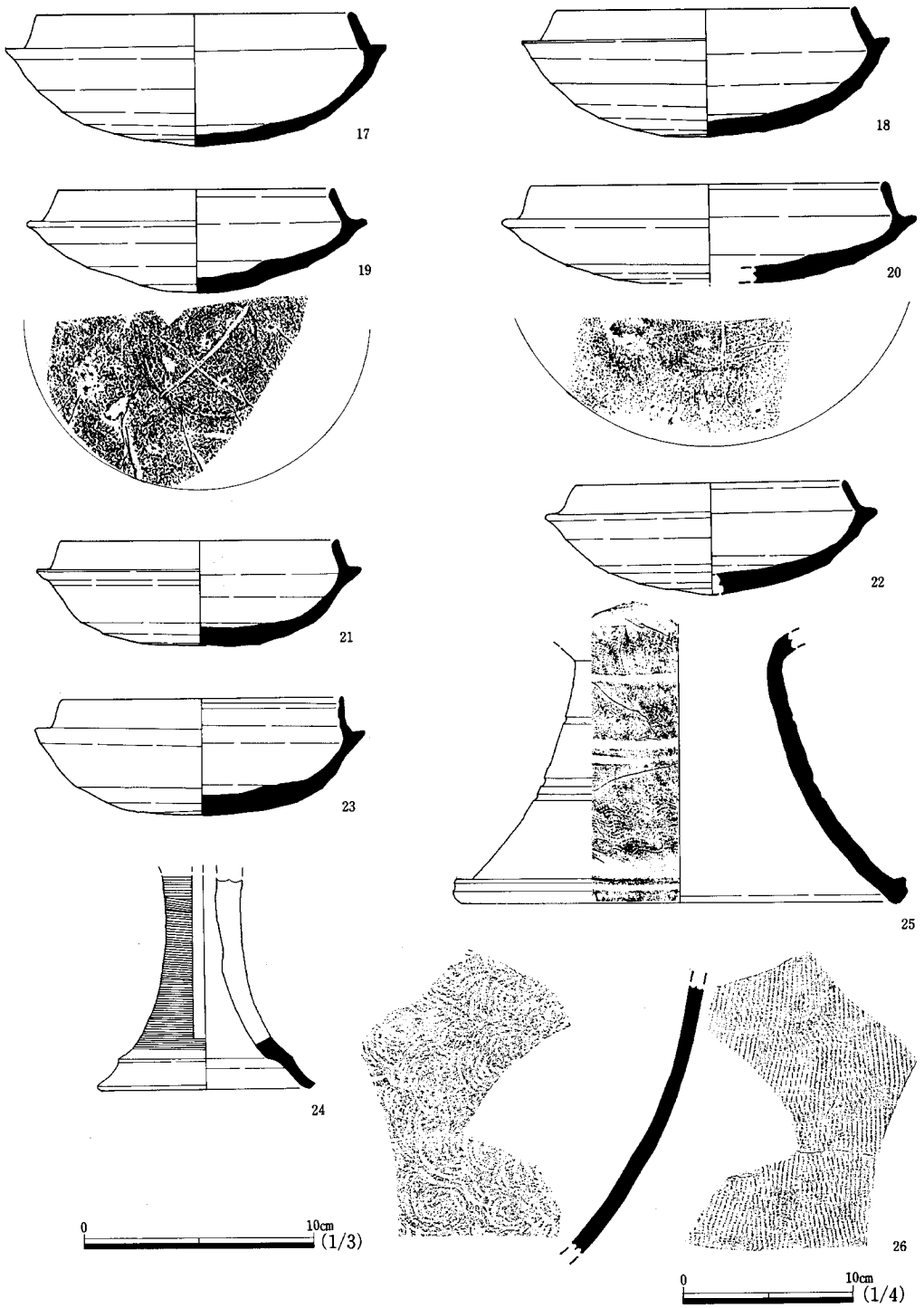


Fig. 124　5－a号土坑出土遺物（縮尺　1/3、1/4）

須恵器

椀（1）　1は高台付き椀で，高台径8.2cmを測る。高台は体部と底部の境に付き，外に開く。調整は外面横ナデ，内面はケズリである。やや赤みを帯びた灰色を呈する。

坏身（2）　小片である。推定底径8.9cmである。摩滅のため，調整は不明である。灰色を呈し，胎土は精良である。

土師器

坏（3）　小片で，推定底径8.2cmを測る。明橙色を呈し，調整はロクロによるナデである。胎土は精良である。

5－a号土坑出土遺物 (Fig. 123～128, PL. 76・77)

各層から大量に遺物が出土したが，完形品や大きな破片は床面近くに多い。その総量はコンテナで約10箱である。各種の器種があるが，土師器の甕，須恵器の坏が特に多い。

須恵器

坏蓋（4～16）　つまみを持つもの（A）と持たないもの（B）に大きく分れる。Aタイプは口径13.7～14.2cm，器高5.4～6.0cmを測る。口縁部と体部の境には沈線が巡る。内面の口縁部先端は削り取られている。調整は4が外面は体部にカキメを施し，他はヨコナデ調整。内面はロクロによる反時計回りのヨコナデ調整である。5と6は，体部外面が反時計回りの回転ヘラケズリで，内面は天井部の裏側が同心円状の当て具痕，その他はヨコナデである。B_1タイプ（7～13）はさらに天井部が丸みを帯びたもの（7～10）と，平らなもの（11～13）に分かれる。調整は外面は体部が回転ヘラケズリ，口縁部がヨコナデ，内面は天井部が当て具の跡，体部下半と口縁部はヨコナデである。口径13～14.9cm，器高3.7～5.8cmを測る。8・9には一本線のヘラ記号がある。B_2タイプ(14～16)は体部中央が厚くなり，口縁部径12.8～13.6cm，器高3.6～4.7cmを測る。調整はB_2タイプに同じである。

坏身（17～23）　口縁部は直線的にほぼ同じ角度で内傾する。底部は丸みを帯びるものが多いが，器高が浅く，平底に近いもの（20・21）もある。前者はやや大きめのもの（17・18）と小さめのもの（19・22・23）がある。調整はいずれも外面が回転ヘラケズリとヨコナデ，内面が巻き上げとヨコナデである。回転方向は両方あるが，反時計回りの方が多い。19と20には×印のヘラ記号がある。

高坏（24）　24は筒部片で，裾部径9.2cmを測る。透しは2カ所あり，ほぼ長方形を呈する。調整は筒部外面にカキメを施している以外は，横ナデである。暗灰色を呈する。胎土には金雲母を含むが精良である。

器台（25）　小型の器台の脚部片である。外面には櫛による波状文が3段に施され，その間に計3本の沈線がある。裾の外周にも沈線が1本施されている。それ以外の部分はすべてヨコナデ調整を施す。底径19.6cmを測る。

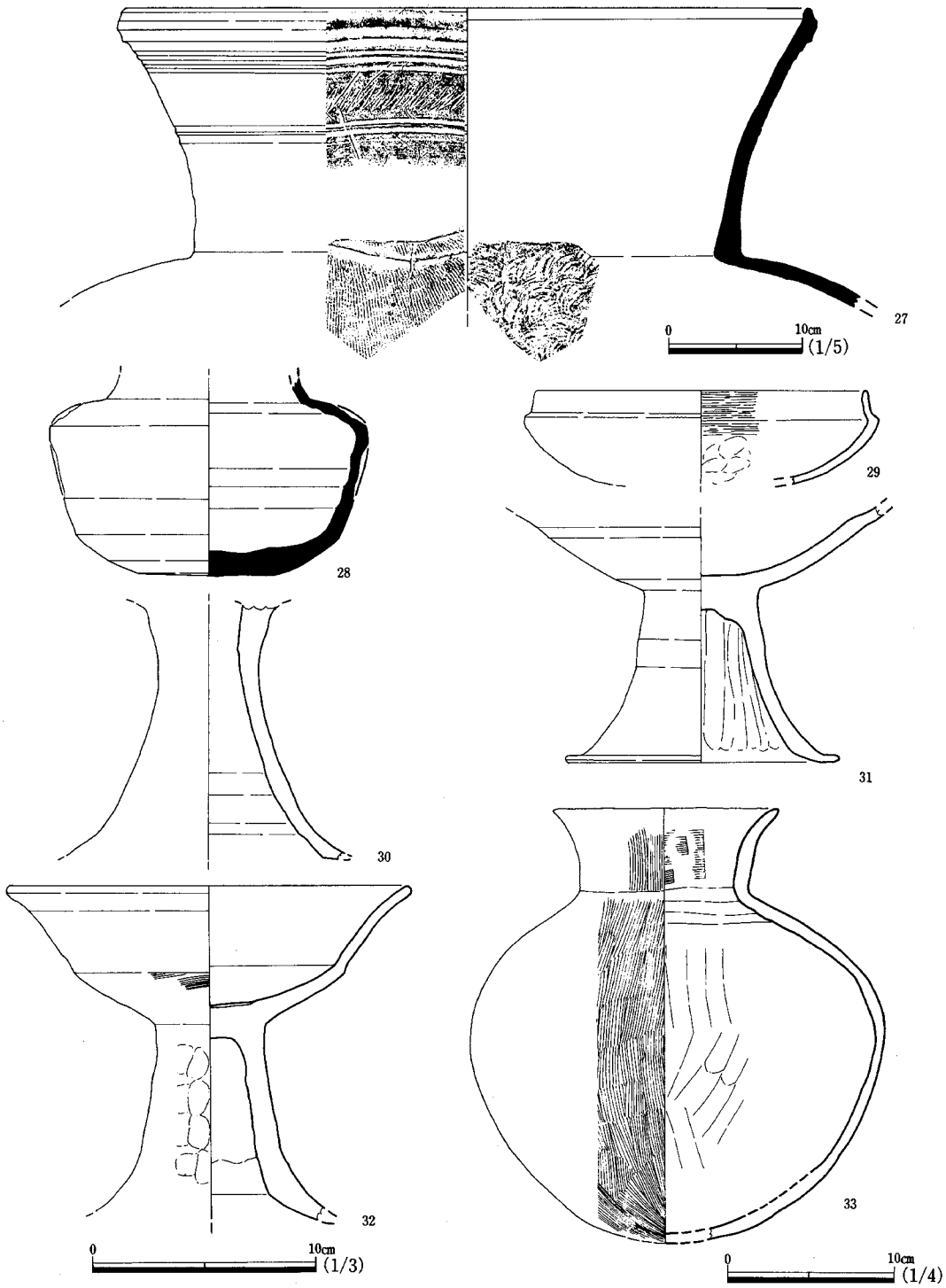


Fig. 125　5－a号土坑出土遺物（縮尺 1/3・1/4・1/5）

甕（26，27）　27はゆるく外反する口縁部から頸部の破片で，口縁端部を内側に折る。口縁部径約42cmを測る。外面に上から3本の沈線，ヘラ書きによる波状文，2本の沈線を施している。口縁部はヨコナデ，胴部は外面が平行タタキ，内面が同心円タタキを施す。27は胴部の破片で，外面に平行タタキ，内面に同心円タタキを施す。

壺（28）　肩が張り，平底気味の小型の壺である。胴部は直線的で，胴部最大径14.2cmを測る。両面ともヨコナデ調整を施す。

土師器

坏（29）　口縁部径14.9cm，推定器高4.4cmを測る。口縁部と胴部の境は須恵器ほど明確ではない。両面とも指押さえの後，ヘラミガキ調整を施し，炭素を吸着させ，黒色を呈する。

高坏（30～32）　32は筒部の器壁が厚い。坏部は途中で屈折し，口縁部はやや外反する。口径17.9cm，推定器高15.2cmを測る。明橙色を呈し，胎土には石英粒を多く含む。30は筒部の破片で，他のものより長い。内面はナデ調整で，外面は不明である。31は筒部が32より短く，器壁が薄い。坏部はほぼ直線的に開く。調整は筒部内面が縦方向のケズリ，その他はナデもしくはヨコナデである。

甕（33～42）　やや長めの口縁部と丸い胴部を持つもの（A），短めの口縁部と丸い胴部を持つもの（B），長めの胴部を持つもの（C）に分かれる。33はAタイプで，口縁部はゆるく外反し、胴部は強く張る。胴部最大径はやや上位にある。外面はハケ調整，内面は口縁部がヨコハケ，胴部がヘラケズリである。35～37・40は短い口縁部と球形に近い胴部を有し，胴部最大径は中位にある。口縁部と胴部の境が，外面ではやや不明瞭である。調整は外面がハケ，内面は口縁部がハケか指ナデ，胴部は縦方向のヘラケズリである。34・38・39・41・42はCタイプである。長めの胴部を持ち，口縁部と胴部の境が不明瞭である。口縁部の形態は様々である。34の胴部は球体に近いが，頸部の形などからこのタイプに入れた。又，39は胴部がほとんど張らない。調整は外面がヘラナデもしくはヘラケズリを主とし，38は胴部に，39は口縁部にハケを施す。内面は胴部がヨコないしタテのヘラケズリ，口縁部はヨコナデが多い。色調は主に淡橙色を呈し，胎土に石英粒を多く含む。焼成は良好である。

土製品

鞴の羽口（45）　復元直径6.4cm，厚さ2～2.6cmを測る。摩滅のため調整不明。暗黄褐色を呈し，胎土には石英，長石などを多く含み，粗い。

石　器

磨石（43，44）　43は花崗岩系の石材を用いる。長さ12cm，幅9.2cm，厚さ4cmを測る。全面かなり磨かれている。44は滑石系の石材であるが蛇紋岩に近い。両側辺には叩いた後があり，わずかに窪んでいる。長さ9.8cm，幅5.6cm，厚さ2.1cmを測る。

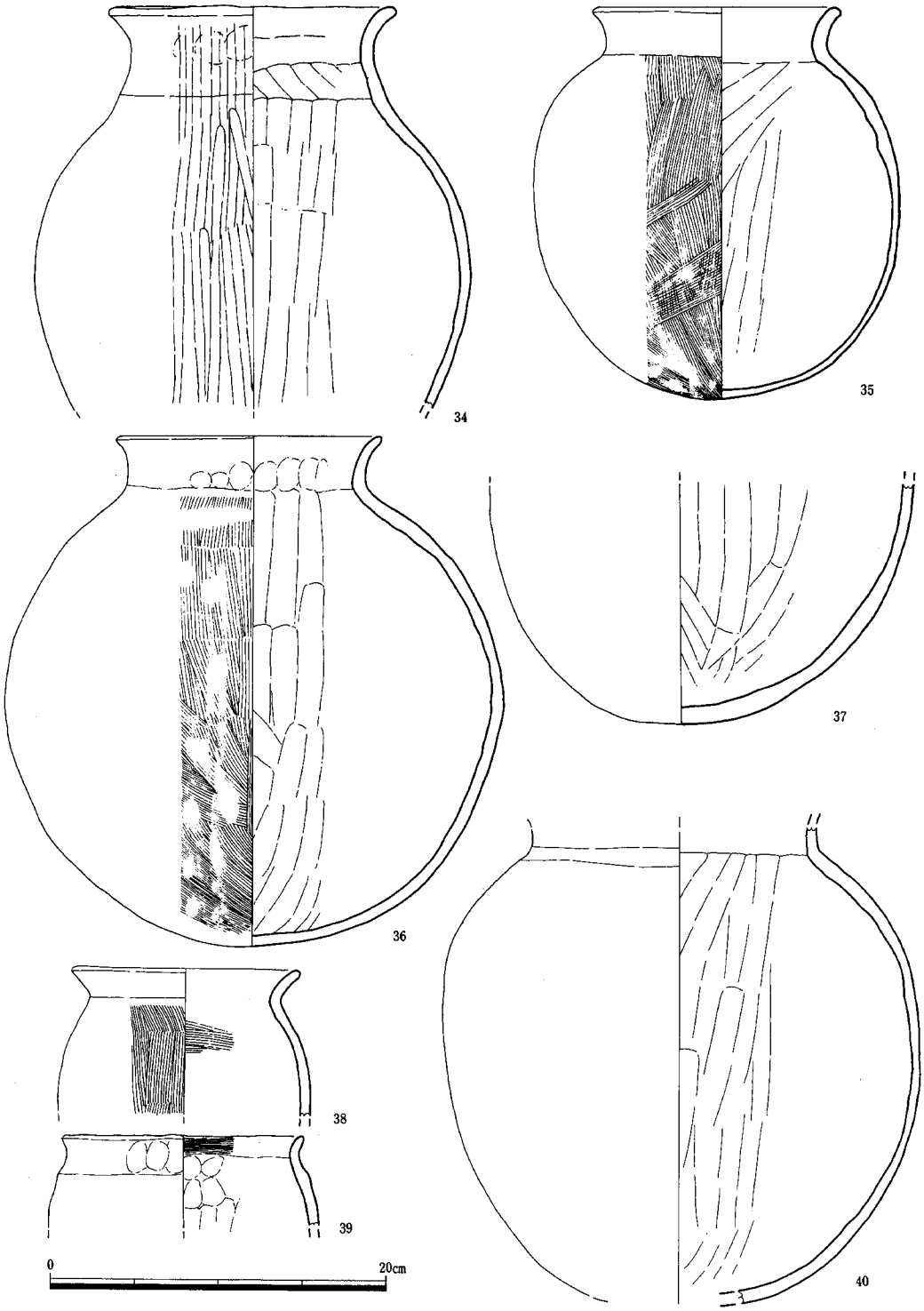


Fig. 126　5－a号土坑出土遺物（縮尺 1/4）

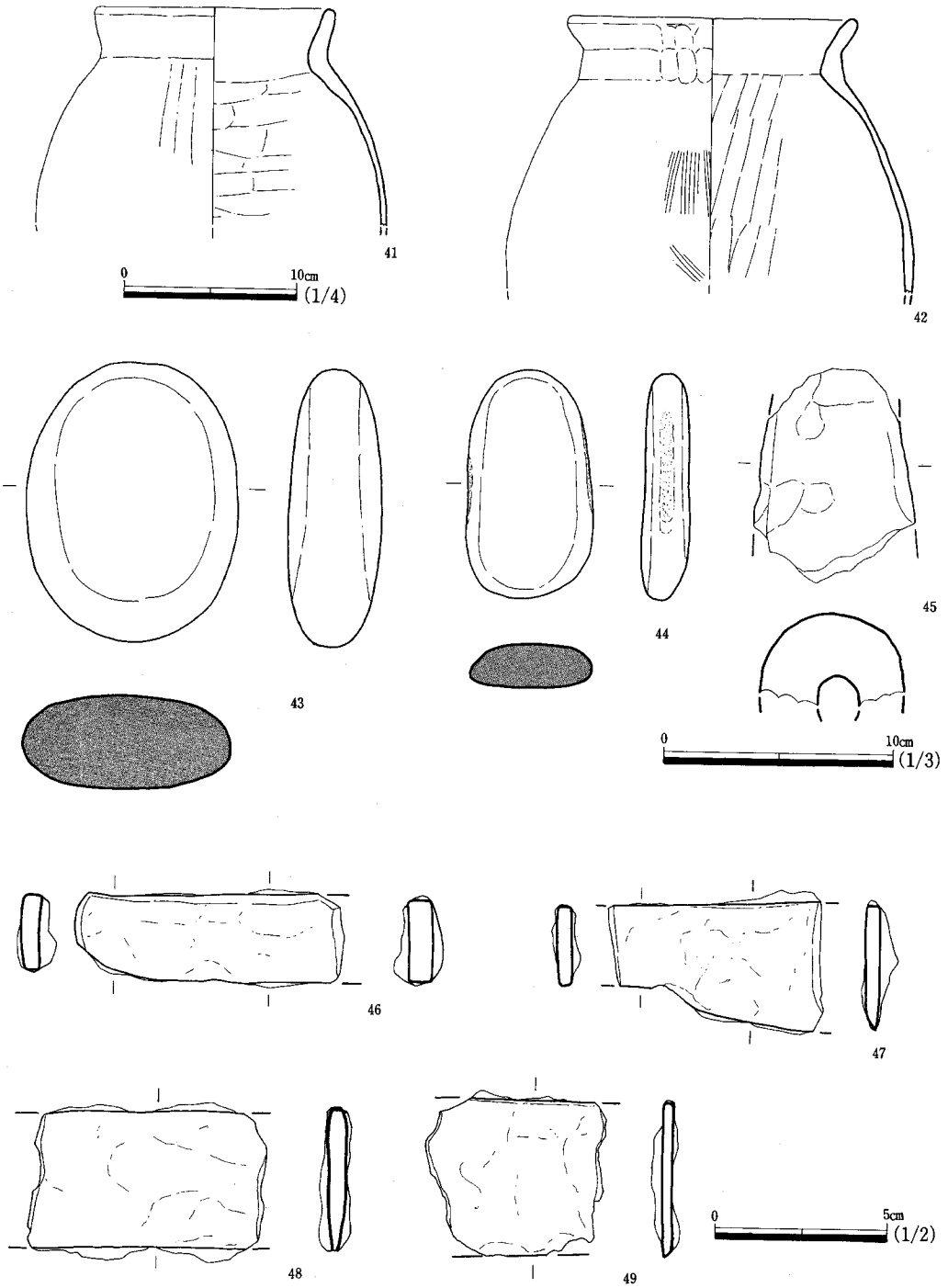


Fig. 127　5－a号土坑出土遺物（縮尺 1/4・1/3・1/2）

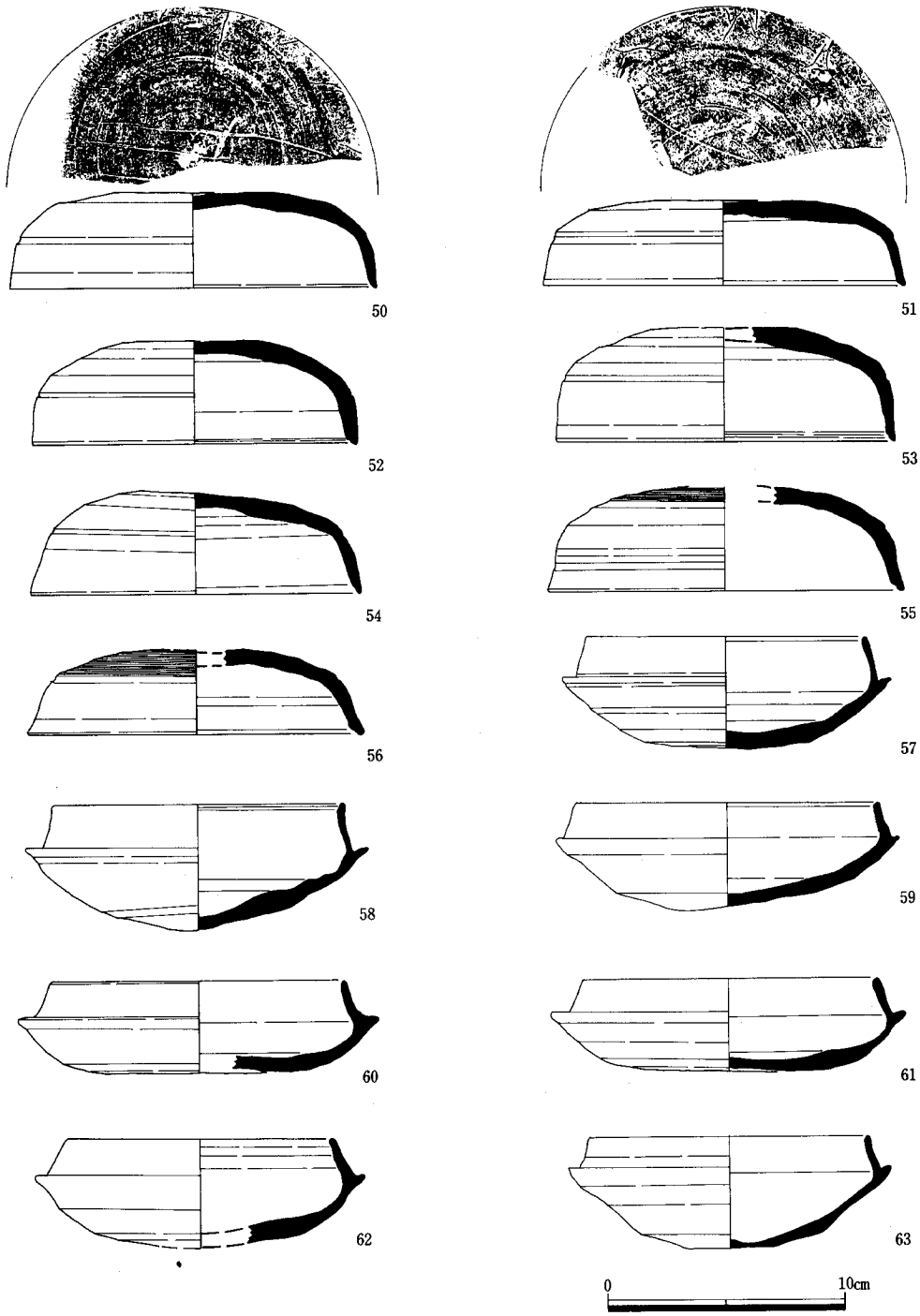


Fig. 128　5－a号土坑出土遺物（縮尺 1/3）

鉄　器

刀（46～49）　同一個体のものが破片で6片出土したが，接合しないため全長はわからない。刀と思われ，茎の幅24cm，身の幅4.0cmを測る。全長に銹が厚く付着しているため厚さは分かりにくいが，5.5mm位を測るものと思われる。

5－b号土坑出土遺物（Fig. 129・130，PL. 79）

5－b号からも多くの遺物が出土したが，土師器の甕の大きな破片が無く，須恵器の小壺が3点出土するなどやや器種構成が異なる。

須恵器

坏蓋（50～56）　1－a号の分類ではB・Cタイプが出土した。Bタイプは50～54で，52と53は器高が高く，口縁部は直線的である。50と51は口径が長く器高が低い。54は口縁部が外に開く。また55も体部と口縁部の境に沈線が巡るが，不明瞭なのでCタイプに入れた。調整は天井部は外面が回転ヘラケズリ，内面が同心円や布と思われる当て具の跡，その他は主にナデである。50には3本線，51には1本線のヘラ記号が施される。口径は13～15.4cm，器高は3.6～5cmを測る。Cタイプは55と56で，ともに口縁部が開いている。55は口径14.1cm，器高2.3cm，56は口径15cm，器高4.4cmを測る。天井部外面にカキメを施す以外は回転ヘラケズリである。

坏身（57～65）　口縁部の形態によって3つに分れる。57.58は口縁部が長く59～62，63～66と短くなる。口径は11.2～12.3と比較的差は少ないが，器高は3.8～5.4cmと差が大きい。調整はいずれも回転ヘラケズリである。

高坏（66・67・70）　66は口径13.3cm，器高9.1cm，裾部径は8.2cmを測る。透かしはほぼ三角形で2カ所ある。調整は全面横ナデである。淡橙色を呈する。67は坏部片で，口径6.4cmを測る。口縁部はわずかに外反する。両面とも回転ヘラケズリ調整である。68は筒部片で，透かしは上下2段に各2つあり，上下の透かしの間に2つの三角凸帯，下段の透かしの下に沈線を巡らす。最も薄いところの幅2.6cmを測る。ほぼ全面横ナデ調整を施す。

壺（68・69）　69は口径6.9cm，器高9cmを測り，肩が張っている。調整は胴部外面にカキメ，底部外面に回転ヘラケズリを施す以外は横ナデ調整である。

甕（71）　頸部片で，頸部の直径12.8cmを測る。調整は胴部外面がカキメ，口縁部外面が櫛書き波波状，内面は口縁部が横ナデ，胴部は同心円タタキである。

土師器

坏蓋（72）　口径15.2cm，器高4.4cmを測る。口縁部と体部の境にわずかに稜が走り，天井部は丸みを帯びる。全面ヘラミガキを施し，灰色味を帯びた橙色を呈する。胎土は石英を多く含み，粗い。

高坏（73～75）　73は坏部片で口径22.7cm，坏部の器高5.3cmを測る。口縁部と体部の間に段が

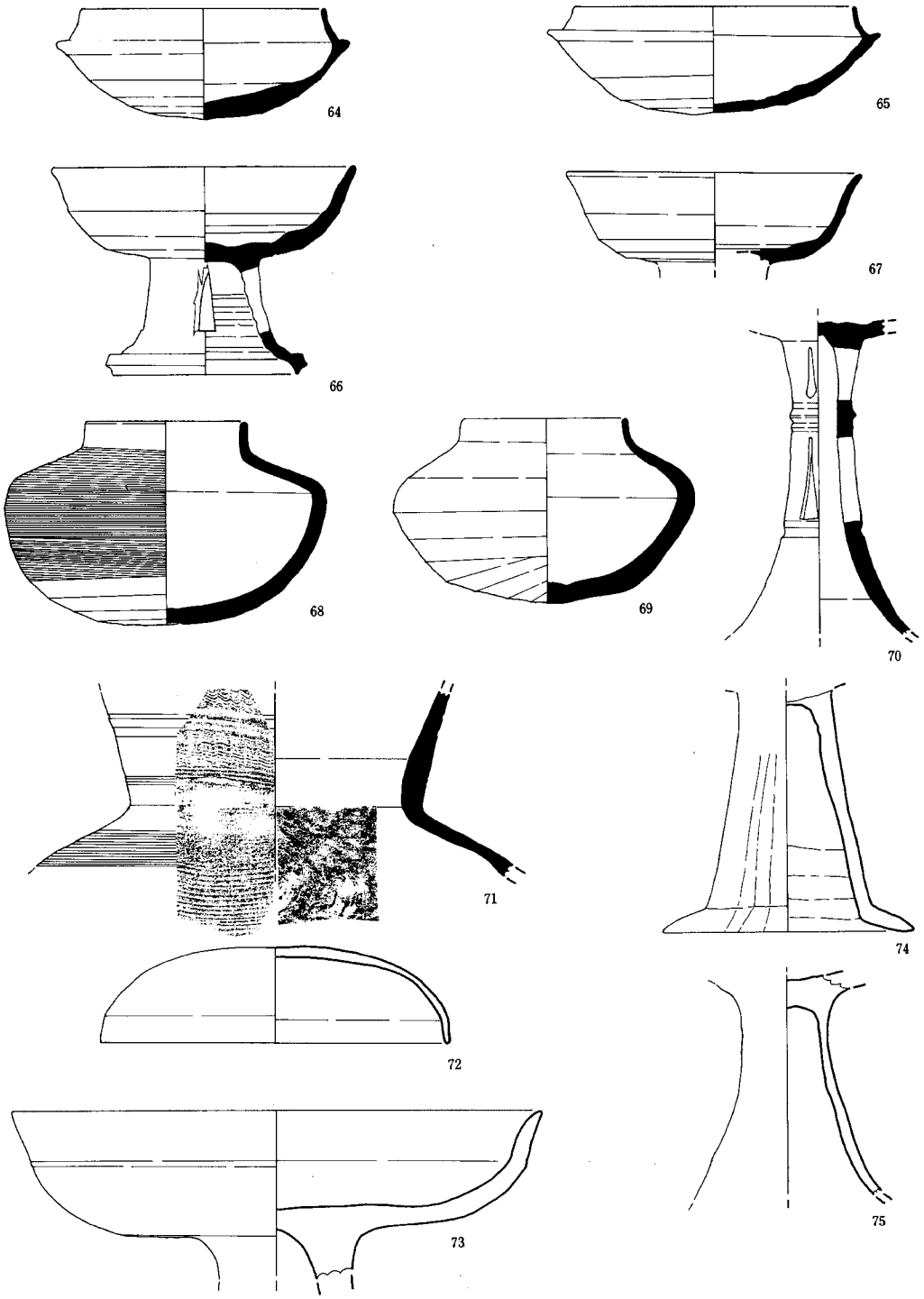


Fig. 129　5－b号土坑出土遺物（縮尺 1/3）

5－b号土坑

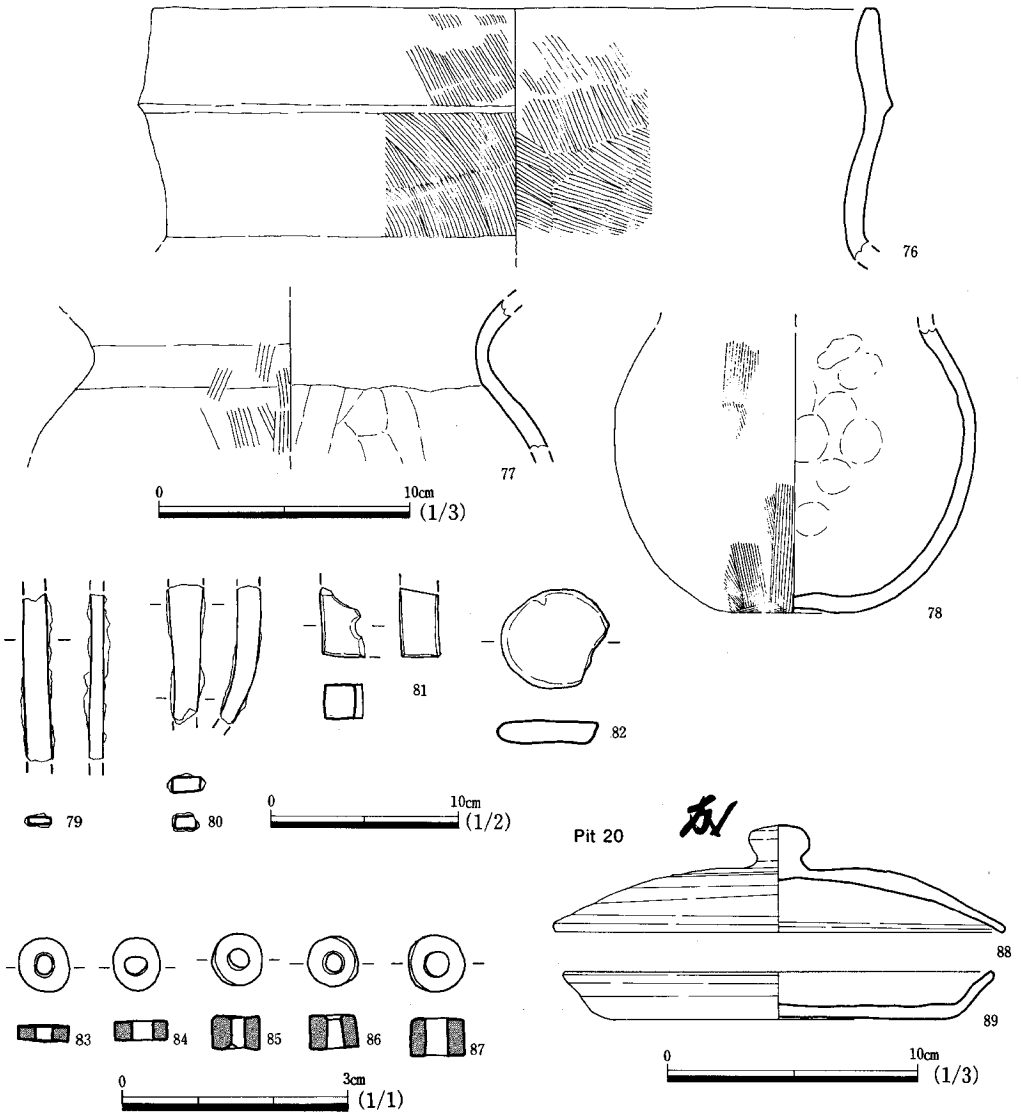


Fig. 130　5－b号土坑，及びピット出土遺物（縮尺 1/1・1/2・1/3）

Tab.13　5－b土坑出土玉類計測表

番　号	種　類	高さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	材　質
83	臼玉	2.8	6.9	2.3	滑石
84	臼玉	2.5	7.0	2.8	滑石
85	臼玉	4.6	6.7	2.0	滑石
86	臼玉	4.8	6.8	2.4	滑石
87	臼玉	5.0	7.2	2.9	滑石

付く。全面横ナデ調整で仕上げる。明橙色を呈し，胎土に石英を多く含み，粗い。74は筒部片で裾部はゆるやかにカーブする。摩滅のため調整は不明である。明橙色を呈し，胎土は比較的精良である。75も筒部片で，筒部と裾部の境は折れ曲がる。裾部径は10.9cmを測る。外面は縦方向のヘラケズリを施し，内面には横方向のヘラケズリを施す。明橙色を呈し，胎土は石英や長石を含み，やや粗い。

甕（76・77）　76は2重口縁の甕で，復元口径28.6cmを測る。両面ともハケメ調整を施すが，口縁部は横ナデでナデ消す。両面とも淡橙色を呈し，胎土には石英，金雲母などを含み，やや粗い。77は頸部片で，頸部13.8cmを測る。胴部外面にはタテハケ，内面はヘラケズリ，口縁部には横ナデ調整を施す。淡橙色を呈し，胎土に石英などを含み，やや粗い。

壺（78）　丸味を帯びた平底をもつ。底部径4.3cm，胴部最大径13.7cmを測る。胴部は丸い。

鉄器

79・80の2点出土した。ともに断面形は長方形を呈する。1はほぼ直線であるが，2はゆるやかに湾曲し，上部は幅が大きくなっていく。何かの茎であろう。

石製品

81は小片のため全形は不明である。厚さ1cmを測る。石材はスレートに似た白色の石材を用いる。直径3mm程度の孔を穿つ。

玉類

臼玉（83～87）　滑石製の臼玉で，北西側よりまとまって5点出土した。長さ0.2～0.5cm，断面径0.6～0.8cm，孔径0.2～0.3cmを測る。

赤色顔料

朱玉（82）　直径約3cm，厚さ0.6cmの塊りである。赤色顔料（ベンガラ）と思われる。一見，軽石のようであるが，手に触れると赤色顔料がかなり付く。

ピット出土遺物（Fig. 130，PL. 79）

土師器

皿（88・89）蓋（88）と身（89）のセットでピット№20から出土した。蓋は口径19.8cmを測り，宝珠形のつまみを有する。全面ヨコナデ調整を施し，明橙色を呈する。口縁部近くの外面に「又は戊」の墨書が施されている。身は口径17.0cm，器高1.9cmを測る。蓋と同様の調整・色調・胎土である。ともに須恵器に多い形態である。

4）小　結

今回検出した遺構は，前述のとおりであるが，第52次調査からのつながりを考えれば，調査区西半に竪穴住居跡が存在したものと思われるが，削平のため消滅したものと考えられる。検出した遺構群は，5号土坑を除いて出土遺物がきわめて少なく，小片ばかりであったため時期

的に不明なものが多い。他の4基の土坑のうち，1号土坑はかなり新しい時期の可能性が強い。2・4号土坑は出土土器がごくわずかしかなく，全く手掛りがない。3号土坑は，方形に近いプランを持ち，覆土中に炭化物を多く含むことから，火葬墓の可能性もある。時期的には1～3の土器から8世紀代と考えられる。

6棟の掘立柱建物についても，時期を知る手掛りは少ないが，1・2・3・6号建物で小片ではあるが，奈良・平安時代の須恵器が少量出土している。建物の方向性や間隔から考えれば1・4・5号が1セットで，2号と3号がセットと成り，6号は5号の建て替えであろうか。時期は奈良時代～平安時代初め頃に収まるものと思われる。

大量の遺物が出土した5号土坑は，土層の状態から2基の切り合いと判断した。第52次調査とのつながりを考え合わせると間違いないものと思われる。しかし前述の通り，土器の出土器種には若干の差があるものの，時期的にはほとんど差が無い。須恵器の坏を見てみるとわずかな時期幅はあるものの，そのほとんどがいわゆるⅢaの時期内に収まる。これは52次調査内で検出した大型の土坑と同一時期である。他の土器群も完形に近いものが多く，この時期の土師器，須恵器のセット関係を考える上で，貴重な資料を呈示したと思われるが，時間の都合で十分な考察が加えられなかった。この土坑の用途については，内部から水がかなり湧き出していること，東壁が湧き出した水のために抉れていることより井戸に近い使われ方をしていたのではないかと推定できる。有田の台地に該期の井戸がほとんどないことから，この推定は存外当を得ているのではないだろうか。

尚，墨書土器の鑑定にあたっては，九州歴史資料館の横田義章氏・倉住靖彦氏にお忙しい中，御迷惑をおかけした。心からお礼を申し上げたい。（米倉）

11. 第108次調査追加資料

1987年度「有田・小田部第８集」で報告の第108次調査で，埋蔵文化財センター向けの再整理の際，新たに青銅器の鋳型片を発見した。この資料について，この場を借りて報告したい。今回発見された鋳型片は，調査区やや北側にある，戦国時代の大型土坑（２号土坑）の下層礫中より発見された。有田遺跡群で鋳型片は，これまで第３次調査，１号井戸，第81次調査ＳＤ07から号１点出土している。今回発見された鋳型片は石材がアプライトであり，以前の２点が砂岩であるのと異なり，別個体の可能性がある。当資料は最大長5.2cm，最大幅5.7cm，最大厚2.2cmを測り，鋳型面は黒く炭化している。鋳型の種類については小片の為不明である。器表面と鋳型部分の段差は1.5mm程度，最大幅1.5cmを測る。鋳型面以外は研磨が施されており，砥石などに転用されたと思われる。（山崎）

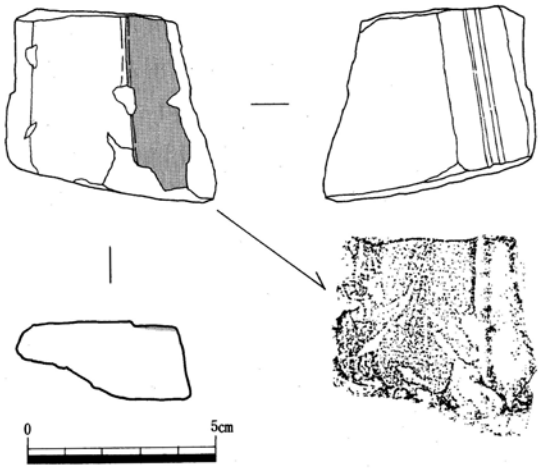


Fig. 131　鋳型実測図（縮尺 1/2）

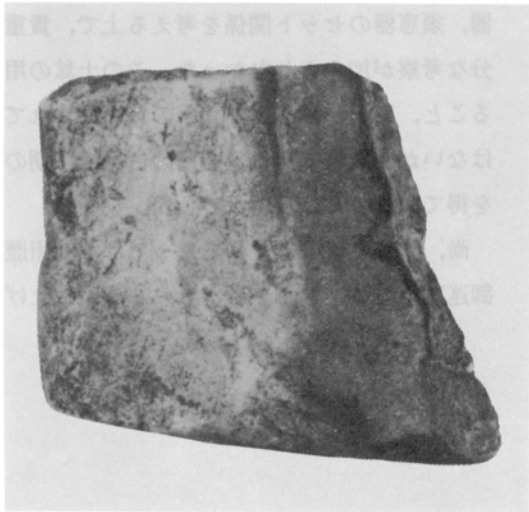
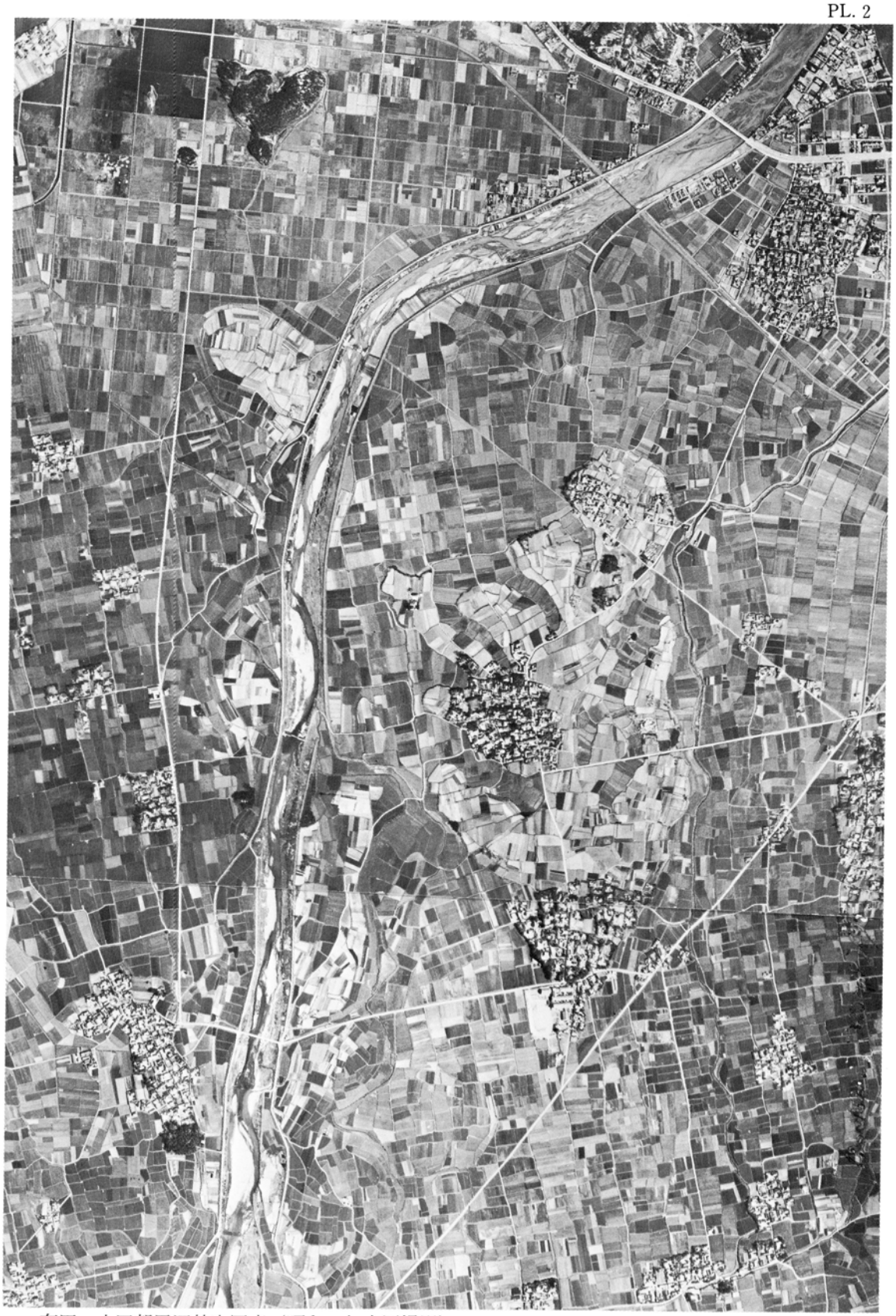


図　　版
PLATES

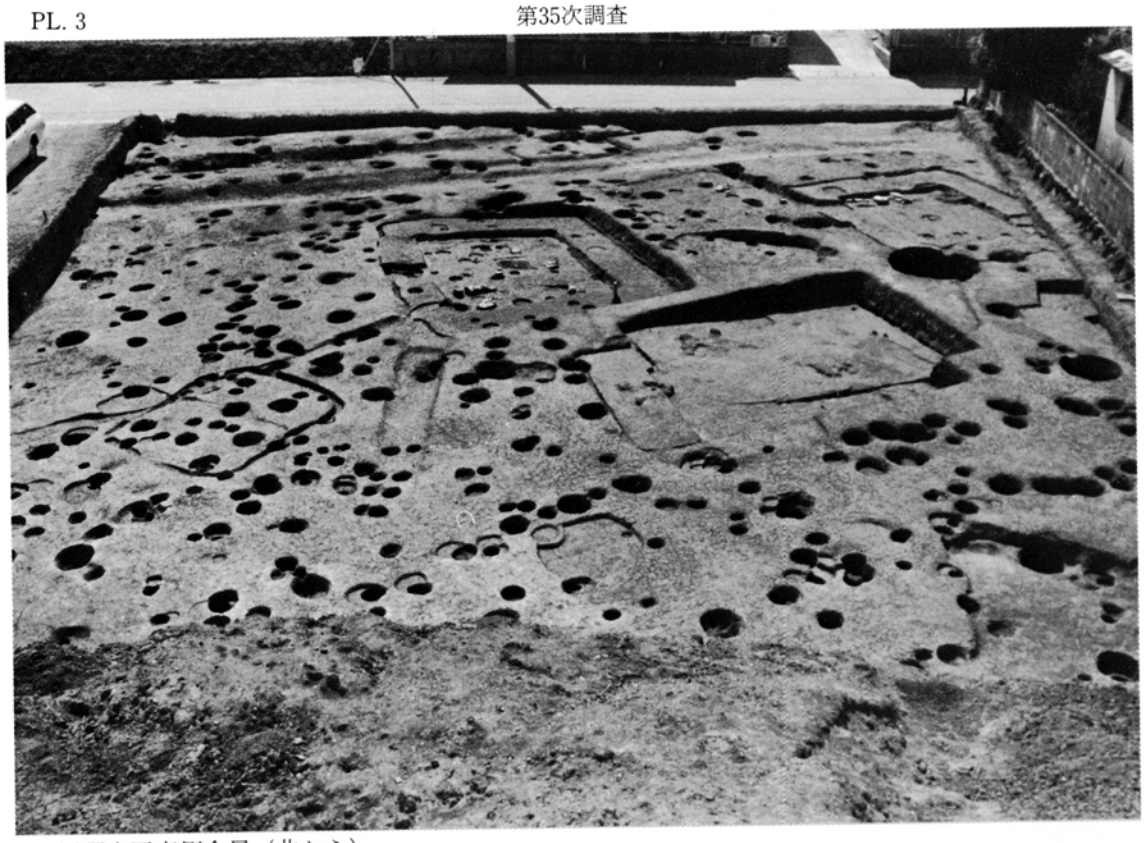
PL. 1

有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）

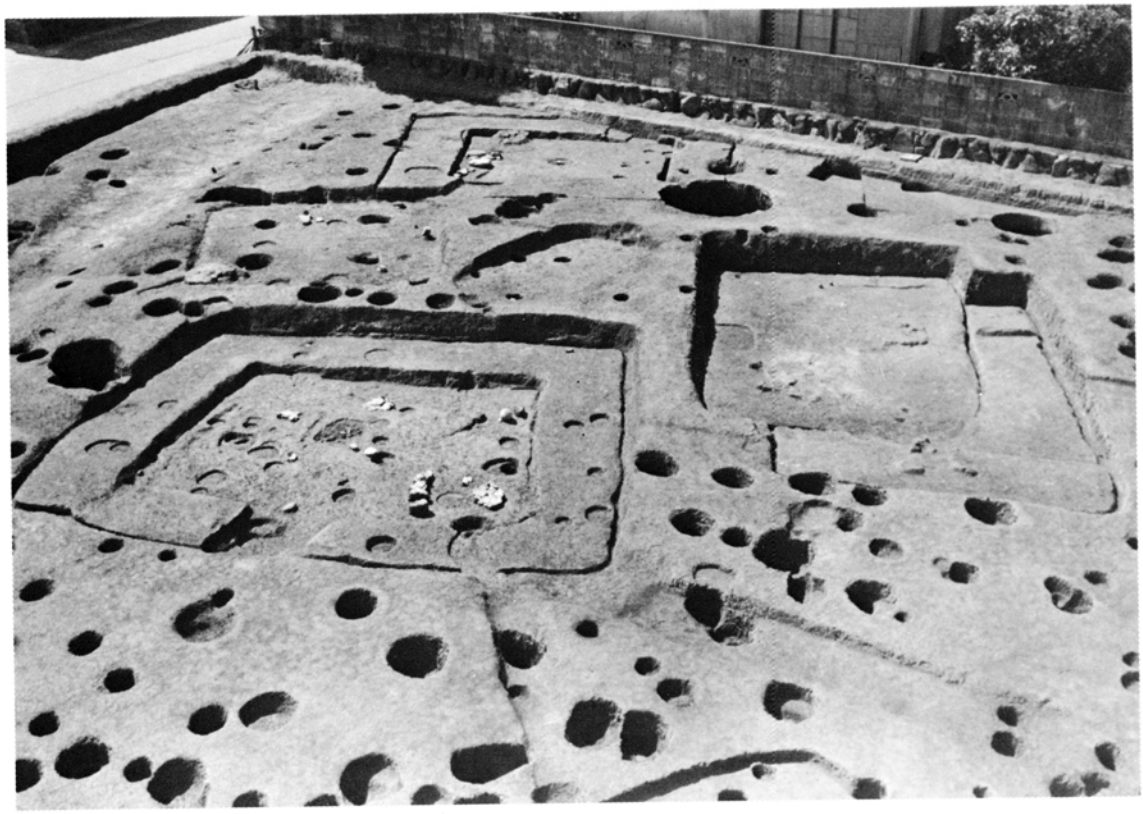


有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）

第35次調査

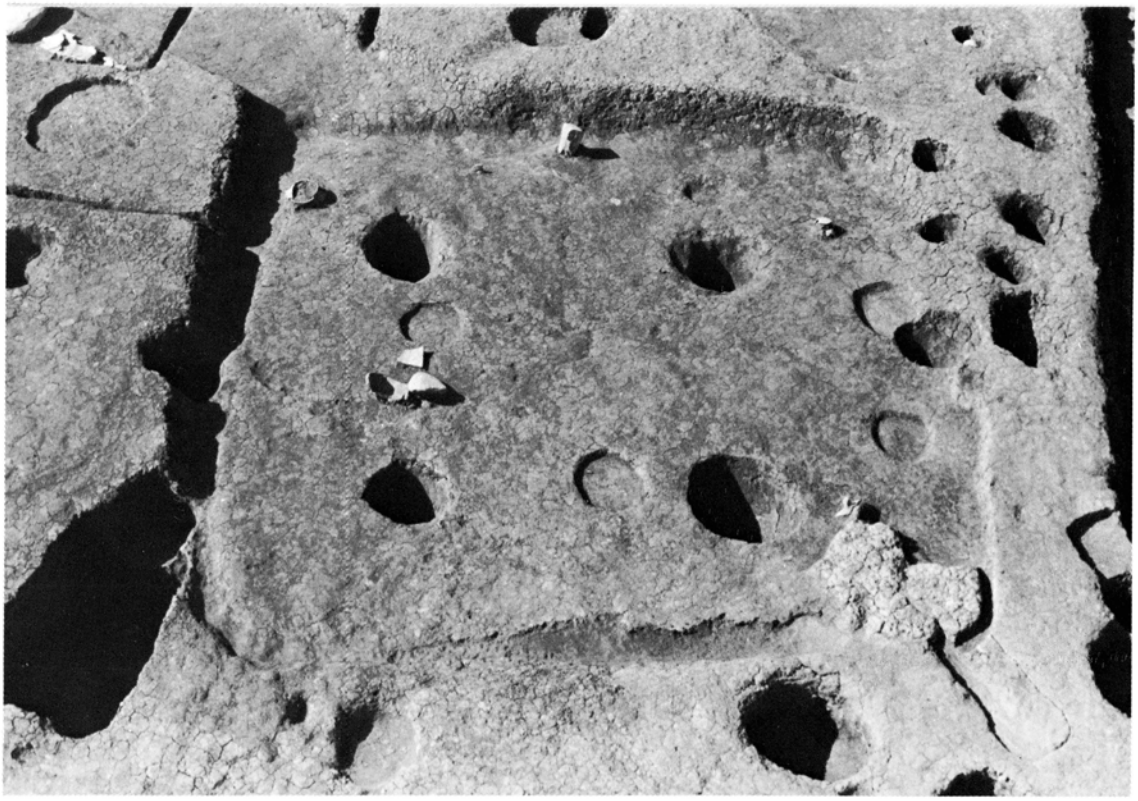


(1)調査区南側全景（北から）



(2)調査区南側住居跡群（東から）

(1)調査区北側全景（南から）

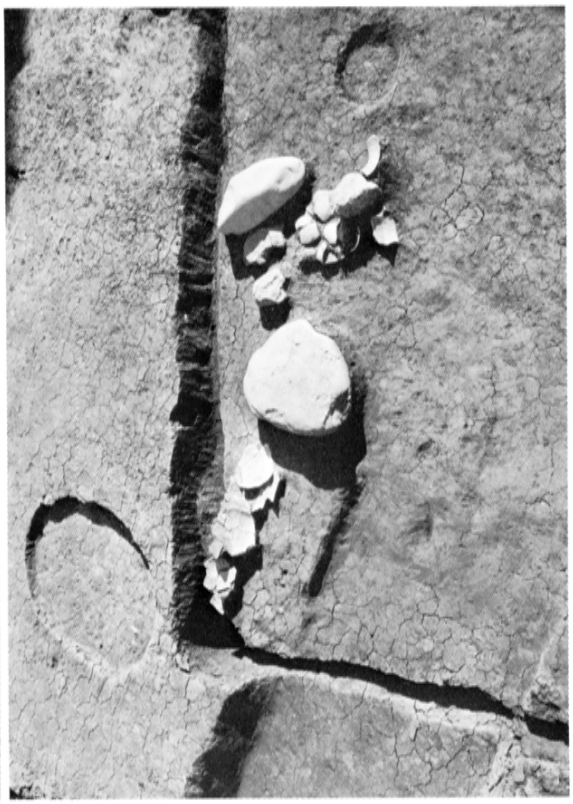


(2) 1 号住居跡（南から）

(1) 1号住居跡内粘土の状態

(2) 1号住居跡かまどの状態

(3) 2号住居跡の炉跡

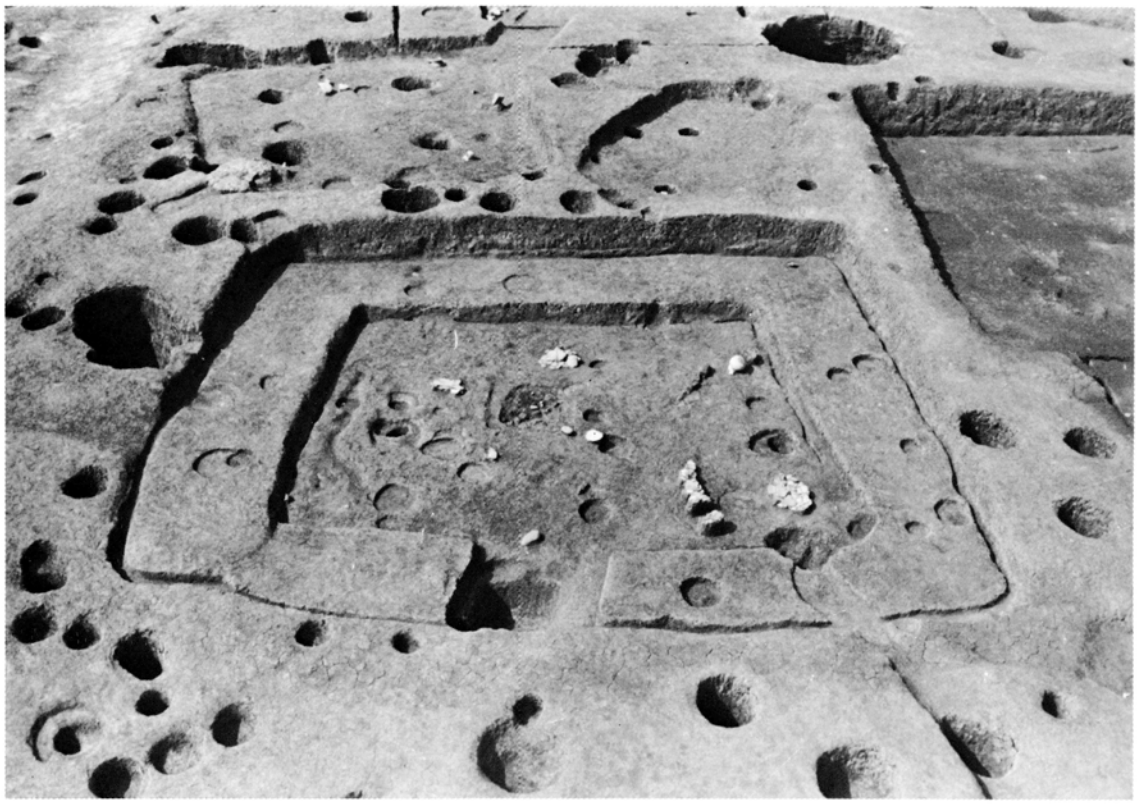


(4) 2号住居跡遺物出土状態

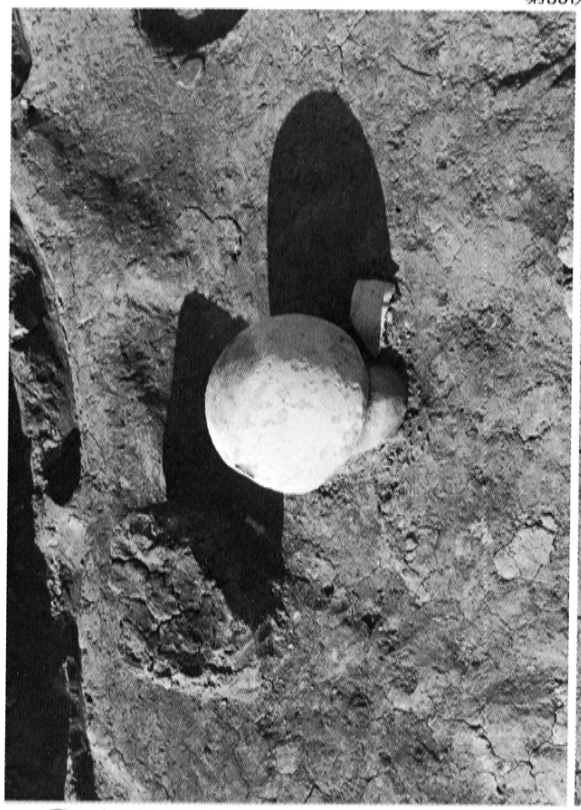
(1) 2 号住居跡（東から）

(2) 3 号・4 号住居跡（東から）

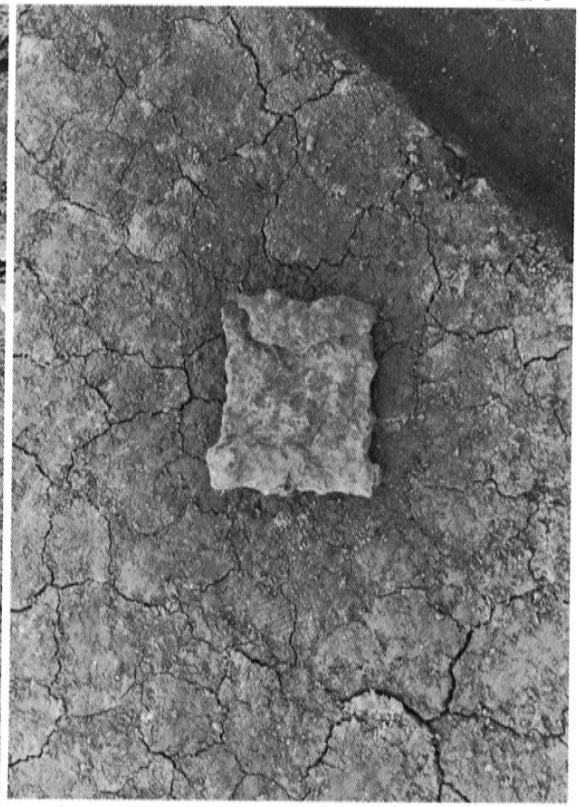
(1) 5 号住居跡（南から）



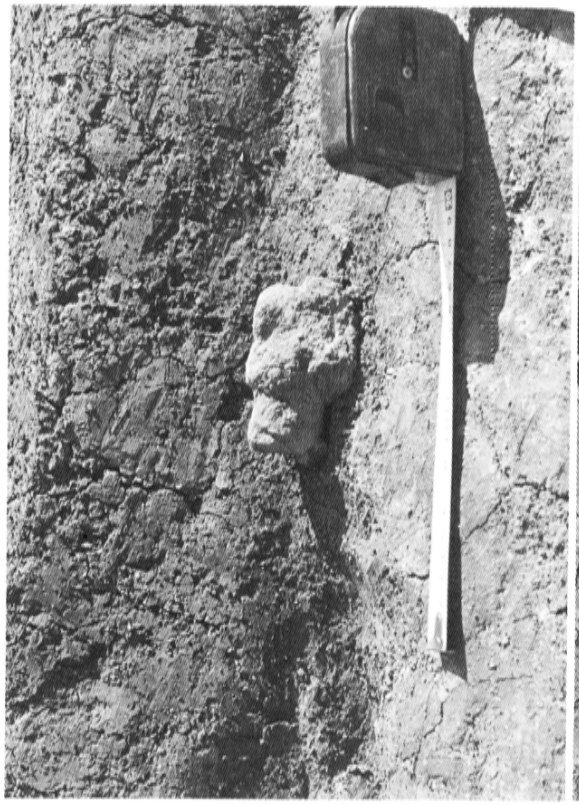
(2) 6 号住居跡（東から）



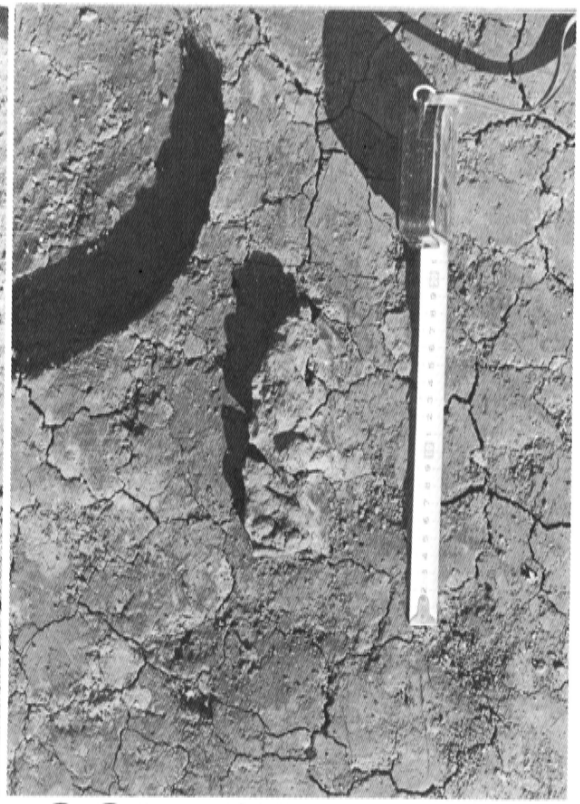
(1) 6号住居跡遺物出土状態・壺



(2) (1)に同じ　鉄製鋤先

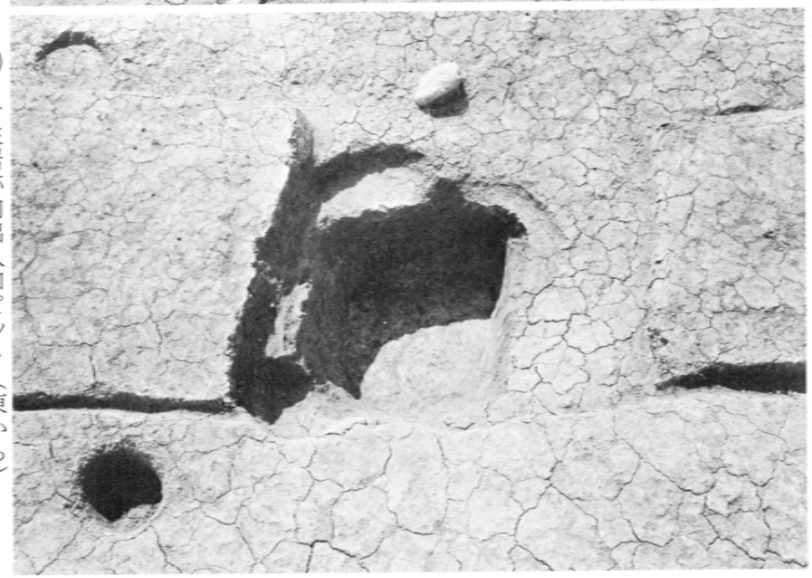


(3) (1)に同じ　鉄製斧



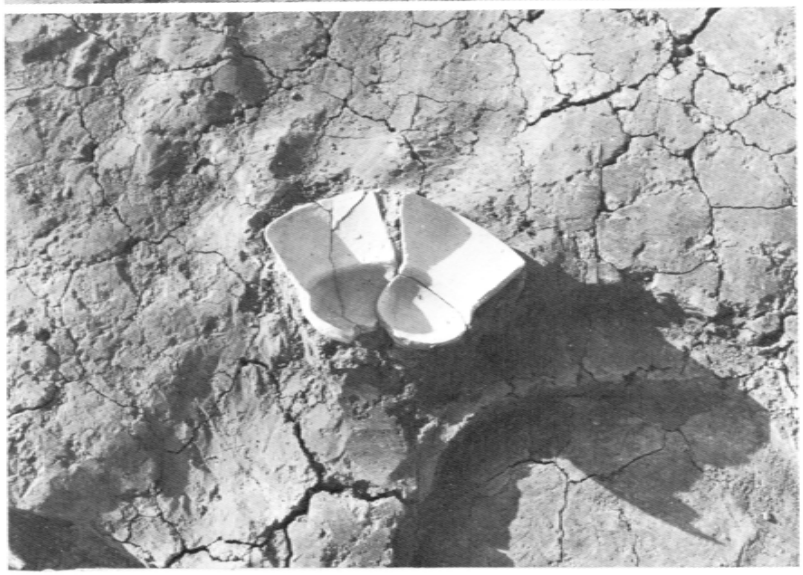
(4) (1)に同じ　鉄製鎌

(1) 6号住居跡内炉跡



(2) 6号住居跡内出入口ピット（東から）

(3) 6号住居跡遺物出土状態



(4) (3)に同じ

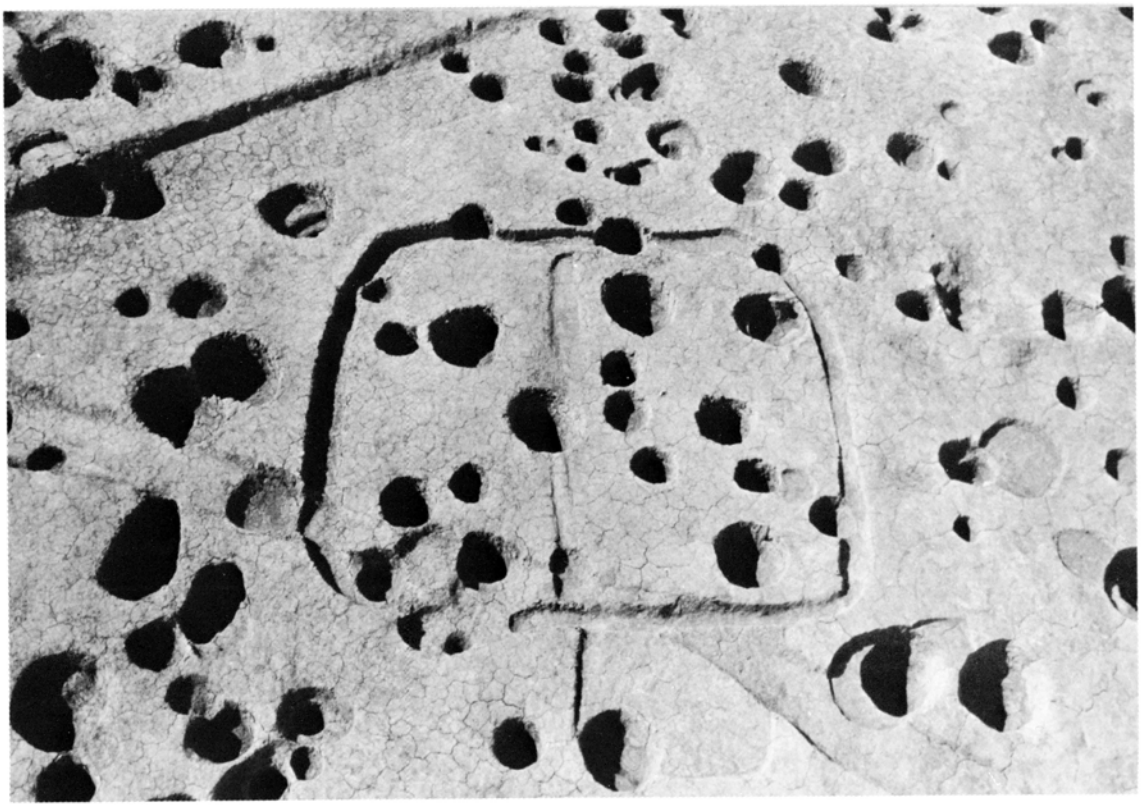
(1) 7 号・8 号住居跡（南から）

(2)

(3)

(2) 7 号住居跡内炉跡　(3) 8 号住居跡内炉跡

(1) 9 号住居跡（東から）

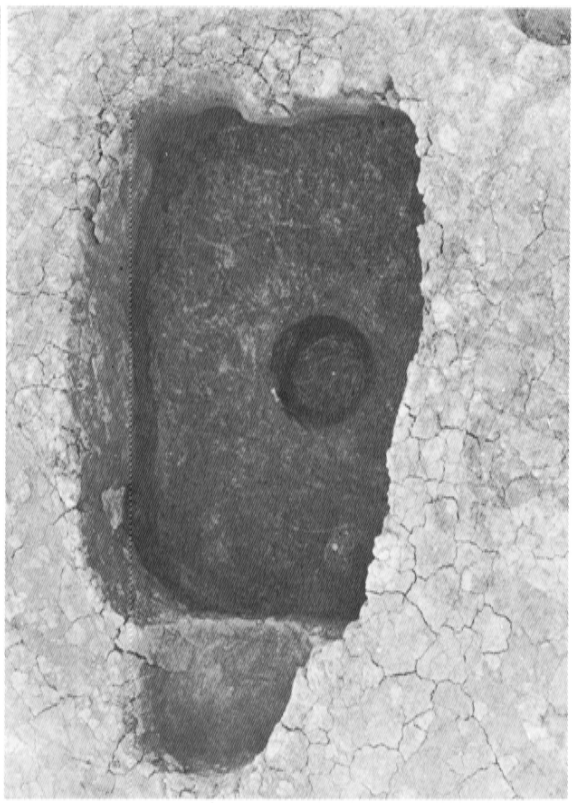


(2)10号住居跡（西から）

(1) 2号土坑（東から）

(2) 2号土坑の断面の状態（東から）

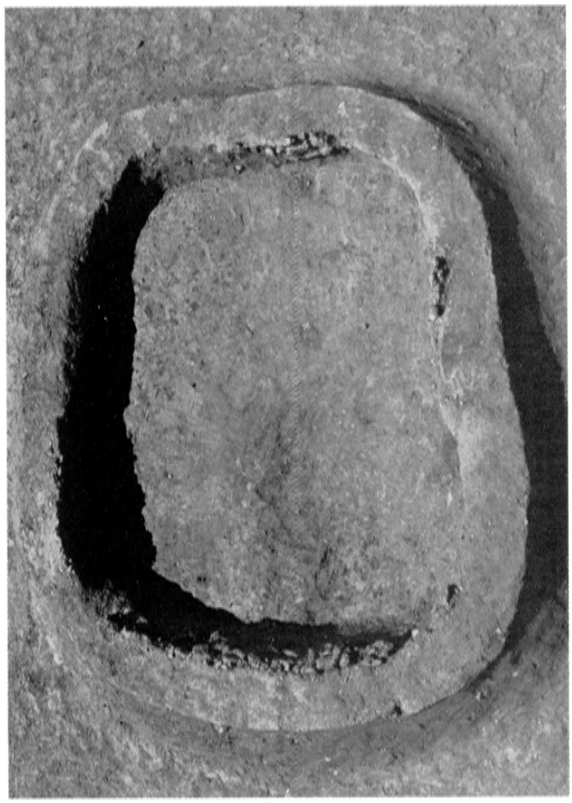
(3) 1号土坑（北から）



(4) 4号土坑（西から）

(1) 5号土坑（西から）

(2) 9号土坑（南から）



(3) 10号土坑（南から）

(4) 10号土坑（横方向）

(1) 1 号井戸（北から）

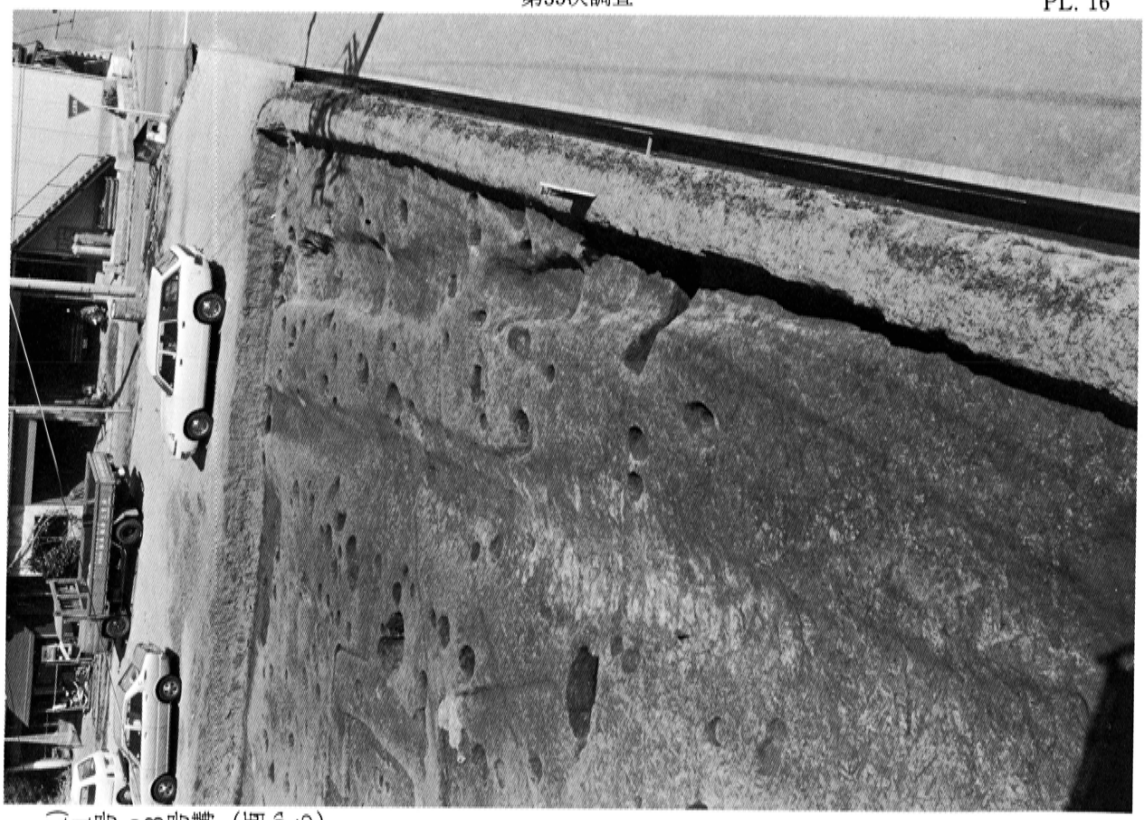
(2) 1 号井戸の断面状態（東から）

(1) 1号井戸底部の礫群

(2) 1号井戸底部の濾過装置

(3) 1号井戸二段目の掘り方

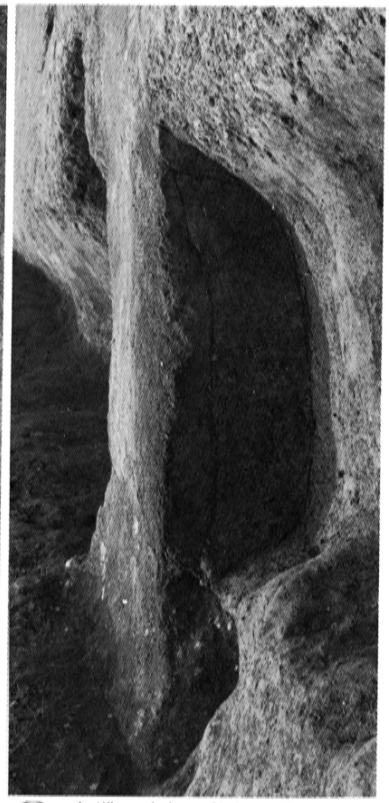
(4) 1号井戸出土の石製品



(1) 1号～3号溝（西から）

(2) 1号溝の断面（東から）

(3) 2号溝の断面（西から）



(4) 3号溝の断面（東から）